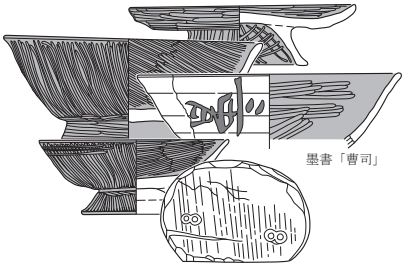
茨城県石岡市

杉ノ井遺跡

（旧 泉台遺跡）



2012

石 岡 市 教 育 委 員 会
有限会社勾玉工房 Mogi

例　言

1. 本書は茨城県石岡市杉並一丁目 12807-1 に所在する杉ノ井遺跡（旧 泉台遺跡）の発掘調査報告書である。なお、発掘調査の概要は既に報告済み（下記文献）であるが、本書をもって正式報告とする。

　山武考古学研究所編　1999『茨城県石岡市泉台遺跡―発掘調査報告書―』 石岡市教育委員会

2. 調査は、民間開発に伴う埋蔵文化財発掘調査として実施した。
3. 調査は、石岡市教育委員会の指導のもと、有限会社山武考古学研究所（当時）が実施した。
4. 整理作業は、市教育委員会の指導のもと、平成 23 年度茨城県雇用創出等基金事業として旧石岡市立高浜幼稚園において、有限会社勾玉工房 Mogi が実施した。
5. 調査内容及び調査機関については下記のとおりである。

調査面積　　約 1,438 ㎡

発掘調査期間　平成 10 年 6 月 26 日～ 8 月 7 日

整理作業期間　平成 23 年 9 月 1 日～ 12 月 5 日

調査担当者　発掘　平岡和夫　高野浩之　土生朗治（有限会社山武考古学研究所（当時））

　　整理　大賀　健　大賀さつき　長谷川秀久　谷　旬　大越直樹　鈴木　徹

　　石山　啓　高橋歩美　森　優里絵　（有限会社勾玉工房 Mogi）

調査参加者　発掘　今川貞男　高橋薫英　小松崎健蔵　大和田謙蔵　三輪英行　小野　豊

　　木村　毅　中島とみ子　矢口多美子　石黒よし子　中野富美子　富田玲子

　　大久保敦子　高野敏江　鏡原美和子　河合淳子　小角みや子　吉田京子

　　石黒　勇　佐藤隆文　立原勝則　斉藤尽志　中村　仁　市原静代

　　長谷川　久

　　整理　須賀澤一憲　根本時子　岩崎美奈子　饗庭紀子　阿天坊弥生　篠原美代子

　　石津弘子　千葉静枝　永瀬敬子　塚本祐司　田村光清　西出晶子

　　稲川千紘　緒方美枝子　原田良秋　佐藤洋子　川並恵子　諸川由美子

6. 本書は大賀健・谷・鈴木が分担執筆した。編集は小杉山大輔・曾根俊雄（市教育委員会生涯学習課）の助言のもと、大賀健・森が行った。
7. 分担執筆は下記のとおりである。

第 4 章第 3・4 節：鈴木、第 5 章第 2 節：谷、その他：大賀健

なお、第 1 章の発掘調査関係は概要報告書から転載、第 3 章は同書記述を改変・転載した。

8. 本遺跡から出土した緑釉陶器及び灰釉陶器は、小松崎博一・山本吉一著「常陸国府域出土施釉陶器集成」（『茨城県考古学協会誌』第 19 号所収、2007 年刊）にすべて掲載されている。したがって、本遺跡の資料として報告がすでに終了していることになるが、同集成は実測図のみの提示であり、他の遺物との共伴関係を示すためにも、遺物図面を遺構ごとに再録した。再録に当たっては、両氏及び市教育委員会の了承の上、小松崎氏作成の実測図を基にデジタルデータ化して掲載を行っている。また、遺物の観察表作成及び産地同定については、実測図の注記、及び川井正一氏指導の基『国分遺跡―確認調査報告書―』「国分遺跡出土施釉陶器の検討」の基礎資料として纏められた一覧表の記載内容をそのまま掲載している。
9. 本報告の作成に当たり、平成 10 年実施の調査資料を基に整理作業を行ったが、13 年の年月の経過による資料の散逸・調査記録の不備や未整理などで明確にし得なかった部分が多々ある。整理作業を担当した者

として最大限資料・記録の理解に努めたが、限界があり、調査時の混乱や調査後に一部資料の持ち出しなどによる不具合な部分が残ったことをここに明記しておく。

10. 発掘調査及び整理作業に関わり、次の諸氏並びに諸機関のご協力・ご教示を賜った。記して感謝の意を表したい。　（敬称略、順不同）

平川　南　川井正一　黒澤彰哉　小松崎博一　山本吉一

ハローワーク石岡　㈱東日本重機　㈲新成田総合社　亀下薬局　ハイマート㈱　開成測量㈱

11. 調査記録及び出土遺物は石岡市教育委員会が保管している。

凡　例

1. 本書に記してある座標値は日本測地系を用いている。全体図・遺構図の方位は座標北を示す。
2. 文中の色調表現は『新版標準土色帖』2008 年度版（農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修）を用いた。
3. 標高は東京湾の平均海抜を示している。
4. 挿図は以下の縮尺で表した。

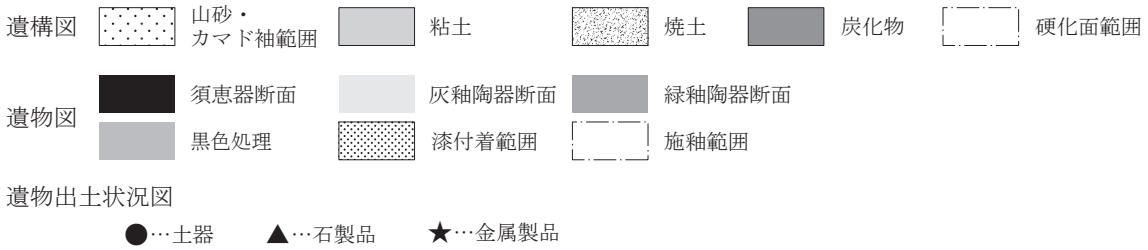
全体図	調査区全体図	1/200
遺構図	住居跡、掘立柱建物跡、土坑、柵・掘立柱塀跡	1/60
	カマド個別切り出し図	1/30
遺物図	土玉、紡錘車、石製品	1/3
	土師器、須恵器、緑釉・灰釉陶器、瓦、土製品	1/4
	金属製品	1/2

なお、変則的な縮尺を用いた場合には、スケールをもってその倍率を表した。

5. 遺物写真は実測図の縮尺に合わせて掲載した。なお写真のみ掲載のものは２分の１である。
6. 本文や挿図・挿表中に用いた略記号は以下を示す。

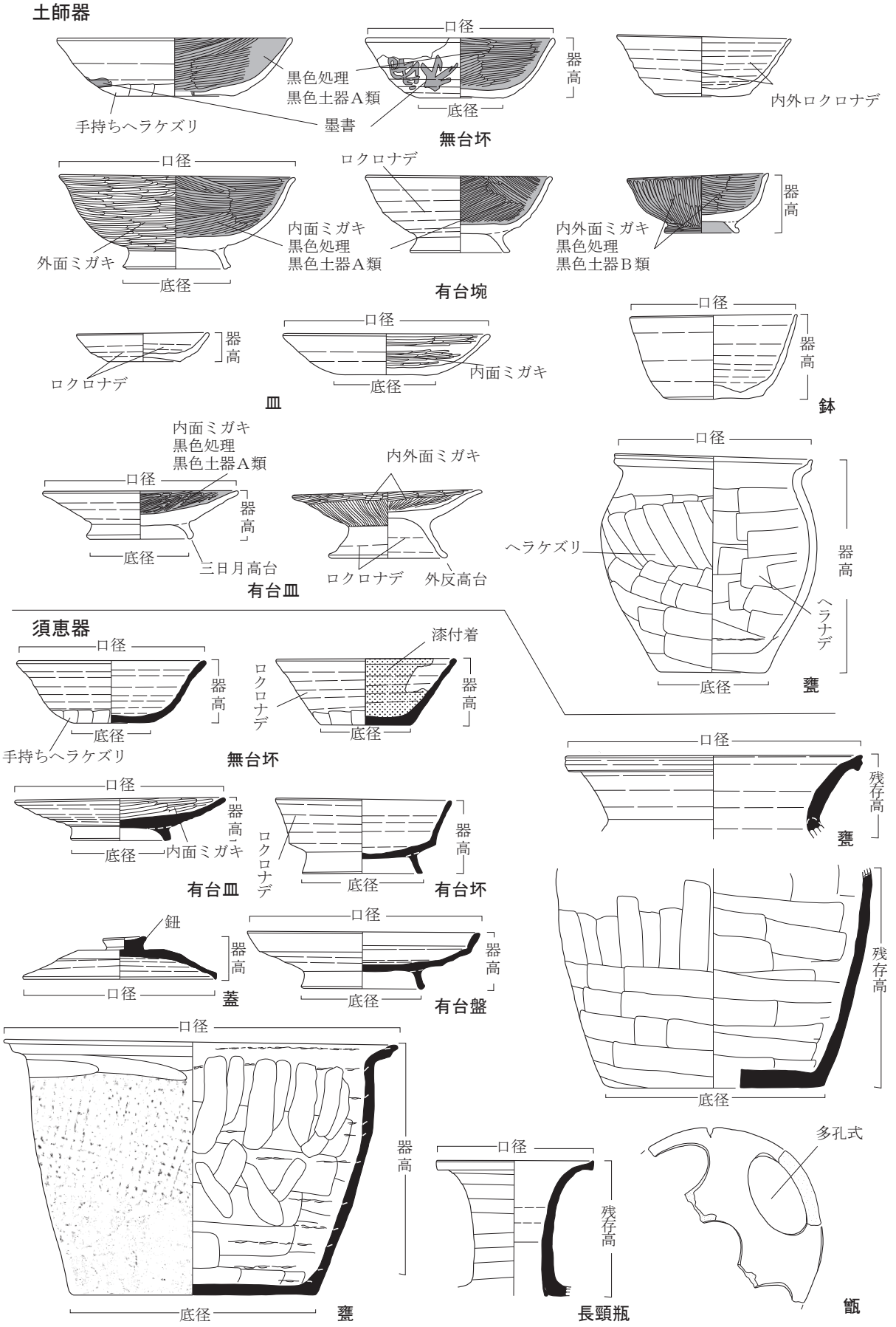
SI：住居跡　SK：土坑　SB：掘立柱建物跡　SA：柵・掘立柱塀跡　P：ピット　K：攪乱

7. 挿図中のスクリントーンは以下を示す。

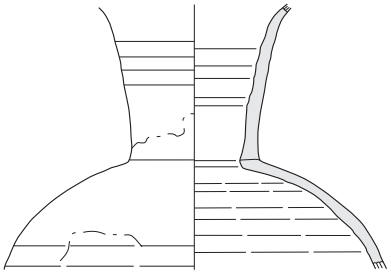


8. 遺物観察表の法量単位はcm、重量単位はｇである。法量に付した（ ）は復元値、〈 〉は残存値を示す。また、備考欄の【 】：小松崎・山本 2007 所収図の掲載番号、実＋数字：小松崎氏実測原図番号を示す。
9. 掘立柱建物跡（SB）属性表中、法量の（ ）値は確認長。「柱痕」は柱痕跡、「柱当」は柱のあたりの略である。
10. 本遺跡の略称はイズミダイ -1998 とした。出土遺物の注記もこれに従っている。
11. 検出された遺物の種類・器種の呼称及び計測位置は次ページ以降の基準に従っている。

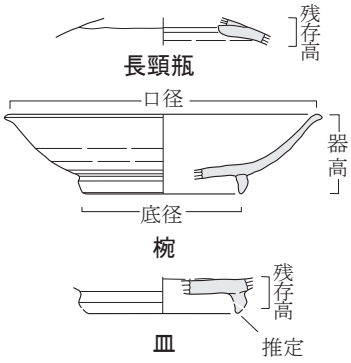
土師器


黒色処理
黒色土器A類
手持ちヘラケズリ
墨書
口径
器高
底径
無台坏
内外ロクロナデ
ロクロナデ
内面ミガキ
黒色処理
黒色土器A類
外面ミガキ
有台埦
内外面ミガキ
黒色処理
黒色土器B類
皿
内面ミガキ
鉢
内面ミガキ
黒色処理
黒色土器A類
三日月高台
有台皿
内外面ミガキ
ロクロナデ
外反高台
ヘラケズリ
ヘラナデ
甕
須恵器
漆付着
手持ちヘラケズリ
無台坏
内面ミガキ
有台皿
有台坏
鈕
蓋
有台盤
残存高
甕
多孔式
甑
長頸瓶

灰釉陶器



長頸瓶

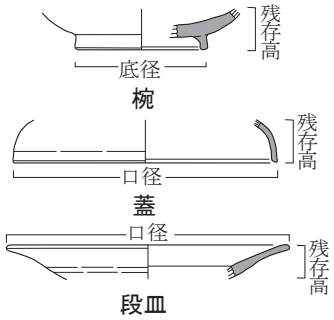


長頸瓶

椀

皿

緑釉陶器

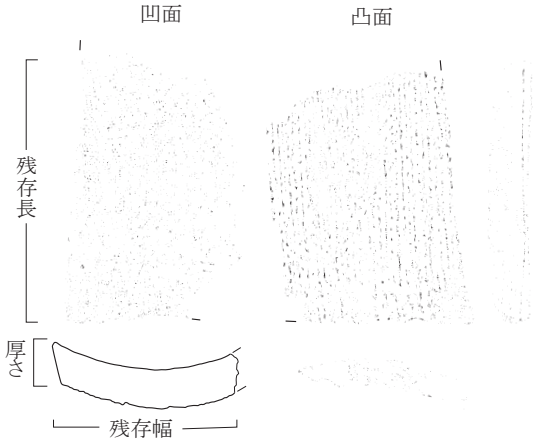


椀

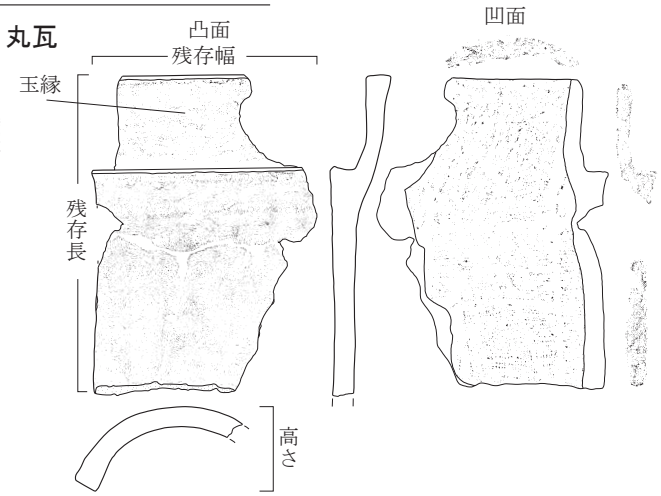
蓋

段皿

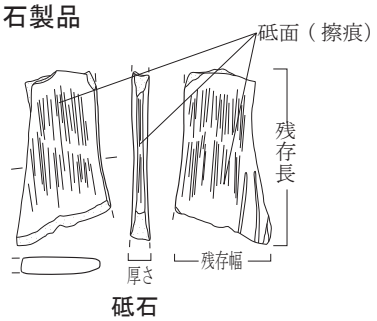
平瓦



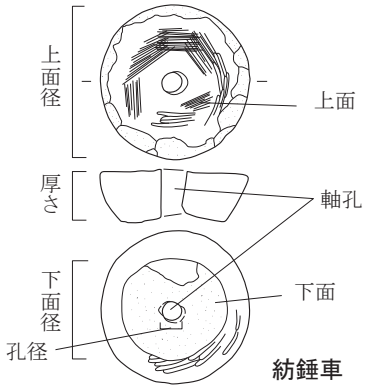
丸瓦



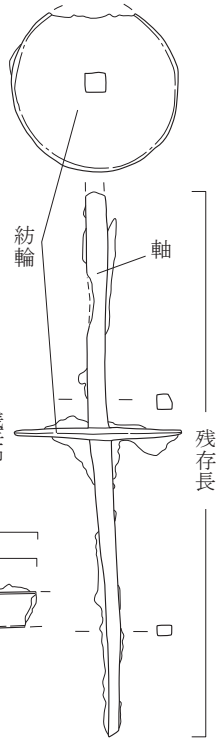
石製品



砥石

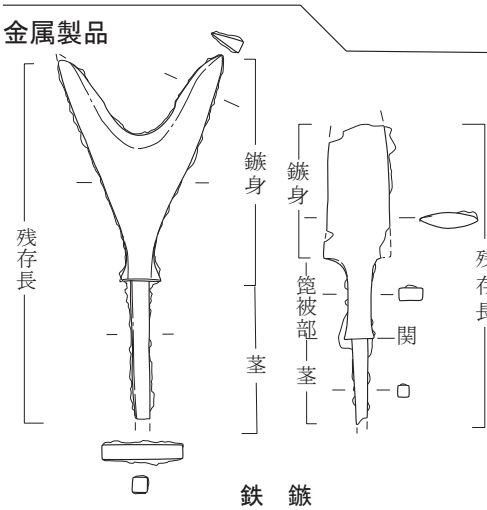


紡錘車

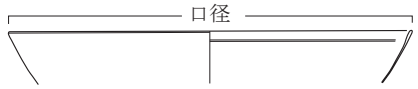


紡錘車

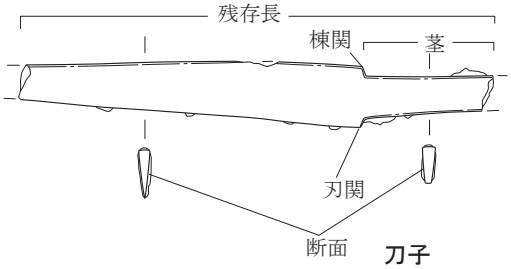
金属製品



鉄　鏃



銅鋺



刀子

本 文 目 次

例言
凡例
目次
第１章　調査の方法と経過 …… 1
　第１節　調査の方法 …… 1
　第２節　調査の経過 …… 1
第２章　遺跡の位置と環境 …… 3
第３章　標準堆積土層 …… 4
第４章　検出された遺構と遺物 …… 6
　第１節　住居跡 …… 6
　第２節　土坑 …… 74
　第３節　掘立柱建物跡 …… 84
　第４節　柵・掘立柱塀跡 …… 93
　第５節　遺構外出土遺物 …… 94
第５章　まとめ …… 95
　第１節　緑釉・灰釉陶器の出土状況 …… 95
　第２節　文字資料 …… 95
　第３節　出土遺物の年代観 …… 97
　第４節　住居跡の形態と年代、及びその性格 …… 102
　第５節　まとめ …… 103
写真図版
抄録

挿 図 目 次

第 1 図　試掘調査トレンチ出土遺物 …… 2
第 2 図　遺跡の位置と周辺の遺跡 …… 3
第 3 図　調査地点位置図 …… 4
第 4 図　標準堆積土層 …… 4
第 5 図　調査区全体図 …… 5
第 6 図　SI01 …… 6
第 7 図　SI01 出土遺物 …… 7
第 8 図　SI02 …… 8
第 9 図　SI02 出土遺物 …… 8
第 10 図　SI03 …… 9
第 11 図　SI03 出土遺物（1） …… 9
第 12 図　SI03 出土遺物（2） …… 10
第 13 図　SI04 …… 10
第 14 図　SI04 出土遺物 …… 11
第 15 図　SI05 …… 12
第 16 図　SI05 出土遺物 …… 12
第 17 図　SI06 …… 13
第 18 図　SI06 出土遺物 …… 13
第 19 図　SI07 …… 14
第 20 図　SI07 出土遺物 …… 14
第 21 図　SI08 …… 14
第 22 図　SI08 出土遺物 …… 15
第 23 図　SI09 …… 16
第 24 図　SI09 出土遺物 …… 18

第 25 図　SI10・11 …… 19
第 26 図　SI10 出土遺物 …… 19
第 27 図　SI11 出土遺物（1）…… 21
第 28 図　SI11 出土遺物（2）…… 22
第 29 図　SI12 …… 23
第 30 図　SI12 出土遺物 …… 24
第 31 図　SI13 …… 25
第 32 図　SI13 出土遺物 …… 26
第 33 図　SI14・15 …… 28
第 34 図　SI14 出土遺物 …… 29
第 35 図　SI15 出土遺物 …… 30
第 36 図　SI16 出土遺物 …… 31
第 37 図　SI16・17・18 …… 32
第 38 図　SI17 出土遺物（1）…… 33
第 39 図　SI17 出土遺物（2）…… 34
第 40 図　SI18 出土遺物 …… 36
第 41 図　SI19 …… 36
第 42 図　SI19 出土遺物（1）…… 37
第 43 図　SI19 出土遺物（2）…… 38
第 44 図　SI20 …… 39
第 45 図　SI20 出土遺物 …… 40
第 46 図　SI21 …… 41
第 47 図　SI21 出土遺物（1）…… 42
第 48 図　SI21 出土遺物（2）…… 43
第 49 図　SI22 …… 43
第 50 図　SI22 出土遺物 …… 44
第 51 図　SI24・25 …… 45
第 52 図　SI24 出土遺物 …… 46
第 53 図　SI25 出土遺物 …… 46
第 54 図　SI26・27 …… 47
第 55 図　SI27 カマド …… 48
第 56 図　SI26 出土遺物 …… 48
第 57 図　SI27 出土遺物 …… 48
第 58 図　SI28 …… 49
第 59 図　SI28 出土遺物 …… 50
第 60 図　SI29 …… 51
第 61 図　SI29 出土遺物 …… 51
第 62 図　SI30 …… 52
第 63 図　SI30 出土遺物（1）…… 52
第 64 図　SI30 出土遺物（2）…… 53
第 65 図　SI31 …… 53
第 66 図　SI31 出土遺物 …… 54
第 67 図　SI32 …… 55
第 68 図　SI32 出土遺物 …… 55
第 69 図　SI33 …… 56
第 70 図　SI33 出土遺物 …… 57
第 71 図　SI34 …… 58
第 72 図　SI34 出土遺物 …… 59
第 73 図　SI35 …… 59
第 74 図　SI35 出土遺物 …… 60
第 75 図　SI37 …… 61
第 76 図　SI37 出土遺物（1）…… 62
第 77 図　SI37 出土遺物（2）…… 63
第 78 図　SI38 …… 65
第 79 図　SI38 出土遺物（1）…… 66
第 80 図　SI38 出土遺物（2）…… 67
第 81 図　SI39 …… 69
第 82 図　SI39 出土遺物 …… 70
第 83 図　SI41 …… 71
第 84 図　SI41 出土遺物 …… 71
第 85 図　SI42 …… 72
第 86 図　SI42 出土遺物 …… 73
第 87 図　SI43 …… 74
第 88 図　SI43 出土遺物 …… 74
第 89 図　SK01 ～ 03・06・13 ～ 16・19 ～ 22・24・25・27・28 …… 76
第 90 図　SK29 ～ 31・33 ～ 37・39 ～ 43 …… 77
第 91 図　土坑出土遺物（1）…… 78
第 92 図　土坑出土遺物（2）…… 79
第 93 図　土坑出土遺物（3）…… 80
第 94 図　SB01 …… 84
第 95 図　SB01 出土遺物 …… 84
第 96 図　SB02 出土遺物 …… 85
第 97 図　SB02 …… 85
第 98 図　SB03・04 …… 86
第 99 図　SB03・04 出土遺物 …… 87

第 100 図　SB05 …… 88
第 101 図　SB05 出土遺物 …… 88
第 102 図　SB06 …… 89
第 103 図　SB06 出土遺物 …… 89
第 104 図　SB09 出土遺物 …… 90
第 105 図　SB07・09・SA03 …… 91
第 106 図　SB08 …… 92
第 107 図　SA01・02 …… 93
第 108 図　遺構外出土遺物 …… 94
第 109 図　緑釉・灰釉陶器出土遺構分布図 …… 96
第 110 図　墨書土器集成図 …… 98
第 111 図　刻書土器集成図 …… 99
第 112 図　土器編年 1（8 ～ 9 世紀）…… 100
第 113 図　土器編年 2（10 ～ 11 世紀）…… 101
第 114 図　住居跡重複関係 …… 104

表　目　次

第 1 表　試掘調査トレンチ出土遺物観察表 …… 2
第 2 表　SI01 出土遺物遺物観察表（1）…… 7
第 3 表　SI01 出土遺物遺物観察表（2）…… 8
第 4 表　SI02 出土遺物観察表 …… 8
第 5 表　SI03 出土遺物観察表 …… 10
第 6 表　SI04 出土遺物観察表 …… 11
第 7 表　SI05 出土遺物観察表 …… 12
第 8 表　SI06 出土遺物観察表 …… 13
第 9 表　SI07 出土遺物観察表 …… 14
第 10 表　SI08 出土遺物観察表 …… 16
第 11 表　SI09 出土遺物観察表 …… 17
第 12 表　SI10 出土遺物観察表 …… 20
第 13 表　SI11 出土遺物観察表（1）…… 20
第 14 表　SI11 出土遺物観察表（2）…… 23
第 15 表　SI12 出土遺物観察表 …… 25
第 16 表　SI13 出土遺物観察表 …… 27
第 17 表　SI14 出土遺物観察表（1）…… 29
第 18 表　SI14 出土遺物観察表（2）…… 30
第 19 表　SI15 出土遺物観察表 …… 31
第 20 表　SI16 出土遺物観察表 …… 31
第 21 表　SI17 出土遺物観察表（1）…… 34
第 22 表　SI17 出土遺物観察表（2）…… 35
第 23 表　SI18 出土遺物観察表 …… 36
第 24 表　SI19 出土遺物観察表 …… 38
第 25 表　SI20 出土遺物観察表（1）…… 39
第 26 表　SI20 出土遺物観察表（2）…… 40
第 27 表　SI21 出土遺物観察表（1）…… 41
第 28 表　SI21 出土遺物観察表（2）…… 43
第 29 表　SI22 出土遺物観察表 …… 44
第 30 表　SI24 出土遺物観察表 …… 45
第 31 表　SI25 出土遺物観察表 …… 46
第 32 表　SI26 出土遺物観察表 …… 48
第 33 表　SI27 出土遺物観察表 …… 48
第 34 表　SI28 出土遺物観察表 …… 50
第 35 表　SI29 出土遺物観察表 …… 51
第 36 表　SI30 出土遺物観察表 …… 53
第 37 表　SI31 出土遺物観察表 …… 54
第 38 表　SI32 出土遺物観察表（1）…… 54
第 39 表　SI32 出土遺物観察表（2）…… 56
第 40 表　SI33 出土遺物観察表 …… 57
第 41 表　SI34 出土遺物観察表 …… 58
第 42 表　SI35 出土遺物観察表 …… 60
第 43 表　SI37 出土遺物観察表（1）…… 63
第 44 表　SI37 出土遺物観察表（2）…… 64
第 45 表　SI38 出土遺物観察表（1）…… 67
第 46 表　SI38 出土遺物観察表（2）…… 68
第 47 表　SI39 出土遺物観察表（1）…… 69
第 48 表　SI39 出土遺物観察表（2）…… 70
第 49 表　SI41 出土遺物観察表 …… 71
第 50 表　SI42 出土遺物観察表 …… 73
第 51 表　SI43 出土遺物観察表 …… 74
第 52 表　土坑一覧表 …… 75
第 53 表　土坑出土遺物観察表（1）…… 81
第 54 表　土坑出土遺物観察表（2）…… 82

第 55 表　土坑出土遺物観察表（3）…… 83
第 56 表　SB01 属性表 …… 85
第 57 表　SB01 出土遺物観察表 …… 85
第 58 表　SB02 属性表 …… 86
第 59 表　SB02 出土遺物観察表 …… 86
第 60 表　SB03 属性表 …… 87
第 61 表　SB04 属性表 …… 87
第 62 表　SB03・04 出土遺物観察表 …… 87
第 63 表　SB05 出土遺物観察表 …… 88
第 64 表　SB05 属性表 …… 89
第 65 表　SB06 出土遺物観察表 …… 89
第 66 表　SB06 属性表 …… 90
第 67 表　SB07 属性表 …… 90
第 68 表　SB09 出土遺物観察表 …… 90
第 69 表　SB09 属性表 …… 92
第 70 表　SB08 属性表 …… 92
第 71 表　SA01 属性表 …… 93
第 72 表　SA02 属性表 …… 93
第 73 表　SA03 属性表 …… 93
第 74 表　遺構外出土遺物観察表 …… 94
第 75 表　緑釉・灰釉陶器分類表 …… 96
第 76 表　住居跡属性一覧表 …… 105

写 真 目 次

遺構図版 1
1　標準堆積土層　西から
2　SI01　東から
3　SI01　鍛冶炉　南から
4　SI02　南から
5　SI02　P1 セクション　西から
6　SI03　西から
7　SI03　鍛冶炉セクション　北から
8　SI04　南から
遺構図版 2
1　SI05　東から
2　SI05　P1 遺物出土状況　北から
3　SI06　南から
4　SI07　西から
5　SI08　遺物出土状況　北から
6　SI08　カマド　西から
7　SI08　西から
8　SI09　南から
遺構図版 3
1　SI10　カマド遺物出土状況　南から
2　SI10　カマド袖セクション　南から
3　SI10　南から
4　SI11　南から
5　SI11　カマド遺物出土状況　南から
6　SI11　カマド　南から
7　SI11　甕据付け穴確認状況　東から
8　SI12　西から
遺構図版 4
1　SI12　カマド遺物出土状況　南から
2　SI13　遺物出土状況　南から
3　SI13　南から
4　SI14　南から
5　SI14　P1 遺物出土状況　北から
6　SI14　鍛冶炉　東から
7　SI15　南から
8　SI16　西から
遺構図版 5
1　SI17　カマド A 遺物出土状況（1）　西から
2　SI17　カマド A 遺物出土状況（2）　東から
3　SI17　カマド B セクション　南から
4　SI17　遺物出土状況　西から
5　SI17・18　西から
6　SI19　南から
7　SI20　セクション　東から
8　SI21　南から
遺構図版 6

1　SI22　検出状況　南から
2　SI22　南から
3　SI25　セクション　北から
4　SI24　セクション　北から
5　SI25　南から
6　SI24　南から
7　SI25　カマド　南から
8　SI26　北西から

遺構図版 7
1　SI26　カマドＢセクション　西から
2　SI26　カマドＢ　西から
3　SI26・27　セクション　東から
4　SI27　西から
5　SI27　カマドセクション　南から
6　SI28　西から
7　SI28　カマド遺物出土状況　南から
8　SI28　カマドセクション　西から

遺構図版 8
1　SI29　西から
2　SI30　南から
3　SI30　カマド　南から
4　SI31　北から
5　SI32　南から
6　SI33　南から
7　SI33　カマド　南から
8　SI34　北側焼土セクション　西から

遺構図版 9
1　SI34　南から
2　SI35・38・SK40　セクション　南から
3　SI35　南から
4　SI36　硬化面確認状況　北東から
5　SI37　セクション・遺物出土状況　東から
6　SI37　西から
7　SI38　セクション　西から
8　SI38　遺物出土状況　西から

遺構図版 10
1　SI38　南から
2　SI39　南から
3　SI41　西から
4　SI42　南から
5　SI43　南から
6　SB01　西から
7　SB03・04　西から
8　SB05・07・09　東から

遺構図版 11
1　SB05　P3 セクション　西から
2　SB06　P2 セクション　南から
3　SB06　P3 セクション　西から
4　SB06　東から
5　SB08　東から
6　SK01　東から
7　SK12　セクション　北から
8　SK12　北東から

遺構図版 12
1　SK39　南東から
2　SK40　セクション　北から
3　SK40　東から
4　SK41　セクション　北から
5　SK41　遺物出土状況
6　SK41　北から
7　SK42　遺物出土状況
8　調査風景　西から

遺物図版 1
SI01 出土遺物
SI02 出土遺物
SI03 出土遺物

遺物図版 2
SI04 出土遺物
SI05 出土遺物
SI06 出土遺物
SI07 出土遺物
SI08 出土遺物

遺物図版 3
SI08 出土遺物
SI09 出土遺物
SI10 出土遺物

遺物図版 4
SI11 出土遺物
遺物図版 5
SI11 出土遺物
SI12 出土遺物
SI13 出土遺物
遺物図版 6
SI14 出土遺物
SI15 出土遺物
SI16 出土遺物
SI17 出土遺物
遺物図版 7
SI17 出土遺物
SI18 出土遺物
SI19 出土遺物
遺物図版 8
SI19 出土遺物
SI20 出土遺物
遺物図版 9
SI21 出土遺物
SI22 出土遺物
SI24 出土遺物
SI25 出土遺物
遺物図版 10
SI26 出土遺物
SI27 出土遺物
SI28 出土遺物
SI29 出土遺物
SI30 出土遺物
遺物図版 11
SI30 出土遺物
SI31 出土遺物
SI32 出土遺物
SI33 出土遺物
遺物図版 12
SI34 出土遺物
SI35 出土遺物
SI37 出土遺物
遺物図版 13
SI37 出土遺物
SI38 出土遺物
遺物図版 14
SI38 出土遺物
SI39 出土遺物
SI41 出土遺物
SI42 出土遺物
SI43 出土遺物
SK01 出土遺物
遺物図版 15
SK03 出土遺物
SK06 出土遺物
SK12 出土遺物
SK16 出土遺物
SK18 出土遺物
SK26 出土遺物
SK33 出土遺物
SK35 出土遺物
SK39 出土遺物
SK40 出土遺物
遺物図版 16
SK41 出土遺物
SK42 出土遺物
SK43 出土遺物
SB01 出土遺物
SB02 出土遺物
SB03・04 出土遺物
SB05 出土遺物
SB06 出土遺物
SB09 出土遺物
遺物図版 17
遺構外出土遺物
試掘調査トレンチ出土遺物

第１章　調査の方法と経過

第１節　調査の方法

発掘調査

調査はトレンチ試掘調査結果にもとづき、重機による表土除去を行った。各遺構の掘り下げは、人力によって行い、遺物の出土状況の記録、各遺構の正確な検出と切り合い関係の把握、土層の堆積状況の把握に努めた。土層断面はすべて実測を行い、土色帖を用いて記録・写真撮影を行った。

調査区内には公共座標に沿って10m四方のグリッドを設定し、北から南へアルファベット（A～E）を、西から東へアラビア数字（1～6）を付して実測や遺物取り上げの基準とした。遺構・遺物の出土状況の記録は原則として20分の1縮尺を基準とし、遺構全体図は200分の1縮尺とした。

写真撮影は、白黒35㎜、カラースライド35㎜、白黒6×7判を用いて調査の過程で随時行った。

整理作業

遺物はすべて水洗いを行なった後に注記を行った。注記は一部「泉台」「イズミ台」「イズミダイ」とされていた。平成23年度の整理作業時点で遺跡名が杉ノ井遺跡と変更になっていたが、混乱を避けるために、遺跡の略称は「イズミダイ -1988」とした。その他の略記号は奈良文化財研究所の仕様に従った。接合を行った後、遺物の台帳を作成し、未掲載遺物は種類別に分類してその重量を示した。実測は遺物量が多量で、紙面の都合上かなりの量を絞らざるを得なかったが、でき得る限り多くの器種を提示するように心掛けた。

遺構測量図はデジタルトレースを実施し、個別図から全体測量図を起こした。デジタルトレースはAdobe社Illustrator CS2・4で実施した。

遺構写真は現地で撮影した35㎜モノクロネガフィルムをデジタル化、JPEGデータを作成して用いた。遺物写真はデジタルカメラ700万画素で撮影を行い、Photoshop CS2・4で処理して掲載した。

原稿はWord、Excelで入力し、編集はInDesign CS4を用いた。

第２節　調査の経過

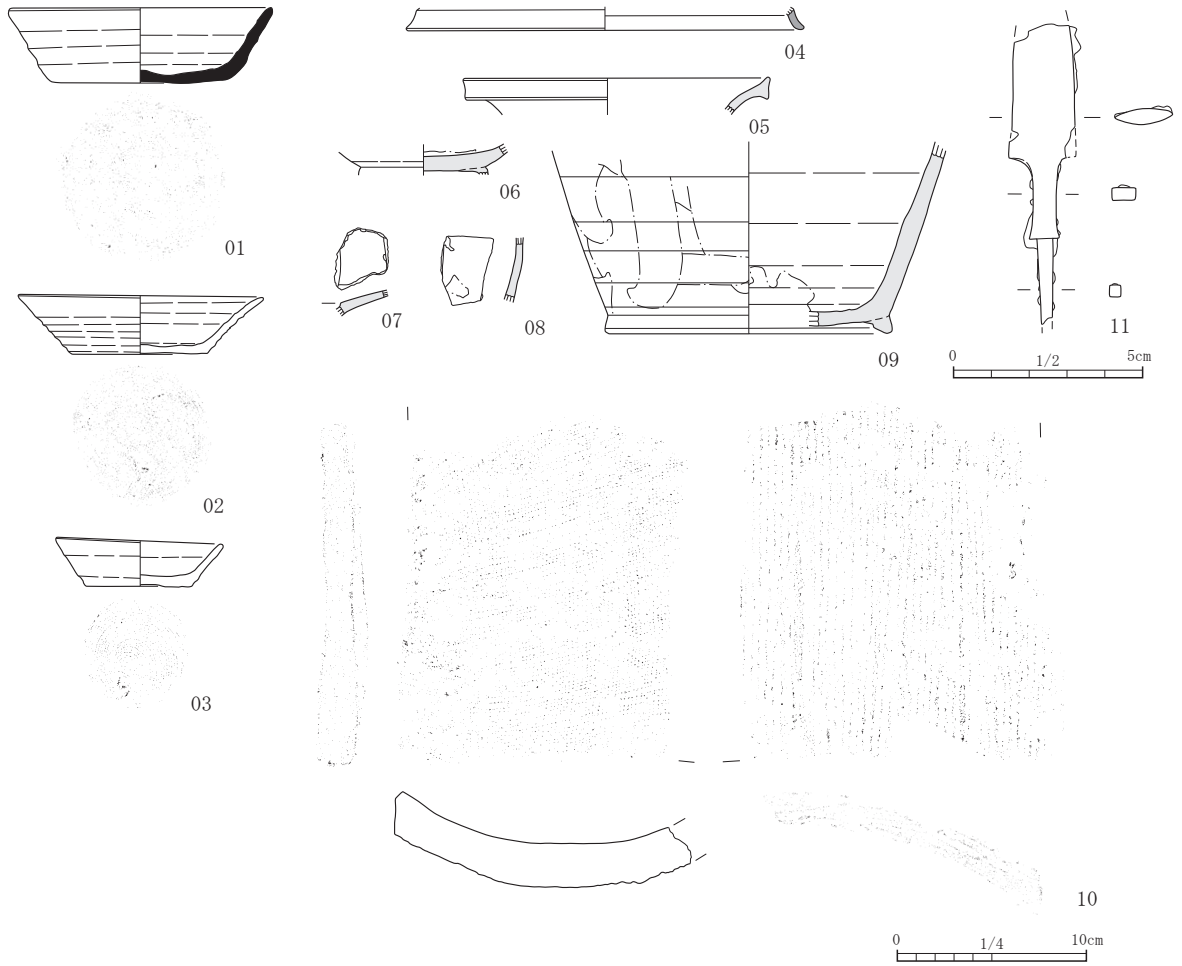
発掘調査

平成10年6月26日～7月15日　重機による表土除去作業を行う。表土の搬出場所が確保できず、面積の半分まで表土除去し残り部分に仮置きして、遺構の掘り込みを開始する。住居跡19軒、掘立柱建物跡3棟、その他土坑の掘り込みを終了し、各図面作成・写真撮影を行って残りの部分の表土切り返しを行う。

平成10年7月20日～8月 7日　残り半分の表土除去作業を行い、住居跡20数軒、掘立柱建物跡数棟を確認する。各遺構の掘り込み、遺物取り上げ、作図、写真撮影を行い、調査をすべて終了する。

整理作業

平成23年9月5日から作業を開始。実施場所は旧高浜幼稚園舎屋。同7日から遺物の水洗いを開始、順次、接合・実測を進める。同12日から遺構図、同21日から遺物実測図のトレースを開始、順次、図版の版組を進める。10月11日から遺物観察表の作成、同14日から遺物の写真撮影を行う。同21日から原稿執筆を開始。同25日遺構図、11月11日遺物実測図トレース終了。同22日観察表作成を終了。同24日から全体の編集作業に取り掛かる。並行して、遺物の収納・納品準備を行う。同30日、初稿を市教育委員会に提出。12月5日、調査資料を返還、作業を終了する。



第１図　試掘調査トレンチ出土遺物

第１表　試掘調査トレンチ出土遺物観察表

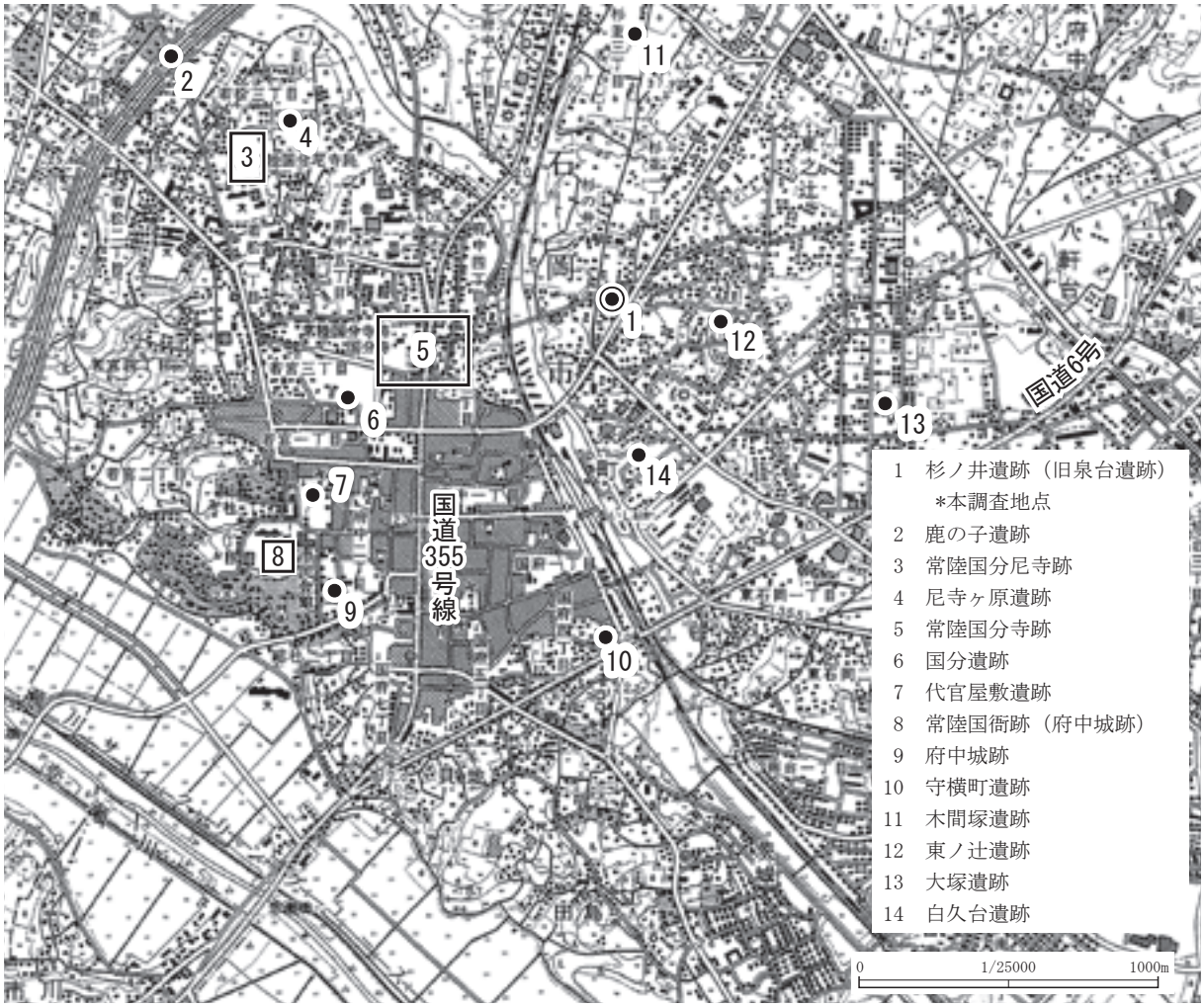
掲載番号	注記	種類	器種	口径	器高	底径	重量	残存	整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
01	No.2 トレンチ	須恵器	無台坏	13.7	4.0	9.0	238.4	ほぼ完形	ロクロ整形、底部一方向の手持ちヘラケズリ。火ダスキあり。	雲母多い、白色針状物質少量、長・石等小礫多い	還元不良	内外面　にぶい黄褐	
02	No.3 トレンチ	土師器	無台坏	12.9	3.05	7.0	94.5	完形	ロクロ整形、底部回転糸切り(左)。	雲母・白色粒子・スコリア少量	良好	内外面　にぶい黄橙	
03	No.3 トレンチ	土師器	小皿	8.5	2.35	5.5	71.5	完形	ロクロ整形、底部回転糸切り(左)。	雲母・白色粒子やや多い、スコリア・白色針状物質微量	良好	内外面　にぶい黄褐	
04	No.2 トレンチ	緑釉陶器	香炉ヵ	—	〈1.2〉	(20.8)	1.8	脚台部片	器壁は比較的薄く内傾して立ち上がり上位で更に内側へ屈曲。	精良	良好	胎土　明茶褐 釉　淡緑	猿投 K90 併行ヵ 【288】実 98-1-001
05	No.1 トレンチ	灰釉陶器	長頸瓶	(17.0)	〈1.9〉	—	12.3	口縁 10%	器壁は薄く口縁付近で強く外反し端部に至る。口縁部分の減り張りが大きい。	精良	良好	胎土　灰白 釉　暗淡緑	猿投 K90 【289】実 98-1-002
06	No.2 トレンチ	灰釉陶器	椀	—	〈1.6〉	—	30.2	底部 1/4	ロクロ整形、底部回転糸切り、高台は下半を欠損しているが断面三日月状を呈すると考えられる。器壁は比較的厚く緩やかに内湾する。	鉄分の噴出し微量	良好	胎土　灰白 釉　暗淡緑（刷毛塗）	美濃光ヶ丘 1 【290】実 98-1-003
07	No.3 トレンチ	灰釉陶器	段皿	—	〈1.4〉	—	5.6	体部片	器壁は比較的薄く屈曲後緩やかに外反し立ち上がる。	鉄分の噴出し少量	良好	胎土　灰白 釉　暗淡緑	猿投 K90 【291】実 98-1-004
08	No.3 トレンチ	灰釉陶器	長頸瓶	—	〈3.4〉	—	6.1	胴部片	ロクロ整形、外面回転ヘラケズリ。	鉄分の噴出し少量	良好	胎土　淡灰 釉　暗淡緑	猿投 K14 【292】実 98-1-005
09	No.3 トレンチ	灰釉陶器	広口瓶	—	〈9.9〉	(14.8)	256.7	体下位～底部 1/3	ロクロ整形、外面下位回転ヘラケズリ、高台は比較的低く断面矩形で内傾面を有し貼付が粗雑。	鉄分の噴出しやや多い	良好	胎土　灰白 釉　暗淡緑（刷毛塗）	猿投 053 【293】実 98-1-006
10	No.2 トレンチ	瓦	平瓦	タテ (19.8)	ヨコ (15.9)	厚 2.3	1,150.6	下縁・右側縁残存	凹面布目圧痕、下端・側縁ケズリ。凸面縄目回転圧痕。端・側面ケズリ。	白色粒子多い	良好	内外面　褐灰	
11	No.3 トレンチ	鉄製品	鉄鏃	長 〈7.9〉	幅 〈1.8〉	厚 0.4	12.3	身部・茎部端欠損	平根系柳葉形鏃。身部に鎬なし。身部厚 0.4cm。矢柄の木質は看取されない。				

第 2 章　遺跡の位置と環境

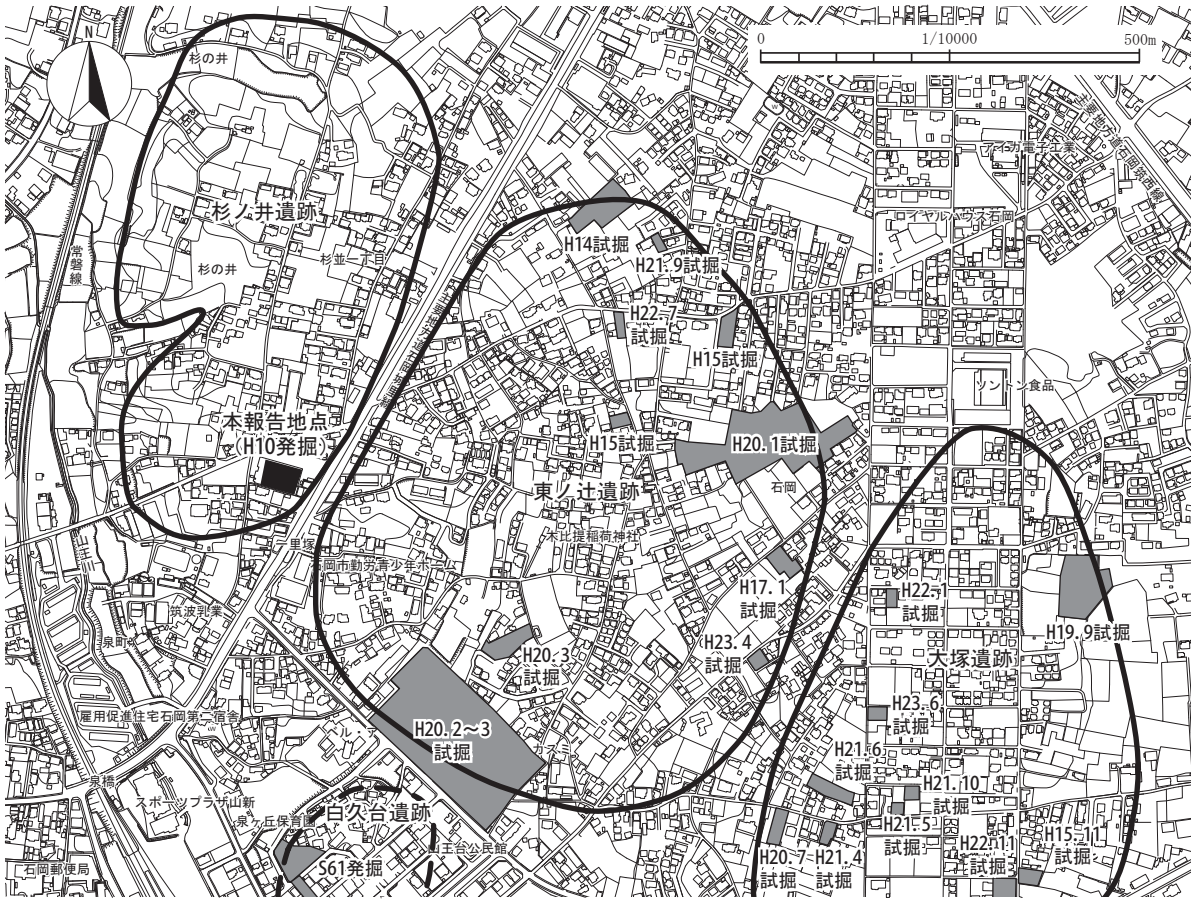
石岡市の中心部から北東方向約 1 ㎞、常陸国分寺跡から山王川の谷を挟んで 700m ほど東方の標高 25 メートルの台地上にある。東・南方からは恋瀬川を渡河して台地上に上がった、現在の石岡小学校が常陸国衙・国庁跡に比定されており、周辺には常陸国分寺跡、同国分尼寺跡、漆紙文書の出土で著名な鹿の子遺跡等、奈良～平安時代の遺跡が数多く分布し、古代常陸国の中心地域の一角にある。官道である東海道の経路については、現在の石岡市域のどの部分を通過するか明瞭にはなっていないが、国府、国分寺、国分尼寺周辺に駅路の存在が想定されている（木下 1996）。仮に官道が国道 355 号線沿いに存在していたとすれば、本遺跡の西側を通過することになり、官道は本遺跡と国庁の中間を北上することになる。

2009 年に纏められた『常陸国衙跡』Ⅱ -2-3「国衙周辺の遺跡」に詳しいが、周辺の集落遺跡としては国分遺跡、鹿の子遺跡、常陸国分寺跡、尼寺ヶ原遺跡、代官屋敷遺跡が発掘調査されている。また 2011 年に調査が行われた府中城跡（石山ほか編 2011）がこれに加わることになり、本遺跡を含め 7 遺跡が調査されている。国衙周辺域の集落についての性格が問われるところである。鹿の子遺跡が国衙付属工房跡と想定されているものの、その他の遺跡では一般集落に比べ大きな差は見出せない。

本遺跡を含めた山王川東岸側には、木間塚遺跡、東ノ辻遺跡、大塚遺跡、白久台遺跡が存在しているが、多くの遺跡で部分的な試掘調査にとどまっており、今後の調査及びその成果報告によってこれらの地域の性格がより明確にされるのを待ちたい。



第 2 図　遺跡の位置と周辺の遺跡（国土地理院発行 2 万 5 千分の 1 地形図『石岡』）



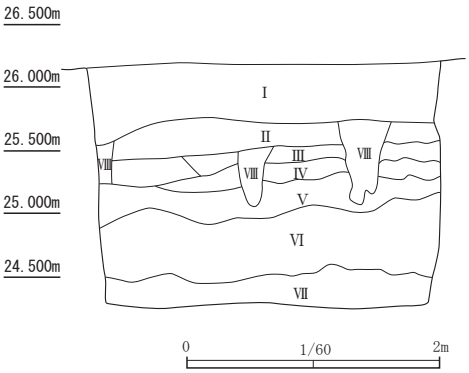
第 3 図　調査地点位置図

第 3 章　標準堆積土層（第 4 図、遺構図版 1）

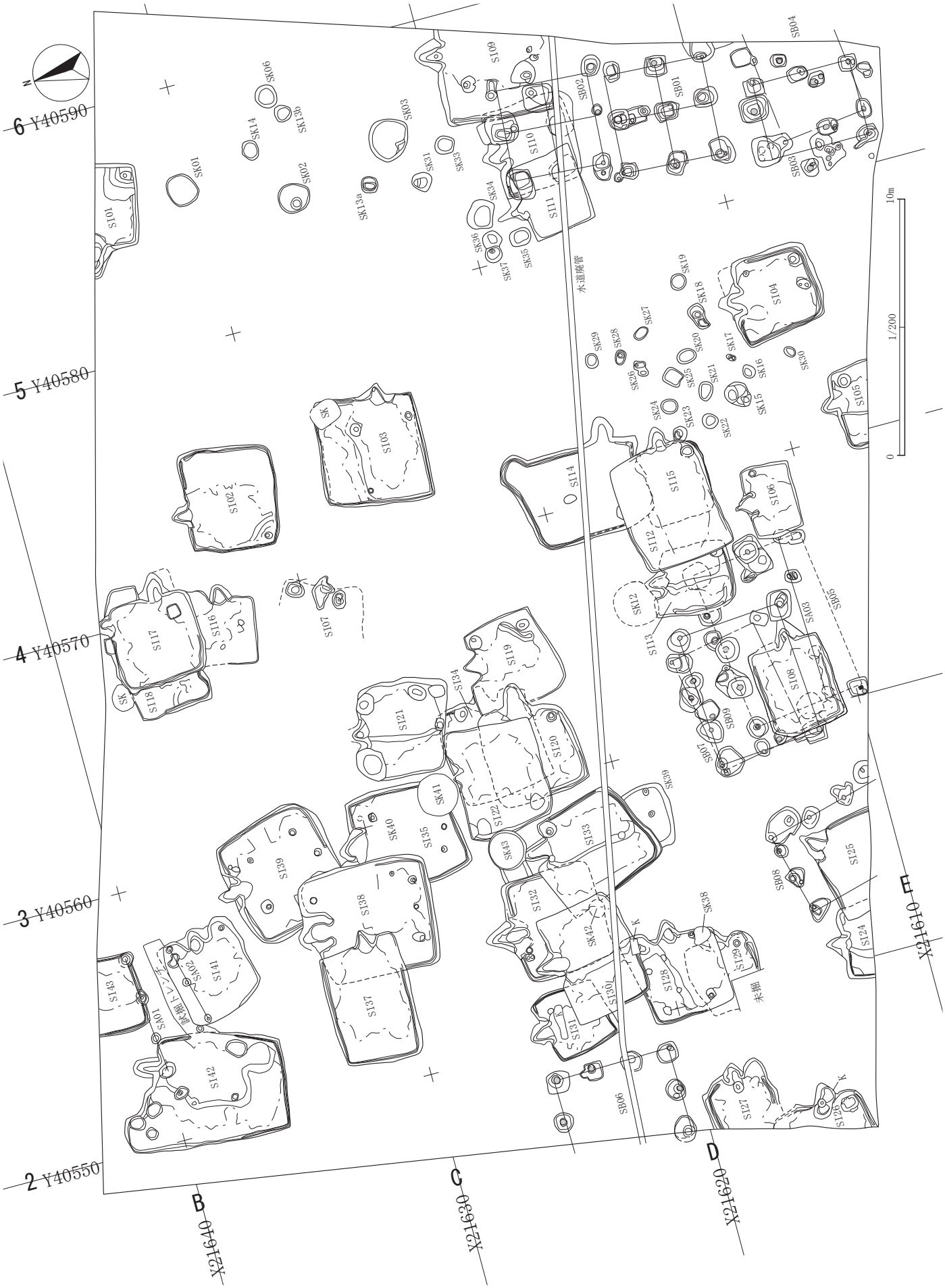
調査区東北端に地表面から約 2m の深さまで垂直に掘り込み標準堆積土層の記録を行う。表層を覆う黒褐色土（Ⅰ層）の厚さは 50cm を測り、この黒褐色土の下から奈良・平安時代の竪穴住居跡の確認ができた。Ⅱ層は暗褐色土で奈良時代以前の堆積土層である。Ⅲ層以下は自然堆積の厚いローム層でⅢ・Ⅳ層は漸移層、Ⅴ層がソフトローム層、Ⅵ層以下がハードロームである。

標準堆積土層の観察位置は記載がなく示すことができていない。表土層からの記載が行われていることからいずれかの調査区壁面にて実施されたものであろう。

テストピット
Ⅰ 7.5YR3/2 黒褐色 ロームブロック φ 1 ～ 2mm 少量。
Ⅱ 7.5YR3/3 暗褐色 ロームブロック φ 1 ～ 2mm 少量。（遺構確認面）
Ⅲ 7.5YR4/4 褐色
Ⅳ 7.5YR4/4 褐色
Ⅴ 7.5YR5/6 明褐色（ソフトローム層）
Ⅵ 7.5YR4/6 褐色（ハードローム層）
Ⅶ 7.5YR6/8 橙色（ハードローム層）白色粒子を少量含む。
Ⅷ 7.5YR3/4 暗褐色 ロームブロック φ 1 ～ 2mm 多量。



第 4 図　標準堆積土層


N
6 Y40590
5 Y40580
4 Y40570
3 Y40560
2 Y40550
B X21640
C X21630
D X21620
E X21610
水道埋管
木柵
1/200
0
10m

第５図　調査区全体図

第４章　検出された遺構と遺物

第１節　住居跡

検出された住居跡は１～43号の41軒で、SI23・40は欠番である。分布状況は調査区域の北東側でやや疎になるものの、全体にまんべんなく検出されており、西側中央部分では重複が多い。住居跡の形状については、おおむね正方形に近いものと長方形を呈するものの二者に分類できるが、正方形の住居跡では北側カマドが主体で、長方形の住居跡は東カマドが多い。西カマドは１軒のみ確認されている。床面に段を有するもの、棚状の施設を有するもの、鍛冶炉を有するもの、柱穴を有するものとないものなど、様々である。以下、検出された住居跡及びその出土遺物について記述する。

なお、各計測値については以下の基準に従って行っている。規模は南北長×東西長。主軸はカマドの設置された壁との直交方向とした。床面の深さは確認面からの深さ。ピット等の計測値は長軸×短軸×深さで示した。

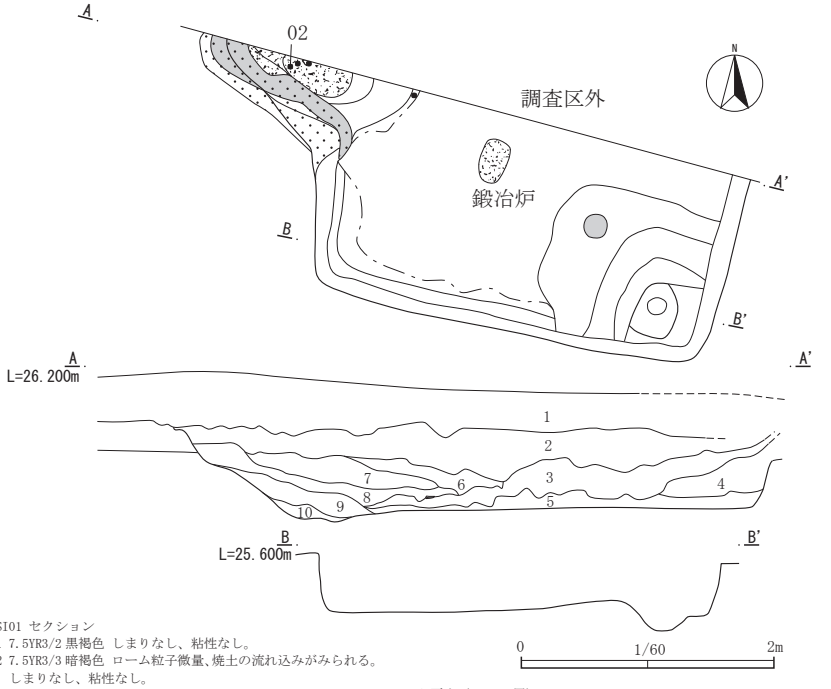
ところで重複する遺構はほとんど同時に覆土の掘り下げを行っているようであり、形状や切り合い関係の記録が十分ではない。

SI01（第６・７図、第２・３表、遺構図版１、遺物図版１）

検出位置：調査区北東端部B5グリッド。北側半分が調査区域外となる。**平面形状**：不明。**主軸方向**：N－86°－W。**規模**：―×3.4m。**確認面下の深さ**：42㎝。**覆土**：６層に分層され自然堆積。**柱穴**：検出されていない。**壁溝**：西及び南壁際に浅い掘込が巡る。**床面**：平坦。**カマド**：西壁中央付近に設置され、壁際主軸部分の全長は187㎝で、西壁から130㎝ほど掘りだされ、山砂及び粘土により構築された袖が大きく開いて設置されている。中央部分には火床面が楕円形に設けられる。カマド覆土は４層に分層され、最下層には灰層が検出されている。**その他付帯施設**：南東コーナー部分に貯蔵穴が検出されている。掘込は上位で方形を呈し、下位では円形となる。上端部での規模は67×64㎝、深さは45㎝。穴の周囲は緩やかな周堤が巡り、硬く踏み固められている。また、周堤の一部には直径18㎝程度の円形に粘土の堆積が認められる。住居中央やや南西寄りのカマド前面に、隅丸方形の鍛冶炉が１基検出されている。長軸は35㎝、端軸24㎝を測る。**重複関係**：なし。

掲載遺物：土師器無台坏７点（墨書土器６点「曹司」「万」「福」ほか）、有台付埦１点、甕２点、須恵器無台坏１点。灰釉陶器長頸瓶２点（猿投053）、皿１点（猿投K90）。

その他未掲載遺物：土師器1182.5g、須恵器312.0g、瓦163.8g。

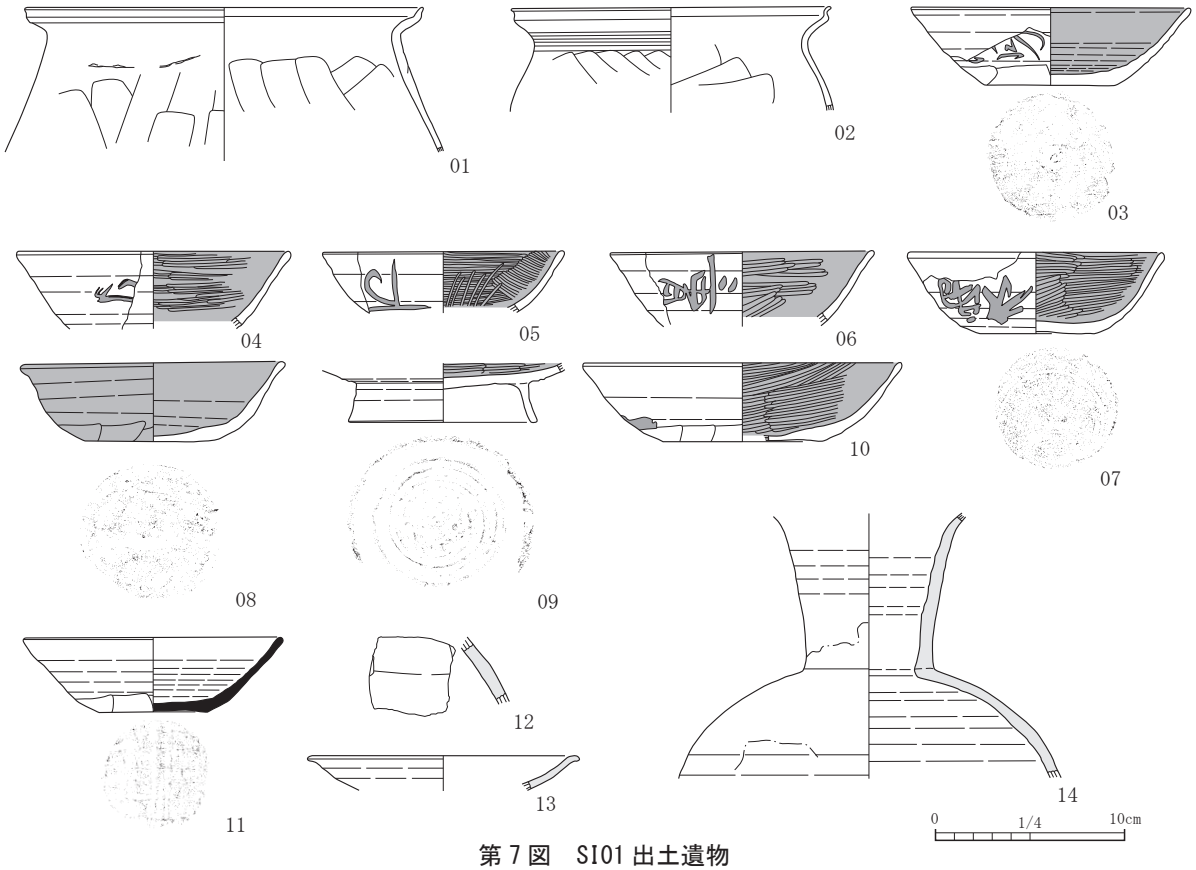


SI01 セクション
1 7.5YR3/2 黒褐色 しまりなし、粘性なし。
2 7.5YR3/3 暗褐色 ローム粒子微量、焼土の流れ込みがみられる。しまりなし、粘性なし。
3 7.5YR3/4 暗褐色 ローム粒子・ロームブロックφ１～2mm少量。しまりなし、粘性なし。
4 7.5YR3/4 暗褐色 ローム粒子・ロームブロックφ２～10mm中量。しまりなし、粘性なし。
5 7.5YR3/3 暗褐色 ロームブロックφ１～5mm少量。しまりなし、粘性なし。
6 7.5YR3/2 黒褐色 ローム粒子微量。しまりなし、粘性なし。

カマド覆土（７～10層）
7 7.5YR3/3 暗褐色 山砂が全体に流れ込む。しまりなし、粘性なし。
8 7.5YR3/2 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子微量。粘土ブロック含む。しまりなし、粘性なし。
9 焼土ブロック・炭化物粒子多量。粘土ブロック含む。
10 炭化物・灰層。

第６図　SI01

遺構の帰属時期：出土遺物から判断される遺構の帰属時期は、内面に黒色処理を施す無台坏（墨書土器）03～07・10、11 の須恵器坏の形状から 9 世紀前半と判断される。一方で、灰釉陶器では黒笹 90 号窯式に折戸 53 号窯式が混在しており、09 の高足高台の埦を含め、一部 10 世紀代の遺物が混入している等、齟齬が見られる。



第 7 図　SI01 出土遺物

第 2 表　SI01 出土遺物遺物観察表（1）

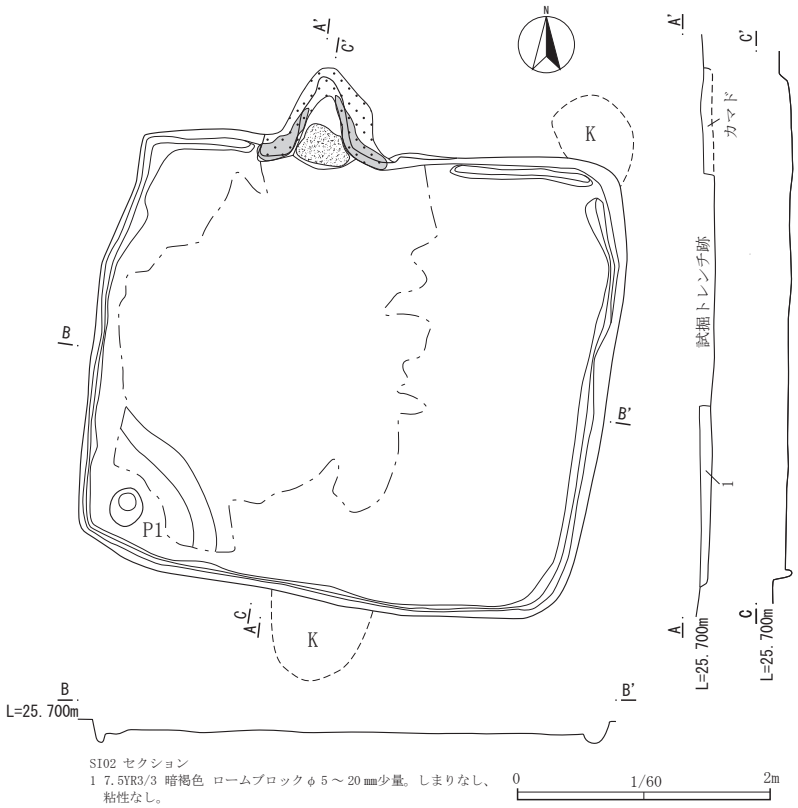
掲載番号	注記	種類	器種	口径	器高	底径	重量	残存	整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
01	覆土・カマド	土師器	甕	(21.0)	〈7.9〉	—	95.1	口縁 1/4	口縁横ナデ、胴部上位内外面共にナデ。	長石・石英・雲母やや多い	良好	内外面　橙	
02	N01	土師器	甕	(17.0)	〈5.5〉	—	32.9	口縁 1/6	口縁横ナデ、胴部上位内外面共にナデ。口唇摘み上げ顕著。	長石・石英・雲母やや多い	良好	内面　明褐灰 外面　にぶい橙	
03	覆土	土師器	無台坏	(14.8)	4.1	6.9	118.7	口縁 1/8～底部	ロクロ整形、下端手持ちヘラケズリ、底部一方向の手持ちヘラケズリ。	雲母やや多い	良好	内面　黒褐 外面　にぶい黄橙	墨書「□」 内面黒色処理
04	中層覆土	土師器	無台坏	(14.4)	〈4.1〉	—	19.9	口縁 1/4	ロクロ整形、内面ミガキ。	雲母やや多い、白色粒子微量	良好	内面　黒褐 外面　にぶい黄橙	墨書「□」 内面黒色処理
05	覆土	土師器	無台坏	(12.8)	〈3.2〉	—	22.9	口縁 1/4	ロクロ整形、内面ミガキ。	雲母．白色粒子微量	良好	内面　黒褐 外面　にぶい黄橙	墨書「万」 内面黒色処理
06	中層覆土	土師器	無台坏	(13.8)	〈3.9〉	—	14.5	口縁 1/8	ロクロ整形、内面ミガキ。	長石・石英・雲母やや多い	良好	内面　黒褐 外面　にぶい黄橙	墨書「曹司」 内面黒色処理
07	覆土	土師器	無台坏	(13.4)	4.3	6.1	93.3	口縁 1/8～底部	ロクロ整形、下端～底部回転ヘラケズリ、内面ミガキ。	白色粒子・白色針状物質やや多い、雲母微量	良好	内面　黒 外面　にぶい黄橙	墨書「福」、底面「井」 墨書ヵ 内面黒色処理
08	覆土	土師器	無台坏	(13.8)	4.2	7.0	157.2	口縁 2/3 欠損	ロクロ整形、下端手持ちヘラケズリ、底部多方向の手持ちヘラケズリ、内面ミガキ。	雲母やや多い、小～中礫少量	良好	内外面　褐	内外面黒色処理
09	覆土	土師器	有台埦	—	〈3.1〉	10.0	135.2	高台ほぼ完形	ロクロ整形、内面ミガキ。底部回転ヘラ切り。	雲母やや多い、白色粒子少量	良好	内面　黒褐 外面　にぶい褐	内面黒色処理
10	覆土	土師器	無台坏	(17.0)	〈3.9〉	(9.0)	29.2	1/3	ロクロ整形、下端手持ちヘラケズリ、底部回転糸切り（左）	雲母少量、白色粒子微量	良好	内面　黒 外面　にぶい黄橙	墨書「□」 内面黒色処理
11	覆土	須恵器	無台坏	(13.8)	3.9	5.8	98.2	口縁 1/3～底部	ロクロ整形、下端手持ちヘラケズリ、底部一方向の方向の手持ちヘラケズリ、内面ミガキ。	雲母多い、長石・石英等小～中礫少量	良好	内外面　灰白	新治産
12	覆土	灰釉陶器	長頸瓶	—	〈3.5〉	—	19.6	胴部片	器壁は比較的薄く、内側にやや丸みを持ってたちあがる。	鉄分の噴出しやや多い、白色粒子少量	良好	胎土　淡灰 釉　暗淡緑	猿投 053 【303】実 98-2-011
13	下層	灰釉陶器	皿	(14.8)	〈1.8〉	—	8.5	口縁部片	器壁は薄く緩やかに内湾して立ち上がり口縁端部で強く外反。部分的に火ブクレがみられる。	精良	良好	内面　灰白 外面　暗淡緑	猿投 K90 【304】実 98-2-012

第３表　SI01 出土遺物遺物観察表（2）

掲載番号	注記	種類	器種	口径	器高	底径	重量	残存	整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
14	下層	灰釉陶器	長頸瓶	—	〈14.0〉	—	360.7	頸部～肩部	ロクロ整形。	精良	良好	胎土　灰白 釉　灰オリーブ	猿投 053 K90 以前と比べ土が粗悪 【305】実 98-2-013

SI02（第８・９図、第４表、遺構図版１、遺物図版１）

検出位置：調査区北壁側中央付近 B4 グリッド。**平面形状**：方形。**主軸方向**：N－2°－E。**規模**：3.64m × 4.07m。**確認面下の深さ**：10 ㎝。**覆土**：確認面が浅く、暗褐色土の単層。**柱穴**：検出されていない。**壁溝**：カマド部分を除きほぼ全周する。幅 15 ㎝、深さ 7 ㎝前後。**床面**：平坦。**カマド**：北壁中央西寄りに設置され、壁際主軸部分の全長は 82 ㎝で、西壁から 60 ㎝ほど掘りだされる。山砂及び粘土により構築された袖が大きく開いて設置される。中央部分には火床面が東西方向の楕円形に広がる。**その他付帯施設**：南東コーナー部分に貯蔵穴が検出されている。掘込は住居跡のコーナー部分を仕切るように高さ 10 ㎝ほどの周堤が巡り、丸味を帯びた三角形に掘りこまれる。下層では円形になる。下層円形部の規模は 33 × 28 ㎝、深さは 16 ㎝。



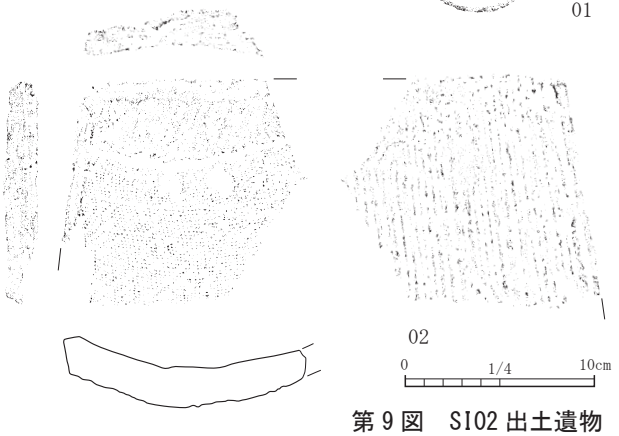
第８図　SI02

重複関係：なし。

掲載遺物：土師器有台埦１点、平瓦１点。前者は高台がハの字に開くもので、内面は磨かれて黒色処理されている。

その他未掲載遺物：土師器 386.5g、須恵器 74.6g。

遺構の帰属時期：有台埦１点のみからであるが、形状より９世紀後半と判断される。



第９図　SI02 出土遺物

第４表　SI02 出土遺物観察表

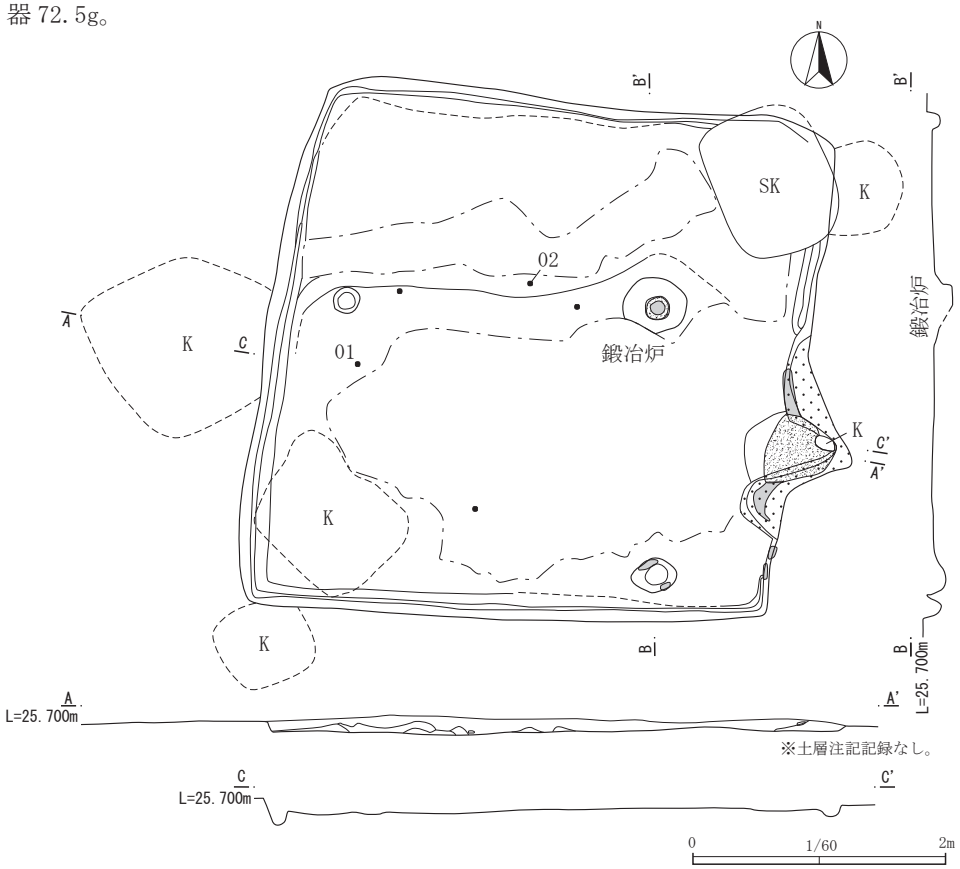
掲載番号	注記	種類	器種	口径	器高	底径	重量	残存	整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
01	覆土	土師器	有台埦	13.2	5.5	7.7	183.2	ほぼ完形	ロクロ整形、内面ミガキ。	白色粒子・雲母少量、スコリア微量	良好	内面　黒 外面　にぶい黄橙	
02	覆土	瓦	平瓦	タテ (12.0)	ヨコ (12.3)	厚 2.2	455.0	上縁・左側縁残存	凹面糸切り痕、布目圧痕（布縁あり）。上端・側端ケズリ。凸面縄目回転圧痕。端・側面ケズリ。	白色粒子やや多い	良好	内面　オリーブ灰 外面　灰	

SI03（第 10 ～ 12 図、第 5 表、遺構図版 1、遺物図版 1）

検出位置:調査区中央やや北東寄り C4 グリッド。**平面形状**:正方形。**主軸方向**:N-97°-E。**規模**:4.12m × 4.04m。**確認面下の深さ**：11 ㎝。**覆土**：5 層に分層され自然堆積。**柱穴**：南東コーナー付近及び西壁中央寄りに各 1 基が検出されている。**壁溝**：カマド部分を除きほぼ全周する。幅 18 ㎝、深さ 10 ㎝前後。**床面**：北側 5 分の 2 の部分が帯状に高くなり、段差を有す。**カマド**：東壁の南寄りに設置され、主軸部分の全長は 82 ㎝で、東壁から 52 ㎝ほど掘りだされる。山砂及び粘土により構築された袖が僅かながら設置される。火袋部分には焼土が大きく広がる。**その他付帯施設**：床面中央やや北東寄りのカマド前面に鍛冶炉が検出されている。規模は 48 × 45 ㎝、深さ 12 ㎝を測る。円形で底部は焼土化している。**重複関係**：北東コーナー部分に土坑（遺構番号不明）が本遺構を切っている。

掲載遺物：土師器坏 2 点、鉄滓（埦形滓）1 点、灰釉陶器皿 1 点（美濃大 2 ～虎 1）、長頸瓶 1 点（猿投 K90）、粒状滓 2.2g、鍛造剥片 24.6g（写真のみ）。

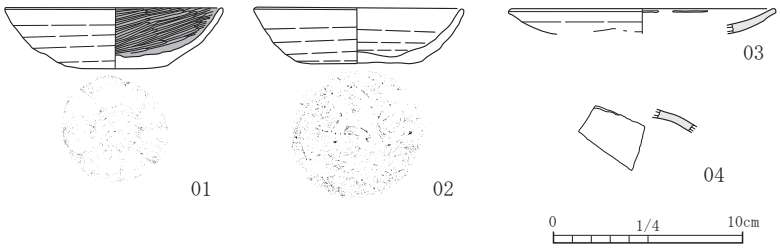
その他未掲載遺物：土師器 2920g、須恵器 1040g、瓦 547.3g、鉄滓 5g、鉄製品 22.9g。**近世以降の遺物**：陶器 72.5g。



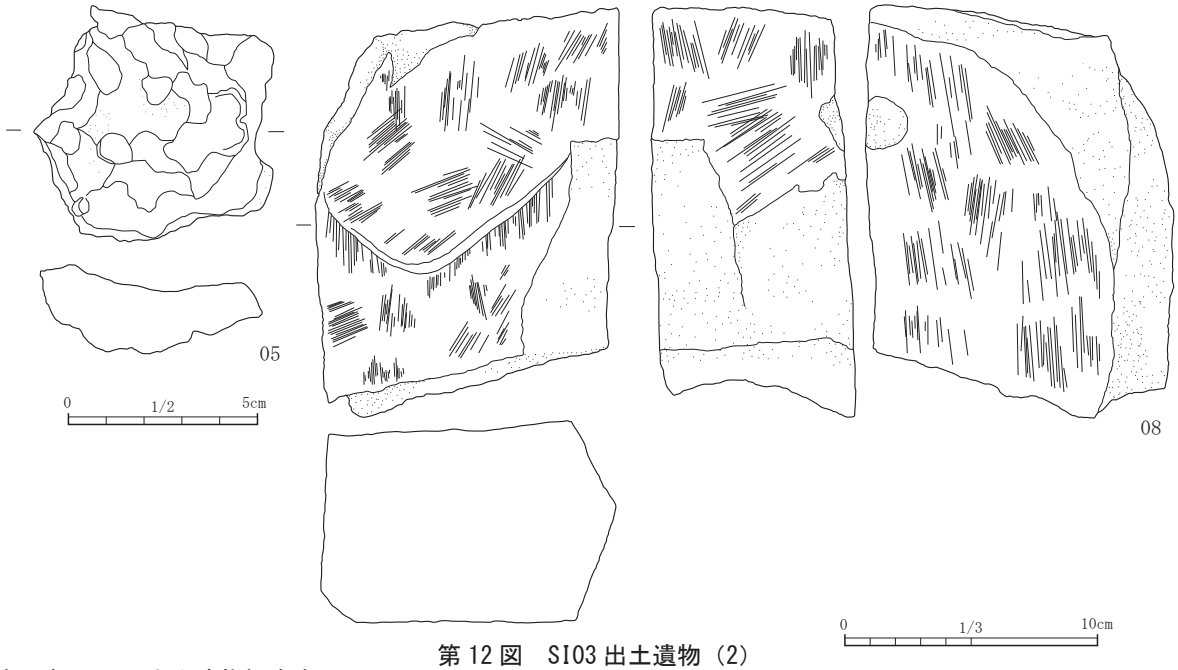
第 10 図　SI03

遺構の帰属時期：出土遺物から判断される遺構の帰属時期は 01・02 の土師器坏及び大原 2 号窯式～虎渓山 1 号窯式の灰釉陶器から 10 世紀前半と判断される。

備考：遺構及び遺物から判断して鍛冶工房と判断される。鉄滓・粒状滓・鍛造剥片・金床石が検出されているが鞴の羽口は出土していない。



第 11 図　SI03 出土遺物（1）



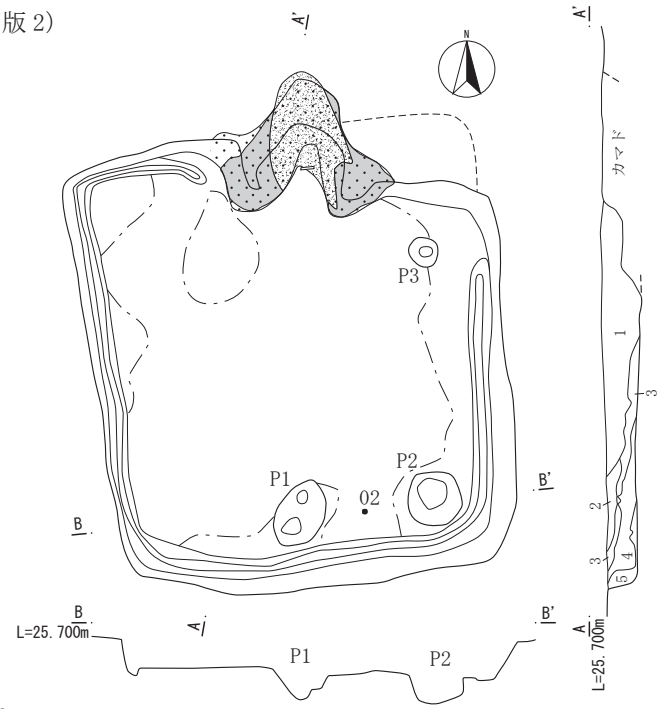
第 12 図　SI03 出土遺物（2）

第５表　SI03 出土遺物観察表

掲載番号	注記	種類	器種	口径	器高	底径	重量	残存	整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
01	№02	土師器	無台坏	11.4	3.2	5.4	118.5	ほぼ完形	ロクロ整形、底部回転糸切り後ナデ、内面ミガキ。	雲母・白色粒子少量、白色針状物質微量。	良好	内面　黒褐 外面　明黄褐	内面黒色処理
02	№04	土師器	無台坏	10.8	2.9	6.7	115.2	口縁一部欠損	ロクロ整形、底部回転ヘラ切り。	小～中礫・雲母少量、スコリア微量	良好	内面　にぶい黄褐 外面　にぶい黄橙	
03	覆土	灰釉陶器	皿	(13.8)	〈1.3〉	—	8.8	口縁部片	器壁は比較的厚く、緩やかに内湾して立ち上がる。	白色粒子・鉄分の噴出し微量	良好	胎土　白灰 釉　暗淡緑	美濃・大２～虎１ 口縁部内面に重ね焼き痕 【306】実 98-2-014
04	覆土	灰釉陶器	長頸瓶	—	〈1.2〉	—	5.6	胴部片	器壁は薄く丸みを持って立ち上がる。	精良	良好	胎土　淡灰 釉　暗淡緑	猿投 K90 【307】実 98-2-015
05	覆土	鉄滓	埦形滓	タテ 6.1	ヨコ 6.3	厚 2.1	99.6	—	埦形を呈する鉄滓、炉底に溜まったものと判断される。				
06	炉内土	鉄滓	粒状滓	直径 2.1 ～ 5.4mm			2.2	—	磁力を持つものあり。				写真のみ
07	炉内土	鉄滓	鍛造剥片	最大長 15.5mm			24.6	—					写真のみ
08	覆土	石製品	金床石	タテ 12.3	ヨコ 10.3	厚 7.0	2,250.0	完形ヵ	表裏面と右側面上部は礫表皮。平滑に研磨されている。他面は打割面。裏面と右側面下部（打割面）に泥状の鉄滓付着。全面被熱赤化。特に表裏面顕著。石材：砂岩。				

SI04（第 13・14 図、第６表、遺構図版１、遺物図版２）

検出位置：調査区南東側コーナー寄り D・E4 グリッド。**平面形状**：方形。**主軸方向**：N - 1°-W。**規模**:3.80m × 3.25m。**確認面下の深さ**:24 cm。**覆土**:住居跡の覆土は５層に分層され自然堆積。**柱穴**：南東コーナー付近及び南壁中央寄り、北東コーナー寄りに各１基が検出されている。北西側は設置されていない。**壁溝**：カマド部分を除きほぼ全周する。幅 16 cm、深さ６cm前後。**床面**:平坦。**カマド**:北壁中央付近に設置され、壁際主軸部分の全長は 120 cmで、北壁から 44 cmほど掘りだされる。火床面は不明瞭。**その他付帯施設**：北東コーナー部分のカマド東側に隣接して、三角形に広がる棚状の施設が設置されている。**重複関係**：なし。



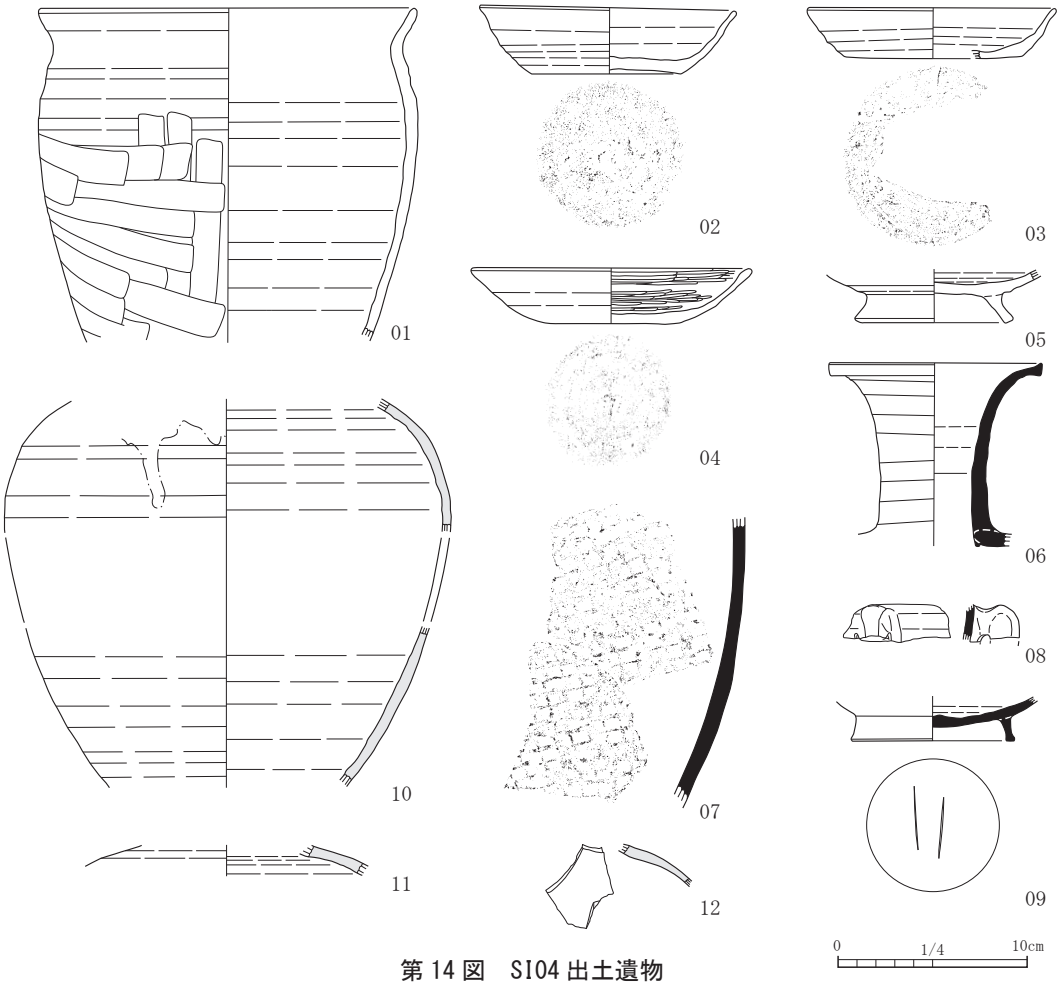
SI04 セクション
1 7.5YR3/2 黒褐色　ローム粒子・ブロックφ２～５mm 中量、焼土粒子微量。しまりなし、粘性なし。
2 7.5YR3/4 暗褐色　ローム粒子少量、焼土粒子微量。しまりなし、粘性なし。
3 7.5YR3/4 暗褐色　ロームを多量に混入。しまりなし、粘性なし。
4 7.5YR3/4 暗褐色　ローム粒子微量、焼土粒子微量。しまりなし、粘性なし。
5 7.5YR3/4 暗褐色　ロームを多量に混入。３層に類似。しまりなし、粘性なし。

第 13 図　SI04　　0　1/60　2m

掲載遺物：土師器無台坏 3 点、有台埦 1 点、甕 1 点、須恵器有台坏 1 点、瓶 2 点、灰釉陶器長頸瓶 3 点（猿投 K90）。

その他未掲載遺物：土師器 3940g、須恵器 640g、瓦 167.3g、鉄滓 5g。

遺構の帰属時期：土師器無台坏の形状及び灰釉陶器黒笹 90 号窯式の出土から 9 世紀後半と判断される。



第 14 図　SI04 出土遺物

第 6 表　SI04 出土遺物観察表

掲載番号	注記	種類	器種	口径	器高	底径	重量	残存	整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
01	覆土	土師器	甕	19.7	〈17.4〉	—	221.7	口縁～胴部下半	ロクロ整形、胴部外面ヘラケズリ。	雲母多い、長石・石英等小～中礫少量、スコリア微量	良好 二次焼成ｱﾘ	内面　橙 外面　にぶい橙	
02	№01	土師器	無台坏	13.4	3.4	7.7	168.0	ほぼ完形	ロクロ整形、底部回転ヘラ切り。	長石・石英・雲母・スコリアやや多い	良好	内面　にぶい黄橙 外面　明黄褐	
03	覆土	土師器	無台坏	12.9	2.7	9.3	81.8	1/2	ロクロ整形、底部回転糸切り後手持ちヘラケズリ。	雲母・スコリアやや多い。	良好	内外面　にぶい黄橙	
04	カマド	土師器	無台坏	(14.6)	2.9	6.8	75.3	口縁 1/5～底部完形	ロクロ整形、底部回転ヘラケズリ、内面ミガキ。	雲母やや多い、白色粒子少量	良好	内面　黄褐 外面　にぶい黄褐	板目ｯ
05	覆土	土師器	有台埦	—	〈2.8〉	7.5	128.0	高台	ロクロ整形、底部回転ヘラケズリ。	雲母・白色粒子・スコリア少量	良好	内面　灰黄褐 外面　黄褐	
06	覆土	須恵器	長頸瓶	11.3	〈9.6〉	—	188.9	口縁～頸部	ロクロ整形。	黒色粒子やや多い、スコリア少量、白色粒子微量	良好	内外面　淡黄	
07	覆土	須恵器	甕	—	—	—	110.2	胴部破片	外面格子目叩き。	長石・石英・雲母やや多い	良好	内面　明褐 外面　橙	格子目叩き
08	覆土	須恵器	双耳瓶	—	2.3	—	17.0	耳部片	肩部に付されるものｯ。丸みを有した板状を呈す、穿孔の数は不明であるが残存する孔の径は 7 ㎜。	鉄分の噴出し少量、白色粒子微量	良好	内外面　黄灰	
09	覆土	須恵器	有台坏	—	〈2.3〉	8.6	108.6	底部	ロクロ整形、身込で緩やかに内湾する。高台は「ハ」の字に付される。	小～中礫やや多い、鉄分の噴出し少量	良好	内外面　黄灰	ヘラ記号 常陸産ｯ
10	覆土	灰釉陶器	長頸瓶	—	〈28.0〉	—	149.2	頸部～胴部片	ロクロ整形、外面回転ヘラケズリ。	鉄分の噴出し多い、白色粒子少量	良好	胎土　灰白 釉　オリーブ黄	猿投 K90 【308】実 98-2-016
11	覆土	灰釉陶器	長頸瓶	—	〈1.6〉	—	14.6	肩部片	器壁は比較的薄く、やや丸みを持ってたちあがる。内面に密なロクロ目。	精良	良好	胎土　灰白 釉　暗淡緑	猿投 K90 【309】実 98-2-017
12	覆土	灰釉陶器	長頸瓶	—	〈2.2〉	—	6.9	胴部片	器壁は薄く丸みを持って立ち上がる。	精良	良好	胎土　灰白 釉　暗淡緑	猿投 K90 【310】実 98-2-018

SI05（第 15・16 図、第 7 表、遺構図版 2、遺物図版 2）

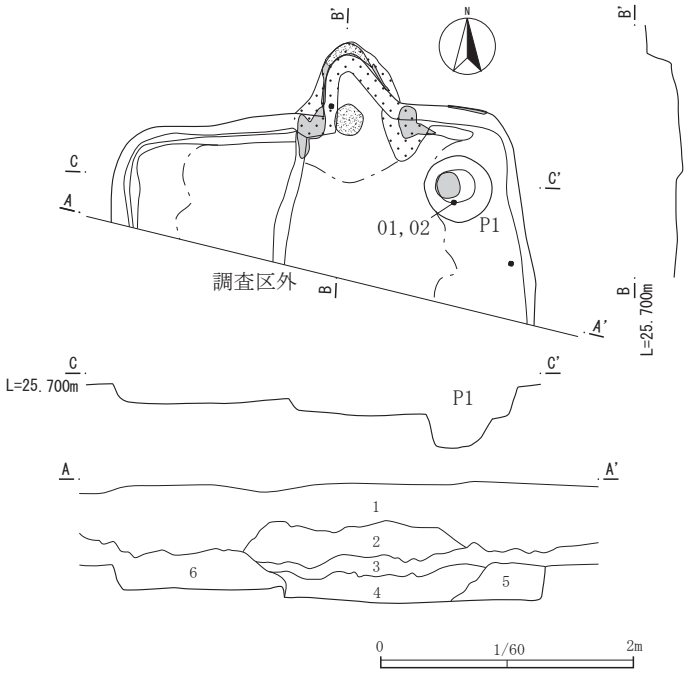
検出位置：調査区南壁やや東寄り E3・4 グリッドにおいて検出されているが、南側が調査区域外となり、全容は不明。**平面形状**：方形ヵ。**主軸方向**：N－1°-W。**規模**：3.24m ×―。**確認面下の深さ**：16 ㎝。**覆土**：基本的には 2 ～ 5 層は自然堆積を示すが、第 6 層は不自然な堆積を示す。攪乱ヵ。**柱穴**:北東コーナー部分に 1 基。**壁溝**：東壁側は検出されていない。その他はカマド部分を除き僅かながら確認できる。幅 22 ㎝、深さ 2 ㎝前後。**床面**:カマドの西側袖の延長部分から住居の西側 3 分の 1 程度は 9 ㎝ほど東側より高くなり、段差を有す。**カマド**：北壁中央やや東寄りに設置され、壁際主軸部分の全長は 108 ㎝で、北壁から 52 ㎝ほど掘りだされる。山砂及び粘土により袖が設置される。中央部分には火床面が円形に広がる。**その他付帯施設**:なし。**重複関係**:なし。

掲載遺物：土師器無台坏 4 点、灰釉陶器長頸瓶 2 点（猿投 K90 新 053）。

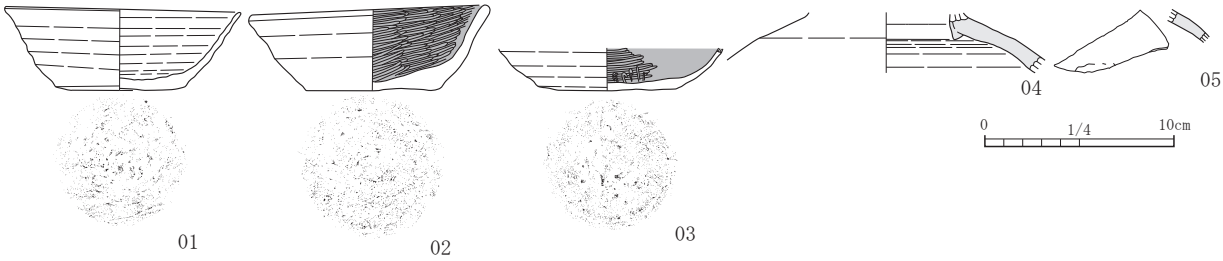
その他未掲載遺物：土師器 600g、須恵器 940g。

遺構の帰属時期：土師器無台坏の形状、黒笹 90 号窯式 3 段階・折戸 53 号窯式の出土から 10 世紀前半と判断される。

SI05 セクション
1 7.5YR4/3 褐色 ビニール等ごみを含む。しまり非常に弱い。
2 7.5YR3/3 暗褐色 しまりなし、粘性なし。
3 7.5YR3/3 暗褐色しまりなし、粘性なし。
4 7.5YR3/3 暗褐色 ロームブロックφ 5 ～ 10mm 少量、山砂を少量混入。しまりなし、粘性なし。
5 7.5YR3/4 暗褐色 ローム粒子・ロームブロックφ 1 ～ 2mm 中量。しまりなし、粘性なし。
6 7.5YR3/4 暗褐色 ローム粒子・ロームブロックφ 1 ～ 2mm 中量、焼土ブロックφ 1 ～ 2mm 微量。しまりなし、粘性なし。2 ～ 3 層より明るい。



第 15 図　SI05



第 16 図　SI05 出土遺物

第 7 表　SI05 出土遺物観察表

掲載番号	注記	種類	器種	口径	器高	底径	重量	残存	整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
01	P1 №01	土師器	無台坏	12.3	4.3	6.0	131.7	完形	ロクロ整形、底部回転糸切り。	雲母多い、長石・石英等小～中礫やや多い、スコリア微量	良好	内面　黄褐 外面　明褐	
02	P1 №01	土師器	無台坏	12.4	4.2	7.0	210.3	完形	ロクロ整形、底部回転ヘラケズリ後多方向の手持ちヘラケズリ、内面ミガキ。	雲母少量、白色針状物質微量	良好 二次焼成アリ	内面　黒 外面　明黄褐	内面黒色処理
03	覆土	土師器	無台坏	―	〈2.2〉	7.3	71.1	底部	ロクロ整形、底部回転ヘラ切り、内面ミガキ。	雲母やや多い	良好	内外面　黒褐	内面黒色処理
04	覆土	灰釉陶器	長頸瓶	―	〈3.1〉	―	39.3	肩部片	器壁は比較的厚くやや丸みを持って立ち上がり頸部に至る。	鉄分の噴出し少量、白色粒子微量	良好	胎土　灰白 釉　灰オリーブ	猿投 K90 新（(053)【311】実 98-2-019
05	覆土	灰釉陶器	長頸瓶	―	〈1.8〉	―	9.1	胴部片	器壁は比較的薄く丸みを持って立ち上がる。	精良	良好	胎土　灰白 釉　オリーブ黄	猿投 K90 新（(053)【312】実 98-2-020

SI06（第 17・18 図、第 8 表、遺構図版 2、遺物図版 2）

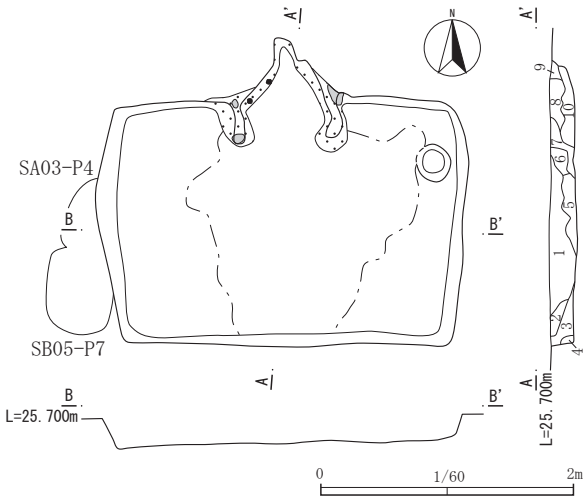
検出位置:調査区南壁側やや東寄り D3 グリッド。**平面形状**:長方形。**主軸方向**:N-5°-E。**規模**:2.94m × 1.95m。**確認面下の深さ**:19 ㎝。**覆土**:住居跡の覆土は 7 層に分層され自然堆積を示す。**柱穴**:なし。**壁溝**:なし。**床面**:平坦。**カマド**：北壁中央付近に設置され、壁際主軸部分の全長は 88 ㎝で、西壁から 49 ㎝ほど掘りだされる。山砂及び粘土により構築された袖が大きく開いて設置される。**その他付帯施設**：北東コーナー部分に貯蔵穴 1 基が検出されている。楕円形を呈し、規模は 33 × 30 ㎝、深さは 20 ㎝。**重複関係**：SB05・SA03 を切る。

掲載遺物：土師器無台坏 3 点（墨書土器 1 点）、有台埦 1 点、灰釉陶器長頸瓶 1 点（二川ヵ K90 ～ 053 併行）。

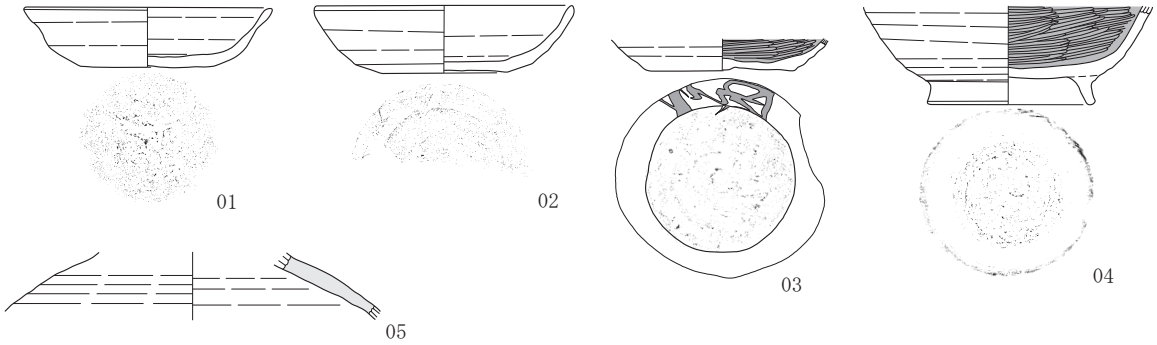
その他未掲載遺物：土師器 1700g、須恵器 154g。

遺構の帰属時期：無台坏 3 点及び有台埦、黒笹 90 号窯式～折戸 53 号窯式に比定される灰釉陶器長頸瓶の出土から 10 世紀前半と判断される。

SI06 セクション
1 7.5YR3/4 暗褐色　ローム粒子・ブロック φ 1 ～ 5mm 中量。しまりなし、粘性なし。
2 7.5YR3/4 暗褐色　ロームブロック φ 1 ～ 2mm 微量。しまりあり、粘性なし。
3 7.5YR3/4 暗褐色　ロームブロック φ 4 ～ 10mm 中量。しまりなし、粘性なし。
4 7.5YR4/4 褐色　ローム多量混入。しまりなし、粘性なし。
5 7.5YR3/2 黒褐色　ローム粒子・ロームブロック φ 1 ～ 2mm 中量。しまりなし、粘性なし。
6 7.5YR3/2 黒褐色　ローム粒子多量、焼土ブロック φ 1 ～ 2mm 微量。しまりなし、粘性なし。
7 7.5YR3/2 黒褐色　ロームブロック φ 5 ～ 10mm 多量。しまりなし、粘性なし。
8 暗褐色　山砂を少量含む。しまりなし、粘性なし。
9 暗褐色　ロームブロック φ 1 ～ 2mm 多量、焼土ブロック φ 1 ～ 2mm 少量、山砂少量。しまりなし、粘性なし。
10 暗褐色　ロームブロック φ 5 ～ 30mm 少量、焼土ブロック φ 1 ～ 3mm 少量。しまりなし、粘性なし。



第 17 図　SI06



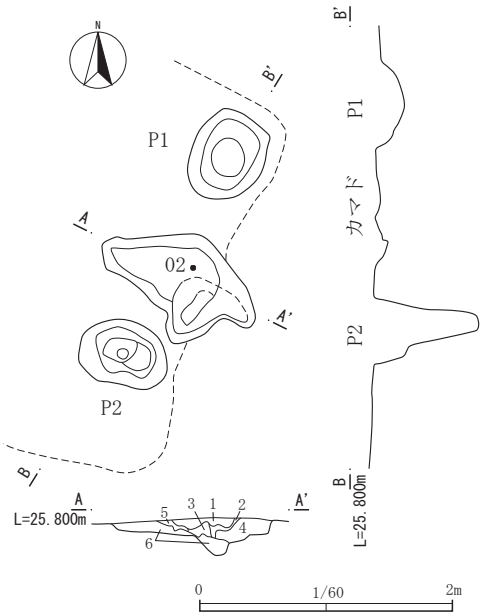
第 18 図　SI06 出土遺物

第 8 表　SI06 出土遺物観察表

掲載番号	注記	種類	器種	口径	器高	底径	重量	残存	整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
01	覆土	土師器	無台坏	12.9	3.1	7.0	134.0	ほぼ完形	ロクロ整形、底部回転ヘラ切り後ナデ。	雲母・白色粒子少量	良好	内外面　にぶい黄橙	
02	カマド	土師器	無台坏	(13.5)	3.5	(6.6)	83.9	0.5	ロクロ整形、下端回転ヘラケズリ、底部回転糸切り。	白色粒子やや多い、雲母少量	良好	内面　褐 外面　にぶい黄橙	
03	覆土	土師器	無台坏	—	〈1.7〉	7.4	84.5	下端～底部	ロクロ整形、底部回転ヘラ切り、内面ミガキ。	白色粒子・雲母少量、スコリア微量白色針状物質微量	良好	内面　黒 外面　にぶい黄橙	墨書「□」 内面黒色処理
04	覆土	土師器	有台埦	—	〈5.0〉	8.4	201.8	下端～底部完形	ロクロ整形、底部回転ヘラ切り、内面ミガキ。	雲母少量、白色針状物質微量	良好 二次焼成ア刂	内面　黒褐 外面　にぶい黄褐	内面黒色処理
05	カマド	灰釉陶器	長頸瓶	—	〈3.5〉	—	51.7	肩部片	上半は回転ヘラケズリ。器壁は比較的厚くやや丸みを持って立ち上がる。	鉄分の噴出し微量	良好	胎土　淡灰 釉　暗淡緑	二川ヵ（K90 ～ 053 併行） 【313】実 98-2-021

SI07（第 19・20 図、第 9 表、遺構図版 2、遺物図版 2）

検出位置：調査区中央やや北寄り B・C3 グリッド。**平面形状**：不明。**主軸方向**：N - 115°-E。**規模**：不明。**確認面下の深さ**:不明。**覆土**:大きく削平されており不明。**柱穴**:カマド右脇に 1 基。**壁溝**:確認できていない。**カマド**：東壁中央付近ヵ。煙道は東壁から 48 ㎝ほど掘りだされる。**その他付帯施設**：なし。**重複関係**：カマド左側の P1 は貯蔵穴ヵ。平面楕円形、71.9 × 60 ㎝、深さ 22.1 ㎝。



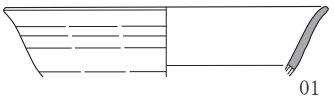
SI07 カマドセクション
1 暗褐色 焼土ブロックφ１～5mm少量。しまりなし、粘性なし。
2 褐色 焼土粒子少量。しまりなし、粘性なし。
3 赤色酸化土 しまりなし、粘性なし。
4 暗褐色 褐色土を多量混入。しまりなし、粘性なし。
5 褐色 炭化ブロックφ１～2mm少量。しまりなし、粘性なし。
6 褐色ソフトローム

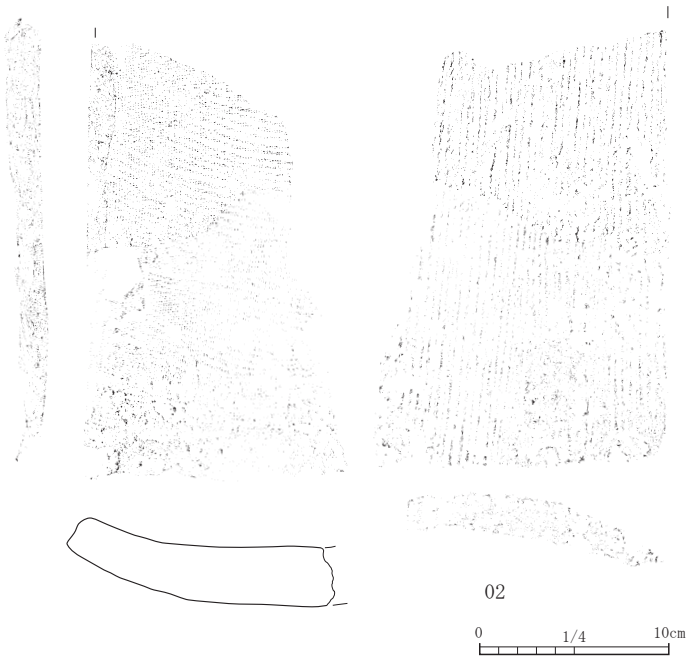
第 19 図　SI07

掲載遺物：緑釉陶器椀１点、平瓦１点。

その他未掲載遺物：土師器 311.7g。

遺構の帰属時期：平瓦１点のみで時期は判断できない。P1 から黒笹 90 号窯式に並行する緑釉陶器が出土している。この土坑が本遺構に伴うものであれば、9 世紀後半の可能性が考えられる。





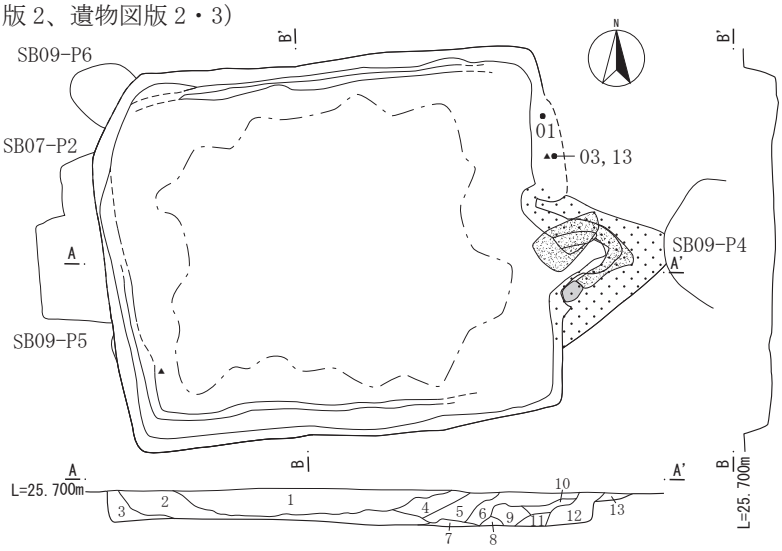
第 20 図　SI07 出土遺物

第 9 表　SI07 出土遺物観察表

掲載番号	注記	種類	器種	口径	器高	底径	重量	残存	整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
01	SK4	緑釉陶器	椀	(17.0)	〈3.7〉	—	8.0	口縁部片	器壁は比較的厚くほぼ直線的に立ち上がり口縁付近で外反し端部に至る。内面体部下端に段を有す。	鉄分の噴出し微量須恵器の胎土・非常に硬質	良好		猿投 K90 併行【299】実 98-2-007
02	カマド１・SK-05	瓦	平瓦	タテ(23.3)	ヨコ(14.0)	厚 3.1	881.7	下縁・左側縁残存	2 枚貼り合せ。凹面糸切り痕、布目圧痕、下端ケズリ。凸面縄目回転圧痕。端・側面ケズリ。	白色粒子やや多い	良好	内外面　灰白	

SI08（第 21・22 図、第 10 表、遺構図版 2、遺物図版 2・3）

検出位置：調査区南壁側やや西寄り D2・3 グリッド。**平面形状**：長方形。**主軸方向**：N-86°-E。**規模**：2.91m × 3.7m。**確認面下の深さ**：28 ㎝。**覆土**：暗褐色を基調に８層に分層される。自然堆積。**柱穴**：検出されてい



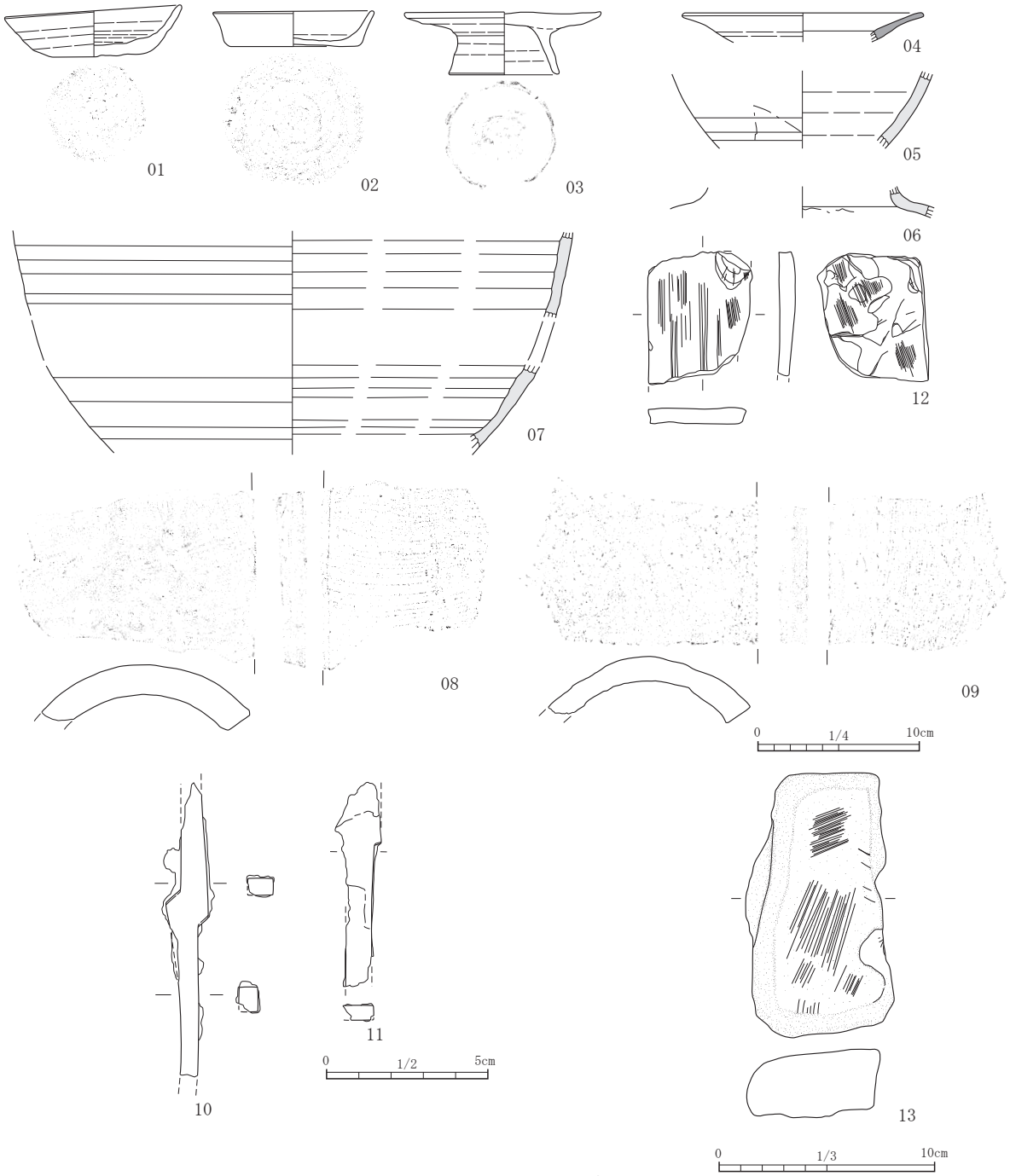
SI08 セクション
1 7.5YR3/3 暗褐色 ローム粒子・ブロックφ１～2mm少量、焼土ブロック少量、炭化物ブロックφ１～2mm少量。しまりなし、粘性なし。
2 7.5YR3/4 暗褐色 ロームブロックφ１～5mm少量。しまりなし、粘性なし。
3 7.5YR3/4 暗褐色 ロームブロックφ１～3mm少量。しまりなし、粘性なし。
4 7.5YR3/3 暗褐色 ロームブロック、炭化ブロックφ１～2mm微量。しまりなし、粘性なし。
5 7.5YR3/4 暗褐色 ロームブロックφ１～5mm少量、炭化物ブロックφ１～8mm少量。しまりなし、粘性なし。
6 7.5YR3/4 暗褐色 山砂・焼土粒子微量。しまりなし、粘性なし。
7 7.5YR3/4 暗褐色 しまりなし、粘性なし。
8 7.5YR3/3 暗褐色 山砂の流れ込み層。
カマド覆土（9～13 層）
9 暗褐色 焼土ブロックφ１～2mm微量。砂質土微量。しまりなし、粘性なし。
10 暗褐色 ロームブロックφ１～3mm微量、焼土ブロックφ１～2mm微量。しまりなし、粘性なし。9 層より明るい。
11 暗褐色 焼土粒子微量。しまりなし、粘性なし。
12 褐色 明赤色土ブロックφ２～20mm多量。砂質土を多量に混入。
13 褐色 明赤色土ブロックφ１～5mm少量。しまりなし、粘性なし。

第 21 図　SI08

ない。**壁溝**：カマド部分を除きほぼ全周するものであろうか、カマド側の東壁は不明瞭。幅 24 ㎝、深さ不明。**床面**：平坦。**カマド**：東壁中央やや南寄りに設置され、壁際主軸部分の全長は 112 ㎝で、東壁から 82 ㎝ほど掘りだされる。山砂及び粘土により構築された袖が大きく開いて設置される。**その他付帯施設**：なし。**重複関係**：SB05・07・09 と重複。本遺構が新しい。

掲載遺物：土師器無台坏 2 点、有台皿 1 点、緑釉陶器段皿 1 点（猿投 K90 併行）、灰釉陶器長頸瓶 1 点（美濃光 1 ～大 2）、短頸壺 2 点（猿投 K90、K90 前後）、丸瓦 2 点、棒状鉄製品 2 点、砥石 2 点。**その他未掲載遺物**：土師器 2940g、須恵器 900g、瓦 143g、鉄製品 18.5g。

遺構の帰属時期：土師器無台坏 01 は小型化し、02 のような皿形の土器が出土している。また、高足の有台皿が出現する時期である。共伴した灰釉陶器も大原 2 号窯式の存在などから、10 世紀後半と判断される。



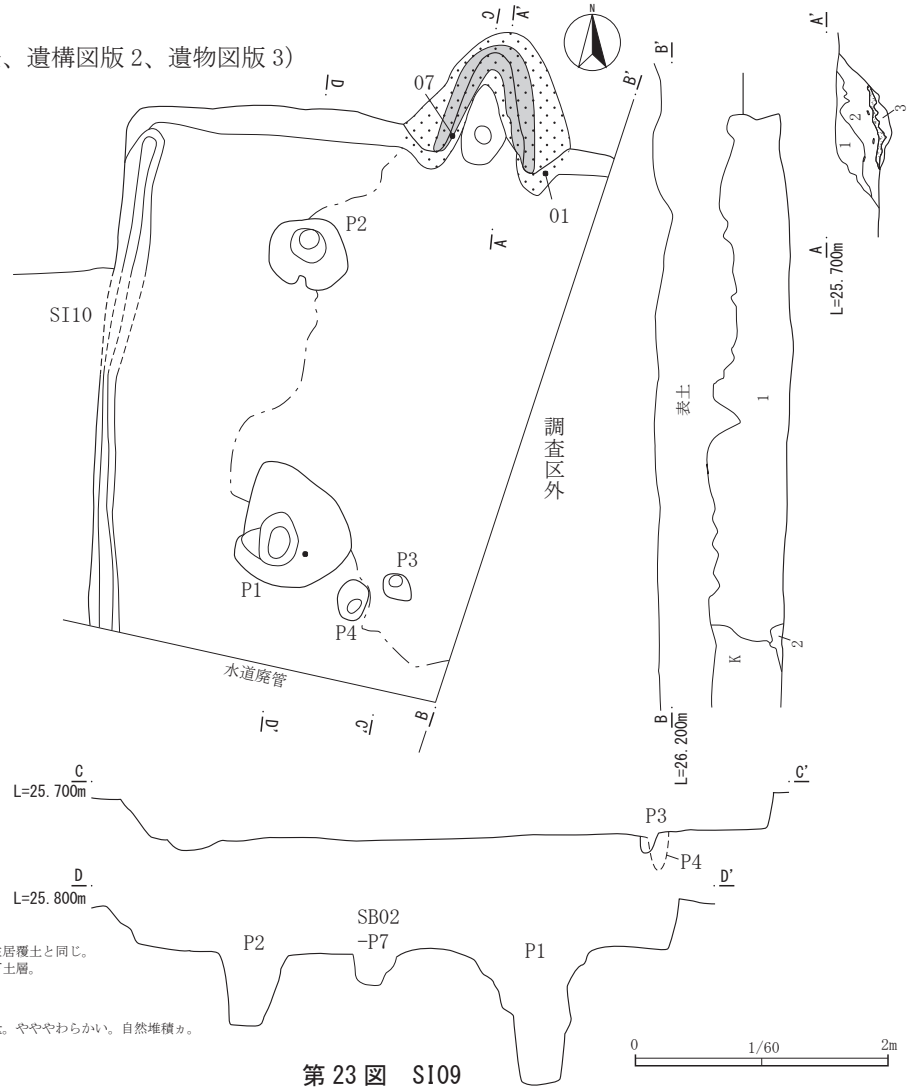
第 22 図　SI08 出土遺物

第 10 表　SI08 出土遺物観察表

掲載番号	注記	種類	器種	口径	器高	底径	重量	残存	整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
01	2	土師器	無台坏	11.8	2.8	5.5	128.2	完形	ロクロ整形、底部回転ヘラ切り。	白色粒子・小～中礫やや多い、白色針状物質微量	良好	内外面　にぶい黄橙	
02	カマド	土師器	無台坏	10.0	2.1	8.0	77.6	完形	ロクロ整形、底部回転ヘラ切り。	雲母やや多い，白色粒子少量	良好 二次焼成 ｱﾘ	内外面　にぶい橙	
03	1	土師器	有台皿	12.2	3.8	6.8	174.6	ほぼ完形	ロクロ整形、底部回転糸切り。	白色粒子・小～中礫やや多い、白色針状物質微量	良好	内外面　橙	
04	覆土・SI12	緑釉陶器	段皿	(14.6)	〈1.7〉	—	13.2	口縁部片	器壁は比較的薄く屈曲後外反して立ち上がり口縁に至る。	精良	良好	内面　淡灰褐 外面　暗黄緑	2 片（001）接合 猿投 K90 併行 【294】実 98-2-001・003
05	覆土	灰釉陶器	長頸瓶	—	〈4.7〉	—	19.6	胴部片	下半回転ヘラケズリ、器壁は比較的薄く丸みを持って立ち上がる。	精良	良好	胎土　白灰 釉　暗淡緑	美濃光 1 ～大 2 【314】実 98-2-022
06	覆土	灰釉陶器	短頸壺	—	〈4.8〉	—	10.9	肩部片	器壁は比較的薄く丸みを持って頸部に至り、弱く屈曲して立ち上がる。	精良	良好	胎土　灰白 釉　暗淡緑	猿投 K90 【315】実 98-2-023
07	上部覆土	灰釉陶器	短頸壺	—	—	—	121.3	肩部・胴部片	外面回転ヘラケズリ。	鉄分の噴出し多い、雲母やや多い	良好	胎土　灰白 釉　オリーブ灰	猿投 K90 前後 【316】実 98-2-024
08	カマド	瓦	丸瓦	タテ (11.4)	ヨコ (13.0)	厚 1.9	444.9	右側縁残存	一部 2 枚貼り合せ（折り曲げ）。凸面糸切り痕、タテナデ。凹面糸切り痕、布目圧痕、側端ケズリ。側面ケズリ。	雲母微量、白色粒子少量	良好	内外面　灰黄	カマド構築砂付着、被熱黒化
09	覆土	瓦	丸瓦	タテ (9.5)	ヨコ (12.4)	厚 1.8	324.5	右側縁残存	凸面ナデ。凹面糸切り痕、布目圧痕（布端あり）。	雲母・白色粒子微量	良好	内面　にぶい黄橙 外面　灰黄	カマド構築砂付着、被熱黒化・凸面火爆ぜ剥離
10	覆土	鉄製品	棒状品	タテ 〈9.1〉	ヨコ 1.3	厚 0.8	24.7	両端欠損	断面方形の棒状品。中央でクランク状に鍛接ヵ。				
11	覆土	鉄製品	棒状品	タテ 〈6.3〉	ヨコ 〈1.4〉	厚 0.5	9.5	両端欠損	断面方形の棒状品。破損著しく形状不明瞭。関状部位から刀子ヵ。				
12	覆土	石製品	砥石	タテ 6.2	ヨコ 4.8	厚 0.8	47.6	下部欠損	携帯型・提げ砥。板状。上面・左側面に鋸目あり。表・裏面と左側面が使用面。表面は凹面、左側面は平坦面を呈し、裏面は打割面を残す。石材：凝灰岩。				被熱赤化。
13	1	石製品	砥石	タテ 12.3	ヨコ 6.6	厚 2.9	407.9	完形	据え置き型。板状の自然礫使用。側面は敲打痕あり、概ね方形に整えている。表面のみ使用、概ね平坦。裏面は凹凸あり、摩耗。石材：砂岩。				表面被熱赤化。

SI09（第 23・24 図、第 11 表、遺構図版 2、遺物図版 3）

検出位置：調査区東端部 D5 グリッド。東壁側は調査区域外。**平面形状**：方形ヵ。**主軸方向**：N－8°－E。**規模**：不明。**確認面下の深さ**：38 ㎝。**覆土**：暗褐色土の単層。人為的な堆積の可能性がある。**柱穴**：西壁側 2 本が検出されている。四隅付近の対角線上に 4 基配されるものであろうか、東側は調査区域外となり不明。また、入り口ピットと考えられる P3・4 が確認されている。**壁溝**：西側壁には検出されているが、カマド側にはない。幅 24 ㎝、深さ 11 ㎝前後。



SI09 カマド A セクション
1 7.5YR3/4 暗褐色 粘土粒子・粘土小ブロック中量。住居覆土と同じ。
2 7.5YR5/4 にぶい褐色 粘土ブロック。天井・内壁落下土層。
3 粘土粒子・灰・炭化物主体、焼土中ブロック少量。

SI09 B セクション
1 7.5YR3/3 暗褐色 ローム粒子中・多量、炭化物粒子少量。ややわらかい。自然堆積ヵ。
2 注記記録なし。

第 23 図　SI09

床面：平坦。**カマド**：北壁に設置され、壁際主軸部分の全長は 120 ㎝で、北壁から 88 ㎝ほど掘りだされる。山砂及び粘土により構築された袖が大きく開いて設置される。**重複関係**：SI10・SB02 と重複する。SI10 を切るが、SB02 との新旧関係は不明瞭である。

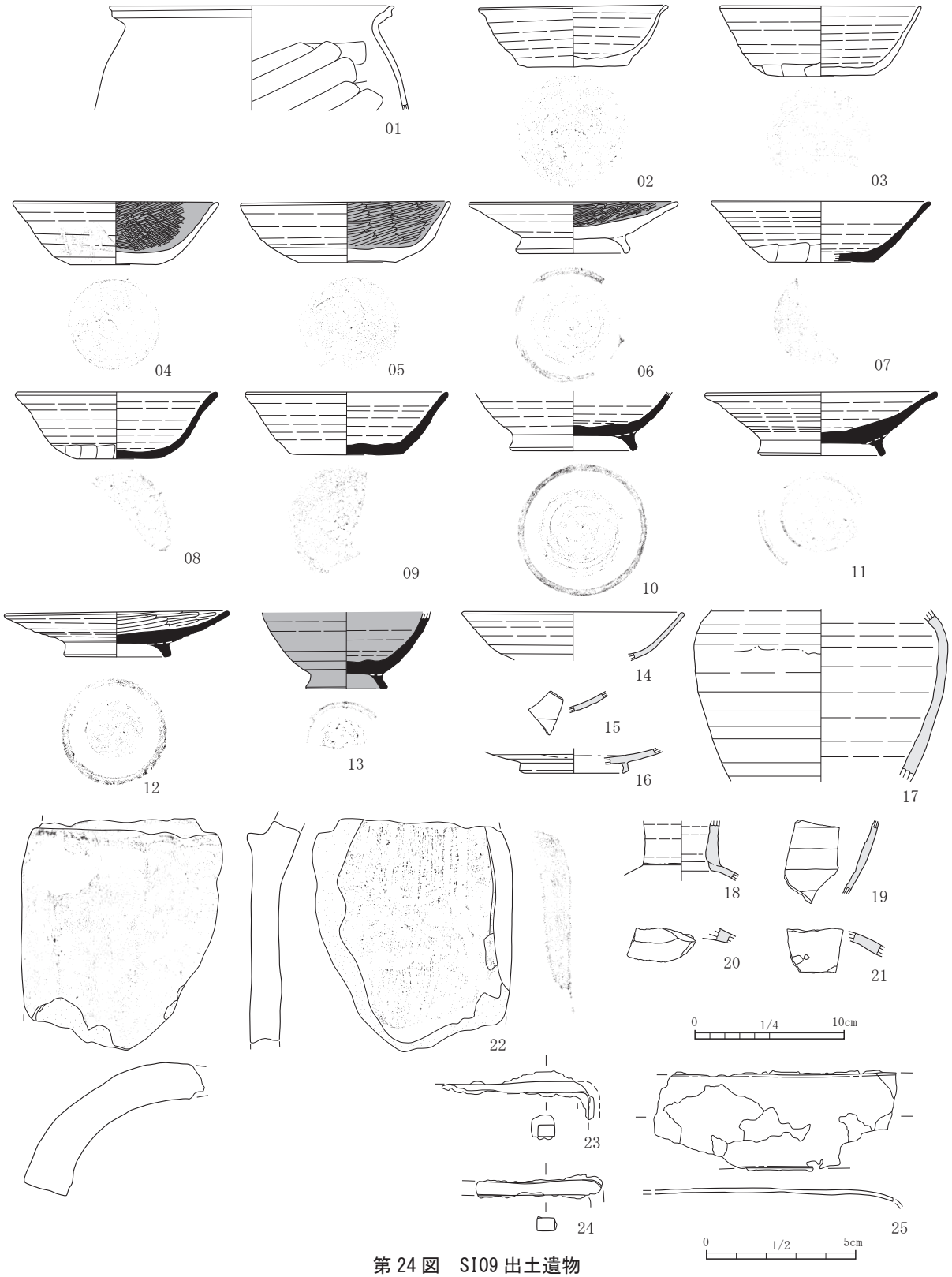
掲載遺物:土師器無台坏 4 点（刻書土器「丁井」1 点)、有台皿 1 点、甕 1 点、須恵器無台坏 3 点、有台坏 1 点、有台皿 2 点、瓶 1 点、灰釉陶器椀 1 点（美濃ヵ光 1 ～大 2)、皿 2 点（猿投 K90・90-2)、長頸瓶 5 点（猿投 IG78（～ K14 古)・K90・K14 ～ 90・三遠系 K90（～ 053 併行)、丸瓦 1 点、鋌 2 点、板状鉄製品 1 点。

その他未掲載遺物：土師器 5140g、須恵器 1018.2g、瓦 198g、鉄製品 23.3g。

遺構の帰属時期：土師器無台坏に内面黒色処理を行うものが出土している。また、須恵器有台皿の出土から 9 世紀中葉と判断した。一方で灰釉陶器は、光ヶ丘 1 号窯式～大原 2 号窯式及び黒笹 90 号窯式、折戸 53 号窯式土器から 9 世紀後半と判断される。

第 11 表　SI09 出土遺物観察表

掲載番号	注記	種類	器種	口径	器高	底径	重量	残存	整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
01	カマド 01	土師器	甕	(18.8)	〈6.9〉	—	96.6	口縁～肩部 1/4	口縁横ナデ、胴部上位内外面共にナデ。	長石・石英・雲母やや多い。	良好	内面　明褐 外面　橙	
02	覆土	土師器	無台坏	12.5	〈4.0〉	7.3	94.7	口縁 1/8 ～底部	ロクロ整形、底部回転ヘラ切り。	雲母やや多い、スコリア少量、白色粒子微量	良好	内外面　にぶい黄橙	
03	覆土	土師器	無台坏	13.3	4.6	6.2	98.7	2/3	ロクロ整形、下端手持ちヘラケズリ、底部回転ヘラ切り後一方向の手持ちヘラケズリ。	雲母多い、白色粒子・スコリア微量	良好	内外面　にぶい黄橙	
04	覆土	土師器	無台坏	13.6	〈4.1〉	6.0	127.5	口縁 1/10 ～底部	ロクロ整形、下端・底部回転ヘラケズリ、内面ミガキ。	白色粒子やや多い、雲母少量、白色針状物質微量	良好	内面　黒褐 外面　淡黄	体部刻書「丁井」
05	覆土	土師器	無台坏	13.8	3.9	6.5	212.6	完形	ロクロ整形、下端・底部回転ヘラケズリ、内面ミガキ。	雲母やや多い、白色粒子微量	良好	内面　黒褐 外面　にぶい黄橙	
06	覆土	土師器	有台皿	(13.8)	〈3.3〉	7.1	151.6	口縁 1/3 ～底部	ロクロ整形、底部回転ヘラ切り。	雲母やや多い	良好	内面　黒褐 外面　にぶい黄褐	
07	カマド 02	須恵器	無台坏	(14.4)	〈4.1〉	(7.0)	58.8	1/3	ロクロ整形、下端手持ちヘラケズリ、底部一方向の手持ちヘラケズリ。	雲母多い、スコリア少量、長石・石英微量	良好	内外面　黄褐	新治産
08	覆土	須恵器	無台坏	(13.2)	〈4.4〉	(5.7)	58.5	1/4	ロクロ整形、下端・底部手持ちヘラケズリ。	長石・石英等小～中礫・雲母多い、スコリア微量	良好	内外面　黄褐	新治産
09	覆土	須恵器	無台坏	(13.3)	〈4.1〉	(7.5)	90.8	1/3	ロクロ整形、底部回転ヘラ切り。	長石・石英等小～中礫・雲母少量	良好	内外面　にぶい黄	新治産
10	覆土	須恵器	有台坏	—	〈3.9〉	8.0	159.7	体～底部	ロクロ整形、底部回転ヘラケズリ。	雲母やや多い	良好	内外面　黄褐	新治産
11	覆土	須恵器	有台皿	(15.2)	〈4.1〉	(7.9)	151.2	1/2	ロクロ整形、底部回転ヘラケズリ。	雲母やや多い	良好	内外面　にぶい黄	新治産
12	覆土	須恵器	有台皿	(14.7)	〈2.9〉	6.5	128.2	1/2	ロクロ整形、底部回転ヘラケズリ	雲母多い、長石・石英微量	還元不良	内面　灰 外面　灰オリーブ	新治産
13	覆土	須恵器	瓶ヵ	—	〈5.2〉	(5.0)	74.7	体～底部 1/2	ロクロ整形、底部回転ヘラ切り。	白色粒子・雲母少量	良好	内外面　オリーブ黒	新治産
14	SI09	灰釉陶器	椀	(14.5)	〈3.2〉	—	24.8	口縁～体部 1/4	体部下位回転ヘラケズリ後回転ナデ、器壁は薄く緩やかに内湾して体部中位からほぼ直線的に立ち上がり口縁に至る。端部の外反はほとんど見られない。	鉄分の噴出し少量	良好	胎土　灰白 釉　剥落	美濃ヵ　光 1 ～大 2 【317】実 98-2-025
15	SI09	灰釉陶器	皿	—	〈1.4〉	—	2.2	体部片	器壁は薄く緩やかに内湾して立ち上がる。	精良	良好	胎土　灰白 釉　暗淡緑	猿投 K90 【318】実 98-2-026
16	SI09	灰釉陶器	皿	—	〈1.6〉	(6.6)	15.8	底部片	体部下端回転ヘラケズリ後回転ナデ、高台は比較的高く断面が足形化した三日月高台。	鉄分の噴出し・白色粒子少量	良好	胎土　灰白 釉　淡緑	猿投 K90-2 重ね焼き痕を有す 【319】実 98-2-027
17	確認面・SI09	灰釉陶器	長頸瓶	—	〈11.3〉	—	105.3	胴部片	下半回転ヘラケズリ。器壁は比較的薄く内湾して肩部に至り以上で内側へ丸みを持って立ち上がる。	鉄分の噴出し少量	良好	胎土　淡灰褐 釉　暗淡緑	猿投 IG78（～ K14 古） 【320】実 98-2-028
18	SI09	灰釉陶器	長頸瓶	—	〈3.9〉	—	24.0	肩部～頸部片	二段構成。器壁は比較的厚くやや外反して立ち上がる。	鉄分の噴出し少量	良好	胎土　灰白 釉　暗淡緑	猿投 K90 【321】実 98-2-029
19	SI09	灰釉陶器	長頸瓶	—	〈4.8〉	—	11.7	胴部片	外面回転ヘラケズリ後回転ナデ 、内面剥落。	鉄分の噴出し少量	良好	胎土　浅黄 釉　剥落	猿投 K90 【322】実 98-2-030
20	SI09	灰釉陶器	長頸瓶	—	〈1.0〉	—	7.9	胴部片	器壁は比較的薄く丸みを持って立ち上がる。	鉄分の噴出し少量	良好	胎土　淡灰 釉　暗緑	猿投 K14 ～ 90 【323】実 98-2-031
21	SI09	灰釉陶器	長頸瓶	—	〈1.7〉	—	8.4	胴部片	器壁は比較的薄く丸みを持って立ち上がる。	鉄分の噴出し少量	良好 二次焼成ｱﾘ	胎土　暗灰 釉　暗淡緑	三遠系 K90（～ 053）併行 【324】実 98-2-032
22	覆土	瓦	丸瓦	タテ (14.5)	ヨコ (13.0)	厚 3.1	645.3	玉縁部・左側縁残存	凸面タテケズリのちヨコナデ。玉縁部ヨコナデ。凹面布目圧痕（布縁あり)。	雲母やや多い、白色粒子少量	良好	内外面　にぶい黄橙	カマド構築砂付着、被熱黒化
23	覆土	鉄製品	鋌	タテ 〈12.8〉	ヨコ 〈48.7〉	幅 5.7	5.6	断面長方形を呈する。					
24	覆土	鉄製品	鋌	タテ 〈5.3〉	ヨコ 〈41.6〉	幅 6.0	5.6	断面長方形を呈する。左側折り曲げ部分で破損。釘の可能性もあり。					
25	覆土	鉄製品	板状品	タテ 3.2	ヨコ 〈8.1〉	厚 0.2	18.0	帯状を呈する。右側は緩やかに湾曲する。飾り金具の類ヵ。					



第 24 図　SI09 出土遺物

SI10（第 25・26 図、第 12 表、遺構図版 3、遺物図版 3）

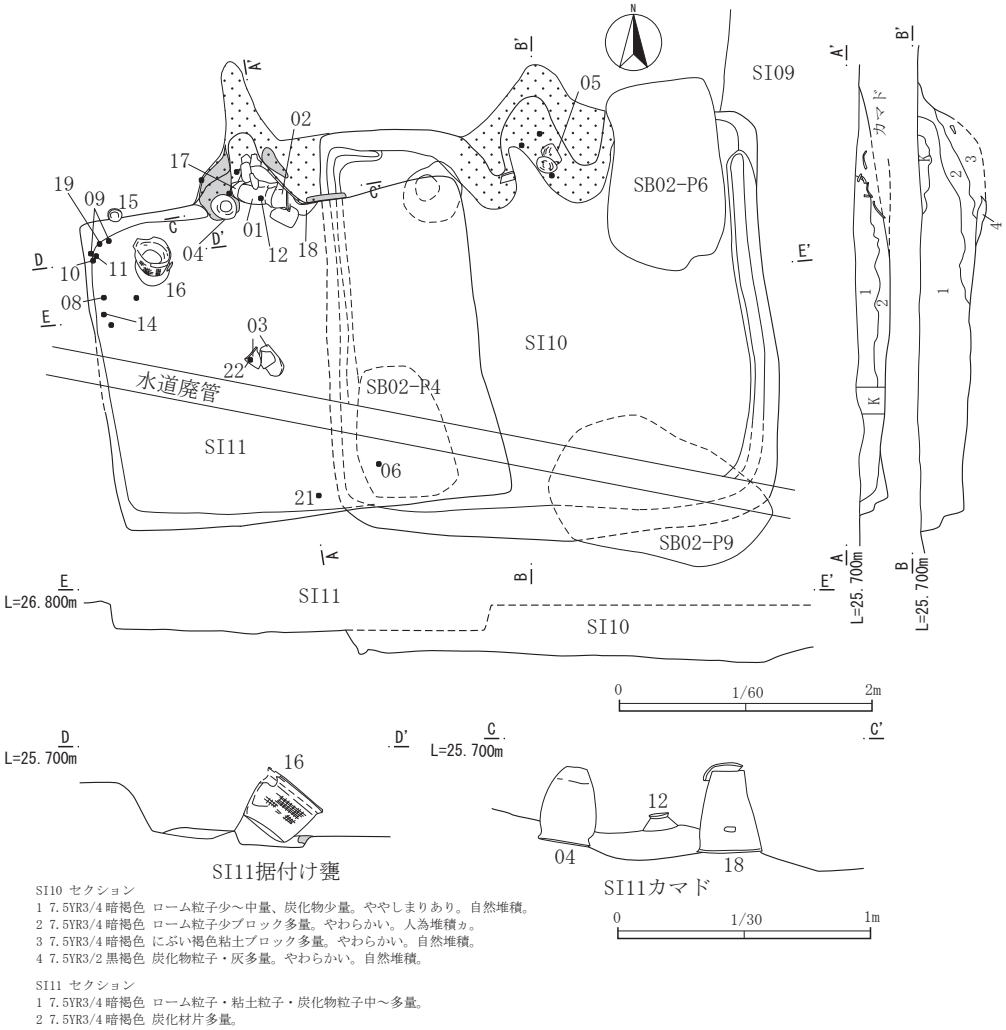
検出位置:調査区東端部 D5 グリッド。**平面形状**:やや歪んだ正方形。**主軸方向**:N-5°-W。**規模**:3.24m × 3.47m。**確認面下の深さ**：20 cm。**覆土**：暗褐色土の単層。自然堆積。**柱穴**：検出されていない。**壁溝**：ほぼ全周する。幅 15 cm、深さ 4 cm前後。**床面**：平坦。**カマド**：北壁中央付近に設置され、壁際主軸部分の全長は 112 cmで、

西壁から 42 ㎝ほど掘りだされる。山砂及び粘土により構築された袖が大きく開いて設置される。**その他付帯施設**：カマド西側袖に隣接して、SB02-P5 埋没後に円形のピット状遺構が掘り込まれている。甕埋設の穴ヵ。**重複関係**：SI09・11・SB02 と重複し、本住居跡が最も古いが、SB02 との新旧関係は不明瞭。

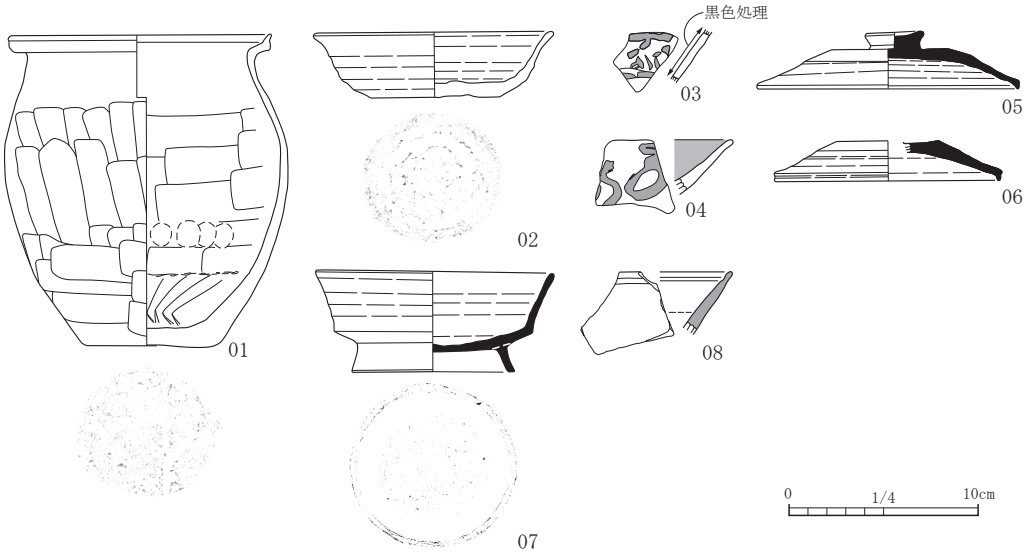
掲載遺物：土師器無台坏２点（墨書土器１点）、有台皿１点（墨書土器１点）、甕１点、須恵器蓋２点、有台坏１点、緑釉陶器稜椀ヵ１点（猿投 K90 併行）。

その他未掲載遺物：土師器 2570g、須恵器 1018.2g、土製品 61.2g。

遺構の帰属時期：須恵器有台坏・蓋の組み合わせから８世紀末から９世紀初頭と判断される。一方で、共伴した緑釉陶器 08 は黒笹 90 号窯式で９世紀後半に比定される。明らかに齟齬があり、SI11 に伴う可能性が高い。



第 25 図　SI10・11



第 26 図　SI10 出土遺物

第 12 表　SI10 出土遺物観察表

掲載番号	注記	種類	器種	口径	器高	底径	重量	残存	整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
01	覆土	土師器	小型甕	13.9	16.2	6.4	723.6	完形	口縁内外面共に横ナデ、胴部外面ヘラケズリ。内面ナデ、中位指頭圧痕、下端ヘラナデ。底部木葉痕。	白色粒子・雲母少量	良好 二次焼成アリ	内外面　灰黄褐	
02	覆土	土師器	無台坏	(12.6)	3.4	7.0	81.2	口縁 5/6 欠損	ロクロ整形、底部回転ヘラ切り。	雲母・スコリア少量	良好	内外面　にぶい橙	
03	覆土	土師器	無台坏	—	—	—	4.5	体部片	ロクロ整形、内面ミガキ。	雲母少量	良好	内面　黒 外面　にぶい黄橙	内面黒色処理 墨書「□」
04	覆土	土師器	有台皿	—	—	—	11.6	体部片	ロクロ整形、内面ミガキ。	雲母・白色粒子少量	良好	内面　黒 外面　にぶい黄橙	内面黒色処理 墨書「□□」
05	№6	須恵器	蓋	14.8	2.9	ツマミ径 3.1	168.1	ほぼ完形	ロクロ整形、返しは無い、天上の回転ヘラケズリは 1/4。	雲母やや多い	還元不良	内外面　灰黄褐	新治産
06	覆土	須恵器	蓋	11.6	〈2.1〉	—	64.2	1/2	ロクロ整形、返しは無い、天上の回転ヘラケズリは 1/4。	白色粒子・雲母・鉄分の噴出し少量	良好	内外面　黄灰	新治産
07	覆土	須恵器	高台付坏	12.4	5.3	8.5	205.4	ほぼ完形	ロクロ整形、下端・底部は回転ヘラケズリ。	鉄分の噴出しやや多い、白色粒子少量、雲母極微量	良好	内外面　黄灰	新治産
08	覆土	緑釉陶器	稜椀ヵ	—	〈3.2〉	—	12.4	口縁部片	器壁は厚くやや外反して立ち上がり口縁付近で極端に薄くなる、内面口唇部に一条の浅い沈線（幅 3mm 弱）が巡る。	精良	良好	胎土　灰白 釉　緑	【295】実 98-2-002

SI11（第 25・27・28 図、第 13・14 表、遺構図版 3、遺物図版 4・5）

検出位置:調査区東端部 D5 グリッド。**平面形状**:方形。**主軸方向**:N-8°-E。**規模**:2.57m ×—。**確認面下の深さ**:30 ㎝。**覆土**:住居跡の覆土は暗褐色土を基調に 2 層に分けられる。自然堆積。**柱穴**:検出されていない。**壁溝**:なし。**床面**：平坦。**カマド**：北壁中央に設置され、袖には甕及び甑を倒立させて設置し、山砂・粘土で固定している。また、カマド内には甕が横方向に入れ子状況で出土しており、懸架材として用いられた可能性がある。壁際主軸部分の全長は 128 ㎝で、西壁から 108 ㎝ほど掘りだされ煙道が長い。両袖間の幅は 72 ㎝と大きく開いて設置される。**その他付帯施設**：北西コーナー寄りに浅い掘り込みを有する部分に、須恵器甕が埋設された状況で検出されている。**重複関係**：SI10・SB02 と重複し、SI10 を切るが、SB02 との新旧関係は不明瞭。

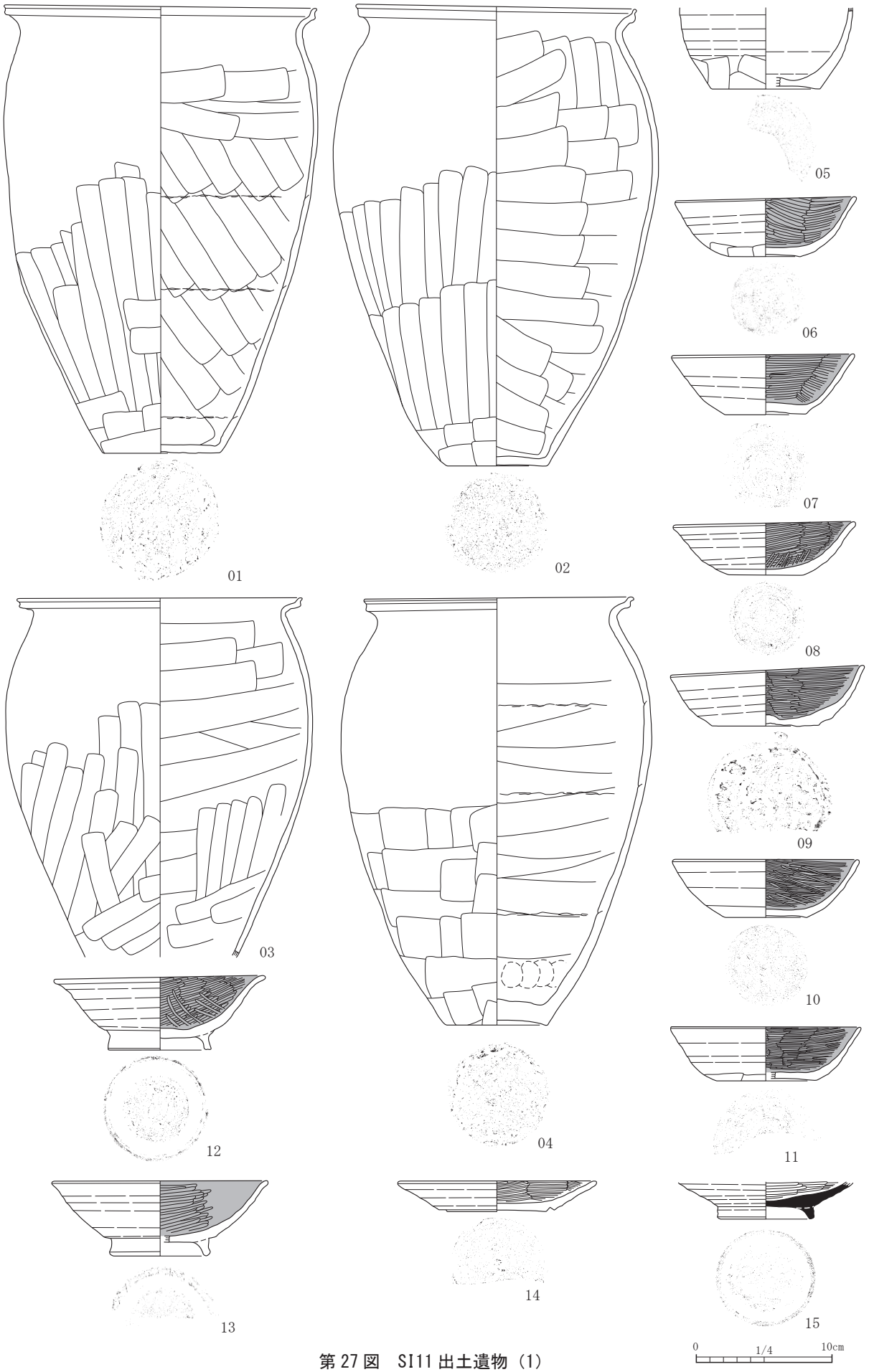
掲載遺物：土師器無台坏 6 点、有台坏 2 点、皿 1 点、甕 5 点、須恵器無台坏 2 点、有台坏 1 点、甑 1 点、広口甕 1 点、大甕 1 点。灰釉陶器椀 1 点（猿投 K90-3）、土製品紡錘車 1 点。

その他未掲載遺物：土師器 3905.5g、須恵器 2985.5g、礫 435.8g、鉄製品 5.3g。

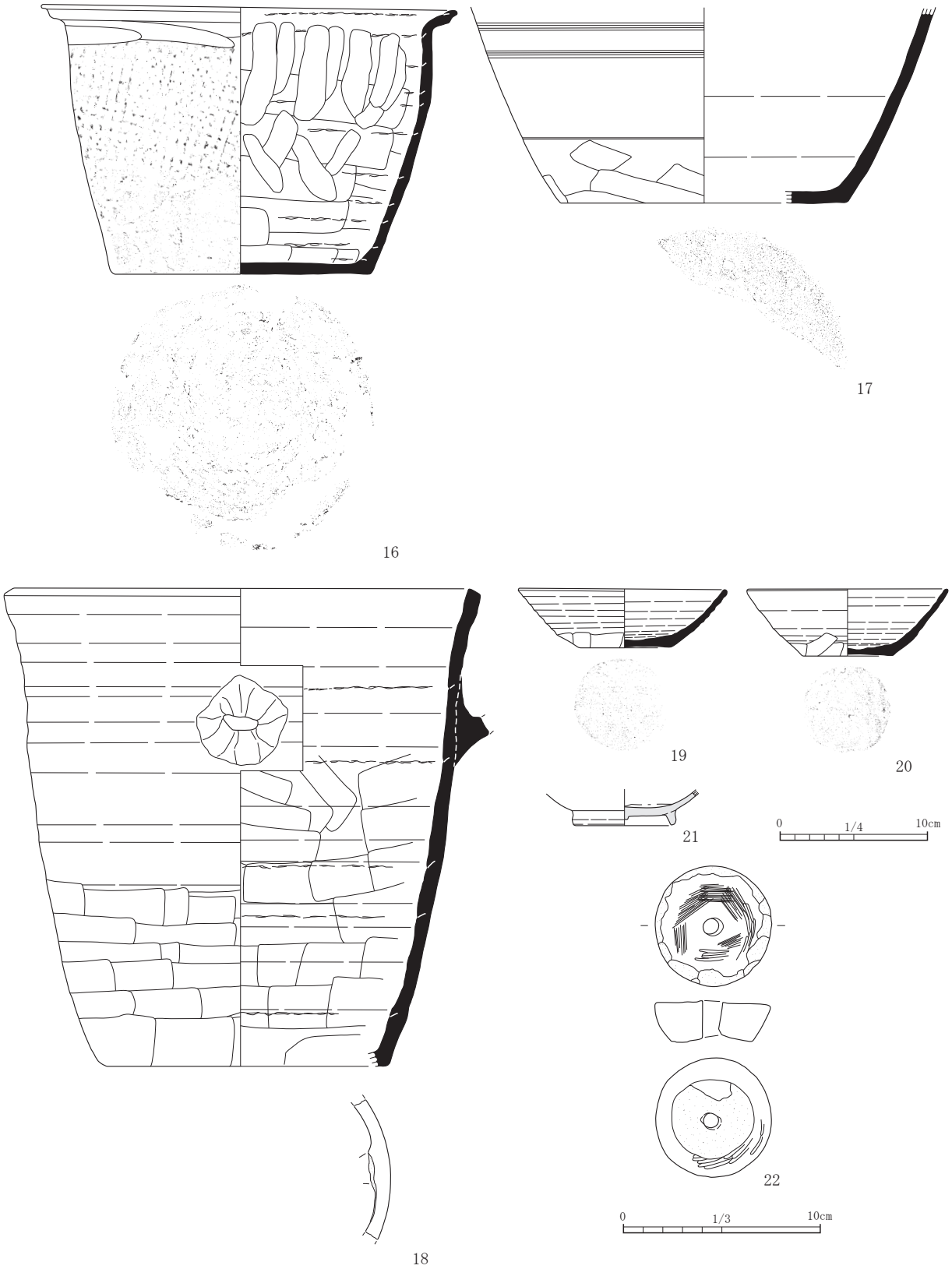
遺構の帰属時期：出土遺物の組み合わせから 9 世紀後半の遺構と判断される。共伴した灰釉陶器も黒笹 90 号窯様式の 3 段階であり齟齬はない。なお、土師器皿が 1 点（14）出土しているが、本住居に伴う遺物と判断している。近接する鹿の子 A 遺跡においても該期の資料として報告されている。

第 13 表　SI11 出土遺物観察表（1）

掲載番号	注記	種類	器種	口径	器高	底径	重量	残存	整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
01	16	土師器	甕	22.4	31.7	8.6	1,274.5	胴下半 1/2 欠損	口縁内外面共に横ナデ、胴部外面中位よりヘラケズリ。内面ナデ。	小～中礫・雲母少量。	良好 二次焼成アリ	内面　橙 外面　明褐	
02	17	土師器	甕	20.4	34.0	7.3	1,437.4	胴部 1/3 欠損	口縁内外面共に横ナデ、胴部外面中位よりヘラケズリ、底部砂目ヵ。内面ナデ。	小～中礫・雲母少量。	良好 二次焼成アリ	内外面　にぶい黄褐	
03	14	土師器	甕	20.8	〈25.9〉	—	610.1	口縁 3/4 胴部 1/3	口縁内外面共に横ナデ、胴部外面中位よりヘラケズリ。内面ナデ。	白色粒子・雲母少量	良好 二次焼成アリ	内面　にぶい黄褐 外面　にぶい黄橙	
04	24	土師器	甕	19.8	30.7	7.5	1,753.6	ほぼ完形	口縁内外面共に横ナデ、胴部外面中位よりヘラケズリ。内面ナデ。	白色粒子・雲母少量	良好 二次焼成アリ	内面　灰黄褐 外面　にぶい黄褐	
05	覆土	土師器	小型甕	—	〈5.9〉	8.0	87.9	底部下端 1/4	ロクロ整形、下端手持ちヘラケズリ、底部一方向の手持ちヘラケズリ。	白色粒子やや多い、雲母少量	良好 二次焼成アリ	内面　にぶい黄褐 外面　にぶい黄橙	
06	10	土師器	無台坏	13.2	4.3	5.2	158.3	ほぼ完形	ロクロ整形、外面下端手持ちヘラケズリ、回転糸切り後一方向の手持ちヘラケズリ。内面ミガキ。	雲母少量、白色粒子・白色針状物質微量、スコリア極微量	良好	内面　オリーブ黒 外面　灰黄褐	内面黒色処理
07	覆土	土師器	無台坏	13.3	4.3	5.9	120.8	2/3	ロクロ整形、回転糸切り（左）後一方向の手持ちヘラケズリ。内面ミガキ。	雲母多い、白色粒子少量	良好	内面　オリーブ黒 外面　にぶい黄褐	内面黒色処理
08	8	土師器	無台坏	13.5	3.7	5.4	122.7	2/3	ロクロ整形、下端・底部回転ヘラケズリ。内面ミガキ。	雲母やや多い、小～中礫少量	良好	内面　オリーブ黒 外面　にぶい黄褐	内面黒色処理



第27図　SI11出土遺物（1）



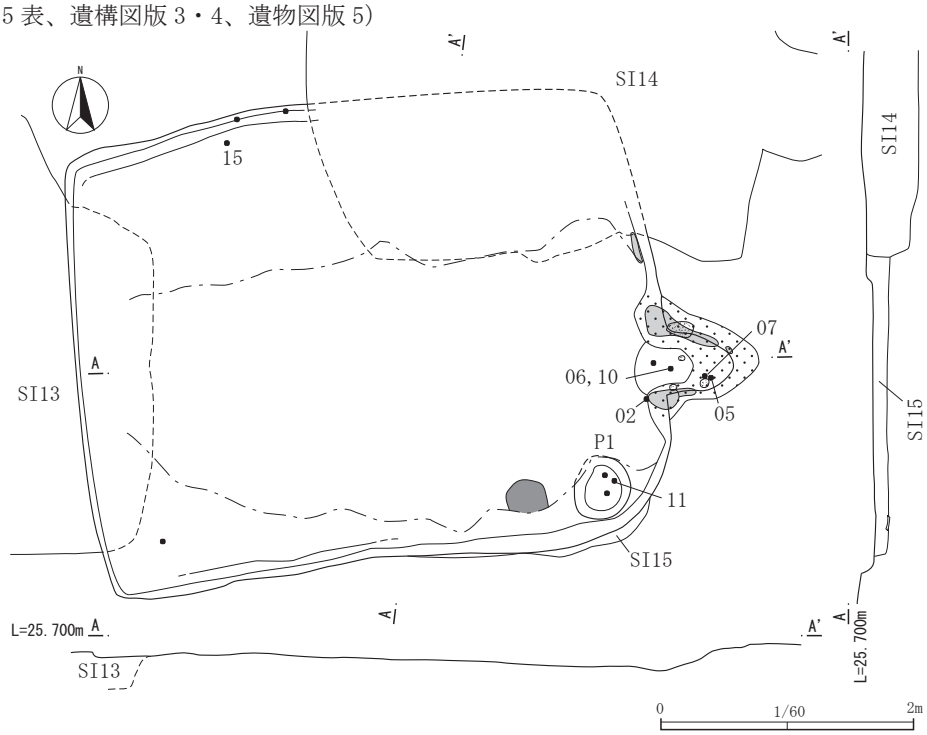
第 28 図　SI11 出土遺物（2）

第 14 表　SI11 出土遺物観察表（2）

掲載番号	注記	種類	器種	口径	器高	底径	重量	残存	整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
09	4・5	土師器	無台坏	14.0	4.0	7.9	113.9	1/2	ロクロ整形、下端回転ヘラケズリ。底部粘土塊により整形不明。内面ミガキ。	雲母多い、小～中礫やや多い	良好	内面　オリーブ黒 外面　にぶい黄褐	内面黒色処理
10	6	土師器	無台坏	(13.4)	4.1	6.0	97.8	1/2	ロクロ整形、下端手持ちヘラケズリ、底部回転ヘラケズリ。内面ミガキ。	白色粒子・雲母少量、白色針状物質・スコリア微量	良好	内面　オリーブ黒 外面　暗灰黄	内面黒色処理
11	7	土師器	無台坏	13.3	4.0	7.4	104.6	1/2	ロクロ整形、下端手持ちヘラケズリ、底部回転ヘラケズリ。	白色粒子・雲母少量、スコリア・白色針状物質微量	良好	内面　オリーブ黒 外面　にぶい黄褐	内面黒色処理
12	19	土師器	有台坏	15.3	5.2	7.1	204.7	口縁～体部 1/3 底部完形	ロクロ整形、底部回転ヘラ切り。	雲母・白色粒子少量、スコリア微量	良好	内面　オリーブ黒 外面　にぶい褐	内面黒色処理
13	カマド	土師器	有台坏	(15.7)	〈5.2〉	(7.1)	82.9	ほぼ完形	ロクロ整形、底部回転ヘラ切り。	白色粒子・雲母・小～大礫少量	良好	内面　オリーブ黒 外面　にぶい黄褐	内面黒色処理
14	1	土師器	皿	14.4	2.2	7.3	97.6	1/3	ロクロ整形、底部回転ヘラケズリ、周縁にシャープな沈線が一条廻る。	白色粒子・雲母微量	良好	内面　オリーブ黒 外面　にぶい黄橙	内面黒色処理
15	11	須恵器	高台付坏	—	〈2.7〉	6.7	116.4	底部	ロクロ整形、底部回転ヘラケズリ。	長石・石英・雲母多い	良好 二次焼成ｱﾘ	内外面　にぶい黄橙	新治産
16	13	須恵器	広口甕	27.9	17.6	17.4	1,920.0	口縁 1/2 欠損	回転台使用ヵ、口縁内外面共に横ナデ、胴部外面格子目叩き、下位ヘラケズリ、底部敷物状圧痕ヵ。内面ヘラ状工具及び指頭圧痕ヵ。	白色粒子・雲母少量、白色針状物質微量	還元不良	内面　暗灰黄 外面　黄褐	新治産ヵ
17	18	須恵器	大甕	—	〈12.8〉	19.4	473.5	胴～底部 1/2	回転台使用ヵ、残存部分外面胴部下半に４本一単位の沈線が二条巡り下端はヘラケズリ。内面はナデ。煤付着。	雲母やや多い、長石・石英少量。	良好 二次焼成ｱﾘ	内面　暗灰黄 外面　にぶい黄	新治産
18	覆土・№23・カマド	須恵器	甑	(30.3)	〈33.0〉	(18.5)	2,540.0	1/3	多孔式。回転台使用ヵ、外面下半ヘラケズリ、口縁直下に牛角状の把手が付されるが単位は不明。内面ナデ。	長石・石英等小～大礫・雲母やや多い。	良好	内面　灰黄 外面　灰	新治産
19	3	須恵器	無台坏	13.9	4.0	6.3	121.4	口縁～体部 2/3 欠損	ロクロ整形、下端は手持ちヘラケズリ、底部一方向の手持ちヘラケズリ。	雲母多い、長石・石英少量	良好	内面　にぶい黄 外面　黄褐	新治産
20	確認面	須恵器	無台坏	13.5	4.4	6.0	104.4	2/3	ロクロ整形、下端は手持ちヘラケズリ、底部一方向の手持ちヘラケズリ。	雲母やや多い、長石・石英少量	良好	内面　黒褐 外面　暗灰黄	新治産
21	№9	灰釉陶器	椀	—	〈2.4〉	6.8	77.6	底部完形	底部回転ヘラケズリ、高台は比較的高く断面三日月形を呈するが幅がやや広く内側下半の内湾や外側下方の稜が弱い。	精良	良好	胎土　灰白 釉　暗淡緑	猿投 K90-3 重ね焼き痕を有す 【325】実 98-2-033
22	15	土製品	紡錘車	径 6.0	厚 2.1	孔径 1.0	70.4	ほぼ完形	上下側面ミガキが施されている。	精良	良好	内外面　黒褐	

SI12（第 29・30 図、第 15 表、遺構図版 3・4、遺物図版 5）

検出位置：調査区中央南寄り C･D3･4 グリッド。**平面形状**：方形。**主軸方向**:N-84°-E。**規模**:3.67m × 4.6m。**確認面下の深さ**：12 cm。**覆土**：不明。**柱穴**:検出されていない。**壁溝**：北壁西寄り及び南壁西寄りに僅かながら確認されており、本来は全周していたものと想定される。幅 14 cm前後。**床面**：平坦。**カマド**：東壁中央やや南寄りに設置され、壁際主軸部分の全長



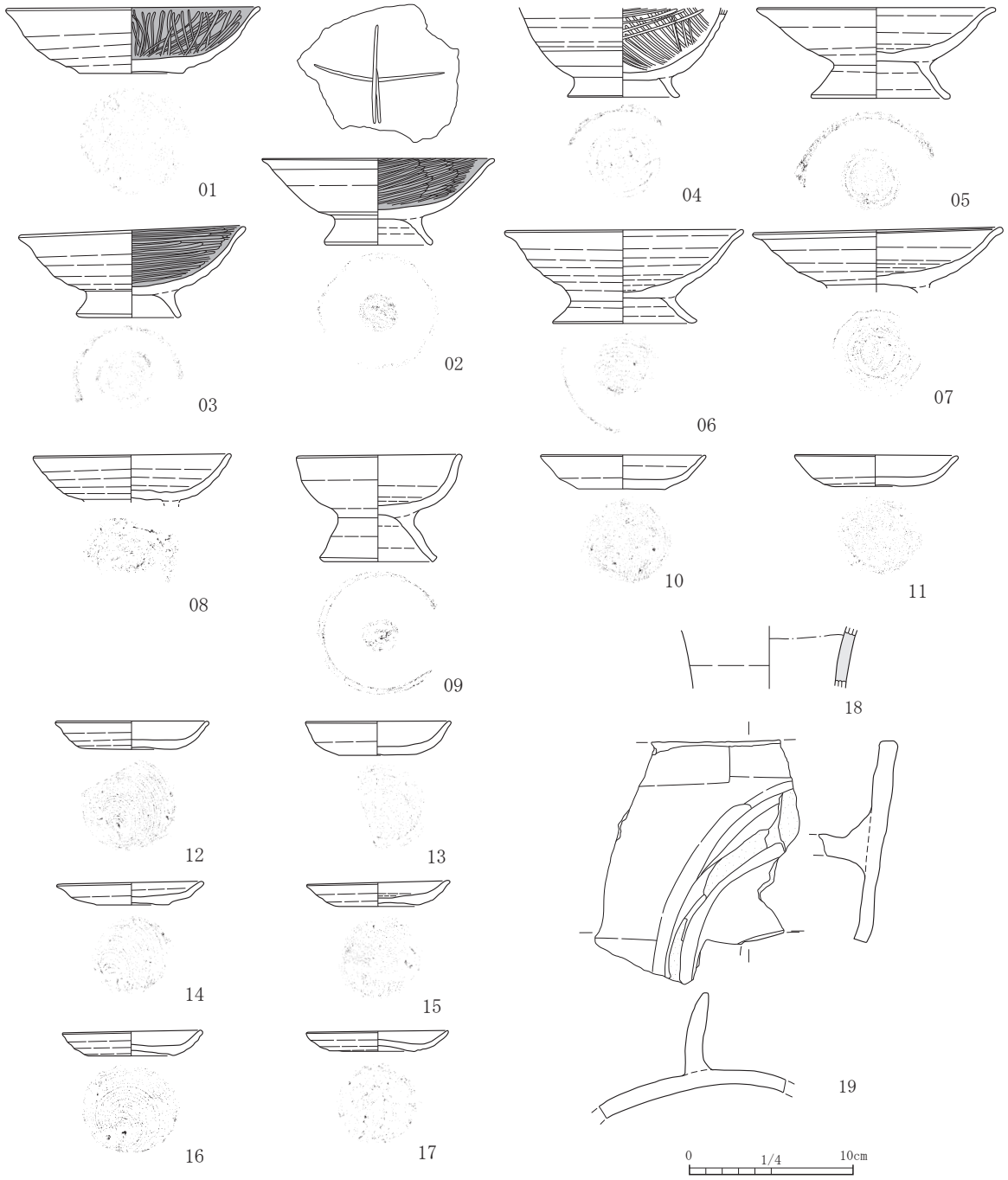
第 29 図　SI12

は 100 ㎝で、西壁から 72 ㎝ほど掘りだされる。山砂及び粘土により構築される。**その他付帯施設**:南東コーナー寄りに浅い掘り込みがあり（P1）、甕埋設穴か。**重複関係**：SI13・14・15 と重複する。本住居跡が最も新しい。

掲載遺物:土師器無台坏 1 点、有台埦 8 点、小皿 8 点、灰釉陶器広口瓶 1 点（二川ヵ K90 ～ 053 併行）、置竈 1 点。

その他未掲載遺物：土師器 2150g、須恵器 169.8g、灰釉陶器 22.3g。

遺構の帰属時期：出土遺物の特徴としては土師器小皿が挙げられる。高足高台椀、内面黒色の無台坏などの出土から 11 世紀と判断した。



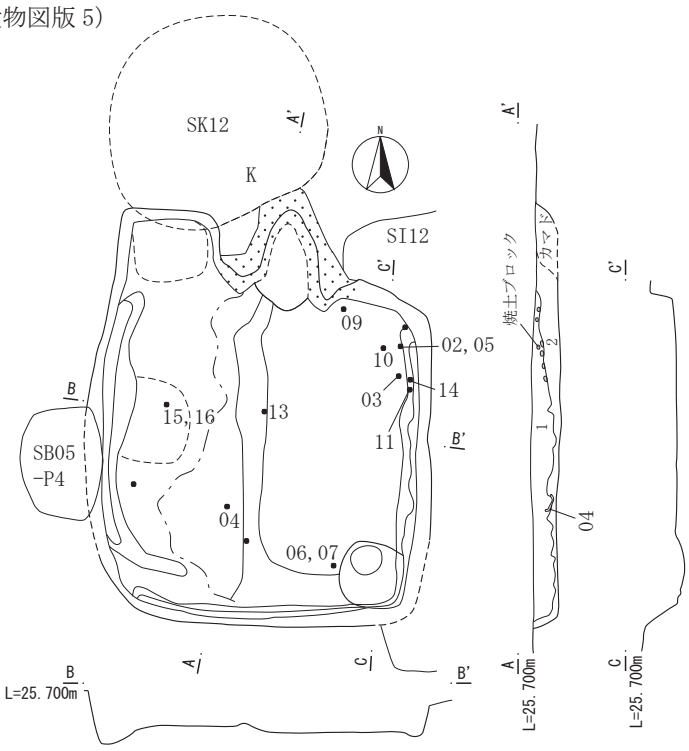
第 30 図　SI12 出土遺物

第 15 表　SI12 出土遺物観察表

掲載番号	注記	種類	器種	口径	器高	底径	重量	残存	整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
01	覆土	土師器	無台坏	(15.5)	4.0	6.3	153.7	口縁 1/3 ～底部	ロクロ整形、底部回転糸切り（右）。内面ミガキ。	雲母微量、白色針状物質微量	良好	内面　褐 外面　黄褐	内面黒色処理
02	カマド 3	土師器	有台埦	(14.6)	5.35	6.6	118.0	口縁 1/6 ～底部	ロクロ整形、体部下端狭く回転ヘラケズリ。内面ミガキ。	雲母やや多い、白色粒子多い	良好	内面　黒褐 外面　にぶい橙	内面黒色処理 内面ミガキ状「十」字暗文あり
03	覆土	土師器	有台埦	13.8	5.2	6.0	165.4	口縁 1/3 ～底部	ロクロ整形、底部回転糸切り（右）。内面ミガキ。	雲母・白色粒子・白色針状物質微量	良好	内面　黒褐 外面　にぶい黄橙	内面黒色処理
04	カマド 6	土師器	有台埦	—	〈5.5〉	6.8	118.9	口縁 1/6 ～底部	ロクロ整形、底部回転ヘラ切り。内面ミガキ。	雲母多い、小～中礫やや多い	良好 二次焼成 ア	内面　灰黄褐 外面　にぶい黄橙	内面黒色処理
05	カマド 1	土師器	有台埦	14.6	5.5	8.5	212.4	口縁 1/4 欠損	ロクロ整形、底部回転糸切り後ナデ。	雲母多い、白色粒子微量	良好 二次焼成 ア	内外面　にぶい黄橙	内面黒色処理
06	カマド 2	土師器	有台埦	14.4	5.5	(8.6)	177.8	口縁欠損 底部 1/3	ロクロ整形、底部糸切り後ナデ。	雲母・白色粒子少量	良好	内外面　橙	
07	カマド 5	土師器	有台埦	15.2	〈3.8〉	—	209.0	高台欠損	ロクロ整形、底部糸切り後周縁ナデ。	雲母少量、白色針状物質微量	良好	内外面　橙	
08	カマド	土師器	有台埦	12.0	2.7	6.0	80.8	3/4 高台欠損	ロクロ整形、底部回転糸切り。	白色粒子やや多い、黒色粒子微量	良好 二次焼成 ア	内外面　灰黄褐	
09	覆土	土師器	有台埦	10.0	6.4	6.7	176.4	完形	ロクロ整形。	雲母・白色粒子微量	良好	内外面　橙	
10	カマド 2	土師器	小皿	10.0	2.0	5.0	76.4	3/4	ロクロ整形、回転糸切り（左）。	雲母・白色粒子微量	良好	内外面　橙	
11	P1-3	土師器	小皿	10.0	2.0	4.0	52.0	1/2	ロクロ整形、回転糸切り（左）。	雲母・白色粒子少量、黒色粒子微量	良好	内面　にぶい橙 外面　橙	
12	確認面	土師器	小皿	9.3	1.7	5.6	45.0	2/3	ロクロ整形、回転糸切り（左）。	白色粒子少量・雲母微量	良好	内外面　橙	
13	覆土	土師器	小皿	8.8	2.0	4.8	52.3	2/3	ロクロ整形、回転糸切り（左）。	白色粒子。雲母微量	良好	内外面　橙	
14	覆土	土師器	小皿	8.8	1.4	4.3	50.8	ほぼ完形	ロクロ整形、回転糸切り（左）。	雲母微量	良好	内外面　橙	
15	2	土師器	小皿	8.7	1.4	5.0	49.1	完形	ロクロ整形、回転糸切り（左）。	白色粒子少量、白色針状物質・スコリア微量	良好	内外面　にぶい黄橙	
16	覆土	土師器	小皿	8.4	1.4	5.2	44.8	ほぼ完形	ロクロ整形、回転糸切り（左）。	白色粒子やや多い、黒色粒子少量、スコリア・雲母微量	良好	内外面　にぶい黄橙	
17	カマド	土師器	小皿	8.6	1.2	4.3	35.9	3/4	ロクロ整形、回転糸切り（左）。	白色粒子やや多い、白色針状物質・スコリア・雲母微量	良好 二次焼成 ア	内外面　にぶい黄橙	
18	確認面	灰釉陶器	広口瓶	—	〈3.6〉	—	22.2	頸部片	器壁は比較的厚くやや外反して立ち上がる。	白色粒子・鉄分の噴出し微量	良好	胎土　淡灰褐 釉　暗淡緑	二川ヵ K90 ～ 053 併行 【326】実 98-2-034
19	覆土	土製品	置竈	—	〈14.5〉	—	305.2	大破片	回転台使用ヵ。	雲母少量、白色粒子・白色針状物質微量	良好 二次焼成 ア	内面　暗灰黄 外面　にぶい黄橙	

SI13（第 31・32 図、第 16 表、遺構図版 4、遺物図版 5）

検出位置：調査区中央南寄り D3 グリッド。**平面形状**：長方形。**主軸方向**：N - 7° -E。**規模**：3.25m × 2.73m。**確認面下の深さ**：25 cm。**覆土**：暗褐色土を基調に 2 層に分層される自然堆積。**柱穴**：検出されていない。**壁溝**：カマド部分を除きほぼ全周する。幅 12 cm、深さ 5 cm前後。**床面**：カマドの西側袖の延長部分の西側 3 分の 1 程度が 6 cmほど高くなる段差を有す。**カマド**：北壁中央付近に設置され、壁際主軸部分の全長は 100 cmで、西壁から 74 cm ほど掘りだされる。**その他付帯施設**:南東コーナー部分に貯蔵穴が検出されている。規模は 75 × 44 cm、深さは 13 cm。また、住居跡の北西コーナー部分は、方形に壁が掘り出されており、棚状の施設として用いられた可能性がある。**重複関係**：SI12 と重複するが、本遺構の方が古い。また、SB05 を切り、SK12 に切られる。



SI13 セクション
1 7.5YR3/4 暗褐色 にぶい褐色砂質粘土が小ブロック化（雲母粒含む）し、1 層の下層にカマド側から流下。ローム粒・焼土粒を含む。ややしまりあり。
2 7.5YR3/4 暗褐色 ローム粒子少～中量、炭化物（材片）極少量。ややしまりあり。

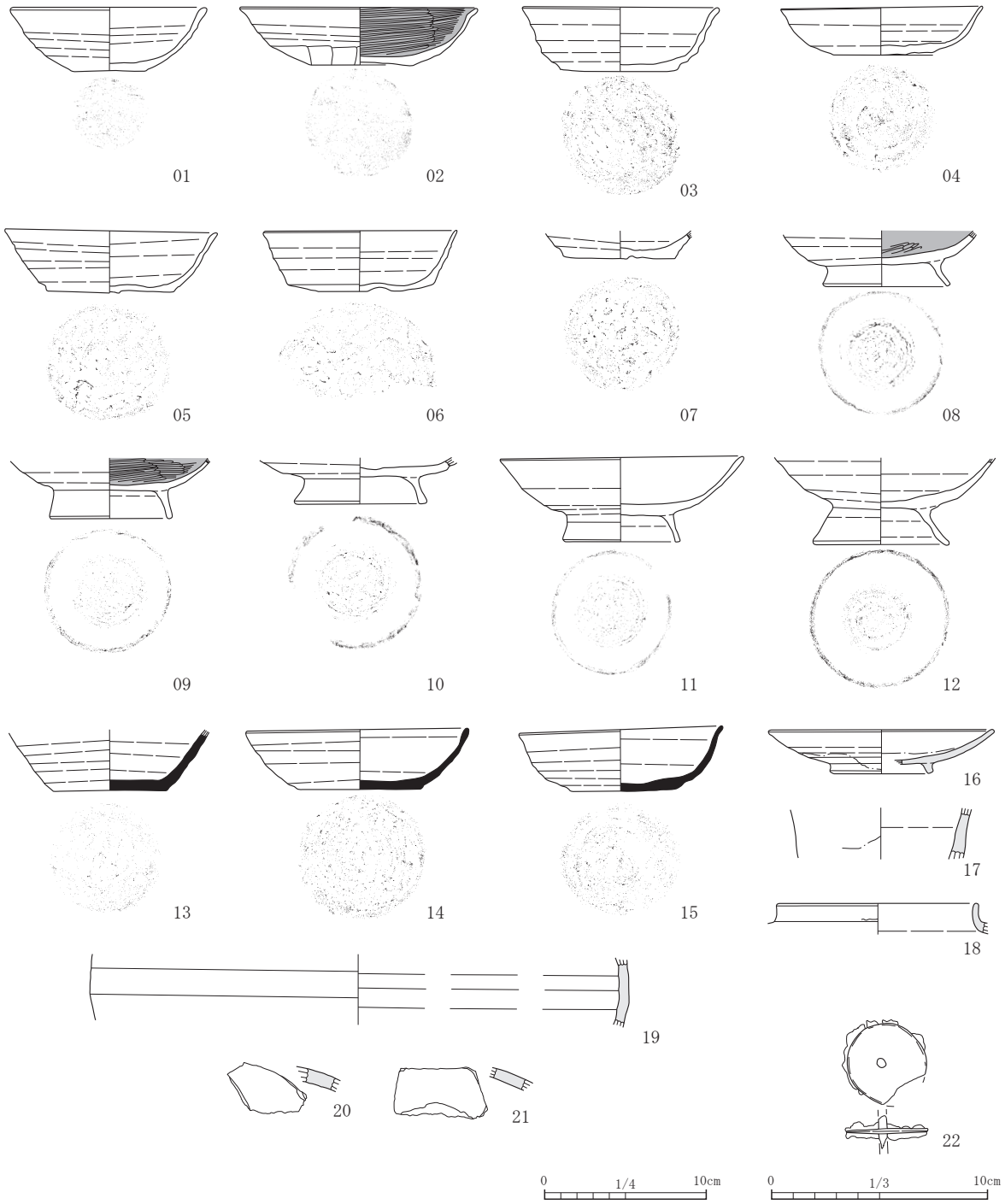
0　1/60　2m

第 31 図　SI13

掲載遺物：土師器無台坏 7 点、有台埦 5 点、須恵器無台坏 3 点、灰釉陶器皿 1 点（美濃光 1）、長頸瓶 1 点（美濃光 1 ～大 2）、短頸壺 3 点（猿投 K90・K14・三遠系 K90（～ 053）併行）、壺・瓶類 1 点（三遠系 K90（～ 053）併行）、鉄製紡錘車 1 点。

その他未掲載遺物：土師器 2745g、須恵器 449.4g。

遺構の帰属時期：出土遺物では、胎土中に雲母を混入する焼成がきわめて粗雑な須恵器で、ほぼ最終段階の生産品と判断される。内面黒色の埦類、足高高台の埦の出土などの要素から、10 世紀前半と判断される。



第 32 図　SI13 出土遺物

第 16 表　SI13 出土遺物観察表

掲載番号	注記	種類	器種	口径	器高	底径	重量	残存	整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
01	覆土	土師器	無台坏	12.0	3.9	4.5	89.6	2/3	ロクロ整形、底部回転糸切り〈左〉。	白色粒子・雲母少量	良好	内外面　にぶい黄橙	
02	3	土師器	無台坏	14.6	3.6	6.4	156.5	ほぼ完形	ロクロ整形、下端広く手持ちヘラケズリ、底部多方向の手持ちヘラケズリ。	雲母やや多い、白色粒子微量	良好	内面　黒褐 外面　にぶい褐	内面黒色処理
03	5	土師器	無台坏	(12.0)	4.0	7.2	111.7	口縁 3/4 欠損	ロクロ整形、底部回転ヘラ切り。	雲母・小～中礫多い	良好	内面　にぶい橙 外面　にぶい褐	
04	11	土師器	無台坏	12.5	3.0	6.3	118.8	完形	ロクロ整形、底部回転ヘラ切り。	雲母やや多い、白色粒子微量	良好	内外面　にぶい褐	
05	3	土師器	無台坏	13.1	4.0	7.8	102.3	ほぼ完形	ロクロ整形、底部回転ヘラ切り。	雲母・小～中礫多い、スコリア微量	良好 二次焼成ｱﾘ	内外面　橙	
06	13	土師器	無台坏	(12.0)	〈3.8〉	(9.0)	66.2	1/2	ロクロ整形、底部回転ヘラ切り。	雲母やや多い、小～大礫少量	良好	内外面　橙	
07	13	土師器	無台坏	—	〈1.75〉	7.0	68.1	底部	ロクロ整形、底部回転ヘラ切り。	雲母やや多い、小～中礫・黒色粒子少量	良好	内外面　橙	
08	カマド	土師器	有台埦	—	〈3.5〉	7.6	90.6	底部	ロクロ整形、底部剥落。	雲母やや多い、白色粒子少量、スコリア微量	良好 二次焼成ｱﾘ	内面　にぶい黄橙 外面　橙	内面黒色処理
09	1	土師器	有台埦	—	〈3.7〉	7.3	108.7	下端～底部	ロクロ整形、底部回転ヘラケズリ。	白色針状物質やや多い、雲母・白色粒子少量	良好	内面　黒褐 外面　にぶい黄橙	内面黒色処理
10	4	土師器	有台埦	—	〈2.9〉	8.0	103.5	下端～底部	ロクロ整形、底部回転ヘラケズリ。	雲母多い、スコリア少量、白色粒子少量	良好 二次焼成ｱﾘ	内面　明褐灰 外面　橙	内面黒色処理ヵ
11	7	土師器	有台埦	15.1	5.1	6.9	143.3	2/3	ロクロ整形、身込部分手持ちによるナデ、底部一方向の手持ちヘラケズリ。	白色粒子・雲母やや多い、スコリア微量	良好	内外面　にぶい赤褐	
12	確認面	土師器	有台埦	—	〈5.4〉	8.2	162.7	口縁欠損	ロクロ整形、底部回転糸切り。	雲母・白色粒子微量	良好	内外面　橙	
13	8	須恵器	無台坏	—	〈3.8〉	7.0	150.9	口縁欠損	ロクロ整形、底部回転ヘラ切り。	小～大礫多い、白色針状物質少量	良好	内外面　灰白	底部ヘラ記号あり 内外面煤付着
14	6	須恵器	無台坏	13.7	3.7	7.7	130.9	ほぼ完形	ロクロ整形、底部回転ヘラ切り。	雲母・白色粒子ややや多い	良好	内面　にぶい黄橙 外面　にぶい黄褐	新治産
15	9	須恵器	無台坏	12.8	3.8	6.5	125.7	完形	ロクロ整形、底部回転ヘラ切り。	雲母・白色粒子少量、スコリア微量	良好 二次焼成ｱﾘ	内外面　にぶい橙	新治産 内外面煤付着
16	9・覆土・確認面・SI14	灰釉陶器	皿	(13.7)	2.6	(5.8)	61.6	3/5	体部は下端回転ヘラケズリ。器壁は比較的薄く緩やかに内湾して立ち上がり口縁端部で僅かに外反。高台は三日月形を呈するが幅が広く内側の内湾が弱い。	鉄分の噴出しやや多い	良好	胎土　灰白 釉　黄緑	美濃光ヶ丘 1 重ね焼き痕を有す 【327】実 98-2-035
17	覆土	灰釉陶器	長頸瓶	—	〈3.1〉	—	12.9	頸部片	器壁は比較的厚くほぼ直線的に立ち上がる。内面のほぼ全体に透明がかった淡緑色の自然釉。	鉄分の噴出し少量	良好	胎土　灰白 釉　暗淡緑	美濃光 1 ～大 2 【328】実 98-2-036
18	覆土	灰釉陶器	短頸壺	(12.1)	〈1.9〉	—	2.4	口縁部片	器壁は比較的薄く頸部で屈曲後緩やかに外反して立ち上がり口縁に至る。	鉄分の噴出し少量	良好	胎土　淡灰褐 釉　暗淡緑	猿投 K90 【329】実 98-2-037
19	SI13 確認面・カマド	灰釉陶器	短頸壺	—	〈4.4〉	—	35.5	胴部片	外面回転ヘラケズリ。	鉄分の噴出し少量	良好	胎土　灰白 釉　灰オリーブ	猿投 K14 【330】実 98-2-038
20	覆土	灰釉陶器	短頸壺	—	〈1.5〉	—	13.3	胴部片	器壁は比較的厚く丸みを持って立ち上がる。	鉄分の噴出し少量	良好	胎土　灰白 釉　暗淡緑	猿投 K14 ～ 90 【331】実 98-2-039
21	覆土	灰釉陶器	壺・瓶類	—	〈1.4〉	—	32.0	胴部片	器壁は比較的薄く僅かに丸みを有し立ち上がる。	鉄分の噴出し多い	良好 二次焼成ｱﾘ	胎土　淡灰褐 釉　暗淡緑	三遠系 K90（～053）併行 【332】実 98-2-040
22	覆土	鉄製品	紡錘車	紡輪直径 4.0、紡軸太さ 0.5			11.3	紡輪一部・紡軸ほとんど欠損	紡輪は円盤状（銭型）。紡軸は断面円形ヵ。紡軸は紡輪の中心からずれている。				紡輪のみ

SI14（第 33・34 図、第 17・18 表、遺構図版 4、遺物図版 6）

検出位置：調査区中央南寄り C・D3、D4 グリッド。**平面形状**：長方形。住居北東コーナー部分に張り出しが設けられる。**主軸方向**：N - 84°-W。**規模**：4.9m × 3.53m。**確認面下の深さ**：45 ㎝。**覆土**：暗褐色土を基調に 6 層に分層される自然堆積。**柱穴**：検出されていない。**壁溝**：カマド部分を除きほぼ全周する。幅 15 ㎝、深さ 7 ㎝前後。張り出し部分にも溝は巡る。また､床面下には張り出し部分を作り出す前の周溝が残る。**床面**:平坦。**カマド**：東壁の南寄りに設置され、壁際主軸部分の全長は 82 ㎝で、西壁から 60 ㎝ほど掘りだされる。山砂及び粘土により構築された袖が大きく開いて設置される。中央部分には火床面が東西方向の楕円形に広がる。**その他付帯施設**：南西コーナー部分に貯蔵穴 1 基が検出されている。規模は 82 × 62 ㎝、深さは 25 ㎝。さらに、住居の中央やや北より部分に、50 × 30 ㎝の楕円形で浅い皿状の鍛冶炉が 1 基検出されている。また、炉の南側には炭化物の集中区が確認されている。**重複関係**：SI12・15 と重複関係にあり、SI12 とは調査時点では明確ではなかったようであるが、本住居跡の方が古く、SI15 よりも新しい。

掲載遺物：土師器無台坏 4 点（墨書土器 2 点）、有台埦 1 点、小皿 2 点、土製品埦加工有孔円盤 1 点、須恵

器無台坏１点（墨書土器「子」）、灰釉陶器椀１点（猿投 K90）、皿２点、段皿１点、長頸瓶 10 点、短頸壷２点、広口瓶１点、壷・瓶類１点（猿投 K90・053・三遠系・K90 ～ 053・宮口ヵ）、平瓦１点。

その他未掲載遺物：土師器 2340g、須恵器 3720g、瓦 815g。

遺構の帰属時期：小型の皿 06・07 が出土する段階で、10 世紀後半が想定される。一方で、共伴した灰釉陶器では黒笹 90 号窯式３段階、折戸 53 号窯式の出土が見られるこのことから 10 世紀中葉と判断される。若干の齟齬を感じるものの、概ね 10 世紀後半と判断した。

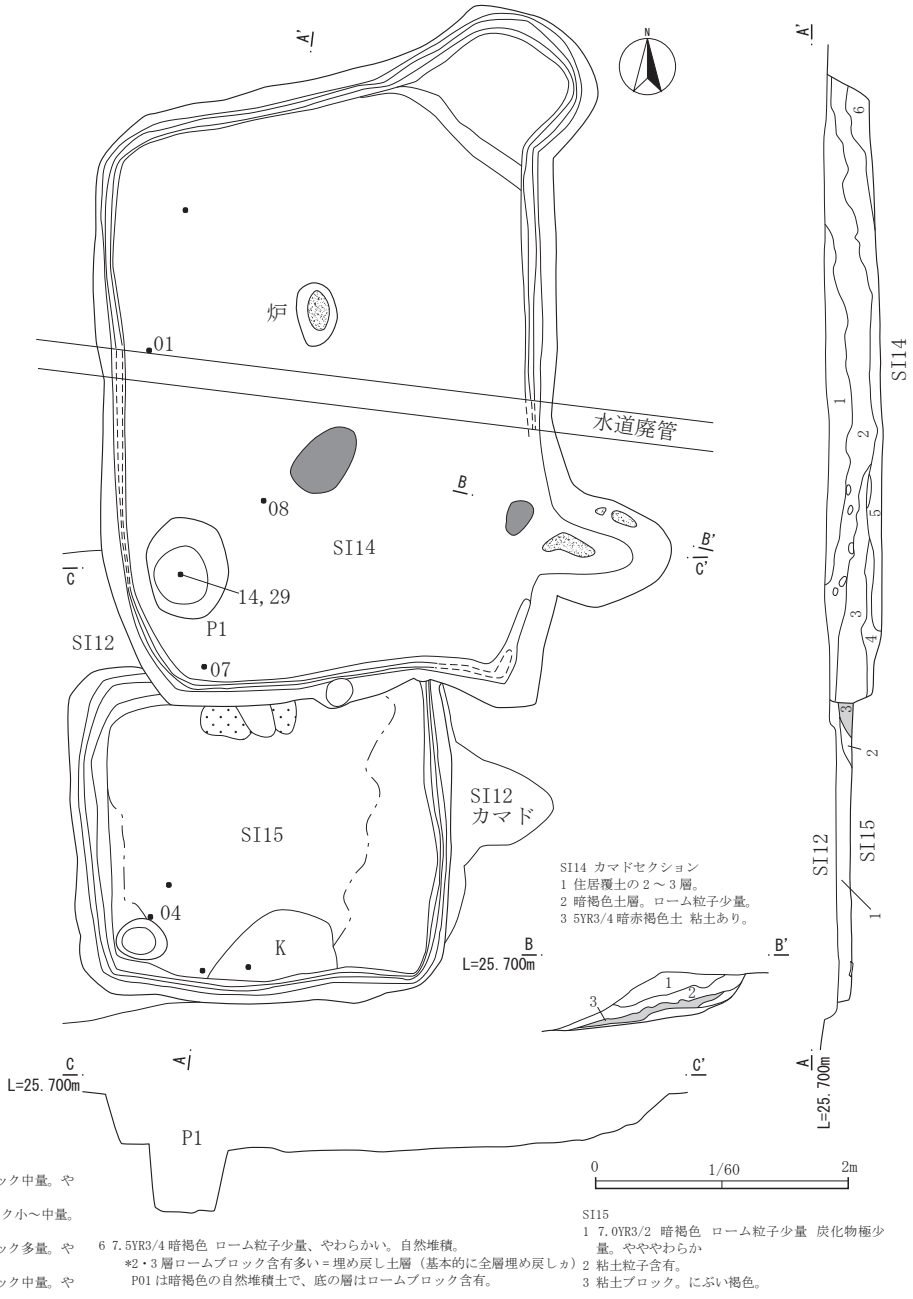
SI15（第 33・35 図、第 19 表、遺構図版 4、遺物図版 6）

検出位置：調査区中央南寄り D3・4 グリッド。**平面形状**：方形。**主軸方向**：N。**規模**：2.96m × 2.6m。**確認面下の深さ**：20 ㎝。**覆土**：住居跡の覆土は確認面が浅く暗褐色土の単層。**柱穴**：検出されていない。**壁溝**：カマド部分を除きほぼ全周する。幅 12 ㎝前後。**床面**：平坦。**カマド**：北壁中央付近に設置され、煙道部分は SI14 によって大きく削り取られている。袖は山砂及び粘土により構築される。**その他付帯施設**：南西コーナー部分に貯蔵穴が検出されている。規模は 33 × 28 ㎝、深さは 16 ㎝。**重複関係**：SI12・14 と重複関係にあり、本住居跡が最も古い。

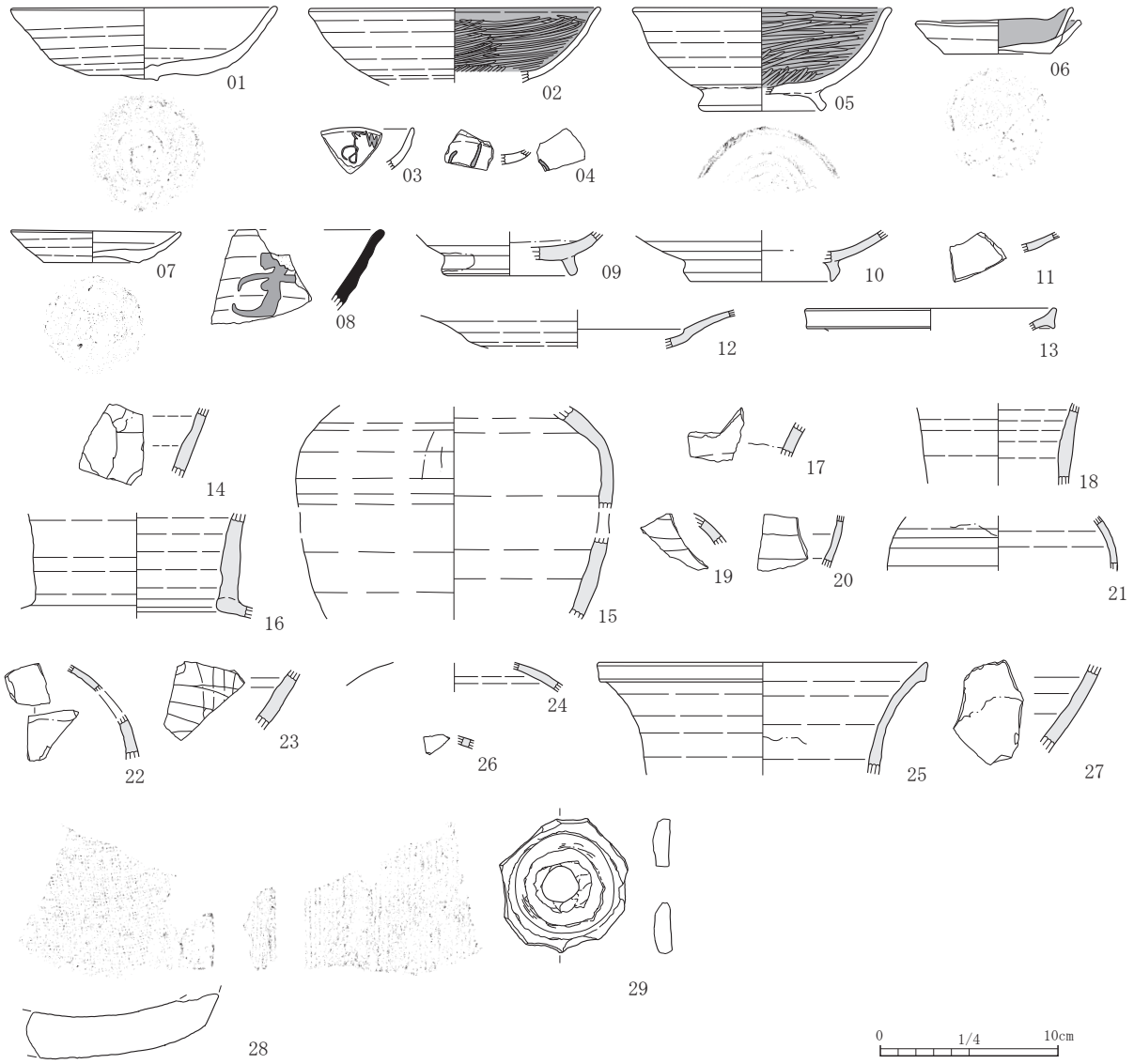
掲載遺物：土師器有台埦２点、須恵器無台坏２点、灰釉陶器椀１点（猿投 K90-1）、長頸瓶２点（猿投 K90・K14 ～ 90）、砥石１点。

その他未掲載遺物：土師器 1655g、須恵器 399g。

遺構の帰属時期：土師器内黒有台埦、足高高台付埦が出土し、須恵器の坏が２点伴う。この須恵器２点は胎土中に僅かながら雲母の混入が認められ、焼成は極めて粗悪である。また灰釉陶器では黒笹 14 号窯式から黒笹 90 号窯式１段階が出土しており、遺構の帰属は９世紀後半と判断される。以上から足高高台埦 02 の初出が９世紀後半にさかのぼる可能性を指摘しておきたい。



第 33 図　SI14・15



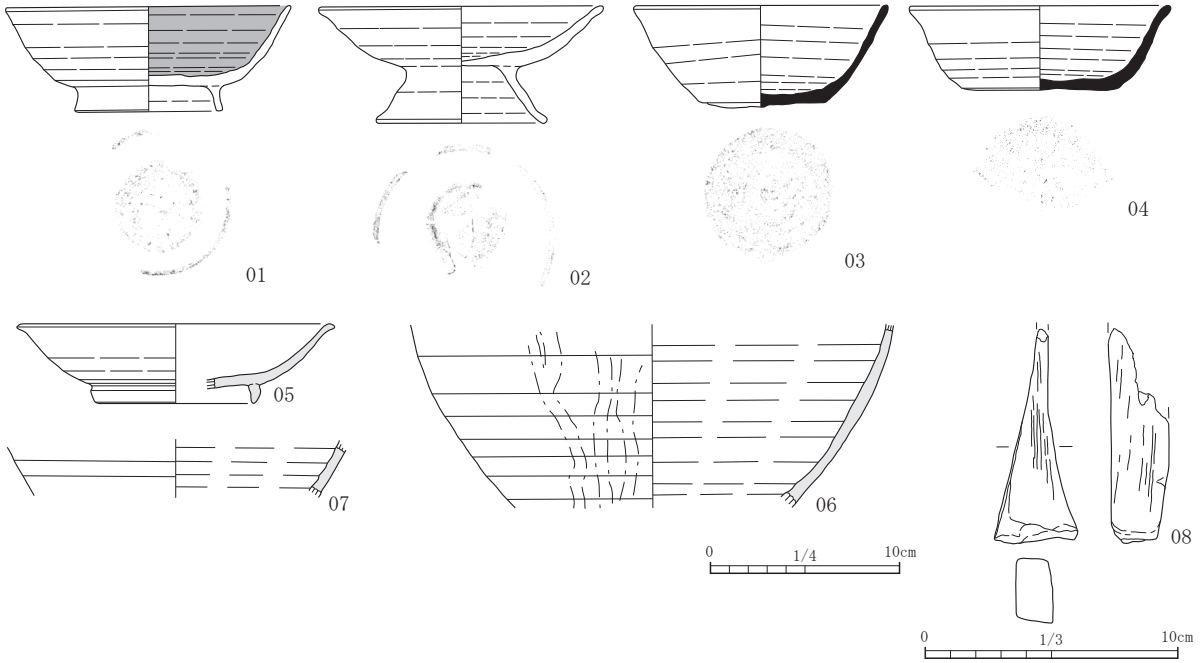
第 34 図　SI14 出土遺物

第 17 表　SI14 出土遺物観察表（1）

掲載番号	注記	種類	器種	口径	器高	底径	重量	残存	整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
01	3	土師器	無台坏	15.0	3.9	6.2	180.4	口縁 1/2 欠損	ロクロ整形、底部回転ヘラ切り。	雲母やや多い、小礫少量	良好	内外面　橙	
02	覆土	土師器	無台坏	(14.6)	〈4.1〉	—	26.8	1/4	ロクロ整形、内面ミガキ。	雲母・白色粒子少量、白色針状物質微量	良好	内面　暗灰黄 外面　橙	内面黒色処理
03	覆土	土師器	無台坏	—	—	—	2.9	口縁部片	ロクロ整形。	雲母・白色粒子微量	良好	内外面　橙	墨書「□」
04	覆土	土師器	無台坏	—	—	—	3.7	体部片	ロクロ整形。	雲母・白色粒子微量	良好	内外面　橙	墨書「□」
05	覆土	土師器	有台埦	(14.5)	5.6	6.4	85.5	1/4	ロクロ整形、底部回転糸切り。内面ミガキ。	雲母・白色粒子少量	良好	内面　黒 外面　赤褐	内面黒色処理
06	覆土	土師器	小皿	最大径 7.7	2.5	6.0	56.4	ほぼ完形	ロクロ整形、底部回転糸切り（左）。体部一部分内傾する。	精良、雲母微量。	良好	内外面　にぶい黄橙	
07	5	土師器	小皿	9.5	1.8	5.3	56.6	完形	ロクロ整形、底部回転糸切り（左）。	雲母・小～中礫少量	良好	内外面　にぶい黄橙	
08	1･4	須恵器	無台坏	—	—	—	18.8	口縁～体部片	ロクロ整形。	長石・石英やや多い、雲母微量	良好	内外面　灰白	墨書「子」 新治産
09	覆土	灰釉陶器	椀	—	〈2.4〉	(7.0)	98.0	体下端～底部	高台は比較的高く断面三日月形を呈するが内側下半の内湾が弱い。	白色粒子・鉄分の噴出し少量	良好	胎土　灰白 釉　暗淡緑（刷毛塗）	三遠系 K90（～053）併行 重ね焼き痕あり 【333】実 98-2-041
10	覆土	灰釉陶器	皿	—	〈2.4〉	(7.0)	10.0	底部片	体部下端回転ヘラケズリご回転ナデ、高台は高く断面が定型化した三日月形を呈する。	鉄分の噴出し多い	良好	胎土　灰白 釉　暗淡緑	猿投 K90 重ね焼き痕あり 【334】実 98-2-042
11	覆土	灰釉陶器	皿	—	〈1.1〉	—	3.9	体部片	器壁は比較的薄く緩やかに内湾し立ち上がる。	鉄分の噴出しやや多い	良好	胎土　淡灰 釉　暗淡緑（含自然釉）	猿投 K90 【335】実 98-2-043
12	SI14・37	灰釉陶器	段皿	—	〈2.1〉	—	23.5	体部片	器壁は比較的薄く緩やかに内湾し立ち上がり、段形成後は緩やかに外反する。	鉄分の噴出し少量	良好	胎土　灰白 釉　暗淡緑	猿投 K90 【336】実 98-2-044

第 18 表　SI14 出土遺物観察表（2）

掲載番号	注記	種類	器種	口径	器高	底径	重量	残存	整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
13	カマド	灰釉陶器	長頸瓶	(13.9)	〈1.2〉	—	2.8	口縁部片	器壁は比較的薄く口縁付近で強く外反し端部に至る、端部のメリハリは比較的強い。	鉄分の噴出しやや多い	良好	胎土　淡灰 釉　暗淡緑色自然釉	猿投 K90 【337】実 98-2-045
14	P1	灰釉陶器	短頸壺	—	〈3.9〉	—	13.9	胴部片	器壁は厚くほぼ直線的に立ち上がり上位でやや外反する。	鉄分の噴出し多い	良好	胎土　灰白 釉　暗淡緑	猿投 K90 【338】実 98-2-046
15	SI14・37	灰釉陶器	長頸瓶	—	—	—	99.7	肩部・胴部片	器壁は厚く胴部下半は丸味が弱いか。	鉄分の噴出し多い	良好	胎土　灰白 釉　暗淡緑	宮口ヵ 【339】実 98-2-047
16	覆土	灰釉陶器	長頸瓶	—	〈5.8〉	—	32.1	胴部片	器壁は厚くほぼ直線的に立ち上がり上位でやや外反する。	鉄分の噴出し多い	良好	体部　灰白 釉　暗淡緑	猿投 053 【340】実 98-2-048
17	覆土	灰釉陶器	長頸瓶	—	〈1.9〉	—	5.5	頸部片	器壁は比較的薄く外反して立ち上がる、器壁の角度から頸部上位の破片と思われる。	鉄分の噴出し少量	良好	胎土　淡灰褐 釉　暗淡緑	三遠系不明 【341】実 98-2-049
18	覆土	灰釉陶器	長頸瓶	—	〈4.5〉	—	16.2	頸部片	器壁は器壁は比較的厚くやや外反して立ち上がる。	鉄分の噴出し少量	良好	胎土　灰白 釉　暗淡緑（透明）	猿投 K90 ～ 53 【342】実 98-2-050
19	覆土	灰釉陶器	長頸瓶	—	〈1.7〉	—	3.8	胴部片	器壁は薄く丸みを持って立ち上がる、外面回転ヘラケズリ後横方向のナデ。	鉄分の噴出し微量	良好	胎土　淡灰 釉　暗淡緑	猿投 K14 ～ 90 【343】実 98-2-051
20	覆土	灰釉陶器	長頸瓶	—	〈2.9〉	—	5.4	胴部片	器壁は非常に薄くやや内湾して立ち上がる。	鉄分の噴出しやや多い	良好	胎土　灰白 釉　淡緑（透明）	猿投 K90 【344】実 98-2-052
21	覆土	灰釉陶器	長頸瓶	—	〈3.0〉	—	7.1	胴部片	小型。外面回転ヘラケズリ、器壁は丸みを持って立ち上がる。	鉄分の噴出しやや多い	良好	胎土　灰白 釉　淡緑	猿投 K90 【345】実 98-2-053
22	覆土	灰釉陶器	長頸瓶	—	〈5.3〉	—	8.6	胴部片	内面全体にハチの巣状の無数の窪み、器壁は丸みを持って立ち上がる。	鉄分の噴出し少量	良好	胎土　淡灰褐 釉　暗淡緑	猿投 K90 ～ 053 【346】実 98-2-054
23	覆土	灰釉陶器	壺・瓶類	—	〈3.3〉	—	14.7	胴部片	器壁はやや薄く僅かに内湾し立ち上がる、外面回転ヘラケズリ後横方向のナデ。	鉄分の噴出し少量	良好	胎土　淡灰褐 釉　暗淡緑	猿投 K90 ～ 053 【347】実 98-2-055
24	覆土	灰釉陶器	長頸瓶	—	〈1.6〉	—	4.1	胴部片	器壁は薄くやや丸みを持って立ち上がる。	鉄分の噴出し微量	良好	胎土　灰白 釉　暗淡緑	猿投 K90 【348】実 98-2-056
25	覆土	灰釉陶器	広口瓶	(18.4)	〈6.2〉	—	19.5	口縁部片	器壁は比較的薄く緩やかに外反し立ち上がりそのまま端部に至る、口縁部のメリハリは小さい。	鉄分の噴出し少量	良好	胎土　淡灰 釉　暗淡緑	三遠系 053 併行 【349】実 98-2-057
26	覆土	灰釉陶器	瓶類	—	〈0.7〉	—	0.8	胴部片	器壁は比較的薄い。	鉄分の噴出し少量	良好	胎土　淡灰 釉　暗淡緑	猿投 K90 【350】実 98-2-058
27	覆土	灰釉陶器	短頸壺	—	〈4.9〉	—	21.3	胴部片	器壁は比較的薄くやや内湾し立ち上がる。	鉄分の噴出し少量	良好	胎土　淡灰 釉　暗淡緑	猿投 053 【351】実 98-2-059
28	覆土	瓦	平瓦	タテ (10.0)	ヨコ (108)	厚 2.5	241.5	右側縁残存	凹面糸切り痕、布目圧痕。凸面縄目回転圧痕。側面ケズリ。	雲母少量、白色粒子やや多い	良好	内外面　灰黄	被熱黒化（破断面も）
29	P1-1	土製品	埦加工有孔円盤	タテ 7.6	ヨコ 7.2	厚 1.0	40.5	坏底部	有台坏の体部と高台を打ち欠き成形。孔（径２㎝程）は下面（底部外面）より打ち欠かれており摩滅している。	雲母やや多い、白色粒子微量。	良好	内外面　にぶい橙	



第 35 図　SI15 出土遺物

第 19 表　SI15 出土遺物観察表

掲載番号	注記	種類	器種	口径	器高	底径	重量	残存	整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
01	覆土	土師器	有台埦	(14.9)	5.4	7.8	94.9	1/3	ロクロ整形、底部回転ヘラ切り。	雲母少量、白色粒子・スコリア微量	良好	内面　黒 外面　にぶい橙	内面黒色処理
02	覆土	土師器	有台埦	(15.6)	6.0	9.0	168.7	1/3	ロクロ整形。	雲母・白色粒子微量	良好	内外面　橙	
03	覆土	須恵器	無台坏	13.4	5.2	6.3	146.2	完形	ロクロ整形、底部回転ヘラ切り。	雲母微量、白色粒子やや多い	良好	内外面　灰白	新治産
04	3	須恵器	無台坏	(13.6)	4.4	(8.4)	61.0	ほぼ完形	ロクロ整形、底部回転ヘラ切り。内面ミガキ。	雲母・白色粒子やや多い	還元不良	内外面　浅黄	新治産
05	覆土	灰釉陶器	椀	(16.3)	4.1	(8.2)	19.8	口縁 5% 体部 5% 底部 10%	器壁は比較的薄く緩やかに内湾して立ち上がり端部でやや強く外反する、腰の張はあまりみられない。高台は比較的高く三日月形を呈する が内湾が弱く足形化するには至っていない。体部下端回転ヘラケズリ後回転ナデ。	鉄分の噴出し多い	良好	胎土　灰白 釉　暗淡緑 （含自然釉）	猿投 K90-1 【352】実 98-2-060・98-2-061
06	覆土	灰釉陶器	長頸瓶	—	〈9.7〉	—	235.3	胴部大破片	外面回転ヘラケズリ、	鉄分の噴出しやや多い	良好	胎土　灰白 釉　暗淡緑	猿投 K90 【353】実 98-2-062
07	覆土	灰釉陶器	長頸瓶	—	〈3.1〉	—	8.6	胴部片	胴部下端回転ヘラケズリご回転ナデ、器壁は比較的薄くほぼ直線的に立ち上がる、内面密なロクロ目。	鉄分の噴出しやや多い	良好	胎土　淡褐（暗褐） 釉　暗淡緑自然釉	猿投 K14 ～ 90 【354】実 98-2-063
08	覆土	石製品	砥石	タテ (8.2)	ヨコ (3.3)	厚 3.3	56.2	上部欠損	携帯型・提げ砥。表裏左右 4 面が使用面。両側面は使用著しく、凹面を呈し、表・裏面は平坦で、裏面は一部礫表皮を残す。破断面の摩耗から、上部欠損後も使用が窺われる。石材：凝灰岩。				

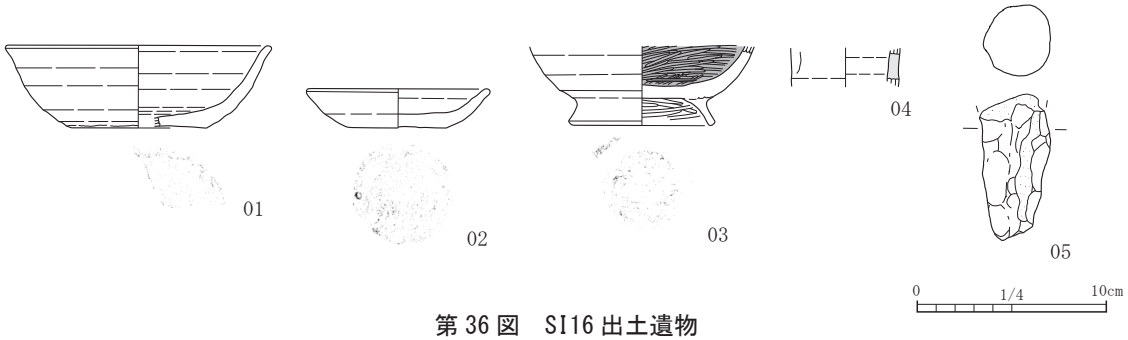
SI16（第 36・37 図、第 20 表、遺構図版 4、遺物図版 6）

検出位置：調査区北側中央 B3・4 グリッド。**平面形状**：方形ヵ。**主軸方向**：N - 108°-E。**規模**：3.0m ×—。**確認面下の深さ**：14 ㎝。**覆土**：住居跡の覆土は確認面が浅く暗褐色土の単層。**柱穴**：検出されていない。**壁溝**：なし。**床面**：平坦。**カマド**：東壁に設置され、壁際主軸部分の全長は 80 ㎝で、西壁から 56 ㎝ほど掘りだされる。山砂及び粘土により構築された袖設置される。**その他付帯施設**:カマド北側の壁が大きく張り出している。棚状の遺構が設置されていた可能性がある。**重複関係**：SI17 と重複し、同住居によって切られる。

掲載遺物：土師器無台坏 2 点、有台埦 1 点、脚付鍋獣脚 1 点、灰釉陶器長頸瓶 1 点（尾北篠岡 4）。

その他未掲載遺物：土師器 817.7g、須恵器 3720g。

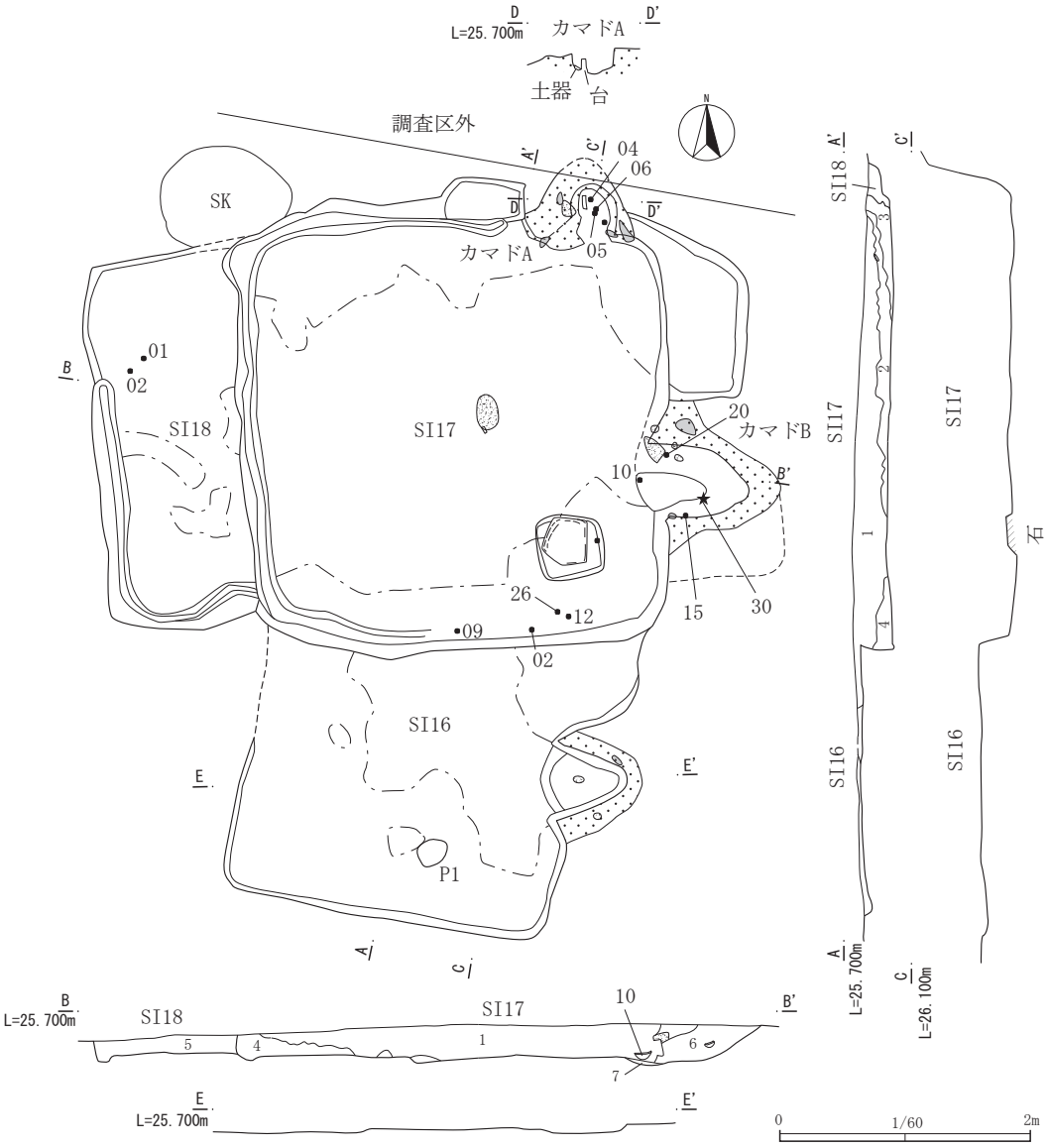
遺構の帰属時期：土師器小型皿の出土、及び灰釉陶器の尾北篠岡 4 号窯式の長頸瓶の出土から 10 世紀後半が想定される。



第 36 図　SI16 出土遺物

第 20 表　SI16 出土遺物観察表

掲載番号	注記	種類	器種	口径	器高	底径	重量	残存	整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
01	確認面	土師器	無台坏	(13.9)	4.3	(7.2)	50.5	1/6	ロクロ整形、底部回転糸切り。	雲母・白色粒子微量	良好	内外面　橙	
02	確認面	土師器	無台坏	9.8	2.0	5.7	69.0	1/2	ロクロ整形、底部回転糸切り（左）。	雲母・白色粒子微量	良好	内外面　にぶい橙	
03	確認面	土師器	有台埦	—	〈4.4〉	(7.3)	102.3	1/3	ロクロ整形、体部下端狭く回転ヘラケズリ。外面底部及び内面ミガキ。	雲母・白色粒子少量	やや不良	内面　黒 外面　黄橙	内面黒色処理
04	床面	灰釉陶器	長頸瓶	—	〈2.0〉	—	6.2	頸部片	器壁は比較的薄くやや外反して立ち上がる。	鉄分の噴出し少量	良好	胎土　灰白 釉　暗淡緑 （部分的に自然釉）	尾北　篠岡 4 【355】実 98-2-064
05	覆土	土製品	獣脚ヵ	タテ (7.4)	ヨコ (3.5)	厚 3.5	95.2	一脚のみ	断面不正楕円形を呈するもので、端部（接地面）は潰れが観察される。	雲母微量、白色粒子やや多い	良好	にぶい黄橙	



SI16・17・18 セクション
1 7.5YR3/4 暗褐色 焼土粒子・小ブロック少～中量、炭化物少量。ややしまりあり。
2 7.5YR3/4 暗褐色 ローム粒子少量、炭化物粒中量。ややわらかい。
3 7.5YR3/4 暗褐色 1層とほぼ同質。やわらかい。
4 3層と同質。
5 7.5YR4/3 褐色 ローム粒子・ローム小ブロック多量。
6 焼土中・小ブロック中量、粘土小・中ブロック中量。
7 炭化物粒と灰。やわらかい。

第37図　SI16・17・18

SI17（第37・38・39図、第21・22表、遺構図版5、遺物図版6・7）

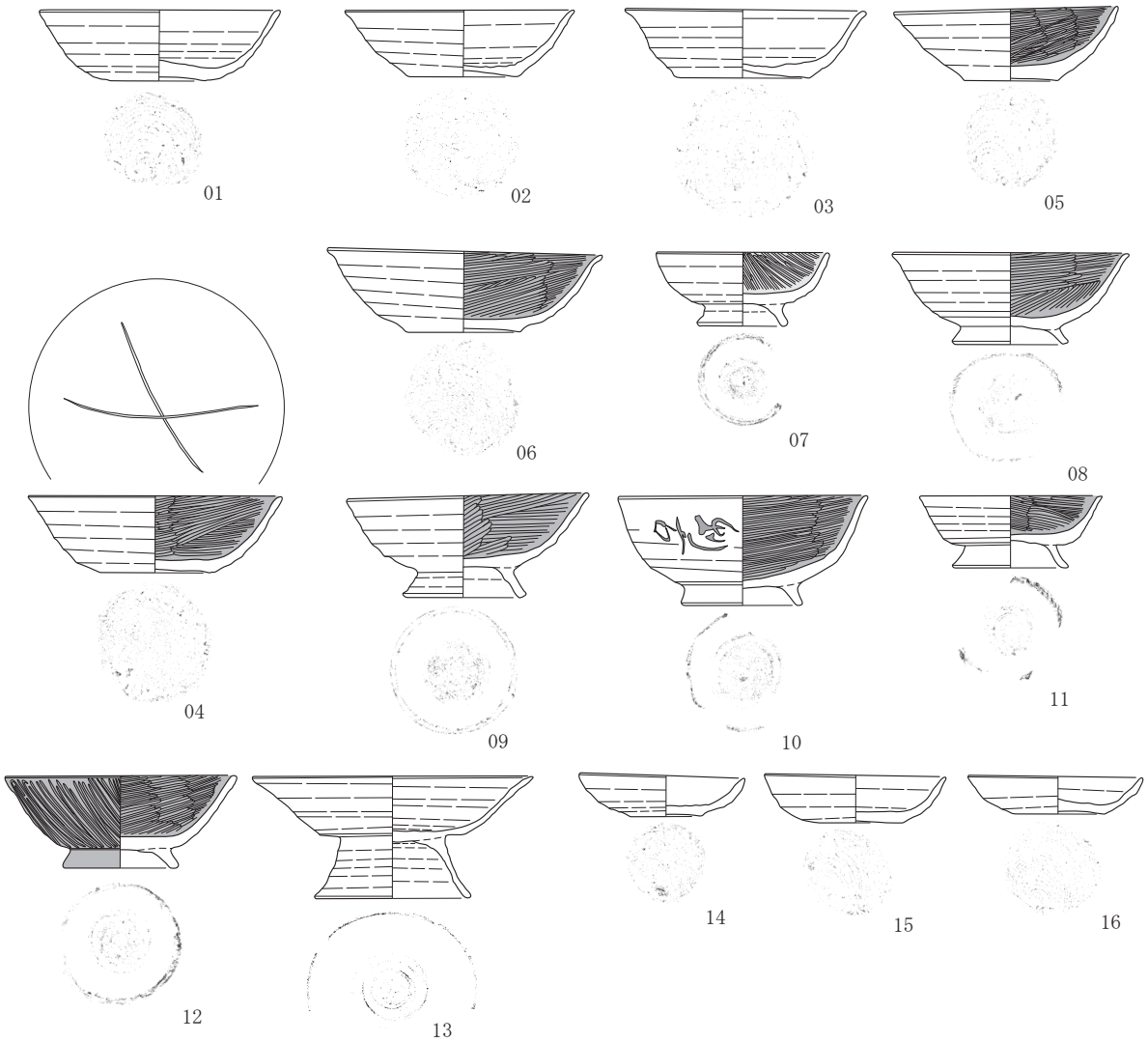
検出位置：調査区北側中央B3・4グリッド。**平面形状**：方形。**主軸方向**：N－1°-E。**規模**：3.26m × 3.56m。**確認面下の深さ**：30㎝。**覆土**：暗褐色土を基調とする4層。自然堆積。**柱穴**：検出されていない。**壁溝**：カマド部分を除きほぼ全周する。幅15㎝、深さ7㎝前後。**床面**：平坦。**カマド**：北壁東コーナー寄りにカマドA、東壁南寄りにカマドBが設置される。カマドAは壁際主軸部分の全長は76㎝で、西壁から56㎝ほど掘りだされる。カマドBは壁際主軸部分の全長は76㎝で、西壁から56㎝ほど掘りだされる。山砂及び粘土により袖が設置される。カマドAの袖は住居跡の内部まで伸びているが、カマドBの袖は住居の壁際で断ち切られており、カマドAの設置される前に設置されていたもの、または重複関係にあるSI18のカマドの可能性がある。**その他付帯施設**：南東コーナー部分に性格不明の穴が検出されている。方形を呈し、内部には板状の石が設置され

る。規模は 54 × 52 ㎝。さらに、カマド A の東側に 1 段高くなる棚状の施設が設置されている。また、中央部分には焼土が検出されており、鍛冶炉の可能性がある。**重複関係**：SI16・18 と重複し、本遺構が新しいものと判断されている。

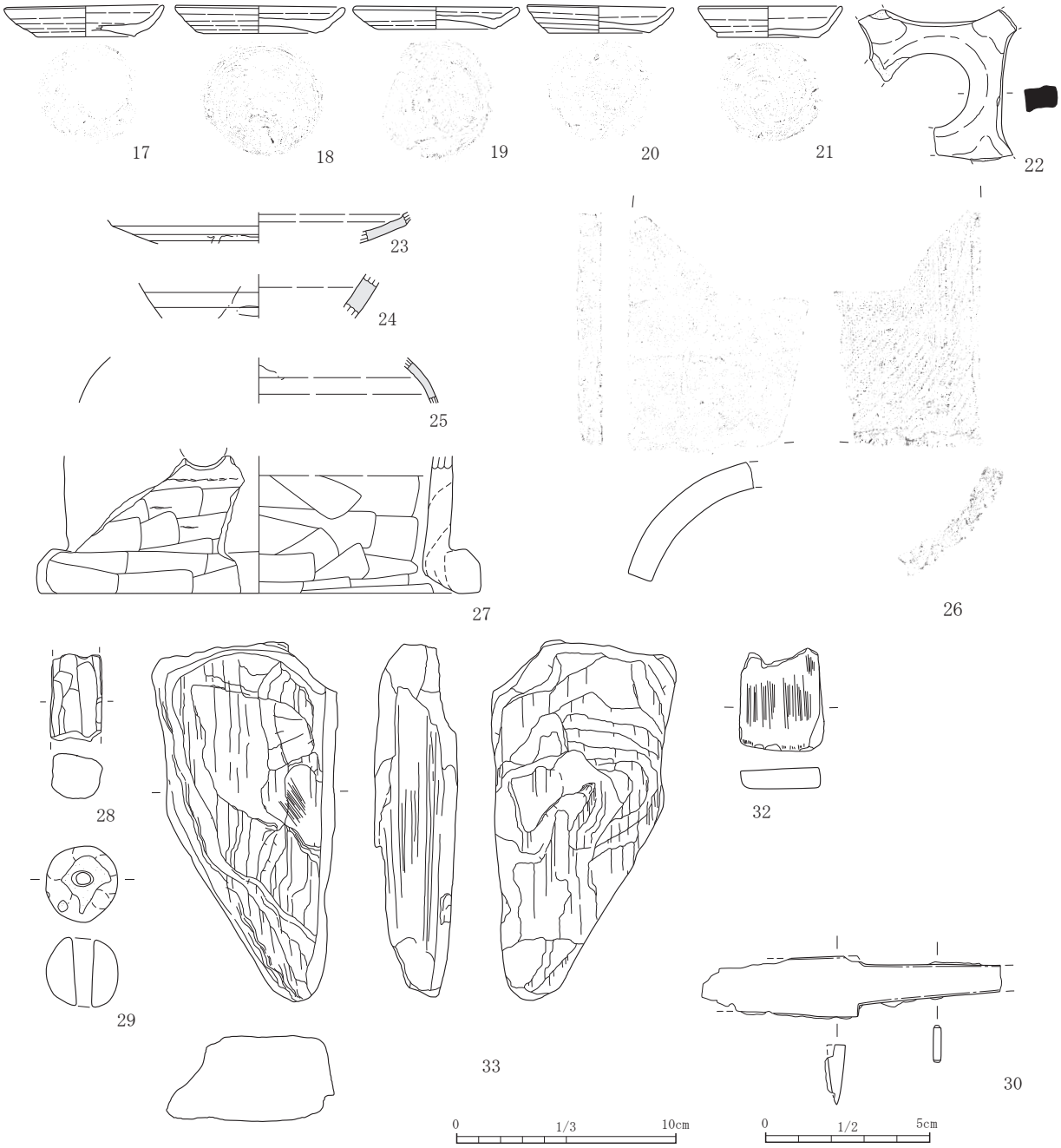
掲載遺物：土師器無台坏 6 点、有台埦 7 点（墨書土器 1 点「利古」）、小皿 8 点、須恵器甑 1 点、灰釉陶器段皿 1 点（猿投 K90）、長頸瓶 2 点（二川ヵ K90 ～ 053 併行・猿投 K90）、土製品土玉 1 点、置竈 1 点、脚付鍋脚部 1 点、丸瓦 1 点、鉄製品刀子 1 点、砥石 1 点。

その他未掲載遺物：土師器 11850g、須恵器 617.8g、瓦 785.4g、礫 2165g。**近世以降の遺物**：陶器 5.6g。

遺構の帰属時期：内外黒色の有台埦が出土している。黒色土器 B 類とされるものである。黒色土器 B 類は 11 世紀に比定される。小型皿が大量に出土し、須恵器が姿を消してしまう時期である。置竈の出現もこの時期になるものと判断している。一方で灰釉陶器は黒笹 90 号窯式、及び折戸 53 号窯式に並行する三河の二川窯の遺物が確認されている。年代的には 10 世紀中葉から後半に当たる。最も新しいと判断される黒色土器 B 類の出土をもって 11 世紀の所産と判断した。一方で、重複する SI18 から出土した 02 は内外面とも磨かれる黒色土器で SI17-12 と時期差がない。さらに A カマドと B カマド内の遺物にも時期差が認められない。このことから SI17・18 は極めて近い新旧関係ということになる。



第 38 図　SI17 出土遺物（1）



第 39 図　SI17 出土遺物（2）

第 21 表　SI17 出土遺物観察表（1）

掲載番号	注記	種類	器種	口径	器高	底径	重量	残存	整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
01	覆土	土師器	無台坏	(13.2)	4.9	5.1	88.1	口縁 1/3 ～底部	ロクロ整形、底部回転糸切り（左）。	白色粒子やや多い	良好	内外面　橙	
02	1	土師器	無台坏	12.5	3.7	5.9	133.3	ほぼ完形	ロクロ整形、底部回転糸切り（左）。	雲母・白色粒子微量、スコリア微量	良好	内外面　黄橙	
03	覆土	土師器	無台坏	13.0	3.8	5.9	149.3	口縁 1/3 欠損	ロクロ整形、底部回転糸切り（左）。	雲母やや多い、白色粒子・スコリア少量	良好	内外面　にぶい黄橙	
04	カマドA-1	土師器	無台坏	13.8	4.2	6.3	170.3	口縁 1/3 欠損	ロクロ整形、底部回転糸切り（左）。内面ミガキ。	雲母微量、白色粒子少量	良好	内面　黒 外面　にぶい黄橙	内面黒色処理 内面ミガキ状「十」字暗文あり
05	カマドA-2	土師器	無台坏	12.2	3.9	5.1	148.4	完形	ロクロ整形、底部回転糸切り（左）。内面ミガキ。	雲母・白色粒子少量、スコリア微量	良好	内面　黒褐 外面　にぶい黄橙	内面黒色処理
06	カマドA-4	土師器	無台坏	15.0	4.5	6.3	145.4	口縁 1/3 欠損	ロクロ整形、底部回転糸切り（左）。内面ミガキ。	雲母少量、白色粒子やや多い、スコリア微量	良好	内面　黒 外面　にぶい黄橙	内面黒色処理
07	覆土	土師器	有台埦	(9.4)	4.0	4.5	59.9	口縁 1/3 ～底部	ロクロ整形、底部回転糸切り。内面ミガキ。	雲母・黒色粒子微量	良好	内面　明赤褐 外面　にぶい黄橙	内面赤彩
08	カマドA	土師器	有台埦	(12.8)	5.0	5.9	131.4	口縁 2/3 欠損	ロクロ整形、底部回転糸切り。内面ミガキ。	雲母やや多い、白色粒子少量、白色針状物質やや多い	良好	内面　黒褐 外面　にぶい黄橙	内面黒色処理

第 22 表　SI17 出土遺物観察表（2）

掲載番号	注記	種類	器種	口径	器高	底径	重量	残存	整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
09	5	土師器	有台埦	13.1	5.6	6.2	180.9	完形	ロクロ整形、底部回転ヘラケズリ。内面ミガキ。	雲母微量、白色粒子やや多い	良好	内面　黒 外面　にぶい黄橙	内面黒色処理
10	カマドB-3	土師器	有台埦	13.5	5.9	(6.2)	219.5	口縁 2/3 ～底部 1/2	ロクロ整形、底部回転ヘラケズリ。内面ミガキ。	雲母やや多い、白色粒子微量、白色針状物質やや多い	良好	内面　黒褐 外面　にぶい黄橙	内面黒色処理 墨書「利古」
11	覆土	土師器	有台埦	(9.9)	4.9	5.9	56.4	口縁 1/8 ～底部 2/3	ロクロ整形、底部回転糸切り。内面ミガキ。	雲母少量、白色粒子微量、白色針状物質少量	良好	内面　黒褐 外面　にぶい黄橙	
12	2	土師器	有台埦	12.5	5.0	5.8	127.7	2/3	ロクロ整形、底部回転糸切り後ナデ。内外面ミガキ。	雲母・白色粒子やや多い	良好	内外面　黒	内外面黒色処理
13	覆土	土師器	有台埦	15.2	6.7	8.2	180.6	2/3	ロクロ整形。脚部（高台ヵ）ロクロ整形。	雲母・白色粒子・スコリア少量、白色針状物質微量	良好	内外面　にぶい黄橙	
14	カマドB	土師器	小皿	9.0	2.2	3.9	64.3	口縁 1/3 欠損	ロクロ整形、底部回転糸切り（右）。	雲母・白色粒子やや多い、スコリア少量	良好	内外面　にぶい黄橙	
15	カマドB-2	土師器	小皿	9.9	2.6	4.8	65.6	口縁 1/3 欠損	ロクロ整形、底部回転糸切り（右）。	雲母少量、白色粒子やや多い、スコリア微量	良好	内面　にぶい赤褐 外面　明赤褐	
16	覆土	土師器	小皿	9.4	2.1	5.0	68.1	完形	ロクロ整形、底部回転糸切り（右）。	雲母少量、白色粒子やや多い、スコリア微量	良好	内面　にぶい橙 外面　灰黄褐	
17	覆土	土師器	小皿	9.5	1.9	6.0	49.7	2/3	ロクロ整形、底部回転糸切り（右）。	雲母微量、スコリア微量	良好	内外面　にぶい黄橙	
18	カマド	土師器	小皿	10.1	1.6	6.9	91.2	完形	ロクロ整形、底部回転糸切り（左）。	雲母・白色粒子・スコリア少量、白色針状物質微量	良好	内外面　浅黄橙	
19	覆土	土師器	小皿	9.8	1.35	7.1	63.2	2/3	ロクロ整形、底部回転糸切り（右）。	雲母・スコリアやや多い、白色粒子少量	良好	内外面　にぶい黄橙	
20	カマドB-4	土師器	小皿	8.8	1.65	6.2	57.4	完形	ロクロ整形、底部回転糸切り（左）。	雲母・白色粒子少量、スコリア・白色針状物質微量	良好	内外面　にぶい黄橙	
21	覆土	土師器	小皿	8.6	1.9	6.0	43.8	口縁 1/2 欠損	ロクロ整形、底部回転糸切り（左）。	雲母やや多い、白色粒子スコリア少量	良好	内外面　にぶい黄橙	
22	覆土	須恵器	甑	タテ 9.1	ヨコ 9.5	厚 1.3	79.4	底部 3/4	多孔式。穿孔はヘラにより面取りされている。	雲母・白色粒子微量	良好	内面　明赤褐 外面　にぶい黄橙	多孔式
23	覆土	灰釉陶器	段皿	—	〈1.92〉	—	12.9	体部片	体部下端回転ヘラケズリ後回転ナデ、器壁は比較的厚くやや内湾し立ち上がり屈曲後やや外反する。	鉄分の噴出し少量	良好	胎土 淡灰褐 釉　暗淡緑 (自然釉を含む)	猿投 K90 【356】実 98-2-065
24	SI17	灰釉陶器	長頸瓶	—	〈2.6〉	—	21.9	胴部片	胴部下端回転ヘラケズリ後回転ナデ、器壁は厚くやや内湾し立ち上がる。	鉄分の噴出し微量	良好	胎土　淡灰褐 釉　暗淡緑	二川ヵ K90 ～ 053 併行 【357】実 98-2-067
25	SI17	灰釉陶器	長頸瓶	—	〈2.7〉	—	5.5	胴部片	器壁は比較的薄くやや丸みを有し立ち上がる。	鉄分の噴出し	良好	胎土　淡灰 釉　暗淡緑	猿投 K90 【358】実 98-2-068
26	覆土	瓦	丸瓦	タテ (14.0)	ヨコ (10.0)	厚 (1.7)	308.0	左側縁残存	凸面ヨコケズリ。凹面糸切り痕、布目圧痕、下端・側端ケズリ。端・側面ケズリ。	白色粒子少量	良好	内面　にぶい黄橙 外面　灰白	カマド構築砂付着ヵ、被熱赤化・黒化
27	カマドB	土製品	置竈	—	〈8.4〉	26.8	547.0	下端 1/4	回転台使用ヵ。内外面共にヘラによる整形が施されている。	小～中礫・雲母やや多い	良好 二次焼成ｱﾘ	内外面　にぶい黄橙	
28	覆土	土製品	脚付鍋	タテ 5.3	ヨコ 3.2	厚 2.2	54.1	両端部欠損	両端部欠損、ヘラにより整形されている。	白色粒子微量	良好	内外面　にぶい黄橙	獣脚
29	覆土	土製品	土玉	タテ 3.5	ヨコ 3.3	最大径 1.1	37.2	ほぼ完形	球形を呈し、孔は中央を貫通する。	雲母、白色粒子やや多い	良好	内外面　にぶい黄橙	
30	カマド：B-1	鉄製品	刀子	長さ 〈9.1〉	幅 〈1.8〉	厚 0.3	16.3	切先・茎尻欠損	棟関は不明瞭。刃部はやや後退している。表面の剥落が著しい。				
31	覆土	鉄滓	鍛冶滓	長さ 5.9	幅 5.4	厚 3.7	304.3	—	多くのスサや小礫が付着、含まれている。表面は細かなクラックが入る。磁着反応強い。別に、気孔に覆われた鉄塊あり。磁着反応弱い。				写真のみ
32	覆土	石製品	砥石	タテ 4.7	ヨコ 3.8	厚 0.95	28.4	上部欠損	携帯型・提げ砥。表裏左右 4 面が使用面。表・裏面は使用著しく、凹面を呈し、両側面は概ね平坦。石材：流紋岩。				
33	カマドA	礫	カマド構築材ヵ	タテ 16.2	ヨコ 8.5	厚 3.8	649.5	完形	板状の石材。全面に被熱痕跡あり、黒化。カマド構築砂付着。石材：絹雲母片岩。				

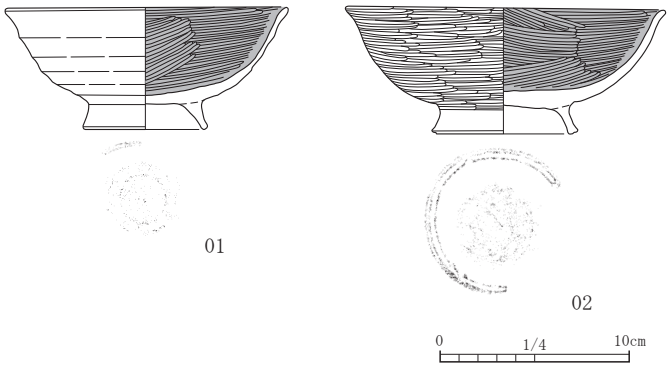
SI18（第 37・40 図、第 23 表、遺構図版 5、遺物図版 7）

検出位置：調査区北側中央 B4 グリッド。**平面形状**：長方形ヵ。**主軸方向**：N - 91°-E。**規模**：—× 3.0m。**確認面下の深さ**：14 cm。**覆土**：確認面が浅く褐色土の単層。**柱穴**：検出されていない。**壁溝**：南西コーナー部分を除き西及び南壁で確認されている。幅 10 cm前後。**床面**：平坦。炭化物が床面に多く検出されており、火災住居と判断される。**カマド**：SI17 カマド B が本遺構のカマドの可能性がある。**その他付帯施設**：SI17 カマド A 左側の棚状施設は本住居跡に伴うものと記録される。**重複関係**：SI17 により東側を大きく切られている。

掲載遺物：土師器有台埦 2 点。

その他未掲載遺物：土師器 467.4g、須恵器 155.4g。

遺構の帰属時期：内面黒色で外面は黒色処理が施されないものの、内外面が磨かれる黒色土器 B 類に近い器種が出土している。その他で図示できるものは明瞭ではないが、概ね 11 世紀の範疇でとらえたい。



第 40 図　SI18 出土遺物

第 23 表　SI18 出土遺物観察表

掲載番号	注記	種類	器種	口径	器高	底径	重量	残存	整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
01	1	土師器	有台埦	(14.8)	〈6.3〉	(6.4)	286.5	1/3	ロクロ整形、底部回転糸切り。内面ミガキ。	白色粒子・スコリア・白色針状物質少量	良好	内面　黒 外面　にぶい褐	内面黒色処理
02	2	土師器	有台埦	16.8	6.5	6.7	127.8	ほぼ完形	ロクロ整形、底部回転糸切り。内面ミガキ。	雲母・白色粒子・黒色粒子少量、白色針状物質微量	良好	内面　黒 外面　にぶい黄橙	内面黒色処理

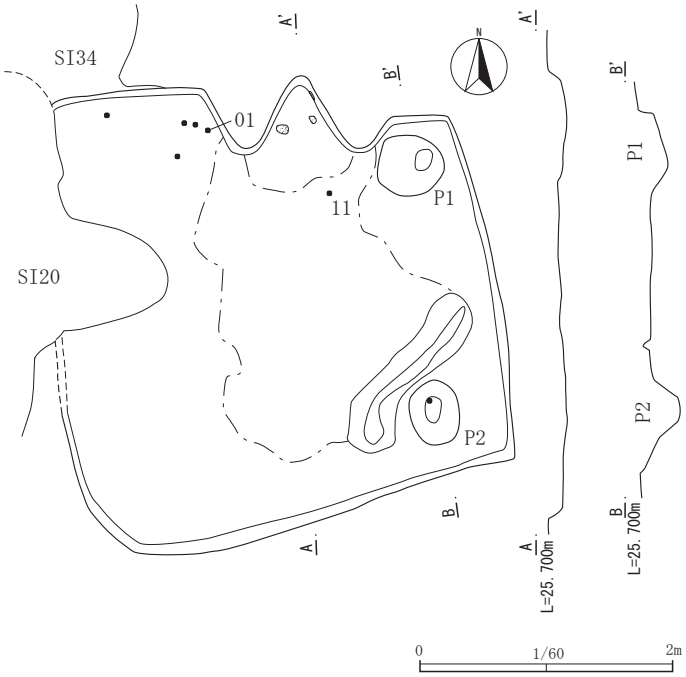
SI19（第 41 ～ 43 図、第 24 表、遺構図版 5、遺物図版 7・8）

検出位置：調査区中央 C3 グリッド。**平面形状**：長方形。**主軸方向**：N - 5°-W。**規模**：3.6 × 3.67m。**確認面下の深さ**：10 ㎝。**柱穴**：カマド東側コーナー部分に P1 が検出されている。規模は 54 × 54 ㎝、深さ 14 ㎝。貯蔵穴の可能性がある。**壁溝**：なし。**床面**：平坦。**カマド**：北壁中央東寄りに設置され、壁際主軸部分の全長は 120 ㎝で、西壁から 36 ㎝ほど掘り出される。山砂及び粘土により構築された袖が大きく開いて設置される。**その他付帯施設**：南東コーナー部分を仕切るように高さ 6 ㎝ほどの周堤が配され、貯蔵穴 P2 は楕円形に掘り込まれる。規模は 52 × 40 ㎝、深さは 24 ㎝。**重複関係**：SI20・34 と重複関係にある。SI34 のカマドは SI19 の貼床下より検出されており、本遺構の方が新しくなるものと判断される。また、SI20 のカマド覆土には本住居の床が確認できないので、SI20 が新しいと判断される。

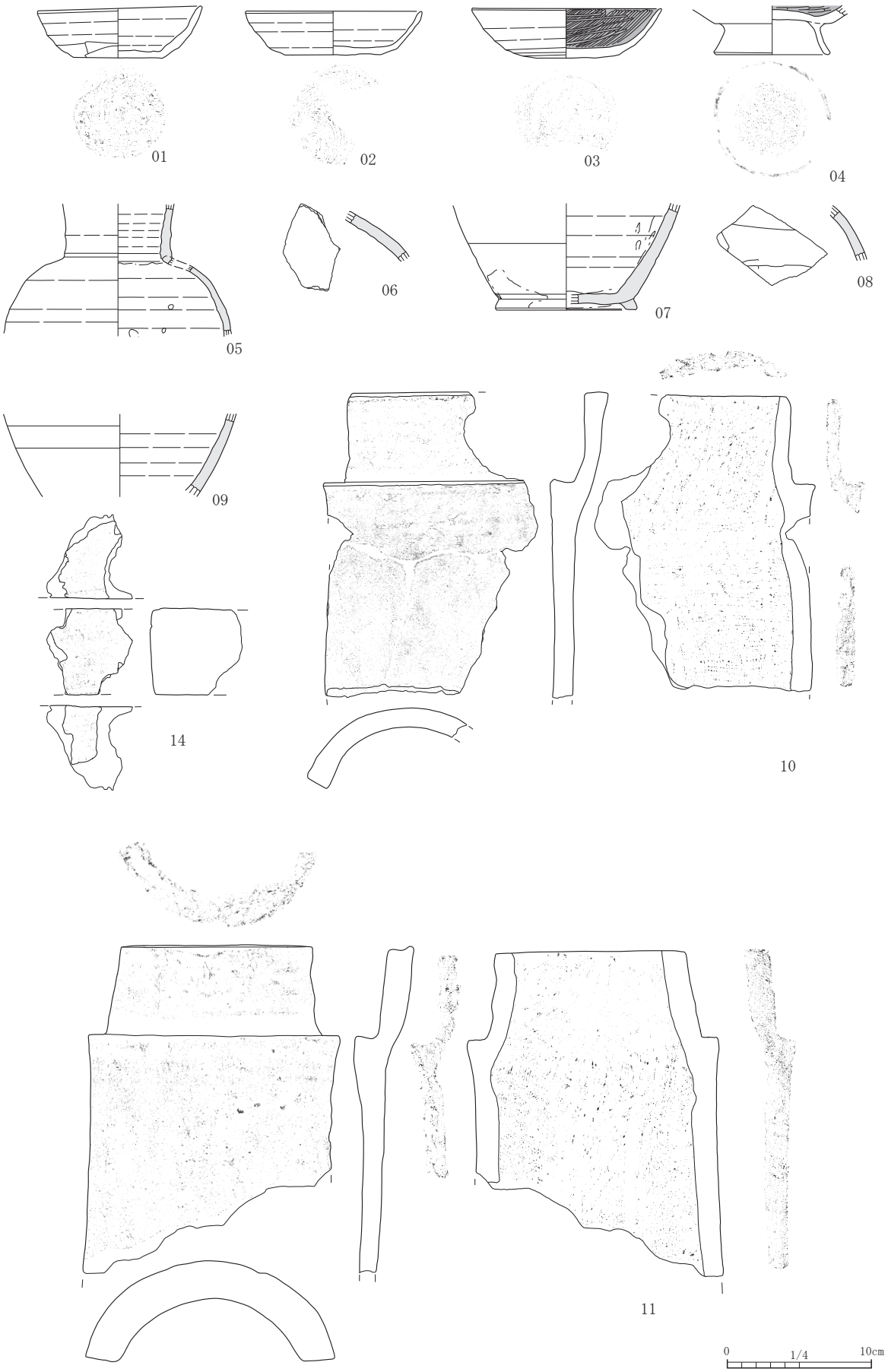
掲載遺物：土師器無台坏 3 点、有台埦 1 点、灰釉陶器長頸瓶 3 点（猿投 K90・K14 ～ 90）、壺瓶類 2 点（猿投 K90・K14）、丸瓦 2 点、平瓦 2 点、塼 1 点、鉄製品平金具 1 点。

その他未掲載遺物：土師器 3390g、須恵器 4395g、瓦 978.2g、礫 314.1。

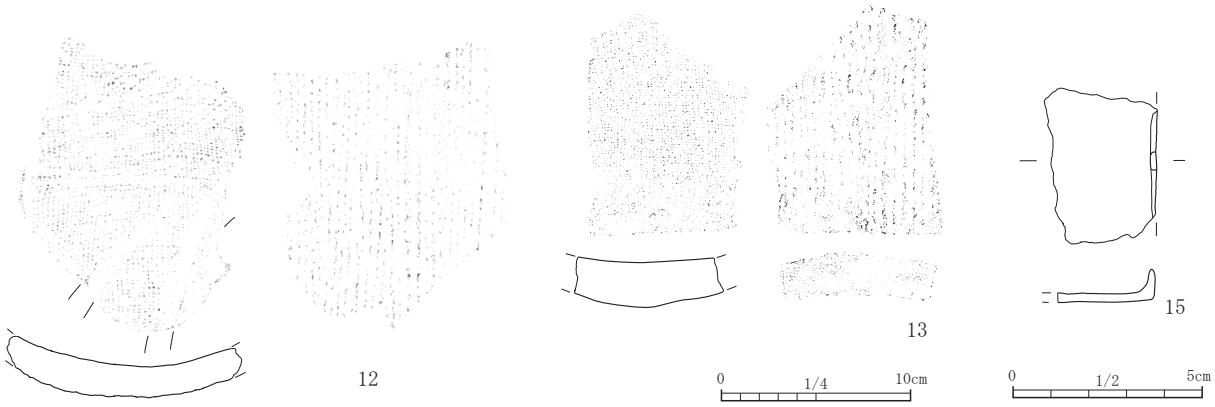
遺構の帰属時期：小振りな土師器坏 3 点が出土している事より、9 世紀後半と判断した。共伴する灰釉陶器は、黒笹 14 号窯式～ 90 号窯式、やはり 9 世紀前半から後半の遺物が主体になる。



第 41 図　SI19



第 42 図　SI19 出土遺物（1）



第 43 図　SI19 出土遺物（2）

第 24 表　SI19 出土遺物観察表

掲載番号	注記	種類	器種	口径	器高	底径	重量	残存	整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
01	3	土師器	無台坏	11.4	3.3	6.2	138.1	ほぼ完形	ロクロ整形、体部下端手持ちヘラケズリ、底部不圧痕あり。	雲母・白色粒子・黒色粒子・白色針状物質少量、小礫やや多い	良好	内外面　明赤褐	
02	カマド	土師器	無台坏	(12.2)	3.0	6.6	54.1	1/3	ロクロ整形、底部回転糸切り（左）。	白色（とくに石英）粒やや多い	良好	内外面　にぶい黄橙	
03	カマド	土師器	無台坏	13.1	3.4	4.0	114.6	2/3	ロクロ整形、体部下端～底部回転ヘラケズリ。内面ミガキ。	雲母やや多い、白色粒子・小礫少量	良好	内面　黒 外面　にぶい黄橙	内面黒色処理
04	覆土	土師器	有台埦	—	〈3.3〉	7.8	85.6	体部下端～高台	ロクロ整形、体部下端回転ヘラケズリヵ、底部回転ヘラケズリ。内面ミガキ。	雲母・石英・長石やや多い、白色針状物質微量	良好	内面　黒 外面　にぶい褐	内面黒色処理
05	覆土	灰釉陶器	長頸瓶	—	〈9.0〉	—	54.5	頸部～肩部片	肩部はやや張る、頸部は僅かに外反気味に立ち上がる。	鉄分の噴出し微量	良好	胎土　淡灰 釉　暗淡緑暗	猿投 K14 ～ 90 【359】実 98-2-069
06	覆土	灰釉陶器	壺・瓶類	—	〈3.4〉	—	19.3	胴部片	器壁は比較的厚くやや丸みを持って立ち上がる。	鉄分の噴出し少量	良好	胎土　淡灰 釉　暗淡緑	猿投 K14 ～ 90 【360】実 98-2-070
07	覆土	灰釉陶器	長頸瓶	—	〈7.2〉	(9.6)	146.9	体～底部 35%	外面回転ヘラケズリ後回転ナデ、器壁は比較的厚くやや内湾し立ち上がる。高台は比較的低く断面矩形を呈す。	鉄分の噴出し少量	良好	胎土　灰白 釉　暗淡緑	猿投 K14 ～ 90 【361】実 98-2-071
08	覆土	灰釉陶器	壺・瓶類	—	〈3.8〉	—	25.1	胴部片	外面回転ヘラケズリ、器壁は比較的薄くやや丸みをもって立ち上がる。	鉄分の噴出し少量	良好	胎土　灰白 釉　暗淡緑	猿投（K14 ～）K90 【362】実 98-2-072
09	覆土	灰釉陶器	長頸瓶	—	〈5.6〉	—	23.8	胴部片	外面回転ヘラケズリ、器壁は比較的厚くやや内湾して立ち上がる。	鉄分の噴出し微量	良好	胎土　灰白 釉　暗淡緑	猿投 K90 【363】実 98-2-073
10	覆土	瓦	丸瓦	タテ (19.8)	ヨコ (15.0)	厚 2.9	666.6	玉縁部・左側縁残存	凸面丸瓦部タテケズリのち同後端ヨコナデ。玉縁部ヨコナデ。凹面糸切り痕、布目圧痕（布縁あり）。側面ケズリ。	雲母・白色粒子やや多い	良好	内外面　灰白	
11	2	瓦	丸瓦	タテ (22.0)	ヨコ (17.5)	厚 2.7	1,111.1	玉縁部・両側縁残存	凸面丸瓦部タテケズリのち同後端ヨコナデ。玉縁部ヨコナデ。凹面糸切り痕、布目圧痕（布縁あり）。側面ケズリ。	白色粒子やや多い	良好、自然釉付着	内外面　灰	
12	覆土	瓦	平瓦	タテ (16.0)	ヨコ (12.4)	厚 1.8	382.9	端・側縁残らず	凹面糸切り痕、布目圧痕。凸面縄目回転圧痕。	白色粒子やや多い	良好	内外面　灰白	凹面に陰刻・指文字ヵ（成形台離脱後）。
13	覆土	瓦	平瓦	タテ (12.1)	ヨコ (8.5)	厚 2.8	203.5	下縁残存	凹面布目圧痕（布縁あり）。凸面縄目回転圧痕。端面ケズリ。	白色粒子やや多い	良好	内面　にぶい黄褐 外面　浅黄	被熱黒化。
14	覆土	塼	—	長手長 〈6.5〉	小口幅 〈6.3〉	厚 5.8	203.5	平・長手面残存	表面（平面）磨滅、裏面（平面）ケズリ。面取りケズリ。	石英・白色粒子少量	良好	灰	被熱、煤付着（破断面も）
15	覆土	鉄製品	平金具	長さ 〈4.0〉	幅 〈3.0〉	厚 〈0.1〉	8.3	一辺残存	鉄板を折り曲げた状態。全形不明。				

SI20（第 44・45 図、第 25・26 表、遺構図版 5、遺物図版 8）

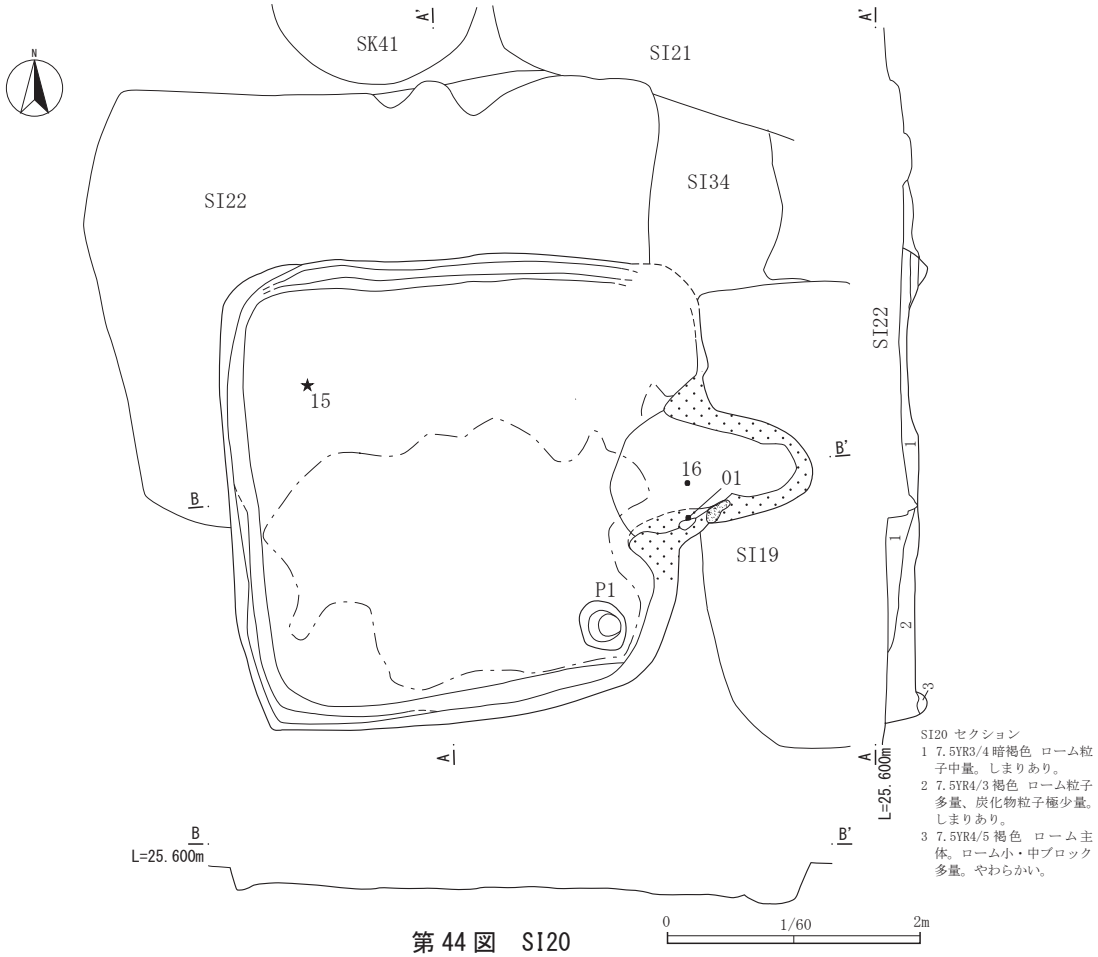
検出位置：調査区中央やや西寄り C2・3 グリッド。**平面形状**：方形。**主軸方向**：N - 86°-W。**規模**：3.8m × 3.73m。**確認面下の深さ**：20 cm。**覆土**：褐色土を基調に 3 層に分層される。自然堆積。**柱穴**：カマドの南側のコーナー寄りに P1 が検出されている。規模は幅 40 × 36 cm、深さ 8 cm前後。**壁溝**：カマド部分を除きほぼ全周する。幅 40 × 36 cm、深さ 8 cm前後。**床面**：断面図から北側は 9 cm程高くなる。**カマド**：東壁中央付近に設置され、壁際主軸部分の全長は 152 cmで、西壁から 95 cmと大きく掘りだされる。また、山砂及び粘土により構築された袖が大きく開いて設置される。**重複関係**：SI19・22・34 と重複する。新旧関係は SI22 よりも古く、SI19・34 よりも新しい。

掲載遺物：土師器無台坏 2 点、有台埦 7 点（墨書土器 6 点「上」「物」ほか）、灰釉陶器椀 1 点（猿投 K90-2）、皿 1 点（美濃光ヶ丘 1）、長頸瓶 1 点（宮口ヵ不明）、丸瓦 1 点、平鍋脚 1 点、鉄製品刀子 1 点、カマド袖

石 1 点。

その他未掲載遺物：土師器 2595g、須恵器 1315g。

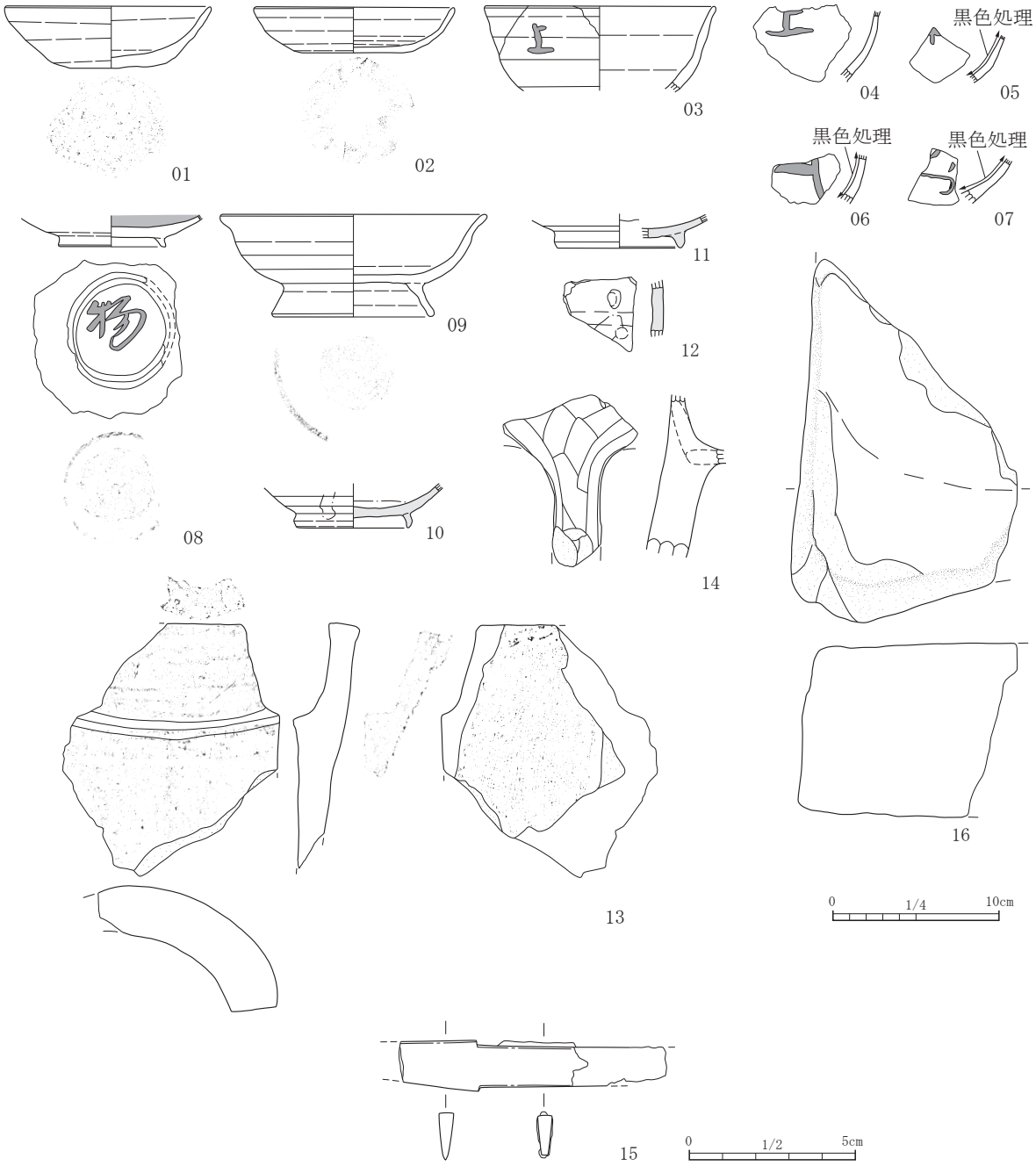
遺構の帰属時期：出土遺物から 10 世紀前半が想定される。灰釉陶器では 9 世紀後半の黒笹 90 号窯式 2 型式の遺物が出土しており、半世紀ほどのずれがある。



第 44 図　SI20

第 25 表　SI20 出土遺物観察表（1）

掲載番号	注記	種類	器種	口径	器高	底径	重量	残存	整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
01	カマド1	土師器	無台坏	12.3	3.7	7.0	120.1	口縁」1/3 欠損	ロクロ整形、底部回転ヘラ切り。	雲母微量、白色粒子・スコリア少量	良好 二次焼成アリ	内外面　橙	
02	覆土	土師器	無台坏	(11.9)	2.7	7.0	60.0	口縁 1/3 ～底部 2/3	ロクロ整形、底部手持ちヘラケズリ。	雲母やや多い、白色粒子・スコリア少量、白色針状物質微量	良好	内外面　にぶい橙	
03	覆土	土師器	有台埦ヵ	(13.8)	〈5.1〉	—	33.4	1/8	ロクロ整形、体部下半より回転ヘラケズリ。	雲母やや多い、白色粒子多い	良好	内外面　にぶい橙	墨書「上」
04	覆土	土師器	有台埦ヵ	—	—	—	17.7	体部破片	ロクロ整形、残存する体部下半より回転ヘラケズリ。	雲母・黒色粒子少量、白色粒子やや多い	良好	内外面　橙	墨書「上」
05	覆土	土師器	有台埦ヵ	—	—	—	6.9	体部破片	ロクロ整形、残存する体部下端より手持ちヘラケズリ。	雲母やや多い、白色粒子少量、白色針状物質微量	良好	内面　黒 外面　にぶい黄橙	内面黒色処理 墨書「□」
06	覆土	土師器	有台埦ヵ	—	—	—	10.7	体部破片	ロクロ整形、残存する体部下半より回転ヘラケズリ。	雲母少量、白色粒子やや多い	良好	内面　黒 外面　にぶい赤褐	内面黒色処理 墨書「□」
07	覆土	土師器	有台埦ヵ	—	—	—	8.2	体部破片	ロクロ整形。	雲母少量	良好	内面　黒 外面　にぶい黄橙	内面黒色処理 墨書「□」
08	覆土	土師器	有台埦	—	〈1.9〉	6.4	86.5	体部下端～底部	ロクロ整形、底部回転ヘラ切り。	雲母・白色粒子やや多い、白色針状物質多い、スコリア微量	良好	内面　黒褐 外面　にぶい黄橙	内面黒色処理 墨書「物」
09	覆土	土師器	有台埦	(15.8)	〈6.1〉	(9.3)	128.1	1/4	ロクロ整形、体部下半～底部回転ヘラケズリ。	雲母やや多い、黒色粒子少量、白色粒子多い	良好	内外面　橙	
10	覆土	灰釉陶器	椀	—	〈2.6〉	(6.6)	52.0	体～底部 45%	体部中～下位回転ヘラケズリ後未調整、器壁は比較的薄くやや内湾して立ち上がる、高台は比較的高く断面が定型した三日月形を呈する、又、接地面の一部が釉着により破損する。	鉄分の噴出し細かく微量	良好	体部　灰白 釉　内面暗淡緑 外面暗淡緑（釉垂）	猿投 K90-2 身込に重ね焼き痕 【364】実 98-2-074
11	覆土	灰釉陶器	皿	—	〈2.0〉	(7.5)	11.9	体～底部 10%	器壁は比較的薄く緩やかに内湾して立ち上がる、高台は比較的高く段面が三日月形を呈するが、外面下方の稜がやや弱い。	鉄分の噴出し微量	良好	体部　灰白 釉　暗淡緑	美濃光ヶ丘 1 【365】実 98-2-075



第 45 図　SI20 出土遺物

第 26 表　SI20 出土遺物観察表（2）

掲載番号	注記	種類	器種	口径	器高	底径	重量	残存	整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
12	SI20・SI35	灰釉陶器	長頭瓶	—	〈3.4〉	—	16.9	胴部片	器壁は比較的薄くやや丸みをもって立ち上がる。※内面のロクロ目の角度が一致しない為器壁の角度が不明瞭。外面２ヵ所に指頭痕。	鉄分の噴出し極めて多い	普通	胎土　淡灰褐 釉　暗淡緑自然釉	宮ロヵ不明 【366】実 98-2-076
13	覆土	瓦	丸瓦	タテ 〈14.2〉	ヨコ 〈12.6〉	厚 3.2	432.7	玉縁部・右側縁残存	凸面丸瓦部タテケズリのち同後端ヨコナデ。玉縁部ヨコナデ。凹面糸切り痕、布目圧痕。側面ケズリ。	白色粒子微量	良好	内外面　にぶい黄橙	被熱、煤付着（破断面も）
14	覆土	土師器	平鍋？	タテ 9.4	ヨコ 8.1	厚 3.7	142.1	底部～脚部	端部欠損、ヘラによる整形が施されている。	雲母やや多い、白色粒子多い	良好	内外面　橙	獣脚
15	1	鉄製品	刀子	長 〈8.0〉	幅 1.2	厚 0.4	20.6	刀・茎部欠損	両関。身部・茎部とも厚手のつくり。SI34-6 と同型品。				
16	カマド２	礫	カマド構築材ヵ	タテ 21.4	ヨコ 13.6	厚 10.1	3,840.0	完形	直方体状の石材。全面に被熱痕跡あり、赤化・黒化。				

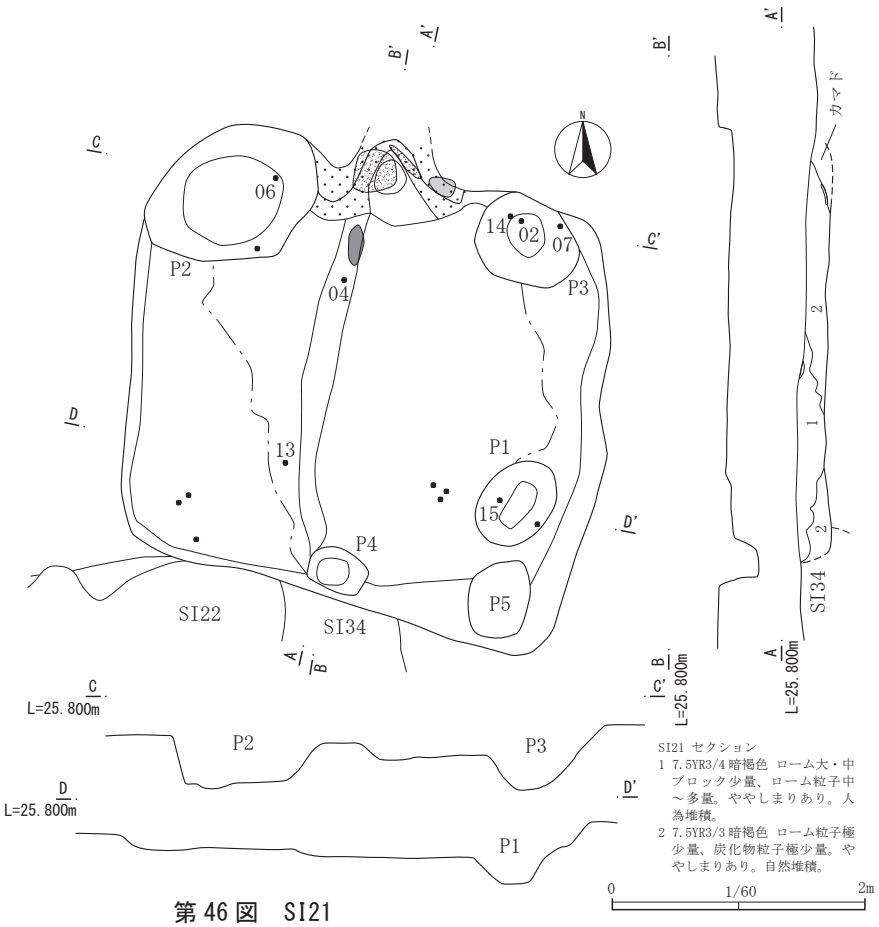
SI21（第 46 ～ 48 図、第 27・28 表、遺構図版 5、遺物図版 9）

検出位置：調査区中央やや北寄り C3 グリッド。**平面形状**：方形。**主軸方向**：N - 9°-E。**規模**：3.44m × 3.82m。**確認面下の深さ**：20 ㎝。**覆土**：暗褐色土を基調とする 2 層に分層され、自然堆積。**柱穴**：南西隅を除く 3 隅に P1 ～ 3 が配される。P4 は入口ピットと判断されカマドの対面南壁寄りに設置される。また、南東コーナー部分にも P5 が検出されているが貯蔵穴の可能性がある。**壁溝**：なし。**床面**：カマドの西側袖の延長部分 3 分の 1 程度が最大で 10 ㎝ほど高くなる段を有す。**カマド**：北壁中央付近に設置され、壁際主軸部分の全長は 68 ㎝で、西壁から 40 ㎝ほど掘り出される。山砂及び粘土により構築される。中央部分には火床面が東西方向の不整形に広がる。**その他付帯施設**:なし。**重複関係**:SI22 および SI34 と重複し、本住居跡が新しい。**掲載遺物**:土師器無台坏 4 点､有台埦 4 点、灰釉陶器長頸瓶 2 点（猿投 K14 ～ 90・二川ヵ K90 ～ 053 併行)、短頸壺 1 点（猿投 K14 ～ 90)、平瓦 1 点、丸瓦 1 点、塼 1 点、砥石 1 点。

その他未掲載遺物：土師器 6649g、須恵器 2850g、瓦 2220g、礫 189.7g。

中世以降の遺物：陶器（古瀬戸）2.5g。

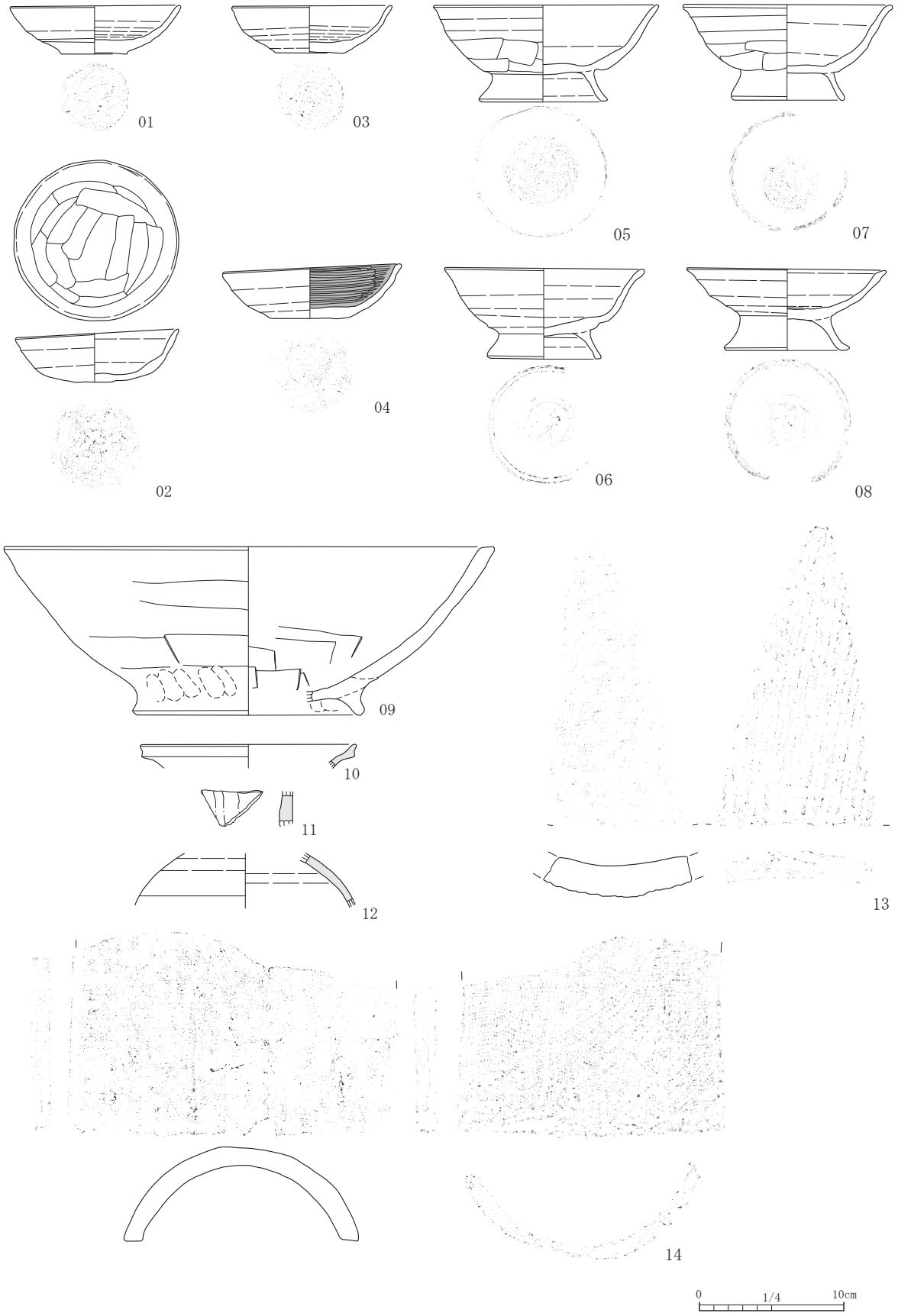
遺構の帰属時期：出土遺物から 10 世紀前半が想定される。灰釉陶器では黒笹 90 号窯式～折戸 53 号窯式と判断される遺物が出土しており、概ね一致する。



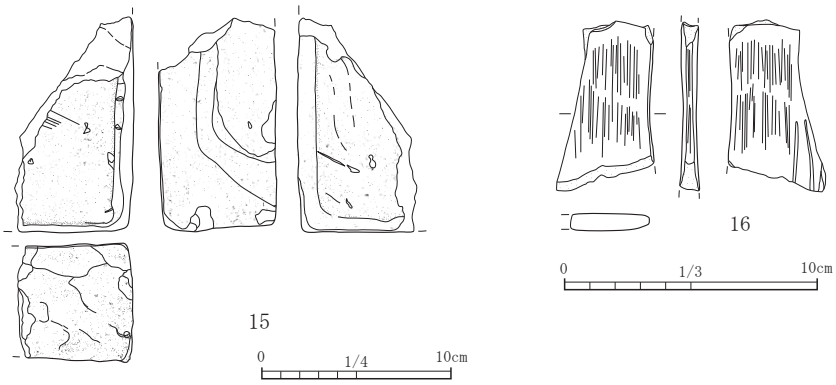
第 46 図　SI21

第 27 表　SI21 出土遺物観察表（1）

掲載番号	注記	種類	器種	口径	器高	底径	重量	残存	整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
01	覆土	土師器	無台坏	11.8	3.3	4.6	111.8	完形	ロクロ整形、底部回転糸切り(左)。	雲母やや多い、白色粒子多い	良好	内外面　にぶい黄橙	
02	P3-2	土師器	無台坏	11.3	3.4	丸底	105.7	完形	ロクロ整形、底部手持ちヘラケズリ。	雲母少量、白色粒子多い	良好	内外面　橙	
03	覆土	土師器	無台坏	11.2	3.3	4.8	79.0	2/3	ロクロ整形、底部回転糸切り(右)。	雲母・黒色粒子やや多い、白色粒子多い	良好	内面　橙 外面　にぶい黄橙	
04	4	土師器	無台坏	12.4	3.6	5.6	118.9	完形	ロクロ整形、底部回転糸切り後周縁手持ちヘラケズリ。	雲母やや多い、白色粒子多い	良好	内面　黒 外面　にぶい黄橙	内面黒色処理
05	P3	土師器	有台埦	15.6	6.6	8.5	253.8	口縁 1/4 欠損	ロクロ整形、体部下半を広く手持ちヘラケズリ、底部回転ヘラケズリ。	雲母少量、白色粒子多い、黒色粒子やや多い	良好	内外面　橙	
06	P2-2	土師器	有台坏	13.8	6.2	7.4	197.5	口縁 1/3 欠損	ロクロ整形、底部回転糸切り。	雲母多い、白色粒子やや多い、黒色粒子少量	良好	内外面　橙	
07	P3-3	土師器	有台坏	(14.3)	6.4	7.5	175.4	口縁 1/2 ～体部 1/3 欠損	ロクロ整形、体部下半を広く手持ちヘラケズリ、底部回転ヘラ切り。	雲母やや多い、白色粒子・黒色粒子多い	良好	内外面　橙	
08	覆土	土師器	有台坏	(13.7)	5.7	8.0	163.5	口縁 3/4 欠損	ロクロ整形、底部回転ヘラケズリ。高台は高さがある。	雲母微量、黒色粒子少量、白色粒子多い	良好	内外面　にぶい黄橙	
09	P-3	土師器	鉢	(34.0)	〈11.5〉	(15.4)	225.5	口縁～底部 1/8	回転台使用ヵ。外面ヘラケズリ、下端～高台（内外面）にかけて指頭圧痕あり。内面ヘラナデ。	雲母やや多い、白色粒子・スコリア・黒色粒子少量、白色針状物質微量	良好 二次焼成ｱﾘ	内外面　橙	
10	覆土	灰釉陶器	長頸瓶	(14.8)	〈1.6〉	—	4.8	口縁部片	器壁は比較的薄く強く外反して立ち上がり端部に至る。口縁部分のメリハリは比較的小さい。	鉄分の噴出し少量	良好	胎土　灰白 釉　暗淡緑	猿投 K14 ～ 90 【367】実 98-2-077



第 47 図　SI21 出土遺物（1）



第 48 図　SI21 出土遺物（2）

第 28 表　SI21 出土遺物観察表（2）

掲載番号	注記	種類	器種	口径	器高	底径	重量	残存	整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
11	覆土	灰釉陶器	短頸壺	—	〈2.4〉	—	9.4	胴部片	器壁は比較的厚くほぼ直線的に立ち上げる傾向、内面の破損が著しく器壁の角度等は不明。	鉄分の噴出し極多い	良好	胎土　淡灰褐 釉　暗淡緑	猿投 K14 ～ 90 【368】実 98-2-078
12	覆土	灰釉陶器	長頸瓶	—	〈3.7〉	—	19.8	胴部片	回転ヘラケズリ後回転ナデ、器壁は比較的薄くやや丸みをもって立ち上がる。	鉄分の噴出し微量	良好	胎土　淡灰 釉　暗淡緑	二川ヵ K90 ～ 053 併行 【369】実 98-2-079
13	N05	瓦	平瓦	タテ (21.0)	ヨコ (10.5)	厚 2.2	525.4	下縁残存	凹面布目圧痕、下端ケズリ。凸面縄目回転圧痕。端面ケズリ。	雲母少量、白色粒子やや多い	良好	内外面　浅黄	
14	P3-1	瓦	丸瓦	タテ (14.5)	ヨコ (15.5)	厚 1.5	654.4	下縁・両側縁残存	薄手。凸面タテケズリのちヨコナデ。凹面布目圧痕(布縁あり)。端・側面ケズリ。	雲母少量、白色粒子やや多い	良好	内面　にぶい橙 外面　灰白	
15	P-1N01	塼	—	長手長 〈11.1〉	小口幅 〈6.3〉	厚 6.0	580.8	平・長手・小口面残存	表面(平面)ケズリ、裏面(平面)・長手面・小口面ナデ。裏面縁辺ケズリ。	白色粒子中量	良好 自然釉付着	灰	
16	覆土	石製品	砥石	タテ 6.7	ヨコ 4.0	厚 0.7	29.2	上下左欠損	携帯型・提げ砥。板状。表裏右 3 面が使用面。表・裏面は凸面、右側面は凹面を呈する。石材:凝灰岩。				

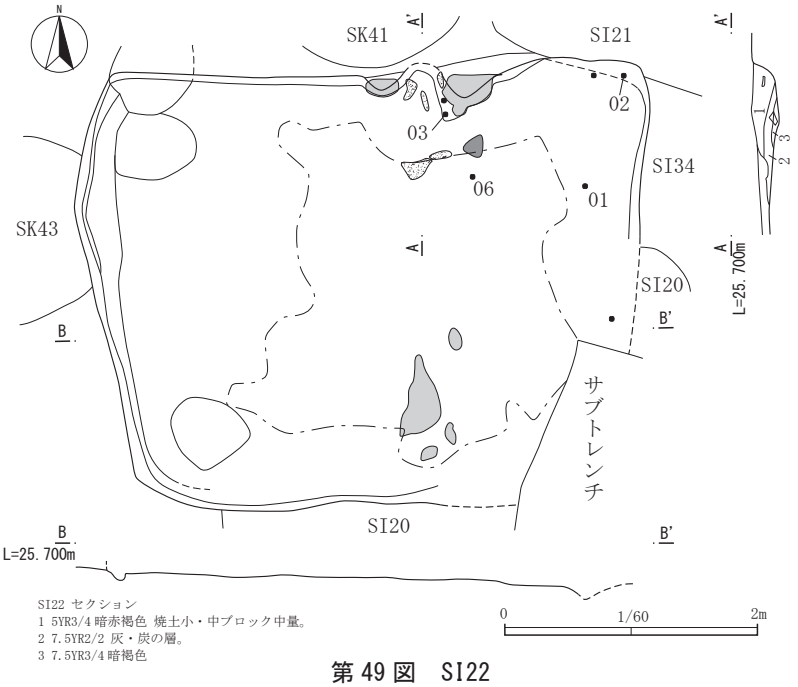
SI22（第 49・50 図、第 29 表、遺構図版 6、遺物図版 9）

検出位置:調査区中央 C2・3 グリッド。**平面形状**:長方形。**主軸方向**:N。**規模**:3.44 × 4.5m。**確認面下の深さ**:3 cm。**覆土**:住居跡の覆土は確認面が浅く暗褐色土の単層。**柱穴**:検出されていない。**壁溝**:西壁に確認。**床面**:平坦。東に向かい緩やかに下降する。また、粘土および焼土が散乱している。**カマド**:北壁東寄りに設置され、煙道部分は SK41 に切られて不明。袖は山砂及び粘土により構築される。**その他付帯施設**：なし。**重複関係**：SI20・21・34、SK43 と重複関係にあり、SI21・SK43 に切られ、SI20・34 を切る。

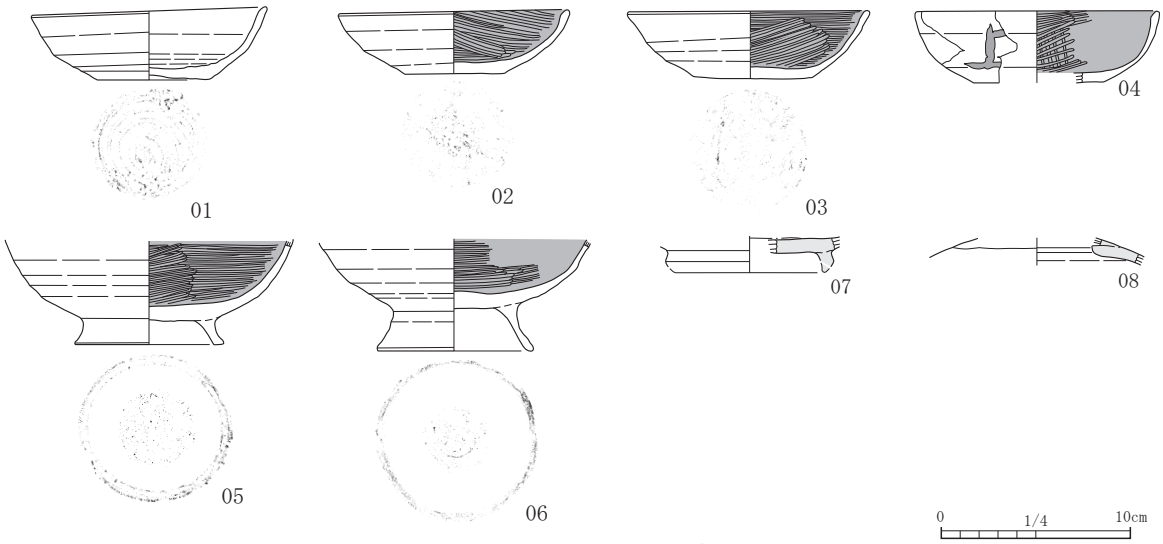
掲載遺物：土師器無台坏 4 点（墨書土器 1 点「上」）、有台埦 2 点、灰釉陶器皿 1 点（猿投 K90）、長頸瓶 1 点（猿投 K14）。

その他未掲載遺物：土師器 2800g、須恵器 525.3g、瓦 273.2g、鉄製品 15g、礫 48.6g。

遺構の帰属時期：出土遺物から判断して、10 世紀前半の遺構と判断した。灰釉陶器では黒笹 14 号窯式・90 号窯式が出土しているが、土師器・須恵器と時期がずれる。



第 49 図　SI22



第 50 図　SI22 出土遺物

第 29 表　SI22 出土遺物観察表

掲載番号	注記	種類	器種	口径	器高	底径	重量	残存	整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
01	2	土師器	無台坏	12.4	3.6	6.0	130.6	完形	ロクロ整形、底部回転糸切り（右）。	雲母多い、白色粒子・スコリア少量、白色針状物質微量	良好	内外面　橙	
02	3	土師器	無台坏	12.3	3.2	5.6	125.7	完形	ロクロ整形、底部回転糸切り後周縁手持ちヘラケズリ。内面ミガキ。外面に火ダスキあり。	雲母多い、白色粒子少量、スコリア微量	良好	内面　黒褐 外面　にぶい黄橙	内面黒色処理
03	カマド2	土師器	無台坏	12.6	3.45	6.2	91.7	ほぼ完形	ロクロ整形、底部手持ちヘラケズリ。内面ミガキ。	雲母多い、小礫ｱﾘ、白色針状物資微量	良好	内面　黒褐 外面　にぶい黄橙	内面黒色処理
04	A	土師器	無台坏	(12.3)	〈3.7〉	(6.8)	15.5	1/8	ロクロ整形、底部の調整不明。内面ミガキ。	雲母・白色粒子少量、スコリア微量	良好	内面　黒褐 外面　にぶい黄褐	内面黒色処理 墨書「上」
05	カマド	土師器	有台埦	—	〈5.4〉	7.9	156.8	体部下端～底部	ロクロ整形、体部下端剥落、底部ナデ整形。	雲母多い、白色粒子・黒色粒子少量	良好	内面　褐灰 外面　橙	内面黒色処理
06	1	土師器	有台埦	—	〈5.7〉	8.2	134.4	体部下端～底部	ロクロ整形、底部回転糸切り。	雲母やや多い、白色粒子少量、白色針状物質微量	良好	内面　黒褐 外面　にぶい黄橙	内面黒色処理
07	覆土	灰釉陶器	皿	—	〈1.6〉	—	21.1	体～底部20%	器壁は比較的薄く緩やかに内湾し立ち上がる、高台は端部を欠損ているが、残存部分から、比較的高く断面三日月形を呈していたと考えられる。身込部に墨痕、又著しい摩耗がみられることから転用硯と考えられる。	鉄分の噴出し多い	良好	胎土　灰白 釉　暗淡緑	猿投 K90 【370】実 98-2-080
08	覆土	灰釉陶器	長頸瓶	—	〈1.4〉	—	16.2	胴部片	頸部と胴部との接合は三段と考えられる、器壁は比較的薄くやや丸みをもって立ち上がる。	鉄分の噴出し少量	良好	胎土　淡灰褐 釉　暗淡緑	猿投 K14 【371】実 98-2-081

SI24（第 51・52 図、第 30 表、遺構図版 6、遺物図版 9）

検出位置：調査区北東端部 D2 グリッド。**平面形状**：方形ヵ。**主軸方向**：N。**規模**：―× 2.9m。**確認面下の深さ**：38 cm。**覆土**：住居跡の覆土は確認面が浅く暗褐色土の単層。**柱穴**：検出されていない。**壁溝**：カマド西側の北壁と西壁に確認。幅 10 cm、深さ 4 cm前後。**床面**：カマド西側袖の延長部分に段差あり、西側 3 分の 1 程度が 7.5 cm程高くなる。**カマド**：北壁中央付近に設置され、壁際主軸部分の全長は 96 cmで、西壁から 62 cmほど掘り出される。中央部分には火床面が隅丸三角形に広がる。**その他付帯施設**：なし。**重複関係**：SI25 と重複関係にあり、本住居が古い。

掲載遺物：須恵器大甕 1 点、無台坏 1 点、有台坏 2 点（転用硯 1 点）、有台盤 1 点、白玉石銙（丸鞆）1 点。

その他未掲載遺物：土師器 164.9g、須恵器 525.3g、礫 67.3。

遺構の帰属時期：出土遺物は須恵器が主体を占め、掲載できる土師器は出土していない。組成より 8 世紀末から 9 世紀初頭と判断される。白玉石帯の出土時期とも齟齬はない。灰釉陶器の出土は見られない。

SI25（第 51・53 図、第 31 表、遺構図版 6、遺物図版 9）

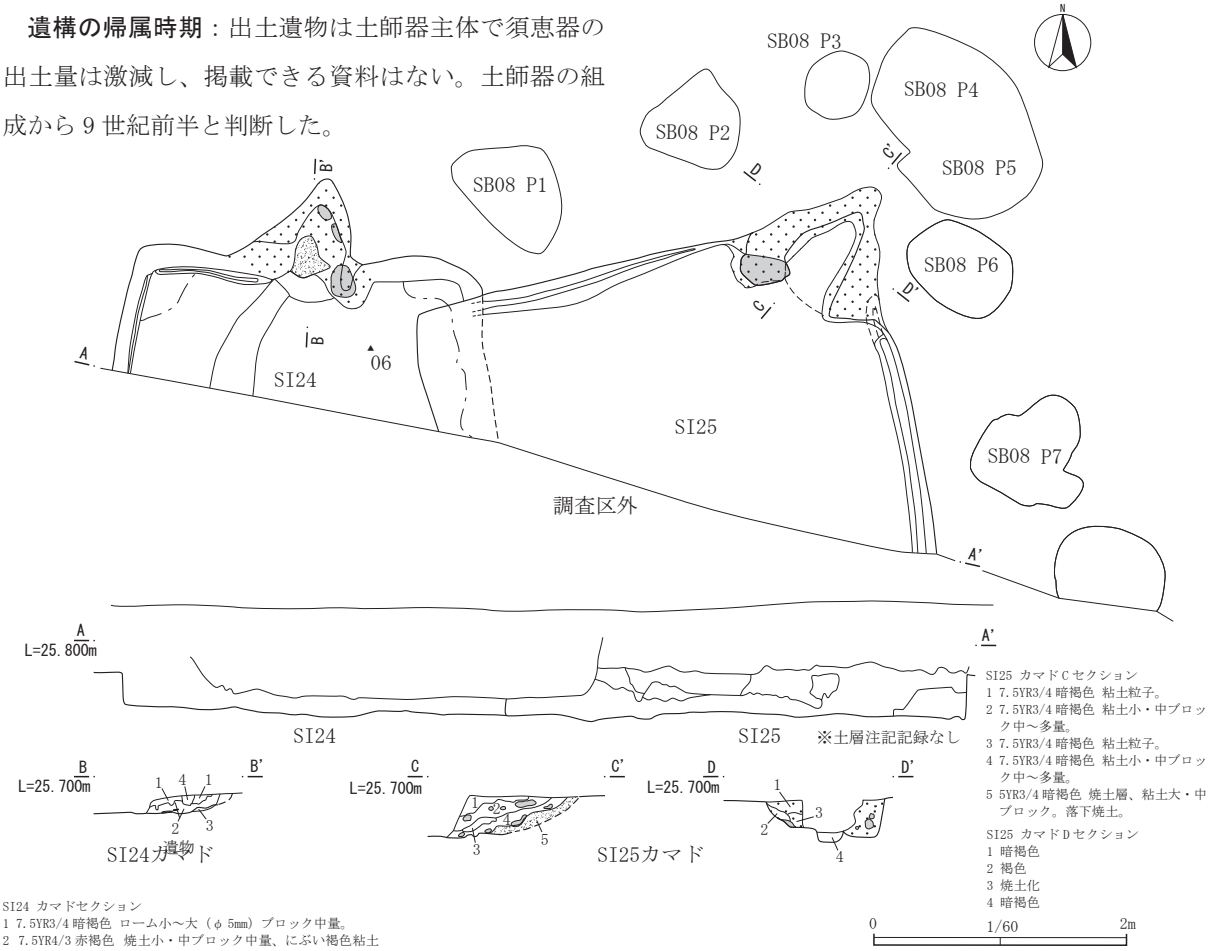
検出位置：調査区南西寄り D2 グリッド。**平面形状**：方形ヵ。**主軸方向**：N - 33°-E。**規模**：―× 3.8m。**確認**

面下の深さ：38 ㎝。**覆土**：暗褐色土を基調として４層程に分類されるが、土層注記記録なし。**柱穴**：検出されていない。**壁溝**：カマド部分を除きほぼ全周する。幅 15 ㎝、深さ７㎝前後。なお、カマドの袖の下にも溝が巡り、本カマドの設置は溝を埋め戻した後に行っている。**床面**：平坦。**カマド**：北東コーナー部分に設置され、壁際主軸部分の全長は 106 ㎝で、煙道は推定コーナー部分より 43 ㎝ほど掘りだされる。山砂及び粘土により構築された袖が大きく開いて設置される。**その他付帯施設**：なし。**重複関係**：SI24 を切る。

掲載遺物：土師器無台坏３点、甕１点。

その他未掲載遺物：土師器 1318.3g、須恵器 109g。

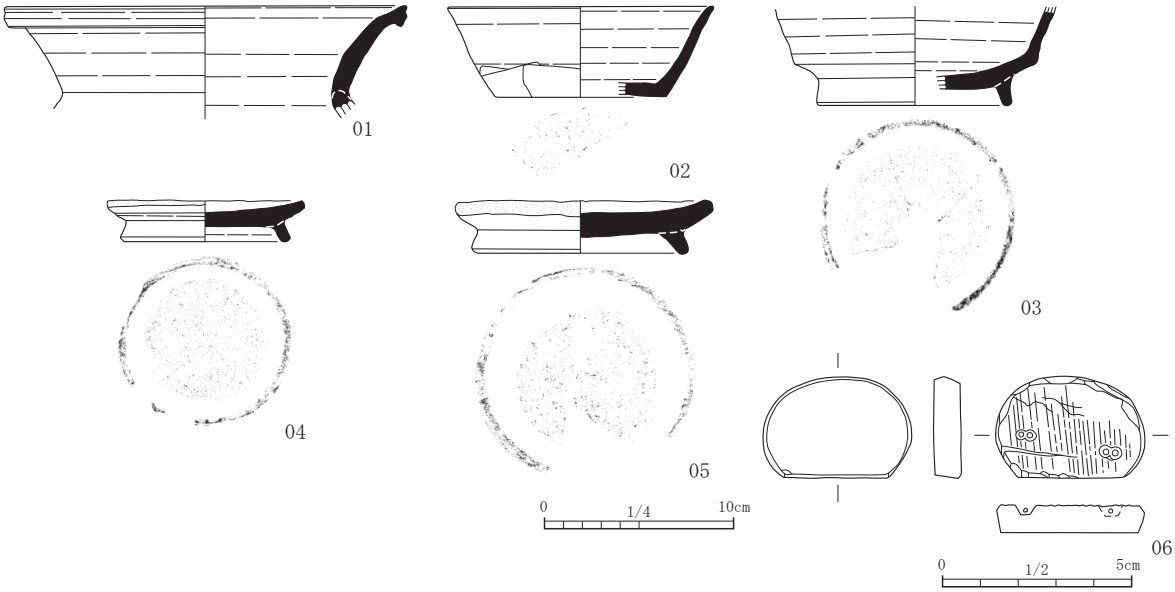
遺構の帰属時期：出土遺物は土師器主体で須恵器の出土量は激減し、掲載できる資料はない。土師器の組成から９世紀前半と判断した。



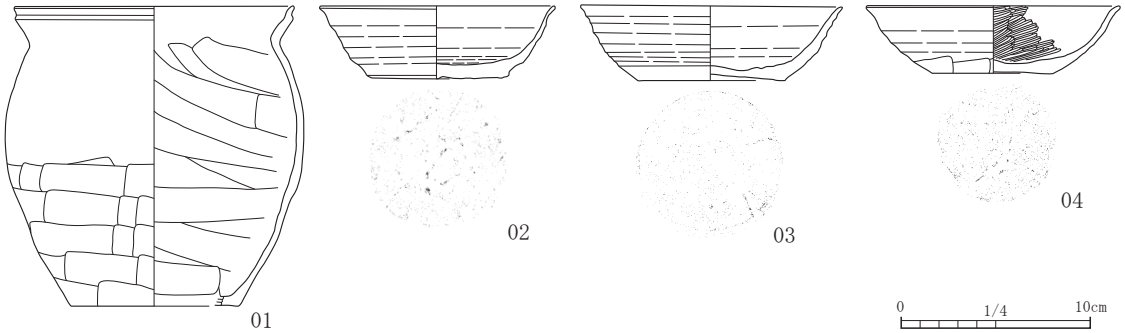
第 51 図　SI24・25

第 30 表　SI24 出土遺物観察表

掲載番号	注記	種類	器種	口径	器高	底径	重量	残存	整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
01	床下１	須恵器	大甕	(21.1)	〈5.9〉	—	109.5	口縁 1/6	内外面回転ナデ。口縁端部折り返し、外面上端に沈線巡る。	雲母やや多い・白色粒子多い	良好	内外面　灰白	新治産
02	覆土	須恵器	無台坏	(13.9)	〈4.65〉	9.0	50.1	1/4	ロクロ整形、体部下端手持ちヘラケズリ、底部一方向の手持ちヘラケズリ。	雲母・白色粒子やや多い	良好	内外面　灰白	新治産
03	カマド	須恵器	有台坏	—	〈5.1〉	9.9	193.8	体部下端～底部 3/4	ロクロ整形、底部回転ヘラケズリ。	雲母微量、白色粒子・黒色粒子やや多い、スコリア少量	良好	内外面　浅黄橙	新治産
04	床下１	須恵器	有台坏	—	〈2.1〉	8.5	136.2	体部下端～底部	ロクロ整形、底部回転ヘラケズリ。体部破断面に磨滅の痕跡が観察される為皿として転用ヵ。	雲母多い、白色粒子・黒色粒子少量	良好	内外面　灰白	新治産 転用硯ヵ
05	カマド	須恵器	有台盤	13.1	2.7	10.8	252.0	3/4	ロクロ整形、底部回転ヘラケズリ。体部破断面に磨滅の痕跡が観察される為皿として転用ヵ。	雲母、白色粒子やや多い、スコリア微量	やや不良	内外面　灰白	新治産
06	N01	石製品	石錘（丸鞆）	タテ 2.6	ヨコ 3.95	厚 0.7	15.3	完形	裏面に２孔一対の潜り穴（１孔径１～1.2mm）が２か所あり。裏面の縁辺には剥離痕が巡り、裏面は波板状の加工痕がある。表面・側面は良く研磨され、特に表面は鏡面状に光沢を持つ。石材：石英。白玉。半透明、白灰色を呈し、白色の縞状模様（斑理）を有する。				



第 52 図　SI24 出土遺物



第 53 図　SI25 出土遺物

第 31 表　SI25 出土遺物観察表

掲載番号	注記	種類	器種	口径	器高	底径	重量	残存	整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
01	覆土	土師器	甕	(14.8)	〈15.6〉	(8.9)	182.5	1/3	最大径を中位に有し、口唇は摘上げられる。口縁は内外面共に横ナデ、胴部外面下半は横方向のヘラケズリ、内面はナデ。	雲母少量、白色粒子多い、スコリアやや多い	良好	内外面　にぶい橙	
02	カマド	土師器	無台坏	(12.4)	3.8	7.4	93.5	2/3	ロクロ整形、底部回転ヘラ切り。口縁の器壁は薄い。	雲母、黒色粒子多い、スコリア少量、小礫ｱﾘ	良好	内外面　にぶい橙	
03	カマド	土師器	無台坏	(13.8)	3.9	7.8	135.5	2/3	ロクロ整形、体部下端～底部回転ヘラケズリ。	雲母、白色粒子多い	良好	内面　にぶい橙 外面　にぶい黄橙	
04	覆土	土師器	無台坏	(13.2)	〈3.4〉	6.4	97.9	1/2	ロクロ整形、体部下端回転ヘラケズリｯ、底部一方向の手持ちヘラケズリ。内面ミガキ。	雲母多い、スコリアやや多い、小礫多い	良好	内面　明赤褐 外面　橙	

SI26（第 54・56 図、第 32 表、遺構図版 6・7、遺物図版 10）

検出位置：調査区南西端部 D1 グリッド。**平面形状**：方形ｯ。**主軸方向**：N - 78°-W。**規模**：3.5m ×―。**確認面下の深さ**：7 ㎝。**覆土**：住居跡の覆土は 3 層に分層される。自然堆積。**柱穴**：検出されていない。**壁溝**：カマド部分を除きほぼ全周するものと想定される。幅 18 ㎝前後。**床面**：平坦。**カマド**：東壁中央南寄り及び南東コーナー付近の 2 基設置される。カマド A は中央部を長楕円形のカクランにより破壊されている。壁際主軸部分の全長は 141 ㎝で、西壁から 71 ㎝ほど掘りだされる。袖は山砂及び粘土により構築される。カマド B はコの字状に配された粘土で作られている。西側に中央部分には火床面が東西方向の楕円形に広がる。**その他付帯施設**：調査区壁際に床面が焼けている部分が確認されている。南北長は 26.5 ㎝。**重複関係**：SI27 と重複するもので、本遺構が新しい。

掲載遺物：土師器有台埦２点、小皿３点。

その他未掲載遺物：土師器 1004.4g、瓦・塼 557.7g。

遺構の帰属時期：出土遺物は土師器が主体となるもので、小皿の出土から 10 世紀後半段階と判断した。

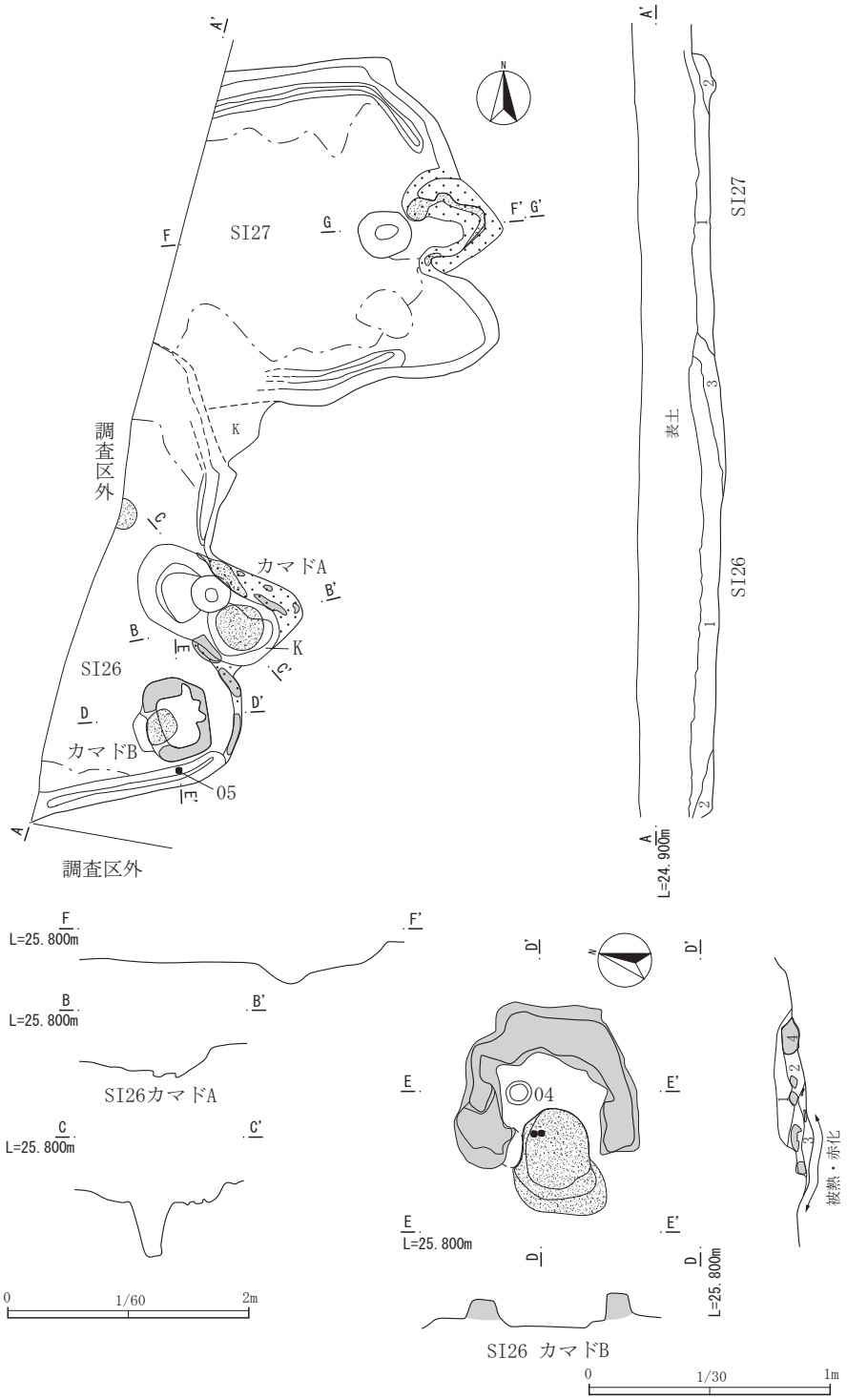
SI27（第 54・55・57 図、第 33 表、遺構図版 7、遺物図版 10）

検出位置：調査区南西端部 D1 グリッド。**平面形状**：長方形ヵ。**主軸方向**：N - 78°-W。**規模**：2.8m ×―。**確認面下の深さ**：17 ㎝。**覆土**：住居跡の覆土は２層に分層され自然堆積。**柱穴**：検出されていない。**壁溝**：カマド部分を除きほぼ全周する。幅 15 ㎝、深さ７㎝前後。**床面**：平坦。**カマド**：東壁中央付近に設置され、壁際主軸部分の全長は 76 ㎝で、西壁から 31 ㎝ほど掘り出される。山砂及び粘土により構築された袖が緩やかに湾曲して設置される。火床部分は攪乱により破壊されている。**その他付帯施設**：なし。**重複関係**：SI26 と重複するもので本遺構が古い。

掲載遺物：土師器無台坏１点、有台埦１点、小皿１点、砥石１点。

その他未掲載遺物：土師器 935.4g、須恵器 87.5g。

遺構の帰属時期：須恵器の消滅と小皿の出土から 10 世紀後半と判断した。

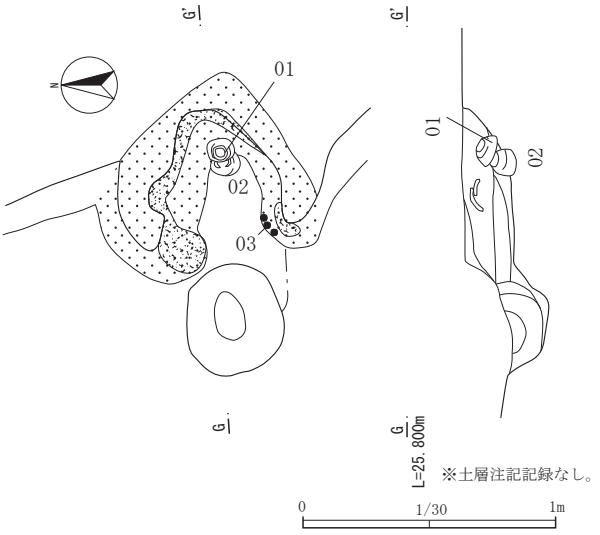


SI26 セクション
表土 7.5YR3/4 暗褐色 ローム粒子極少量。
1 7.5YR3/4 暗褐色 ローム大～小ブロック中量、ローム粒子少量。やわらかい。人為堆積ヵ。
2 7.5YR3/4 暗褐色 ローム粒子極少量。やわらかい。壁際自然堆積。
3 7.5YR2/2 黒褐色 炭化物粒の純層。(カマド灰層) やわらかい。

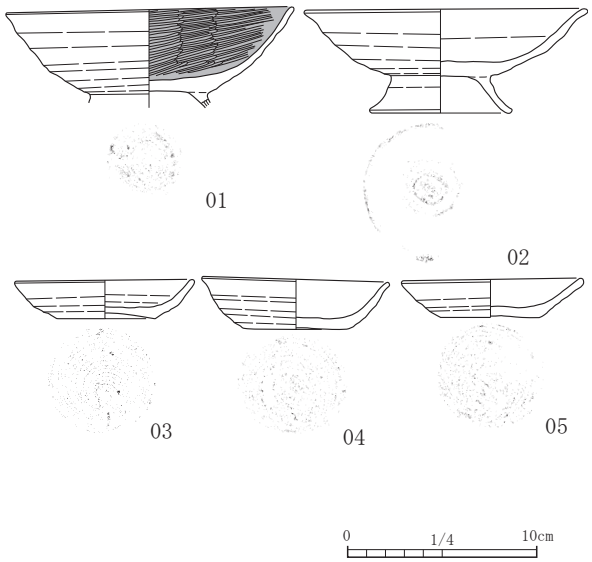
SI27 セクション
1 7.5YR3/4 暗褐色 ローム粒子極少量。やわらかい。自然堆積。
2 7.5YR3/4 暗褐色 ローム粒子少～中量。やわらかい。自然堆積。

SI26 カマドBセクション
1 7.5YR3/4 暗褐色 粘土粒子・粘土少量。ややしまりあり。
2 7.5YR3/4 暗褐色 粘土中・小ブロック多量。やわらかい。
3 7.5YR3/4 暗褐色 灰・炭化物粒子・焼土粒子・小ブロック。やわらかい。
4 にぶい褐色 粘土純層。床著。(地山と接する)

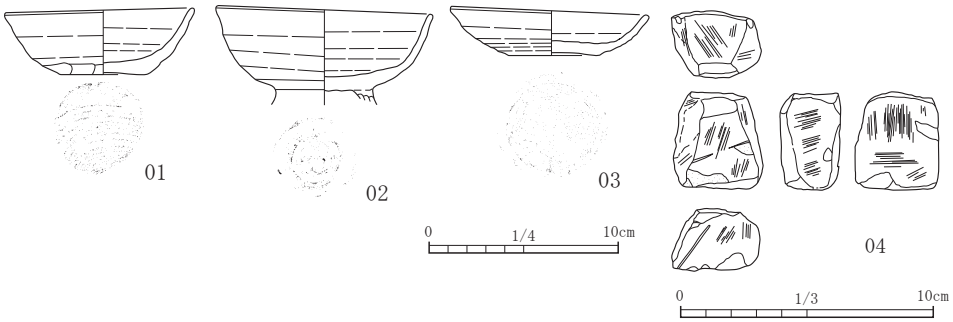
第 54 図　SI26・27



第 55 図　SI27 カマド



第 56 図　SI26 出土遺物



第 57 図　SI27 出土遺物

第 32 表　SI26 出土遺物観察表

掲載番号	注記	種類	器種	口径	器高	底径	重量	残存	整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
01	2 カマド	土師器	有台埦	15.1	〈5.2〉	—	155.3	高台欠損	ロクロ整形、底部回転ヘラケズリ。内面ミガキ。	雲母やや多い、白色粒子多い、スコリア微量	良好 二次焼成アリ	内面　黒 外面　にぶい黄橙	内面黒色処理 歪みアリ カマドB
02	2 カマド	土師器	有台埦	14.8	5.4	7.2	165.3	口縁 1/5 欠損	ロクロ整形、底部回転ヘラケズリ。	雲母少量、白色粒子多い	良好 二次焼成アリ	内外面　にぶい黄褐	カマドB
03	1 カマド	土師器	小皿	9.3	2.0	5.2	60.8	口縁 1/4 欠損	ロクロ整形、底部回転糸切り。	雲母・白色粒子・黒色粒子少量、スコリアやや多い、白色針状物質微量	良好	内外面　にぶい黄橙	カマドA
04	カマド N04	土師器	小皿	9.8	2.6	5.2	71.8	ほぼ完形	ロクロ整形、底部回転糸切り（左）。	雲母やや多い、白色粒子多い、スコリア微量	良好 二次焼成アリ	内面　橙 外面　にぶい黄橙	カマドB
05	カマド N01	土師器	小皿	9.5	2.0	5.2	63.2	完形	ロクロ整形、底部回転糸切り（右）。	雲母微量、白色粒子多い	良好	内外面　にぶい黄橙	カマドA

第 33 表　SI27 出土遺物観察表

掲載番号	注記	種類	器種	口径	器高	底径	重量	残存	整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
01	カマド N01	土師器	無台坏	10.0	3.4	4.6	109.5	完形	ロクロ整形、体部下端手持ちヘラケズリ、底部静止糸切り。	白色粒子・黒色粒子・雲母多い、小～中礫・白色針状物質少量	良好	内外面　橙	
02	カマド N02	土師器	有台埦	11.3	〈4.95〉	—	140.3	高台欠損	ロクロ整形、体部下端回転ヘラケズリ、底部回転ヘラ切り。	雲母・黒色粒子・スコリア多い	良好	内外面　明赤褐	
03	N01	土師器	小皿	10.3	2.3	4.8	79.6	ほぼ完形	ロクロ整形、底部回転糸切り（左）。	雲母やや多い、白色粒子・スコリア多い	良好	内外面　橙	
04	覆土	石製品	砥石	タテ 3.7	ヨコ 2.4	厚 2.4	45.9	完形	携帯型・提げ砥。サイコロ状。表裏左右 4 面が使用面。4 面とも使用により凸面を呈する。石材：凝灰岩。				提砥ヵ

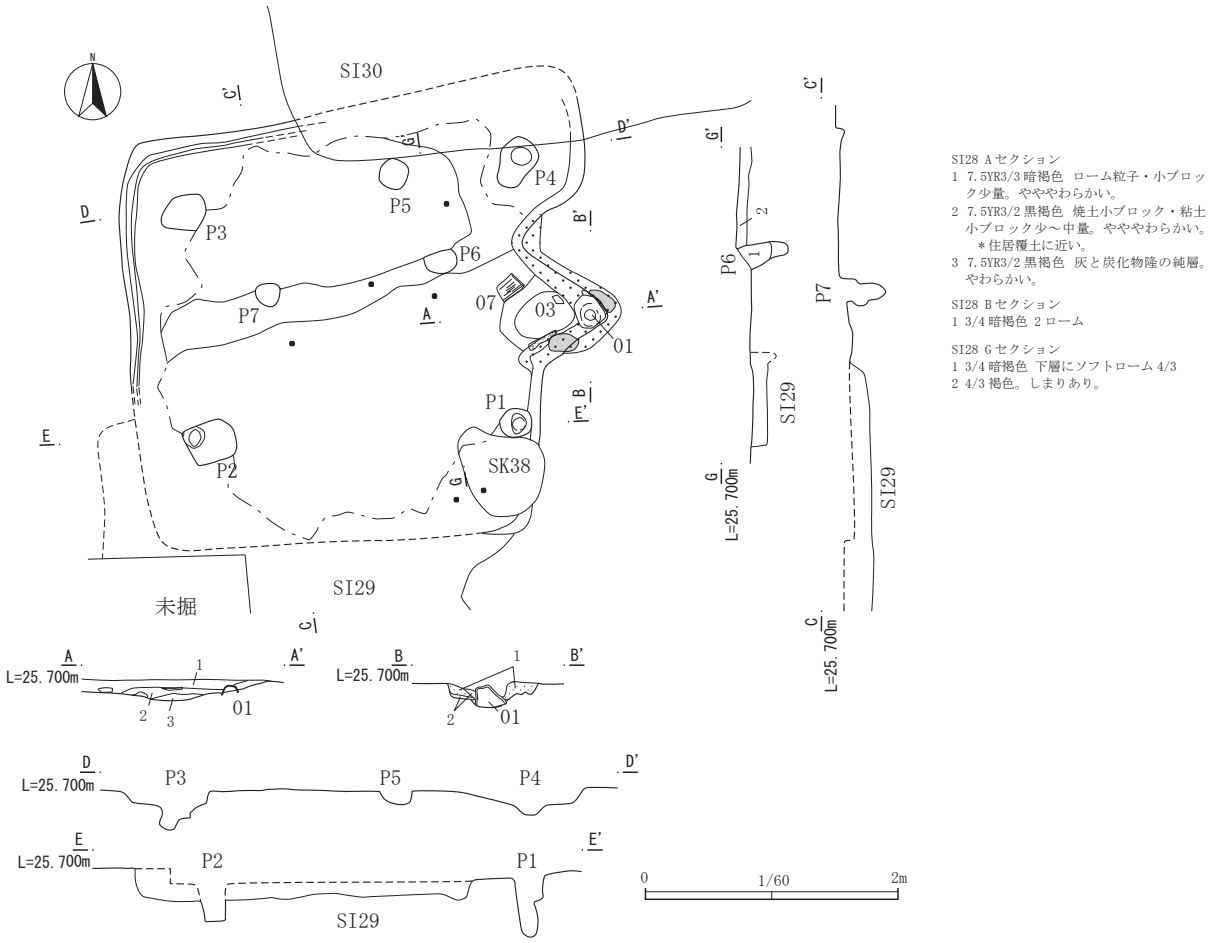
SI28（第 58・59 図、第 34 表、遺構図版 7、遺物図版 10）

検出位置：調査区南西寄り D1・2 グリッド。**平面形状**：方形。**主軸方向**：N - 88°-W。**規模**：3.73m × 3.34m。**確認面下の深さ**：24 ㎝。**覆土**：不明。**柱穴**：7 基検出されている。P1 ～ P4 は四隅に配置され、主柱穴と判断される。**壁溝**：北・西壁の把握部分で確認。**床面**：カマド北側袖の延長から西壁にかけて住居跡の北側 5 分の 2 に段を有す。**カマド**：東壁中央付近に設置され、壁際主軸部分の全長は 96 ㎝で、東壁から 61 ㎝ほど掘り出される。山砂及び粘土により設置される。**その他付帯施設**：なし。**重複関係**：SI29・30 と重複関係にあり、SI29 を切り、SI30 に切られる。また、SK38 に切られる。

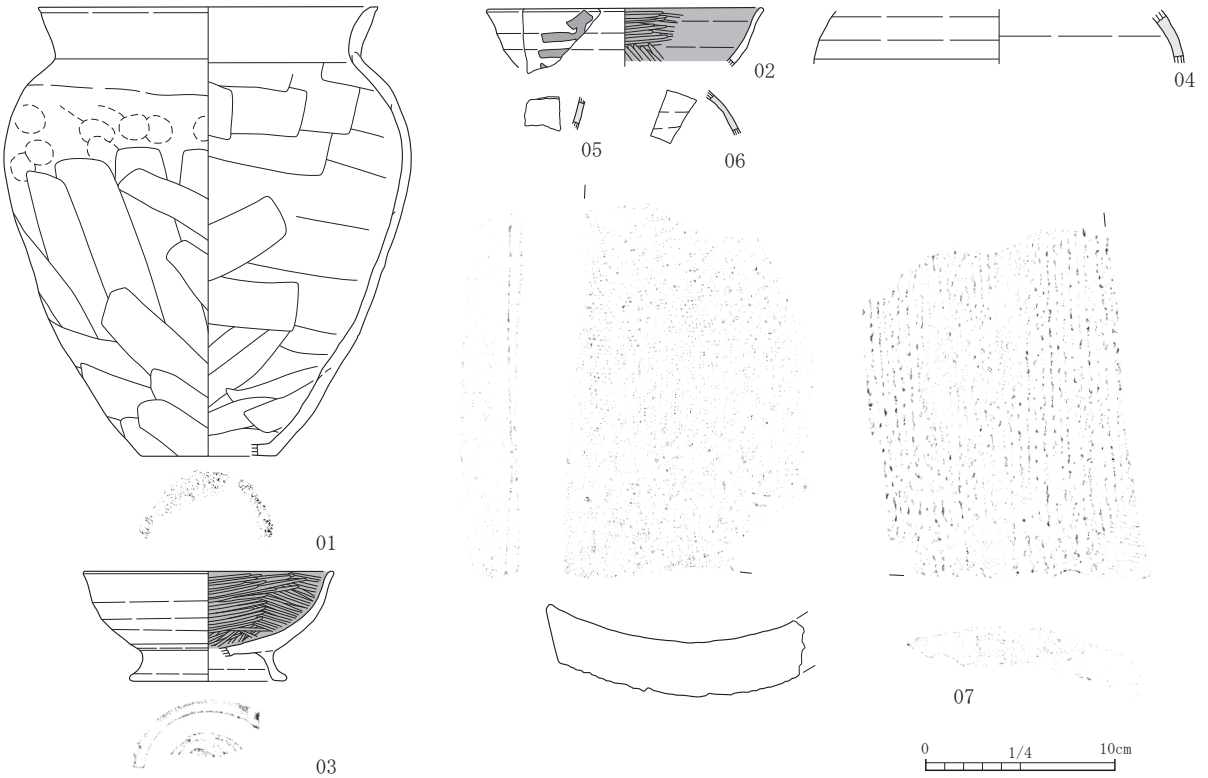
掲載遺物：土師器無台坏 1 点（墨書土器 1 点「手」ヵ）、有台埦 1 点、甕 1 点、灰釉陶器長頸瓶 1 点（猿投 K90）、瓶類 2 点（猿投 K90）、平瓦 1 点。

その他未掲載遺物：土師器 2165.5g、須恵器 998.8g、瓦 788.8g、鉄製品 18.1g、礫 230.7g。

遺構の帰属時期：土師器甕・内黒埦の出土から 10 世紀前半と判断した。灰釉陶器では黒笹 90 号窯式の遺物が出土しており、やや齟齬がある。



第 58 図　SI28



第 59 図　SI28 出土遺物

第 34 表　SI28 出土遺物観察表

掲載番号	注記	種類	器種	口径	器高	底径	重量	残存	整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
01	カマド３	土師器	甕	(17.5)	〈23.1〉	(7.3)	700.7	1/3	最大径を上位に有す、口縁は内外面共に横ナデ、胴部外面は縦方向のヘラケズリ、肩部に僅かに指頭圧痕内観察される。面はナデ。	雲母・白色粒子多い	良好 二次焼成ｱﾘ	内外面　明黄褐	
02	P4	土師器	無台坏	(14.4)	〈3.1〉	—	4.9	口縁破片	ロクロ整形、内面ミガキ。	雲母・白色粒子少量	良好	内面　黒 外面　にぶい黄橙	内面黒色処理 墨書「手」
03	カマド２	土師器	有台埦	(13.0)	5.7	(8.0)	88.0	1/2	ロクロ整形、体部下端回転ヘラケズリ、底部回転ヘラ切り。内面ミガキ。	雲母・スコリア少量	良好	内面　黒 外面　にぶい黄橙	内面黒色処理
04	覆土	灰釉陶器	長頸瓶	—	〈2.8〉	—	7.9	胴部片	外面下位を回転ヘラケズリ、器壁は比較的薄くやや丸みをもって立ち上がる。	鉄分の噴出し少量	良好	胎土　灰白 釉　暗淡緑	猿投 K90 【372】実 98-2-082
05	覆土	灰釉陶器	瓶類	—	〈1.7〉	—	1.8	胴部片	器壁は比較的薄くやや内湾して立ち上がる。	鉄分の噴出し少量	良好	胎土　灰白 釉　透明な自然釉	猿投 K90 【373】実 98-2-083
06	覆土	灰釉陶器	瓶類	—	〈2.3〉	—	1.8	胴部片	器壁は非常に薄くやや丸みをもって立ち上がる。	鉄分の噴出し微量	良好	胎土　灰白 釉　暗淡緑	猿投 K90 【374】実 98-2-084
07	カマド１	瓦	平瓦	タテ 〈19.6〉	ヨコ 〈12.6〉	厚 2.9	1,222.6	下縁・左側縁残存	凹面糸切り痕、布目圧痕。凸面縄目回転圧痕。端・側面ケズリ。	雲母・白色粒子少量	良好	内外面　灰白	カマド構築砂付着（破断面も）、被熱黒化

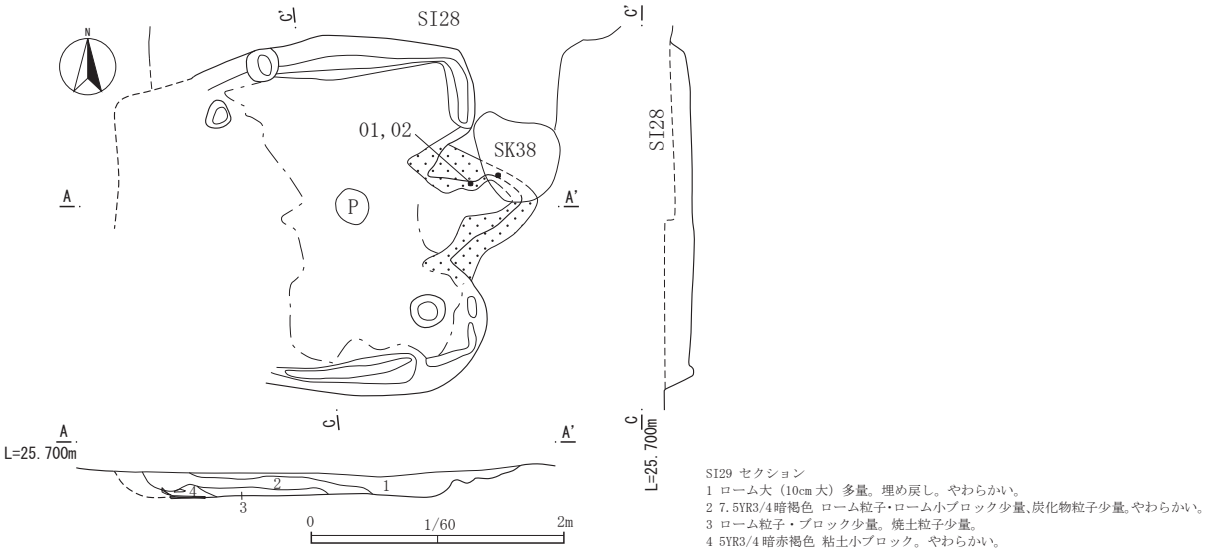
SI29（第 60・61 図、第 35 表、遺構図版 8、遺物図版 10）

検出位置：調査区南西寄り D1・2 グリッド。**平面形状**：方形。**主軸方向**：N - 88°-W。**規模**：2.25m ×―。**確認面下の深さ**：18 ㎝。**覆土**：暗褐色土を基調に 4 層に分層される自然堆積。**柱穴**：3 基検出されているが、本住居跡に伴うものか不明。**壁溝**：カマド部分を除きほぼ全周ヵ。**床面**：平坦。**カマド**：東壁中央付近に設置され、壁際主軸部分の全長は 95 ㎝で、西壁から 55 ㎝ほど掘り出される。山砂及び粘土により構築された袖が設置される。**その他付帯施設**：なし。**重複関係**：SI28 と重複し、本遺構の方が古い。また、SK38 によりカマド部分が切られる。

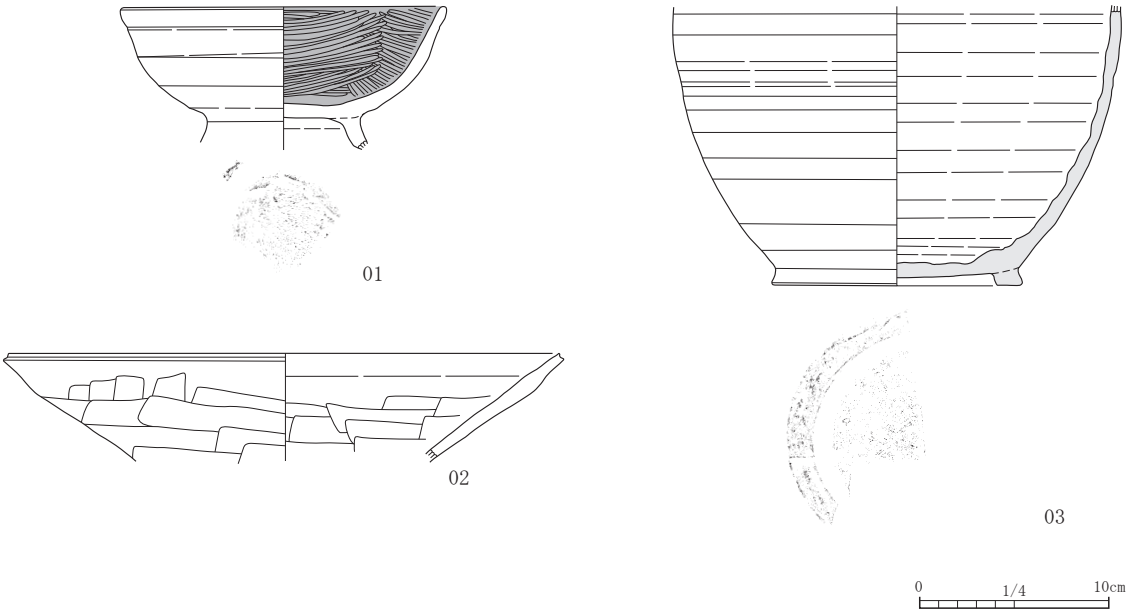
掲載遺物：土師器有台埦 1 点、大鉢 1 点、灰釉陶器瓶 1 点。

その他未掲載遺物：土師器 1213.6g、須恵器 441.4g、瓦 260.4g、礫 84.5g。

遺構の帰属時期：出土遺物では内黒埦の出土、大形の鉢の出土から 10 世紀前半と判断した。灰釉陶器瓶類が 1 点出土している。折戸 53 号窯式と見られる。



第 60 図　SI29



第 61 図　SI29 出土遺物

第 35 表　SI29 出土遺物観察表

掲載番号	注記	種類	器種	口径	器高	底径	重量	残存	整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
01	カマド N01	土師器	有台埦	16.9	〈7.4〉	—	268.0	2/3	ロクロ整形、体部下半広く回転ヘラケズリ、底部は回転糸切りが僅かに観察されるが整形する為か木口状の圧痕が確認される。内面ミガキ。	雲母・長石・石英・角閃石やや多い、白色針状物質微量	良好 二次焼成 ｱﾘ	内面　黒褐 外面　にぶい橙	
02	カマド 1	土師器	大鉢	(28.4)	〈5.7〉	—	299.4	口縁 1/2	ロクロ整形ヵ、体部は直線的に開き口唇は摘み上げられる。外面はヘラケズリ、内面はヘラナデ。	雲母・長石等小～中レキやや多い	良好	内外面　浅黄橙	
03	覆土・ カマド N01	灰釉陶器	瓶類	—	〈14.3〉	(13.1)	354.7	胴部下半～底部 1/3	ロクロ整形、外面胴部回転ヘラケズリ、中位に僅かにロクロナデが確認される、底部回転ヘラケズリ。外面の一部・内面底部に自然釉が被る。	堅緻、小～中・鉄分の噴き出しやや多い・雲母微量	堅緻	内面　灰白 外面　褐灰	猿投 053

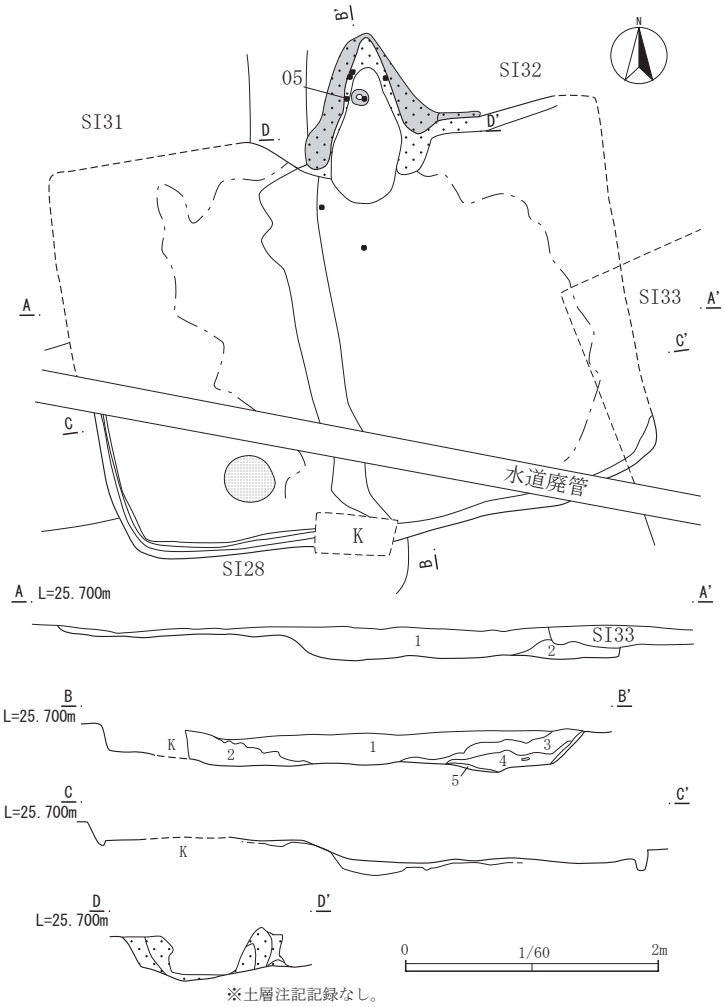
SI30（第 62 ～ 64 図、第 36 表、遺構図版 8、遺物図版 10・11）

検出位置：調査区西寄り C2 グリッド。**平面形状**：長方形。**主軸方向**：N - 9°-W。**規模**：4.3m × 3.1m。**確認面下の深さ**：23 ㎝。**覆土**：4 層に分層される自然堆積。**柱穴**：検出されていない。**壁溝**：南西コーナー部分で僅かに確認される。**床面**：カマド西袖の延長上に北側壁に至る部分に段を有し、西側 5 分の 2 が高くなる。**カマド**：北壁中央やや東寄りに設置され、壁際主軸部分の全長は 138 ㎝で、煙道は北壁から 53 ㎝ほど掘りだされる。山砂及び粘土により構築された袖が大きく開いて設置される。**その他付帯施設**：なし。**重複関係**：SI28・31・32・33 と重複関係にあり、SI28・31・32 よりも新しい。SI33 はセクション図では本住居跡を切る形で示されているが、出土遺物は本住居が新しい。

掲載遺物：土師器無台坏 2 点、甕 1 点、有台埦 2 点、須恵器有台坏 1 点、塼 1 点。

その他未掲載遺物：土師器 3960.2g、須恵器 2155.5g、瓦 177.5g、礫 63.3g。

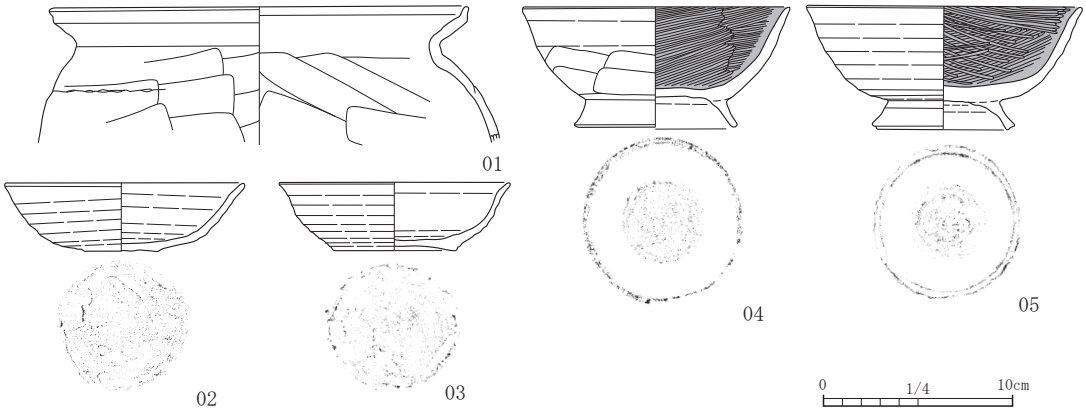
遺構の帰属時期：土師器の組み合わせから 10 世紀後半と判断される。06 の須恵器は古い時期の遺物の混入と判断した（SI32 由来ヵ）。灰釉陶器の出土はない。



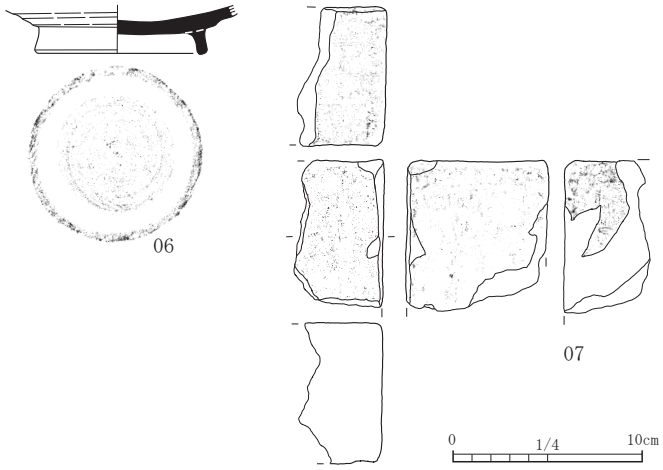
SI30 A セクション
1 7.5YR3/4 暗褐色 ローム粒子少量、炭化物粒子少量。しまりあり。自然堆積。
2 7.5YR3/4 暗褐色 ロームブロック中量。ローム粒子少量。やややわらか。自然堆積。

SI30 B セクション
1 7.5YR3/4 暗褐色 ローム粒子少量、粘土粒子極少量、炭化物粒子極少量。ややしまりあり。
2 7.5YR3/4 暗褐色 ローム小・中ブロック中～多量。ややしまりあり。
3 7.5YR3/4 暗褐色 粘土中・大ブロック中～多量、炭化材片少量。ややしまりあり。
4 7.5YR3/4 暗褐色 粘土小・中ブロック中量、焼土小・中ブロック中量。ややしまりあり。（側壁天井撚り落下焼土）
5 7.5YR3/2 黒褐色 黒色微粒の純層。やわらかい。（カマド炭と灰層）

第 62 図　SI30



第 63 図　SI30 出土遺物（1）



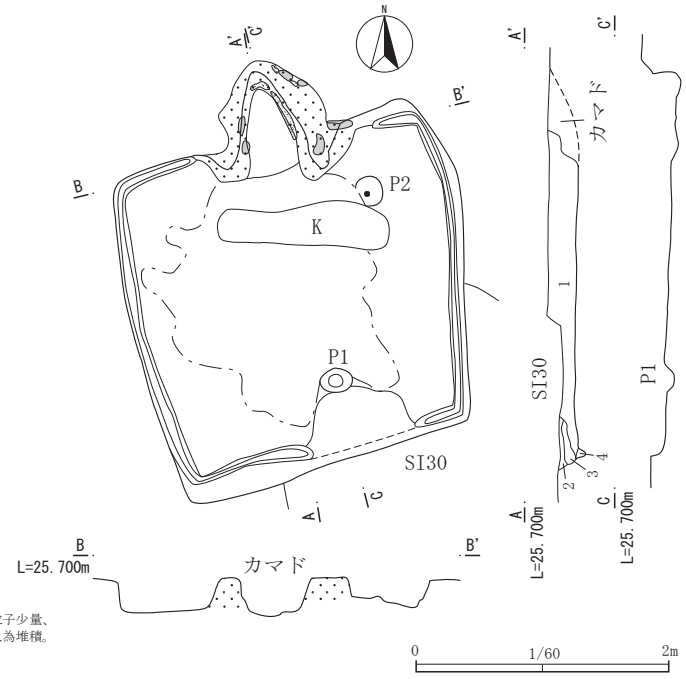
第 64 図　SI30 出土遺物（2）

第 36 表　SI30 出土遺物観察表

掲載番号	注記	種類	器種	口径	器高	底径	重量	残存	整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
01	カマド	土師器	甕	22.0	〈7.3〉	—	399.7	口縁部	肩部は張る、口唇は摘み上げられる。口縁は内外面共に横ナデ、肩部も内外面共にナデ。	雲母・白色粒子多い、スコリア微量	良好 二次焼成 ｱﾘ	内外面　にぶい橙	常総型甕ｶ
02	カマド	土師器	無台坏	12.5	3.5	3.9	88.0	ほぼ完形	ロクロ整形、底部一方向の手持ちヘラケズリ。	雲母・白色粒子・スコリアやや多い	良好 二次焼成 ｱﾘ	内外面　浅黄橙	
03	カマド	土師器	無台坏	(12.1)	3.5	6.6	67.7	口縁一部～底部	ロクロ整形、底部回転糸切り（左）。	雲母・白色粒子微量、黒色粒子やや多い	良好 二次焼成 ｱﾘ	内外面　灰白	
04	カマド	土師器	有台埦	14.0	6.2	8.2	210.7	ほぼ完形	ロクロ整形、体部下半広く回転ヘラケズリ、底部は木口状の圧痕が確認される。内面ミガキ。	雲母・白色粒子微量、黒色粒子多い	良好 二次焼成 ｱﾘ	内面　灰褐 外面　明赤褐	内面黒色処理
05	カマド 1	土師器	有台埦	(14.4)	6.3	6.7	167.6	口縁 1/4 ～底部	ロクロ整形、体部下端回転ヘラケズリ、底部回転ヘラ切り後ナデ。内面ミガキ。	雲母多い、白色粒子・スコリア少量	良好	内面　黒褐 外面　にぶい黄褐	内面黒色処理
06	カマド	須恵器	有台坏	—	〈2.55〉	8.6	137.2	体部下端～底部	ロクロ整形、底部回転ヘラケズリ。内面身込の磨滅状況から転用硯の可能性あり。	雲母多い	良好	内外面　灰黄褐	新治産
07	覆土	塼	—	タテ 〈7.7〉	ヨコ 〈4.4〉	厚 7.4	314.7	4 面残存	表・上・右面ケズリ、裏面ケズリのちナデ。	石英・白色粒子中量、スコリア少量	良好	にぶい橙	被熱黒化

SI31（第 65・66 図、第 37 表、遺構図版 8、遺物図版 11）

検出位置：調査区西寄り C1・2 グリッド。**平面形状**：方形。**主軸方向**：N-13°-W。**規模**：2.72m × 2.76m。**確認面下の深さ**：19 cm。**覆土**：確認面が浅く暗褐色土の単層。**柱穴**：2 基検出されている。P1 は入口ピットと想定される。**壁溝**：カマド部分及び南壁中央部分を除きほぼ全周する。**床面**：平坦。**カマド**：北壁中央付近に設置され、壁際主軸部分の全長は 97 cmで、西壁から 60 cmほど掘り出される。山砂及び粘土により構築された袖が大きく開いて設置される。



SI31 セクション
1 7.5YR3/4 暗褐色 ローム小・中ブロック中量、ローム粒子少量、カマド側砂粘土粒・小ブロック少量。ややしまりあり。人為堆積。
2 ローム中・大ブロック床。
3 ローム主体。上の住居の掘方覆土。
4 暗褐色の純層。やわらかい。

第 65 図　SI31

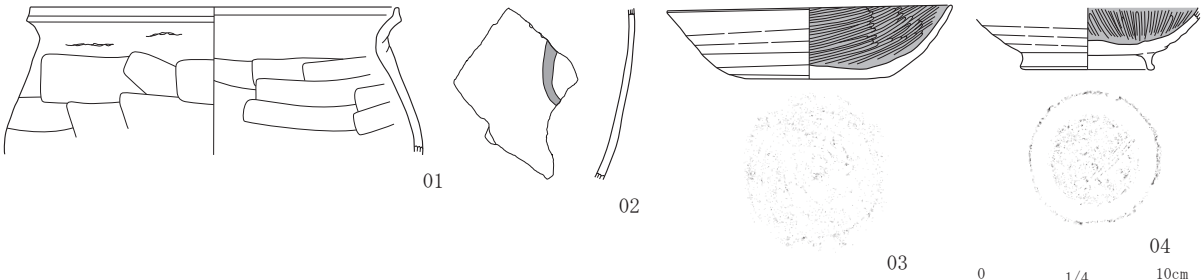
その他付帯施設:入口ピットの南側に床面が緩やかに高まりを見せる。入口施設に関わるものと判断される。

重複関係：SI30 と重複関係にあり、本住居跡が古い。

掲載遺物：土師器無台坏 1 点、有台埦 1 点（刻書「〆」ヵ）、甕 2 点（墨書土器 1 点、人面絵画ヵ）。

その他未掲載遺物：土師器 1295.8g、須恵器 1097.5g、礫 41.5g。

遺構の帰属時期：出土遺物は土師器のみで、形態の組み合わせから 9 世紀後半と判断した。灰釉陶器の出土はない。



第 66 図　SI31 出土遺物

第 37 表　SI31 出土遺物観察表

掲載番号	注記	種類	器種	口径	器高	底径	重量	残存	整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
01	カマド	土師器	甕	(19.8)	〈7.8〉	—	200.8	口縁 1/2	肩部は張りは弱い、口唇は摘み上げられる。口縁は内外面共に横ナデ、肩部も内外面共にナデ。	雲母・白色粒子やや多い	良好 二次焼成ｱﾘ	内面　灰黄褐 外面　にぶい橙	常総型甕ヵ
02	カマド	土師器	甕	高さ (8.9)	ヨコ (6.6)	厚 (0.5)	27.2	胴部破片	内外面共にナデ整形。	雲母多い、白色粒子やや多い	良好	内面　にぶい黄橙 外面　橙	墨書 人面絵画ヵ
03	カマド	土師器	無台坏	15.0	3.7	7.0	190.8	口縁 1/3 欠損	ロクロ整形、体部下半～底部回転ヘラケズリ。内面ミガキ。	雲母多い、白色粒子やや多い	良好	内面　黒 外面　にぶい橙	内面黒色処理
04	カマド	土師器	有台坏	—	〈3.2〉	6.6	94.2	体部下端～底部	ロクロ整形、底部回転ヘラケズリ。内面ミガキ。	雲母やや多い、白色粒子少量白色針状物質やや多い	良好 二次焼成ｱﾘ	内面　黒褐 外面　にぶい褐	内面黒色処理 刻書「〆」ヵ

SI32（第 67・68 図、第 38・39 表、遺構図版 8、遺物図版 11）

検出位置：調査区西寄り C2 グリッド。**平面形状**：方形。**主軸方向**：N - 5°-W。**規模**：4.1m × 3.61m。**確認面下の深さ**：56 ㎝。**覆土**：不明。**柱穴**：検出されていない。**壁溝**：カマド部分を除きほぼ全周する。幅 21 ㎝前後。**床面**：平坦。**カマド**：北壁中央付近に設置され、壁際主軸部分の全長は 173 ㎝で、西壁から 99 ㎝ほど掘り出される。山砂及び粘土により構築された袖が大きく開いて設置される。中央部分には火床面が東西方向の楕円形に広がる。**その他付帯施設**：なし。**重複関係**：SI30・33、SK42 と重複する。いずれの遺構よりも古いが、掘り込みが深くほぼ全容を把握できている。SK42 によって南壁中央部分を切られる。

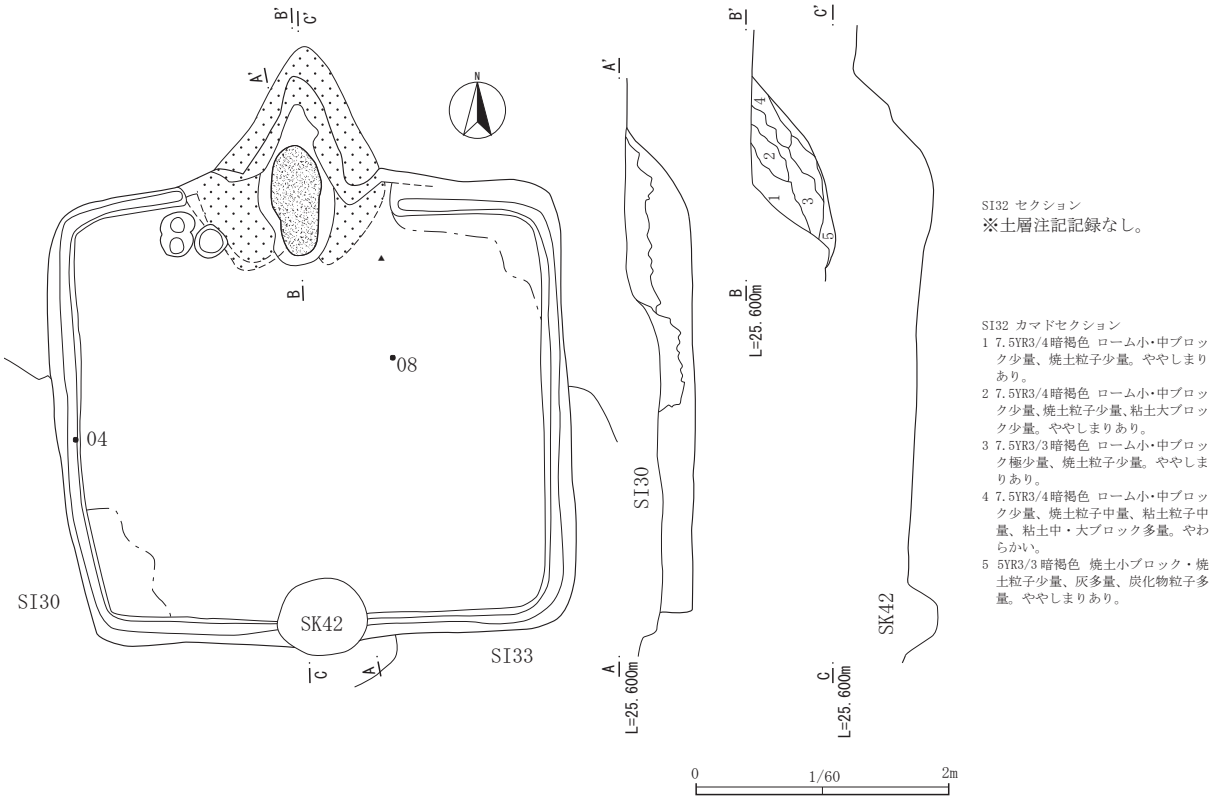
掲載遺物:土師器無台坏 2 点（墨書土器「□」)、須恵器蓋 1 点（朱墨書「〆」ヵ)、無台坏 4 点（刻書 1 点「□」、漆付着 2 点)、有台盤 1 点、丸瓦 1 点、塼 1 点。

その他未掲載遺物：土師器 3472.5g、須恵器 4902g、瓦 95.6g、鉄製品 6.4g。**近世以降の遺物**：陶器 6.4g。

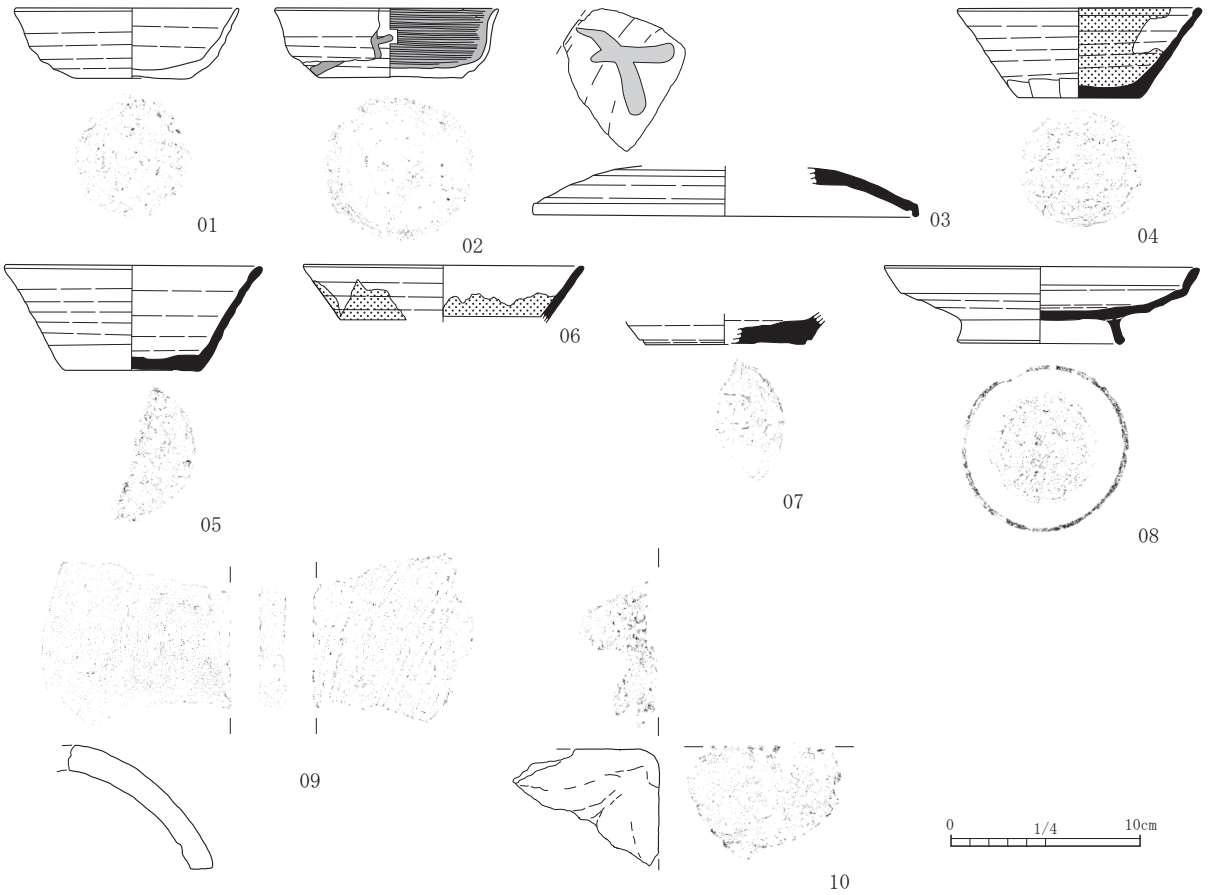
遺構の帰属時期：出土遺物では、須恵器の底部が狭くなり、器高が高くなる形状から 8 世紀終末から 9 世紀初頭と判断した。灰釉陶器の出土はない。

第 38 表　SI32 出土遺物観察表（1）

掲載番号	注記	種類	器種	口径	器高	底径	重量	残存	整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
01	覆土	土師器	無台坏	11.8	3.6	6.0	109.3	3/4	ロクロ整形、底部回転糸切り。	雲母多い	良好	内外面　にぶい橙	
02	覆土	土師器	無台坏	(11.8)	3.5	7.6	85.7	口縁 1/2 欠損	ロクロ整形、底部回転糸切り後ナデ。内外面ミガキ。箱形。	雲母多い	良好	内面　黒褐 外面　にぶい黄橙	内面黒色処理 墨書「□」
03	覆土	須恵器	蓋	(20.2)	〈2.5〉	—	40.6	裾部破片	ロクロ整形、残存部の回転ヘラケズリは 1/5、返しは無い。重ね焼き痕あり。	雲母やや多い	良好	内外面　灰黄褐	朱墨書「〆」ヵ 新治産



第 67 図　SI32



第 68 図　SI32 出土遺物

第 39 表　SI32 出土遺物観察表（2）

掲載番号	注記	種類	器種	口径	器高	底径	重量	残存	整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
04	3	須恵器	無台坏	12.8	4.6	6.4	125.4	ほぼ完形	ロクロ整形、体部下端手持ちヘラケズリ、底部一方向の手持ちヘラケズリ。内面漆様。	雲母少量・白色粒子少量、小礫アリ	良好	内外面　暗灰黄	漆溜め 新治産
05	覆土	須恵器	無台坏	13.4	5.4	7.2	104.0	1/2	ロクロ整形、体部下端回転ヘラケズリ、底部縦方向の手持ちヘラケズリ。	雲母多い、白色粒子やや多い	良好	内外面　灰黄褐	新治産
06	覆土	須恵器	無台坏	(14.8)	〈3.0〉	—	11.3	口縁破片	ロクロ整形。	雲母・白色粒子やや多い	良好	内外面　灰黄	漆付着 内面黒色処理
07	覆土	須恵器	無台坏	—	〈1.6〉	(8.4)	46.9	底部 1/3	ロクロ整形、底部回転ヘラ切り後ナデ。火ぶくれあり。底部の器壁は厚い。	白色粒子やや多い、小礫アリ	良好	内外面　褐灰	刻書「□」 常陸産ヵ
08	N01	須恵器	有台盤	16.6	3.9	8.4	219.5	ほぼ完形	ロクロ整形、底部回転ヘラケズリ。	白色粒子多い	良好	内外面　黄灰	新治産
09	覆土	瓦	丸瓦	タテ 〈8.8〉	ヨコ 〈9.6〉	厚 1.35	159.2	右側縁残存	薄手。凸面タテナデ。凹面糸切り痕、布目圧痕（布縁あり）。側面ケズリ。	雲母やや多い、白色粒子多い	良好	内外面　灰白	
10	覆土	塼	—	タテ 〈6.2〉	ヨコ 〈7.6〉	厚 〈8.2〉	208.4	2 面残存	角で折り曲げるように成形。上・右面ケズリ。	石英・白色粒子中量	良好	灰白	

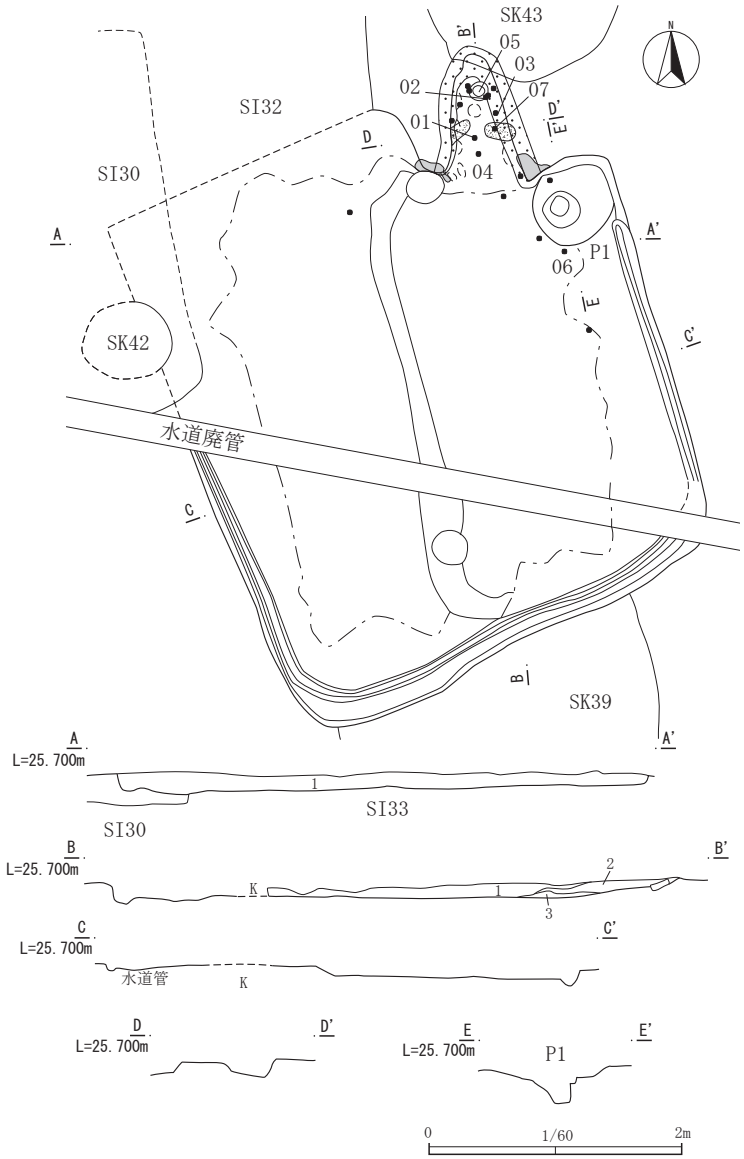
SI33（第 69・70 図、第 40 表、遺構図版 8、遺物図版 11）

検出位置：調査区西寄り C・D2 グリッド。**平面形状**：長方形。**主軸方向**：N - 16°-W。**規模**：4.25m × 3.76m。**確認面下の深さ**：10 cm。**覆土**：住居跡の覆土は浅く暗褐色土の単層。**柱穴**：検出されていない。**壁溝**：カマド部分を除きほぼ全周するものと思われる。幅 16 cm、深さ 7 cm前後。**床面**：カマド西袖の延長より床の 2 分の 1 程度の西側が 9 cm程高くなる。**カマド**：北壁東コーナー寄りに設置され、壁際主軸部分の全長は 120 cmで、北壁から 89 cm ほど掘りだされる。山砂及び粘土により構築される。**その他付帯施設**：なし。**重複関係**：SI30・32 と重複する。SI32 を切る。前述のとおり、出土遺物は SI30 より古相を示す。また、SK39 を切り、SK42、43 に切られる。

掲載遺物：土師器無台坏 1 点、有台埦 3 点（墨書土器 1 点「□」）、須恵器甑 1 点、緑釉陶器椀 1 点（猿投 K90 併行）、平瓦 1 点。

その他未掲載遺物：土師器 3230g、須恵器 893.4g、瓦 1947.8g、礫 553.4g。

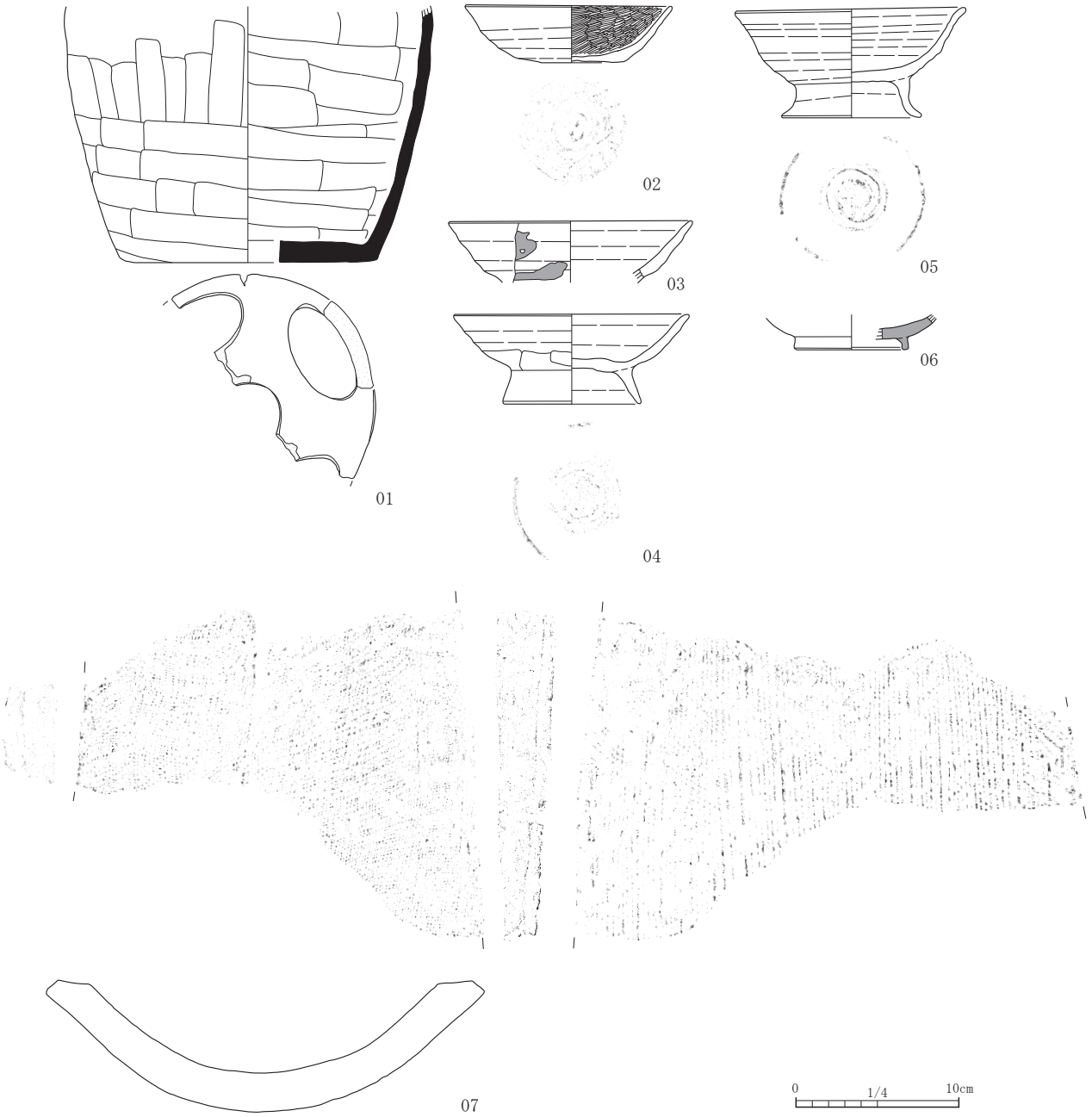
遺構の帰属時期：出土遺物 02 の土師器無台坏は回転ヘラ切を行うもので、高足高台の埦の共伴が見られるものの、9 世紀末から 10 世紀前葉と判断される。



SI33 A セクション
1 7.5YR3/4 暗褐色 ローム粒子少量、炭化物粒子少量。しまりあり。自然堆積。

SI33 B セクション
1 7.5YR3/4 暗褐色 炭化物少～中量。やわらかい。
2 5YR3/4 暗赤褐色 粘土大・焼土大ブロック多量。やわらかい。
3 黒褐色 炭化物粒まじりの灰層。やわらかい。

第 69 図　SI33



第 70 図　SI33 出土遺物

第 40 表　SI33 出土遺物観察表

掲載番号	注記	種類	器種	口径	器高	底径	重量	残存	整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
01	カ 1	須恵器	甑	—	〈15.6〉	(16.0)	473.7	胴部下端 1/4	回転台使用ヵ。多孔式。胴部外面ヘラケズリ、内面ナデ。孔はヘラにより面取りが施されている。	雲母微量、白色粒子多い	還元不良	内面　にぶい赤褐 外面　橙	内面黒色処理
02	覆土	土師器	無台坏	12.5	3.5	5.2	123.5	完形	ロクロ整形、底部回転ヘラ切り。内面ミガキ。	雲母やや多い、白色粒子・スコリアコリア少量	良好	内面　黒褐 外面　にぶい橙	内面黒色処理
03	カマド 7	土師器	有台埦	(14.8)	〈3.65〉	—	36.2	口縁 1/8	ロクロ整形、体部下端回転ヘラケズリ。	雲母微量、白色粒子多い、黒色粒子少量	良好	内外面　明赤褐	墨書「□」
04	カ 11	土師器	有台埦	(14.2)	〈5.3〉	8.3	113.1	1/3	ロクロ整形、体部下端手持ちヘラケズリ、底部回転ヘラケズリ。	雲母微量、白色粒子やや多い、黒色粒子少量	良好	内外面　明赤褐	
05	カ 4	土師器	有台埦	13.8	6.6	8.4	233.8	ほぼ完形	ロクロ整形、底部回転ヘラ切り。	雲母多い、白色粒子少量、スコリアやや多い	良好	内外面　にぶい黄橙	
06	№1	緑釉陶器	椀	—	〈2.1〉	(6.7)	18.9	体下端～底部 1/4	器壁は比較的薄く丸みを持って立ち上がる、高台は比較的高く断面矩形を呈す。	鉄分の噴出し微量	良好	胎土　白灰 釉　緑	猿投 K90 併行 【296】実 98-2-004
07	カ 8	瓦	平瓦	タテ (21.8)	ヨコ (27.0)	厚 2.3	1,440.0	両側縁残存	凹面糸切り痕、布目圧痕、側端ケズリ。凸面糸切り痕、縄目回転圧痕。側面ケズリ。	白色粒子少量	良好	内面　にぶい黄橙 外面　黄灰	被熱黒化

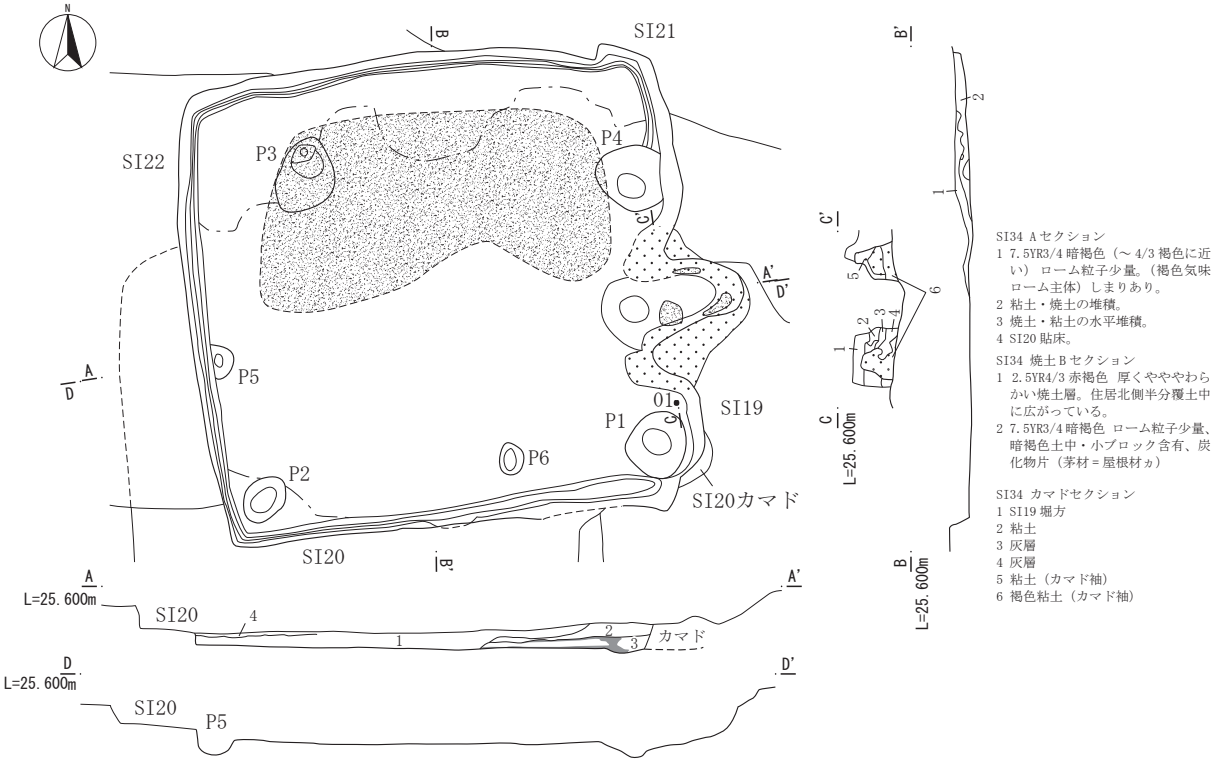
SI34（第 71・72 図、第 41 表、遺構図版 8・9、遺物図版 12）

検出位置：調査区中央やや西寄り C2・3 グリッド。**平面形状**：方形。**主軸方向**：N - 90°-W。**規模**：3.68m × 4.0m。**確認面下の深さ**：20 ㎝。**覆土**：住居跡の覆土は 3 層に分層され、自然堆積。北半部床面上に炭化物（材）と焼土が堆積し、火災住居と判断される。**柱穴**：コーナー部分に 4 基、西壁中央付近に 1 基、南壁寄りに 1 基検出されている。**壁溝**：カマド部分を除きほぼ全周する。幅 12 ㎝前後。**床面**：平坦。**カマド**：東壁中央南寄りに設置され、壁際主軸部分の全長は 121 ㎝で、西壁から 50 ㎝ほど掘り出される。山砂及び粘土により構築された袖が大きく開いて設置される。中央部分には火床面が東西方向の楕円形に広がる。**その他付帯施設**：なし。**重複関係**：SI19・20・21・22 と重複する。本住居が最も古い。

掲載遺物：須恵器無台坏 1 点、有台坏 1 点、灰釉陶器椀 1 点（猿投 K90）、平瓦 1 点、鉄製品刀子 1 点。

その他未掲載遺物：土師器 2205g、須恵器 1962.9g、瓦 377.7g、鉄製品 9.8g、礫 121.5g。

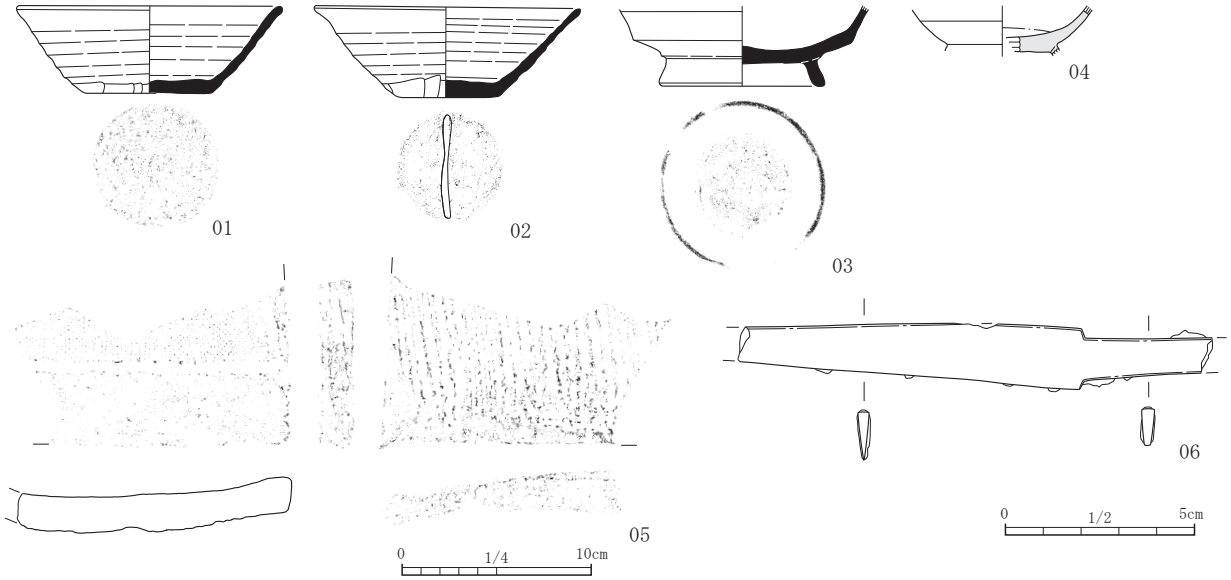
遺構の帰属時期：須恵器の底部が狭くなり、器高が高くなる形状から 9 世紀初頭と判断した。



第 71 図　SI34　0　1/60　2m

第 41 表　SI34 出土遺物観察表

掲載番号	注記	種類	器種	口径	器高	底径	重量	残存	整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
01	1	須恵器	無台坏	13.7	4.6	6.7	137.3	2/3	ロクロ整形、体部下端～底部手持ちヘラケズリ。	雲母多い、白色粒子やや	還元不良	内外面　にぶい黄褐	ヘラ記号「×」
02	覆土	須恵器	無台坏	13.8	4.7	5.3	117.7	2/3	ロクロ整形、体部下端手持ちヘラケズリ、底部多方向の手持ちヘラケズリ。	雲母多い、白色粒子やや多い	良好 二次焼成ｱﾘ	内外面　黄灰	ミガキ状ヘラ記号「|」 新治産
03	覆土	有台坏	高台付坏	—	〈4.1〉	8.3	209.0	体部下端～底部	ロクロ整形、体部下端回転ヘラケズリ、底部回転ヘラ切り。	小～中礫やや多い、雲母・白色針状物質微量	良好	内外面　黄灰	新治産
04	覆土	灰釉陶器	椀	—	〈2.6〉	—	12.9	体～底部 10%	外面体部中位を回転ヘラケズリ後回転ナデ、器壁は比較的薄く内湾して立ち上がる、高台は下位を欠損しているが断面が三日月形を呈していたと考えられる。	鉄分の噴出し少量	良好	胎土　灰白 釉　暗淡緑	猿投 K90 身込に直接重ね焼き痕 【375】実 98-2-085
05	覆土	瓦	平瓦	タテ〈8.0〉	ヨコ〈14.5〉	厚 2.0	317.6	左側縁残存	凹面布目圧痕。凸面縄目回転圧痕。端面ケズリ。	白色粒子微量	良好、自然釉付着	内外面　灰	
06	覆土	鉄製品	刀子	長〈12.5〉	幅〈1.7〉	厚 0.3	20.1	切先・茎尻欠損	両関。身部・茎部とも厚手のつくり。SI20-15 と同型品。				

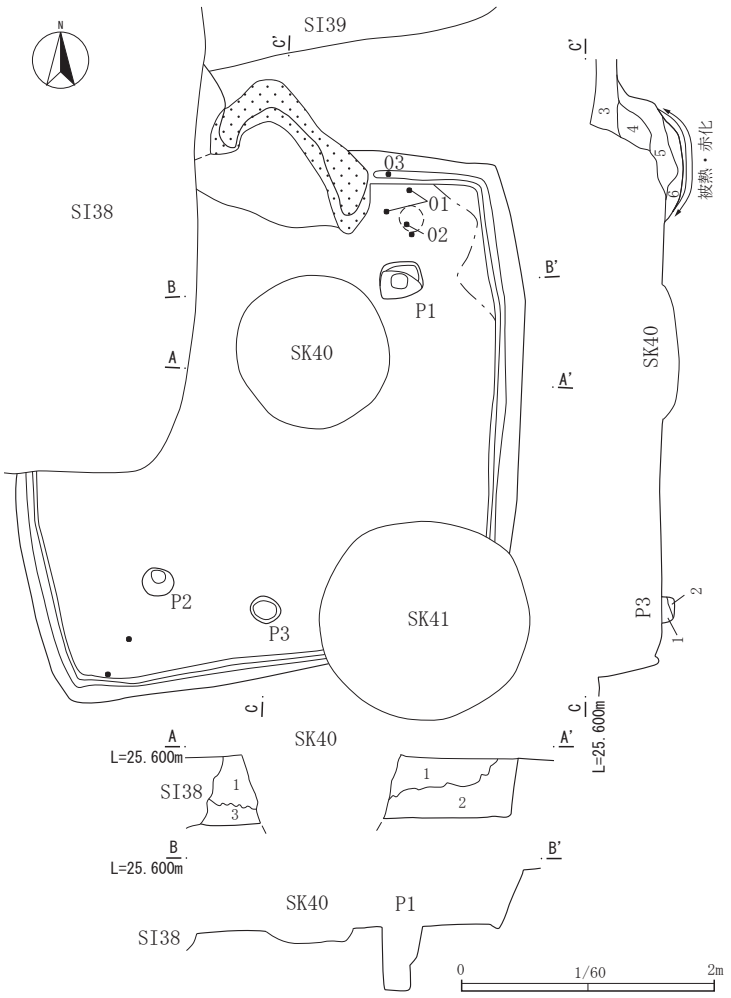


第 72 図　SI34 出土遺物

SI35（第 73・74 図、第 42 表、遺構図版 9、遺物図版 12）

検出位置：調査区北西端部 B2・3、C2・3 グリッド。**平面形状**：方形。**主軸方向**：N。**規模**：4.92m × 4.0m。**確認面下の深さ**：35 cm。**覆土**:暗褐色土を基調とした 3 層に分層。第 2 層は埋め戻し土とされる。**柱穴**：北東及び南西コーナー付近に各 1 基と南壁中央寄りに 1 基の 3 基が検出されている。**壁溝**:カマド部分を除きほぼ全周するものと思われる。幅 12 cm、深さ 7 cm前後。**床面**:平坦。**カマド**：北壁中央付近に設置され、壁際主軸部分の全長は 121 cmで、西壁から 55 cmほど掘りだされる。山砂及び粘土により構築された袖が大きく開いて設置される。**その他付帯施設**：なし。**重複関係**：SI38・39、SK40・41 と重複する。いずれの遺構よりも本住居が古い。SI39 は出土遺物から本住居より古いと思われる。

掲載遺物：土師器甕 2 点、須恵器蓋 1 点（墨書土器 1 点「石上□ロ」）、緑釉陶器蓋類 1 点（猿投 K90 併行）、灰釉陶器皿 1 点（美濃光 1 ～大 2）。



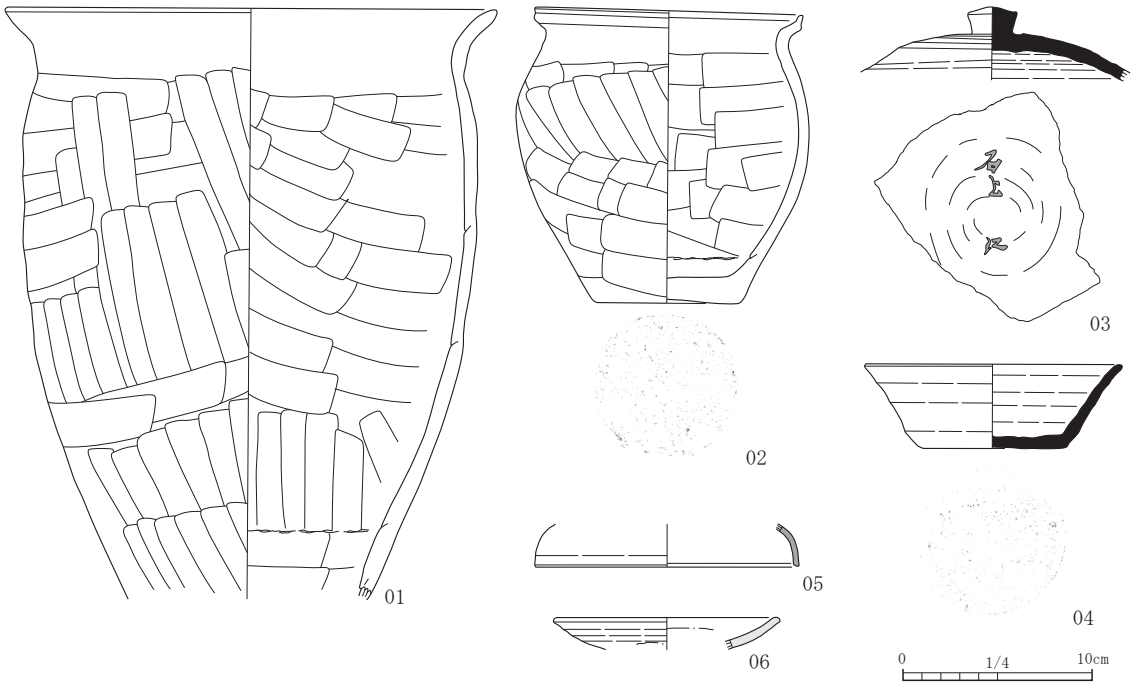
SI35 C セクション
1 暗褐色 やわらかい。
2 ロームブロック
3 暗褐色
4 ローム小・中ブロック多量。カマドを壊した後住居覆土。
5 暗褐色 ローム小ブロック少量
6 灰とローム粒子、焼土粒子。

SI35 セクション
1 7.5YR3/4 暗褐色 ローム粒子中～多量。やわらかい。自然堆積。
2 7.5YR3/4 暗褐色 ローム粒子多量、ローム小・中ブロック多量。人為的埋め戻し土。
3 7.5YR3/4 暗褐色 ローム粒子少量。やわらかい。自然堆積。

第 73 図　SI35

その他未掲載遺物：土師器 3218.5g、須恵器 1722.2g、瓦 204.7g、礫 186.1。**近世以降の遺物**：陶器 2.3g。

遺構の帰属時期：須恵器および土師器の甕が出土している。その形状から 9 世紀初頭と判断されるが、灰釉陶器では光ヶ丘 1 号～大原 2 号窯式が出土しており、9 世紀後半～ 10 世紀前葉になる。また、緑釉陶器 05 の蓋は黒笹 90 号窯式で、9 世紀後半が想定される。明らかに齟齬がある。



第 74 図　SI35 出土遺物

第 42 表　SI35 出土遺物観察表

掲載番号	注記	種類	器種	口径	器高	底径	重量	残存	整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
01	4・3	土師器	甕	(25.8)	〈30.5〉	—	697.3	口縁～胴部下端 1/4	長胴型の甕ヵ。口縁は内外面共に横ナデ。胴部外面はヘラケズリ、内面はヘラナデ。	雲母やや多い、白色粒子多い	良好 二次焼成 ｱﾘ	内面　にぶい黄橙 外面　灰黄褐	カマド砂付着
02	2	土師器	小型甕	14.0	15.3	7.6	590.9	3/4	最大径を上位に有す小型の甕である。、口縁は内外面共に横ナデ、口唇は摘み上げられる。胴部外面ナデ、下半は斜方向のヘラケズリ、内面はナデ。	雲母少量、白色粒子多い	良好 二次焼成 ｱﾘ	内面　にぶい黄橙 外面　暗赤褐	
03	5	須恵器	蓋	—	〈3.75〉	ツマミ径 2.6	141.1	裾部欠損	ロクロ整形、ツマミは擬宝珠状を呈す。天井残存部の回転ヘラケズリは 1/3。	小～中礫・鉄分の噴出しやや多い、白色針状物質微量。	良好	内外面　灰	墨書「石上□ロ」
04	覆土	須恵器	無台坏	(13.3)	4.3	7.6	113.3	口縁 1/8 ～底部	ロクロ整形、底部回転ヘラ切り後多方向の手持ちヘラケズリ。	白色粒子やや多い	良好	内外面　灰	ヘラ記号「×」
05	SI35 覆土・SK43	緑釉陶器	蓋類	(13.9)	〈2.2〉	—	3.7	口縁 10%	器壁は比較的薄く内側に丸みを持って立ち上がる。	鉄分の噴出し微量	良好	胎土　白灰 釉　緑（総釉）	猿投 K90 併行 【297】実 98-2-005
06	覆土	灰釉陶器	皿	(11.6)	〈1.7〉	—	6.3	口縁部 8%	器壁は比較的厚く緩やかに内湾して立ち上がり端部で僅かに外反。	鉄分の噴出し細かく少量	良好	胎土　灰白 釉　暗淡緑 内面口縁部黄色がかった淡緑（含自然釉）・外面口縁部透明自然釉	美濃光 1 ～大 2 【376】実 98-2-086

SI36（第 78 図、遺構図版 9）

SI38 の南北セクション上層に僅かながら床面らしき硬化部分を確認したため、SI36 としたが全容は不明。SI37 との重複関係も確認できない。

掲載遺物：なし。

その他未掲載遺物：土師器 2175.5g、須恵器 1260.5g、瓦 44.5g、礫 32.7。**近世以降の遺物**：陶器 2.3g。

遺構の帰属時期：不明

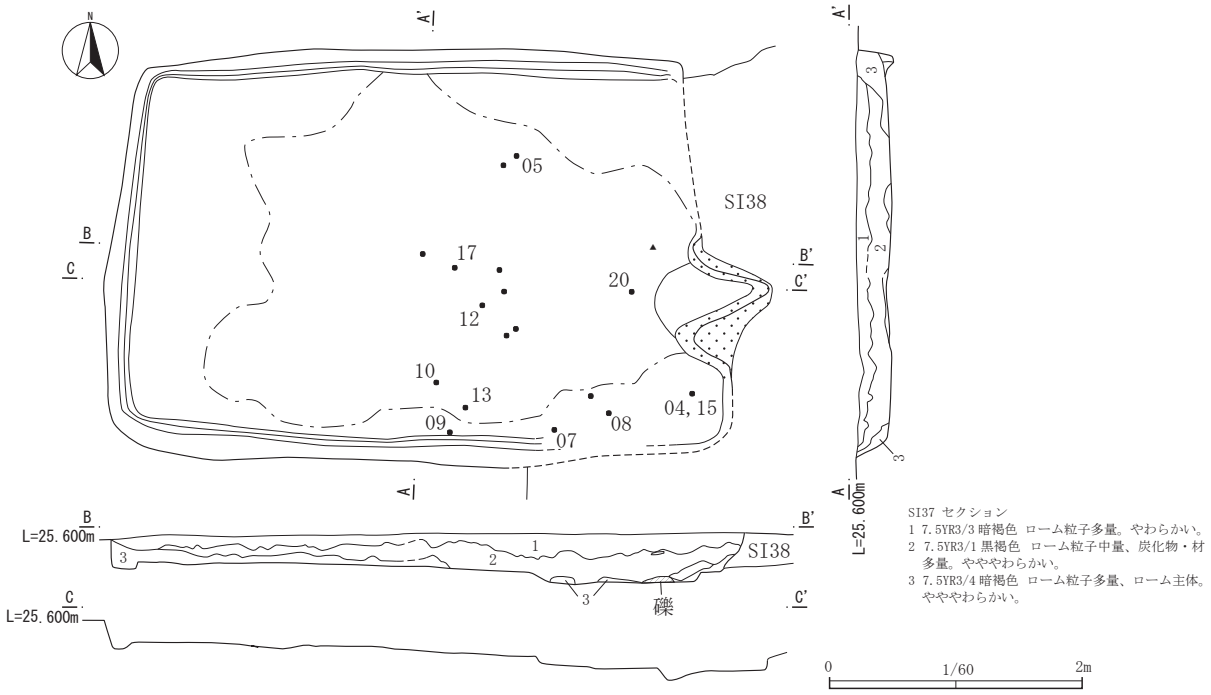
SI37（第 75 ～ 77 図、第 43・44 表、遺構図版 9、遺物図版 12・13）

検出位置：調査区北西端部 B2 グリッド。**平面形状**：長方形。**主軸方向**：N - 92°-E。**規模**：3.28m × 4.94m。**確認面下の深さ**：21 ㎝。**覆土**：暗褐色土を基調とする 3 層に分層される。自然堆積。**柱穴**：検出されていない。**壁溝**：カマド部分を除きほぼ全周するものであろう。幅 12 ㎝、深さ 9 ㎝前後。**床面**：東側に向かい緩やかに下降する。**カマド**：東壁中央やや南寄りに設置され、壁際主軸部分の全長は 93 ㎝で、東壁から 49 ㎝ほど掘り出される。山砂及び粘土により構築された袖が大きく開いて設置される。**その他付帯施設**：なし。**重複関係**：SI38 と重複するもので 本住居跡が新しい。

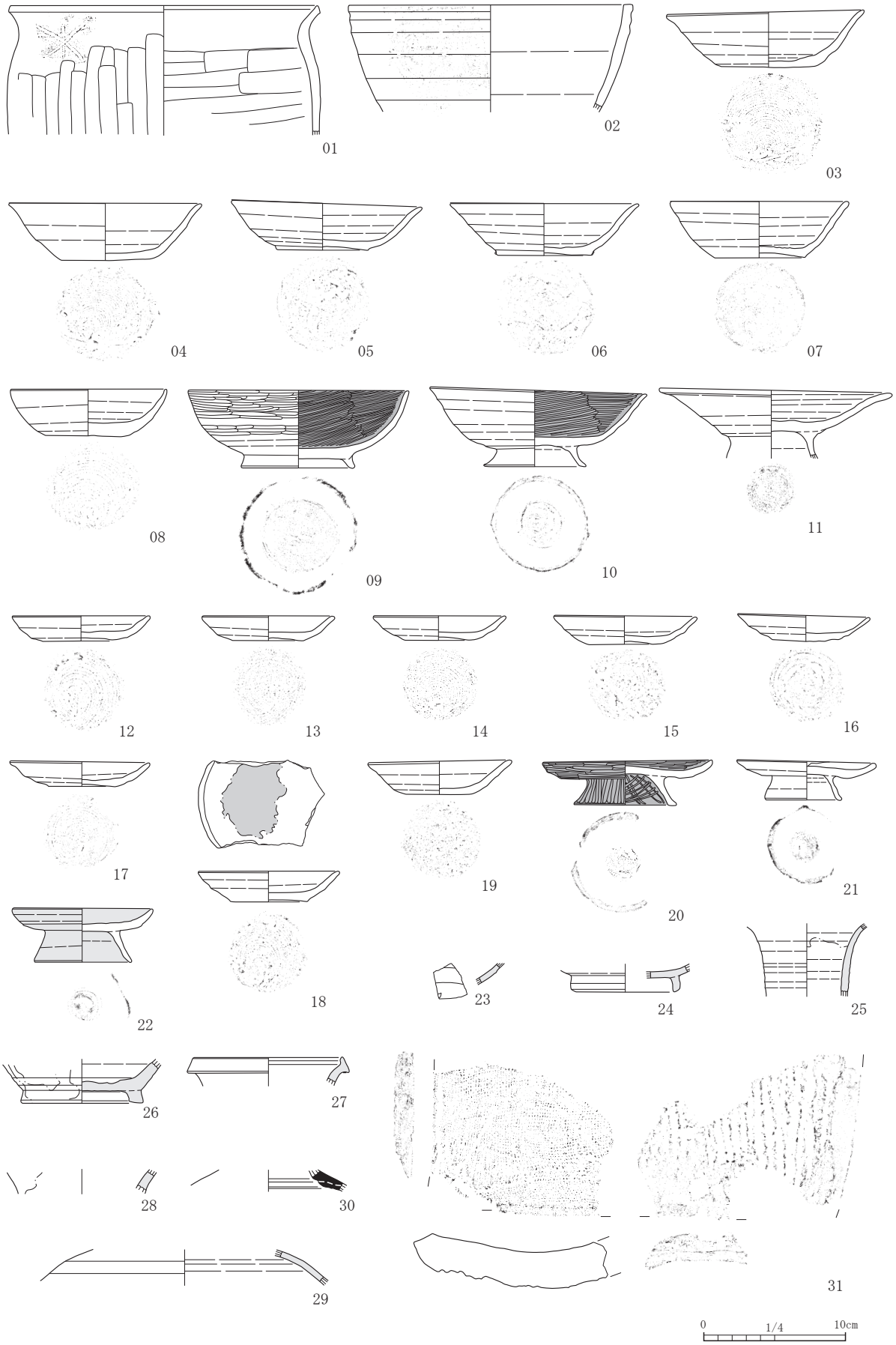
掲載遺物：土師器無台坏 6 点、有台埦 2 点、有台皿 1 点、小皿 8 点、有台小皿 3 点、鉢 1 点（刻書絵画）、甕 1 点（窯印）、灰釉陶器椀 1 点（猿投 K14 ～ K90）、埦・皿類 1 点（猿投 K90）、長頸瓶 5 点（猿投 K90・K14・美濃光ヶ丘 1・猿投 K14 ～ K90）、須恵器長頸瓶（東海系 8 世紀代）、平瓦 1 点、丸瓦 1 点、土製品獣脚 1 点、金属製品鉄製金具 1 点、銅埦 1 点、砥石 1 点。

その他未掲載遺物：土師器 23818g、須恵器 4125g、瓦 4098.5g、鉄製品 120.2g、礫 446.3g。**近世以降の遺物**：陶器 18.1g。

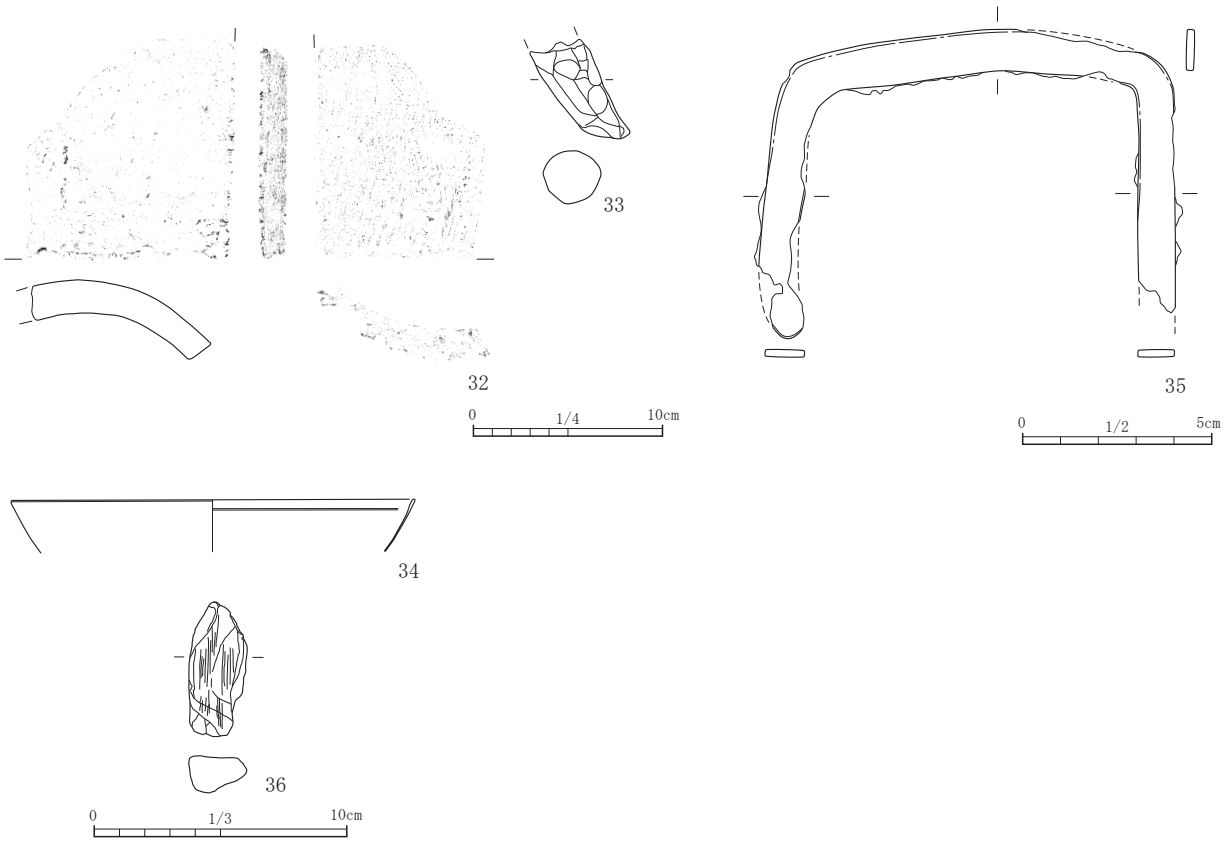
遺構の帰属時期：土師器坏、有台埦に加え皿が大量に出土する。坏・皿類の底部は糸切のままで無調整になる。さらに内外面ミガキの内面黒色処理された埦、内外面ミガキの後黒色処理される有台皿などの出現から 11 世紀と判断した。また、灰釉陶器も比較的まとまって出土しているが、黒笹 14 号窯式～ 90 号窯式、光ヶ丘 1 号窯式など 9 世紀後半の資料が主体となっており、齟齬がある。本住居が重複関係にある SI38 に伴う遺物の可能性が高い。



第 75 図　SI37



第 76 図　SI37 出土遺物（1）



第 77 図　SI37 出土遺物（2）

第 43 表　SI37 出土遺物観察表（1）

掲載番号	注記	種類	器種	口径	器高	底径	重量	残存	整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
01	覆土	土師器	甕	21.6	〈9.0〉	—	128.1	口縁 1/4	胴部の張りは弱い、口唇は面取りが行われている、胴部外面は縦方向のヘラケズリ、内面は横方向のナデ整形。	雲母・白色粒子多い	良好	内面　にぶい褐 外面　にぶい黄褐	口縁直下ヘラ記号
02	覆土	土師器	鉢	(19.4)	〈7.3〉	—	52.7	口縁 1/8	ロクロ整形、口唇は面取りが行われている。残存部の外面胴部下端回転ヘラケズリ。	雲母・白色粒子やや多い	良好	内面　にぶい黄橙 外面　浅黄	刻書
03	覆土	土師器	無台坏	13.8	3.8	6.7	174.6	口縁 1/4 欠損	ロクロ整形、底部回転糸切り(左)。	雲母微量、白色粒子やや多い	良好	内外面　にぶい黄橙	ヘラ記号
04	2	土師器	無台坏	13.8	3.9	6.6	170.5	完形	ロクロ整形、底部回転糸切り(左)。	白色粒子多い	良好	内面　黒褐 外面　暗灰黄	内面漆様塗布物付着ヵ ヘラ記号
05	13	土師器	無台坏	13.1	3.3	6.4	143.3	ほぼ完形	ロクロ整形、底部回転糸切り(左)。	雲母・スコリアやや多い、白色粒子多い、白色針状物質少量	良好	内外面　にぶい黄橙	
06	覆土	土師器	無台坏	13.1	3.6	6.7	125.5	ほぼ完形	ロクロ整形、底部回転糸切り(左)。	雲母・白色粒子やや多い、スコリア少量	良好	内外面　にぶい黄橙	
07	4	土師器	無台坏	12.3	3.9	6.4	140.1	完形	ロクロ整形、底部回転糸切り(左)。	雲母やや多い、白色粒子・白色針状物質少量、スコリア微量	良好 二次焼成ｱﾘ	内面　にぶい黄橙 外面　にぶい黄褐	
08	1	土師器	無台坏	10.8	3.2	6.0	119.9	口縁 1/2 欠損	ロクロ整形、底部回転糸切り(右)。	雲母・白色粒子多い、スコリア微量	良好	内面　にぶい黄橙 外面　にぶい褐	
09	5	土師器	有台埦	(15.2)	5.45	7.7	203.4	口縁 2/3 欠損	ロクロ整形、体部下半回転ヘラケズリ、底部回転ヘラケズリ。内外面共にミガキが確認されるが、外面のミガキは粗い。	雲母多い、白色粒子・白色針状物質少量、スコリア微量、	良好	内面　黒 外面　にぶい黄橙	内面黒色処理
10	7	土師器	有台埦	15.0	5.3	6.5	183.2	口縁 1/3 欠損	ロクロ整形、体部下端回転ヘラケズリ、底部回転糸切り。内面ミガキ。	雲母やや多い、白色粒子少量、白色針状物質やや多い	良好	内面　黒褐 外面　にぶい黄橙	内面黒色処理 外面鉄分付着
11	覆土	土師器	有台皿	16.1	〈4.7〉	—	166.2	体部 2/3 欠損	ロクロ整形、底部回転糸切り。	雲母微量、白色粒子多い	良好 二次焼成ｱﾘ	内外面　にぶい黄橙	
12	11	土師器	小皿	9.5	1.7	4.6	71.5	ほぼ完形	ロクロ整形、底部回転糸切り(左)。	雲母やや多い、白色粒子多い、スコリア少量	良好	内外面　にぶい黄橙	
13	6	土師器	小皿	9.1	1.7	5.0	58.5	完形	ロクロ整形、底部回転糸切り(左)。	雲母やや多い、白色粒子多い	良好	内外面　にぶい黄橙	
14	覆土	土師器	小皿	9.3	1.8	4.5	62.3	完形	ロクロ整形、底部回転糸切り(左)。	雲母やや多い黒色粒子少量、白色粒子多い	良好	内外面　にぶい黄褐	
15	2	土師器	小皿	9.9	2.0	5.0	69.1	口縁 1/3 欠損	ロクロ整形、底部回転糸切り(左)。	雲母少量、白色粒子多い	良好	内外面　にぶい黄橙	
16	覆土	土師器	小皿	9.1	1.8	4.7	54.6	口縁 1/3 欠損	ロクロ整形、底部回転ヘラ切り。	雲母微量、白色粒子多い	良好	内外面　にぶい黄橙	

第 44 表　SI37 出土遺物観察表（2）

掲載番号	注記	種類	器種	口径	器高	底径	重量	残存	整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
17	15	土師器	小皿	9.6	1.65	4.8	68.7	ほぼ完形	ロクロ整形、底部回転糸切り（左）。	白色粒子多い	良好	内外面　にぶい黄橙	
18	覆土	土師器	小皿	(9.8)	2.2	5.3	46.3	口縁 1/4 ～底部	ロクロ整形、底部回転糸切り（左）。	白色粒子多い	良好	内外面　にぶい黄橙	内面朱墨
19	覆土	土師器	小皿	9.8	2.3	4.8	67.3	ほぼ完形	ロクロ整形、底部回転糸切り（左）。	雲母微量、白色粒子多い	良好	内外面　にぶい黄橙	
20	12	土師器	有台皿	11.8	3.0	6.1	140.8	口縁 1/3 欠損	ロクロ整形、底部回転糸切り。高台・体部共に内外面ミガキ。	雲母やや多い、白色粒子微量、白色針状物質少量	良好	内外面　黒褐	内外面黒色処理
21	覆土	土師器	有台皿	9.5	2.6	5.2	82.6	ほぼ完形	ロクロ整形、底部回転糸切り後ナデ。	雲母やや多い、白色粒子少量、スコリア微量、白色針状物質微量	良好	内外面　灰黄褐	
22	覆土	土師器	有台皿	(9.6)	〈3.7〉	6.6	64.7	体部 2/3 欠損	ロクロ整形、底部回転ヘラ切り。	雲母・白色粒子・白色針状物質微量	良好	内外面　にぶい褐	内外面赤彩
23	覆土	灰釉陶器	椀	—	〈1.5〉	—	3.0	体部片	器壁は薄く緩やか内湾し立ち上がる。外面回転ヘラケズリ後回転ナデ。	鉄分の噴出し微量	良好	胎土　淡灰 釉　暗淡緑	猿投 K14 ～ 90 【378】実 98-2-088
24	覆土	灰釉陶器	椀・皿類	—	〈1.9〉	(6.9)	8.9	底部片	高台は比較的高く断面三日月形を呈するが内側下半の内湾が弱い。	鉄分の噴出し微量	良好	胎土　灰白 釉　暗淡緑	猿投 K90 【379】実 98-2-089・98-2-090
25	覆土	灰釉陶器	長頸瓶	—	〈5.0〉	—	19.1	頸部 10%	器壁は比較的薄く緩やかに外反し立ち上がる、外面に強く密なロクロ目。	鉄分の噴出し多い	良好	胎土　灰白（赤褐） 釉　暗淡緑色自然釉	猿投 K14 【380】実 98-2-091
26	覆土	灰釉陶器	長頸瓶	—	〈3.0〉	(8.4)	54.7	体下端～底部 1/4	器壁は比較的薄くほぼ直線的に立ち上がる、高台は比較的高く断面矩形で内傾面を有す。	鉄分の噴出し多い	良好	胎土　灰白 釉　暗淡緑自然釉（内面釉垂れ）	猿投 K90 【381】実 98-02-092
27	覆土	灰釉陶器	長頸瓶	(10.5)	〈2.0〉	—	6.6	口縁 15%	器壁は比較的厚く緩やかに外反し立ち上がり頸部に至る。端部のメリハリは大きい。	鉄分の噴出し少量	良好	胎土　淡灰褐 釉　暗淡緑自然釉	美濃光ヶ丘 1 【382】実 98-2-093
28	覆土	灰釉陶器	長頸瓶	—	〈1.7〉	—	9.7	頸部片	器壁は比較的厚く強く外反し立ち上がる。	鉄分の噴出しやや多い	普通	胎土　灰白 釉　暗淡緑	猿投 K90 【383】実 98-2-094
29	覆土	灰釉陶器	長頸瓶	—	〈2.5〉	—	10.3	胴部片	回転ヘラケズリ、施釉により回転ナデの有無は不明、器壁は薄く丸みを持って立ち上がる。	鉄分の噴出し細かく少量	良好	胎土　灰白 釉　暗淡緑	猿投 K14 ～ 90 【384】実 98-2-095
30	覆土	須恵器	長頸瓶	—	〈1.5〉	—	8.1	頸部片	器壁は比較的薄い。頸部と体部の接合 3 段。	鉄分の噴出し極多い	良好	胎土　淡灰釉　暗淡緑	東海系　8C 代 【385】実 98-2-096
31	覆土	瓦	平瓦	タテ〈12.5〉	ヨコ〈13.8〉	厚 2.6	448.4	下縁・左側縁残存	凹面布目圧痕、側・下端ケズリ。凸面縄目回転圧痕。端・側面ケズリ。	白色粒子少量	良好	内外面　浅黄	
32	覆土	瓦	丸瓦	タテ〈12.2〉	ヨコ〈9.8〉	厚 1.8	286.4	下縁・右側縁残存	凸面タテケズリカ。凹面糸切り痕、布目圧痕。端・側面ケズリ。	雲母・白色粒子少量	良好	内外面　灰	
33	覆土	土製品	獣脚ヵ	タテ〈4.7〉	ヨコ〈3.2〉	厚 3.0	43.3	上部欠損	断面不正楕円形を呈するもので、端部（接地面）は潰れが観察される。	雲母・白色粒子少量	良好	内外面　にぶい黄橙	
34	覆土	金属製品	銅鉋	(16.0)	〈2.0〉	厚 0.02 ～ 0.15	6.0	口縁～体部 1/10	いわゆる佐波理椀。体部の丸味は少なく、やや大きく開く。口縁端部は玉縁状に厚くなる。内面には沈線状のわずかな段が見られる。暗緑色を呈し、やや緑青が見られるものの、状態は良い。				
35	覆土	鉄製品	金具	タテ 8.2	ヨコ 11.0	厚 0.2	36.6	右側先端部欠損	コの字形の製品。幅約 1cm の薄い棒状品を曲げた状態。取り付けの部位や痕跡は確認できない。特別、付着物もない。				
36	覆土	石製品	砥石	タテ〈5.1〉	ヨコ〈2.2〉	厚〈1.7〉	21.7	上下右欠損	携帯型・提げ砥。欠損により表・左面の使用面が残る。表面は凹面、左面は平坦面を呈する。石材：凝灰岩。				

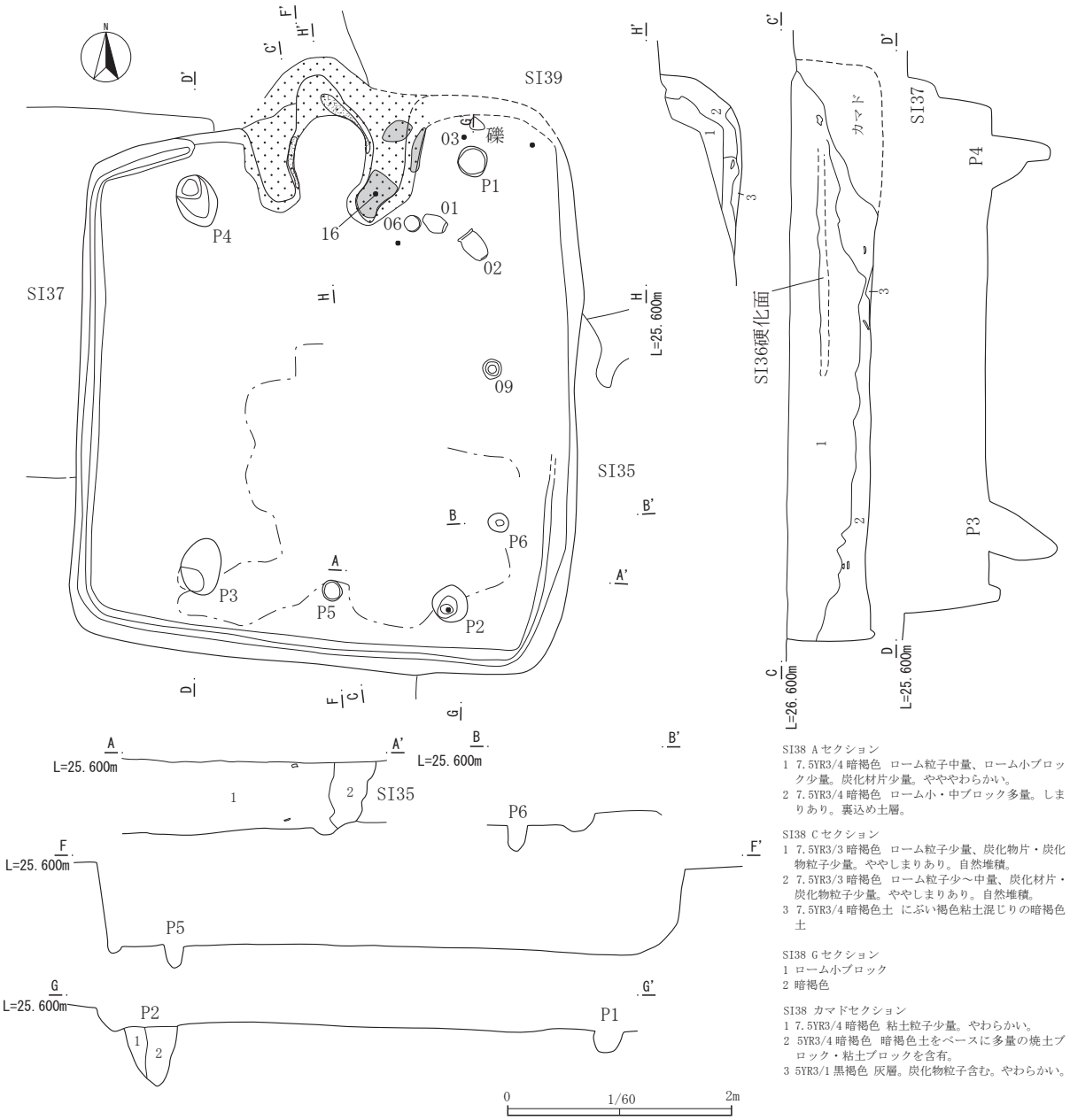
SI38（第 78 ～ 80 図、第 45・46 表、遺構図版 9・10、遺物図版 13・14）

検出位置：調査区北西端部 B・C2 グリッド。**平面形状**：方形。**主軸方向**：N。**規模**：5.2m × 4.47m。**確認面下の深さ**：63 ㎝。**覆土**：3 層に分層され、自然堆積。**柱穴**：コーナー部分に各 1 基、南壁際中央部分に 1 基、東壁際南寄りに 1 基の 5 基が検出されている。**壁溝**:カマド部分を除きほぼ全周するものであろうか、北東コーナー側は明瞭ではない。幅 26 ㎝、深さ 18 ㎝前後。**床面**：平坦。**カマド**：北壁中央付近に設置され、壁際主軸部分の全長は 156 ㎝で、西壁から 40 ㎝ほど掘り出される。山砂及び粘土により構築された袖が大きく湾曲して設置される。**その他付帯施設**：なし。**重複関係**：SI35・36・37・39 と重複関係にある。SI35 よりも新しく SI37 よりも古い。SI36 は本住居よりも新しいが、床面の一部を検出したのみで他の遺構との新旧関係は不明。SI39 は本住居跡により切られ、これらの新旧関係では最も古くなる。

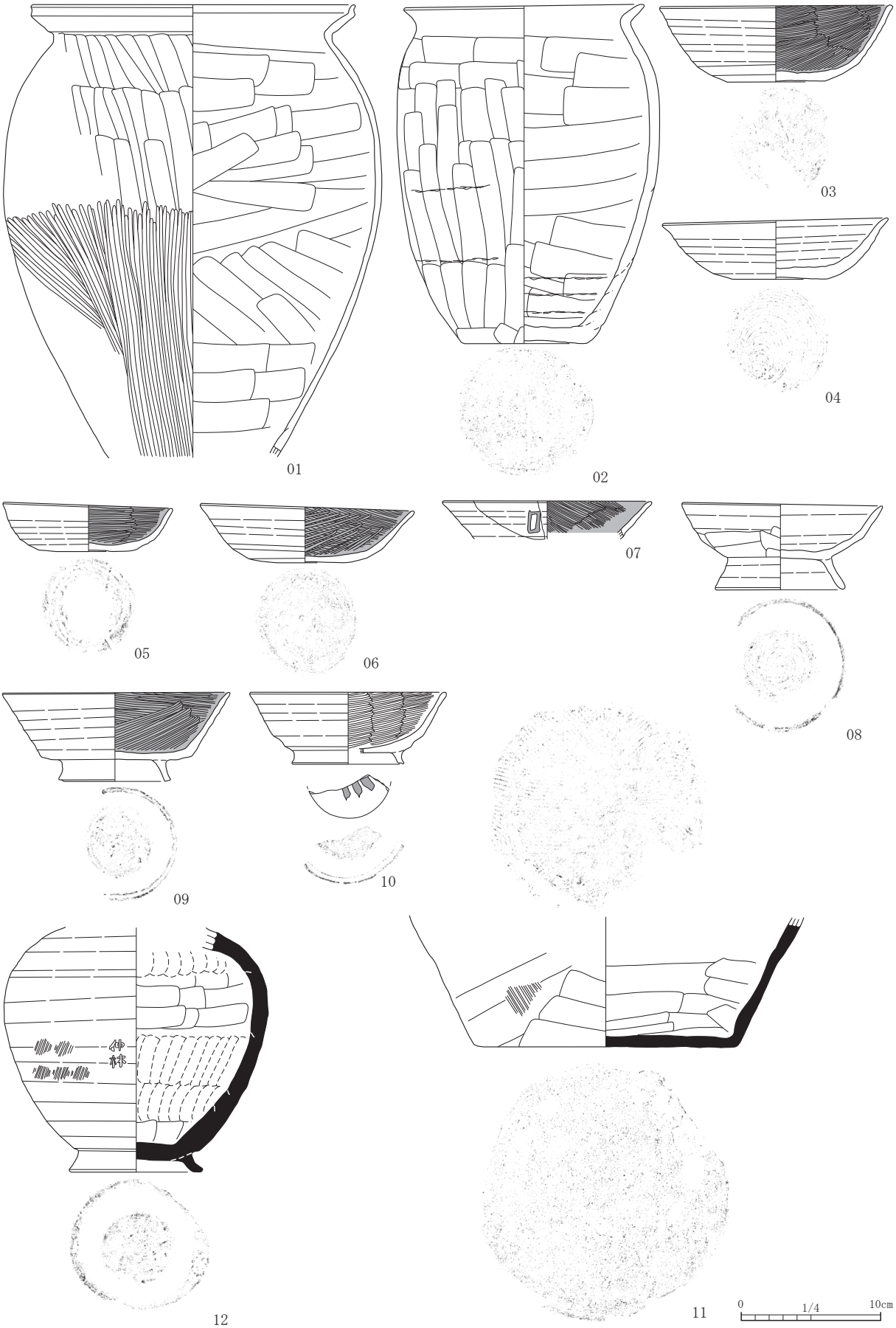
掲載遺物：土師器無台坏 5 点（墨書土器 1 点「□」）、有台埦 3 点（墨書土器 1 点「□）、甕 2 点、須恵器無台坏 5 点（漆付着 1 点）、有台坏 3 点（刻書 1 点「□」）、大甕 1 点、瓶 1 点（刻書土器「仲林」）、緑釉陶器皿 1 点（猿投 K90）、灰釉陶器長頸瓶 1 点（猿投 K14 ～ K90）、平瓦 1 点、丸瓦 1 点、砥石 2 点。

その他未掲載遺物：土師器 25055.6g、須恵器 10203g、瓦 172.9g、鉄製品 144.5g、石製品 586.9、礫 1161.6g。

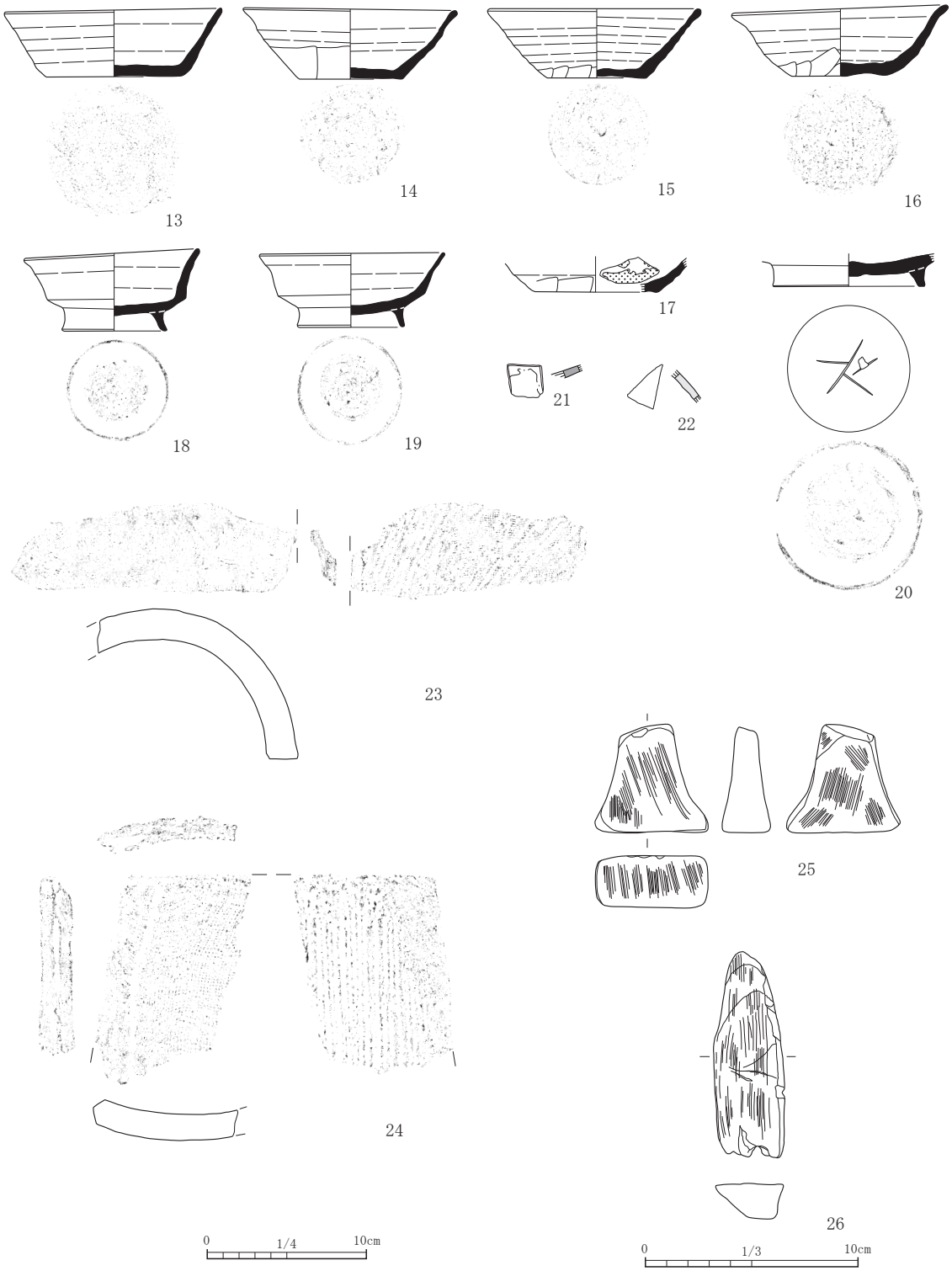
遺構の帰属時期：土師器の甕・無台坏、有台埦等から 9 世紀後半の遺構と判断される。一方で、12 ～ 20 の須恵器は 9 世紀前半の遺物であり SI35 の遺物、21・22 の灰釉陶器は 9 世紀後半の遺物とすれば本遺構の遺物であろう。同時に、SI37 出土の灰釉陶器も本遺構に伴うものの可能性が高い。



第 78 図　SI38



第 79 図　SI38 出土遺物（1）



第 80 図　SI38 出土遺物（2）

第 45 表　SI38 出土遺物観察表（1）

掲載番号	注記	種類	器種	口径	器高	底径	重量	残存	整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
01	3	土師器	甕	(23.0)	〈31.7〉	—	558.0	口縁 1/2 ～胴部 1/3	最大径を上位に有し口唇は摘み上げられる。口縁は内外面共に横ナデ、胴部外面下半はミガキ、内面はナデ。	雲母少量、白色粒子多い	良好	内面　にぶい褐 外面　橙	常総型甕
02	4	土師器	甕	16.8	23.6	8.8	1,509.2	ほぼ完形	胴部の張りが弱い寸胴形の甕。口縁は内外面共に横ナデ、胴部外面は縦方向のヘラケズリ、内面は横方向のナデ整形。輪積痕複数残る。	白色粒子少量	良好	内外面　にぶい黄橙	底部木葉痕

第 46 表　SI38 出土遺物観察表（2）

掲載番号	注記	種類	器種	口径	器高	底径	重量	残存	整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
03	7	土師器	無台坏	16.4	5.45	7.0	257.2	ほぼ完形	ロクロ整形、体部下端～底部回転ヘラケズリ。内面ミガキ。	雲母・白色粒子やや多い、白色針状物質多い	良好	内面　黒 外面　にぶい橙	内面黒色処理
04	覆土	土師器	無台坏	16.0	4.1	6.6	197.3	口縁 1/2 欠損	ロクロ整形、底部回転糸切り（左）。	雲母・白色粒子・赤色粒子・黒色粒子・スコリア少量	良好	内面　にいぶ橙 外面　にぶい黄橙	
05	覆土	土師器	無台坏	11.9	3.2	7.0	99.9	ほぼ完形	ロクロ整形、底部回転ヘラ切り。内面ミガキ。	雲母多い、白色粒子少量、スコリアやや多い	良好	内面　黒褐 外面　にぶい橙	内面黒色処理
06	2	土師器	無台坏	15.1	3.8	6.6	215.2	ほぼ完形	ロクロ整形、体部下端回転ヘラケズリ、底部回転ヘラケズリ後ナデ。	雲母・白色粒子やや多い	良好	内面　黒 外面　にぶい黄橙	内面黒色処理
07	覆土	土師器	無台坏	(14.7)	〈2.6〉	—	7.1	口縁破片	ロクロ整形。	雲母少量、白色粒子やや多い	良好	内面　黒褐 外面　にぶい黄橙	内面黒色処理 墨書「□」
08	覆土	土師器	有台埦	14.1	6.1	9.0	209.0	口縁 1/4 欠損	ロクロ整形、体部下端広く手持ちヘラケズリ、底部回転ヘラケズリ。高台は高さがある。	雲母・白色粒子少量、黒色粒子やや多い、スコリア微量	良好 二次焼成ｱﾘ	内外面　にぶい褐	
09	5	土師器	有台埦	16.1	6.2	7.2	297.8	ほぼ完形	ロクロ整形、底部回転ヘラケズリ。内面ミガキ。	雲母・白色粒子少量	良好	内面　黒 外面　にぶい黄橙	内面黒色処理 内外面共に漆様塗布物付着
10	覆土	土師器	有台埦	(13.6)	〈5.0〉	(8.0))	65.6	1/4	ロクロ整形、体部下端・底部回転ヘラケズリ。内面ミガキ。	雲母・白色針状物質多い、白色粒子少量、黒色粒子やや多い	良好	内面　黒 外面　にぶい黄橙	内面黒色処理 墨書「□」
11	覆土	須恵器	大甕	—	〈9.2〉	18.5	482.9	胴部下端～底部	バケツ型ヵ。胴部はヘラケズリが行われているが、部分的に平行叩きが確認される、内面はナデ、底部は平行叩きが施されている。	雲母・白色粒子多い、スコリアやや多い	還元不良	内面　にぶい褐 外面　褐灰	砂目
12	18	須恵器	瓶	—	〈17.0〉	8.7	1,752.7	胴部～底部	ロクロ整形、外面胴部平行叩き僅かに観察される、下端・底部回転ヘラケズリ。内面指頭圧痕・ナデ整形が行われている。器壁は厚い。	白色粒子・鉄分の噴出しやや多い	良好	内面　黄灰 外面　灰	刻書「仲林」
13	覆土	須恵器	無台坏	13.4	4.1	8.5	135.7	口縁～体部 1/2 欠損	ロクロ整形、底部の調整不明。	雲母多い、白色粒子少量	良好	内面　灰黄 外面　黄灰	新治産
14	カマド	須恵器	無台坏	13.1	4.2	6.5	150.9	ほぼ完形	ロクロ整形、体部下半広く手持ちヘラケズリ、底部一方向の手持ちヘラケズリ。	雲母少量、白色粒子多い、スコリア微量	良好	内外面　黄灰	新治産
15	覆土	須恵器	無台坏	13.0	4.2	6.2	120.3	口縁 1/4 欠損	ロクロ整形、体部下端手持ちヘラケズリ、底部回転ヘラケズリ後一方向の手持ちヘラケズリ。	雲母・白色粒子多い	やや還元不良	内面　黄灰 外面　にぶい黄褐	新治産
16	カマド 1	須恵器	無台坏	13.2	4.1	6.1	162.7	口縁 1/4 欠損	ロクロ整形、体部下端手持ちヘラケズリ、底部回転糸切り後ナデ。	白色粒子多い	良好	内外面　褐灰	ヘラ記号 新治産
17	覆土	須恵器	無台坏	—	〈2.2〉	(7.8)	10.2	体部～底部の破片	ロクロ整形、体部下端手持ちヘラケズリ、底部回転ヘラ切り。	白色粒子多い	良好	内外面　黄灰	漆付着
18	覆土	須恵器	有台坏	10.8	4.7	6.2	116.5	ほぼ完形	ロクロ整形、体部下端・底部回転ヘラケズリ。	白色粒子多い	やや還元不良	内面　褐灰 外面　黒褐	新治産 内面自然釉
19	カマド	須恵器	有台坏	(11.4)	4.1	6.4	88.7	口縁～体部 1/2 欠損	ロクロ整形、体部下端・底部回転ヘラケズリ。	鉄分の噴出し多い、小～中礫やや多い	良好	内面　灰黄褐 外面　黄灰	常陸産ヵ 内面自然釉
20	覆土	須恵器	有台坏	—	〈2.0〉	9.4	143.9	底部のみ	ロクロ整形、身込で緩やかに内湾する。高台は「ハ」の字に付される。内面の墨痕及び磨滅の状態から転用硯の可能性あり。	白色粒子・鉄分の噴出し少量、小礫微量	良好	内外面　黄灰	転用硯ヵ 刻書
21	カマド	緑釉陶器	皿	—	〈0.8〉	—	2.4	体部片	器壁は比較的薄く僅かに内湾し立ち上がる。表面全体を施釉前にヘラミガキ。	鉄分の噴出し微量	良好	胎土　白 釉　淡緑	猿投 K90 軟質 【298】実 98-2-006
22	覆土	灰釉陶器	長頸瓶	—	〈2.0〉	—	2.4	胴部片	器壁は比較的薄くやや丸みをもって立ち上がる。	鉄分の噴出し少量	良好	胎土　灰白 釉　暗淡緑（外面全体に黄色がかった暗淡緑、自然釉の可能性あり）	猿投 K14 ～ 90 【386】実 98-2-097
23	覆土	瓦	丸瓦	タテ (5.7)	ヨコ (15.0)	厚 1.9	288.8	右側縁残存	凸面ヨコナデ。凹面布目圧痕、側端ケズリ。側面ケズリ。	白色粒子少量	良好	内外面　黄灰	
24	覆土	瓦	平瓦	タテ (13.0)	ヨコ (9.0)	厚 1.9	302.2	上縁・左側縁残存	凹面布目圧痕（布縁あり）、側端ケズリ。凸面縄目回転圧痕。端・側面ケズリ。	雲母微量、白色粒子やや多い	良好	内外面　灰黄	
25	覆土	石製品	砥石	タテ 5.1	ヨコ 5.35	厚 2.5	65.9	上部欠損ヵ	携帯型・提げ砥。上部破断面も使用。他の５面とも使用面。表裏左右面は凹面、下面は凸面を呈する。右側面の下位には溝状の段を有する。石材：凝灰岩。				
26	覆土	石製品	砥石	タテ 9.8	ヨコ 3.3	厚 2.1	65.0	不明	携帯型・提げ砥。棒状の打割礫の１面を使用したものか、表面以外は欠損面であるのか不明瞭。使用面は凸面を呈する。石材：凝灰岩。				

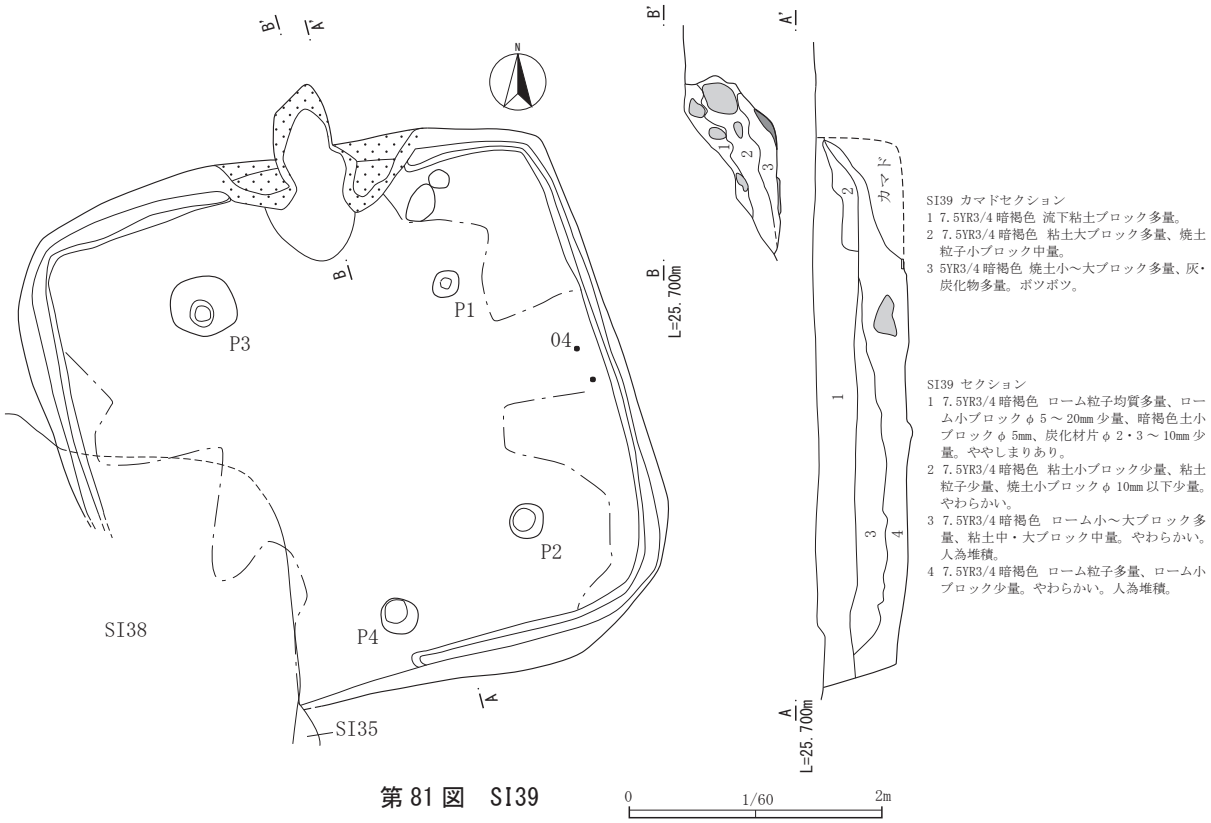
SI39（第 81・82 図、第 47・48 表、遺構図版 10、遺物図版 14）

検出位置：調査区北西端部 B2・3 グリッド。**平面形状**：ほぼ正方形。**主軸方向**：N-12°-W。**規模**：4.37m × 4.5m。**確認面下の深さ**：65 cm。**覆土**：暗褐色土の 4 層に分層され、自然堆積。**柱穴**：南西を除く 3 方の壁際に主柱穴、南壁際の中央付近に入口ピット 1 基が検出されている。**壁溝**：カマド部分を除きほぼ全周するものであろう。幅 17 cm前後。**床面**：平坦。**カマド**：北壁中央付近に設置され、壁際主軸部分の全長は 141 cmで、西壁から 51 cmほど掘り出される。山砂及び粘土により構築される。**重複関係**：SI38 によって南西コーナー部分を切られている。SI35 との切り合い関係は不明瞭。

掲載遺物：土師器無台坏 2 点（墨書土器 1 点「十万」）、小皿 1 点、須恵器無台坏 1 点、蓋 1 点、羽釜 1 点、灰釉陶器椀 1 点（猿投 K14 ～ K90-1）。

その他未掲載遺物：土師器 5500.5g、須恵器 3165.5g、瓦 340.8g、陶器 7.5g、礫 380.9。

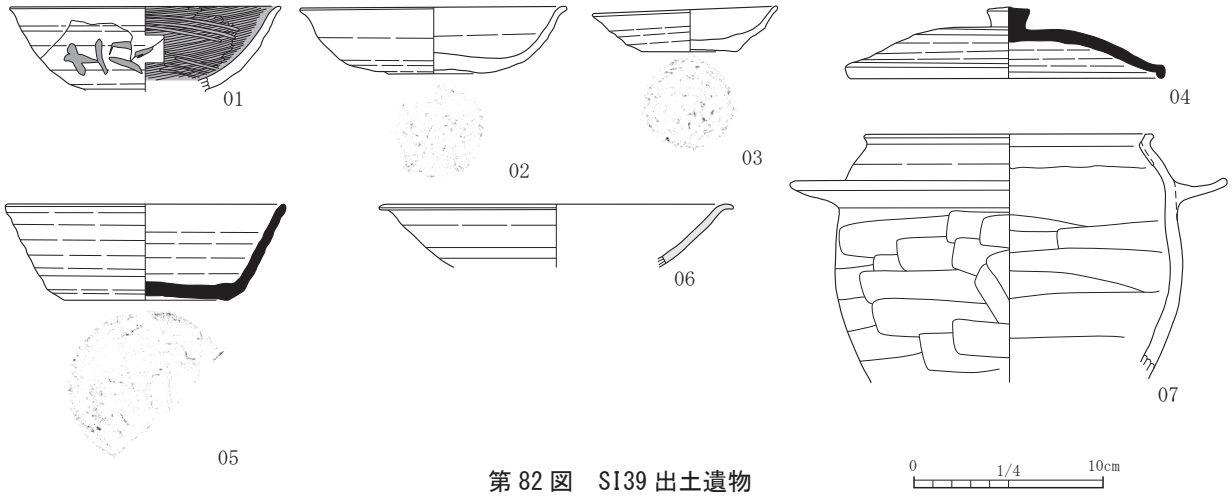
遺構の帰属時期：須恵器の坏・蓋と灰釉陶器椀は 8 世紀後半から末の遺物、その他の土師器は羽釜の出現も含め 10 世紀後半の時期が想定できる。遺構の形状及び遺物の出土状況から判断して 8 世紀末の遺構と判断されるが、10 世紀後半代の遺物を SI37 由来とするのは直接重複関係がないことから齟齬がある。何らかの土坑または調査時における遺物の取り上げミスの可能性もある。



第 81 図　SI39

第 47 表　SI39 出土遺物観察表（1）

掲載番号	注記	種類	器種	口径	器高	底径	重量	残存	整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
01	覆土	土師器	無台坏	(13.0)	〈4.5〉	—	57.1	口縁～胴部 1/4	ロクロ整形、内面ミガキ。	雲母多い、白色粒子やや多い	良好	内面　黒 外面　にぶい橙	内面黒色処理 墨書「十万」
02	覆土	土師器	無台坏	13.8	3.5	4.9	136.5	口縁 4/1 欠損	ロクロ整形、回転糸切り（左）。	雲母・白色粒子・黒色粒子多い、スコリア少量	良好	内外面　橙	
03	覆土	土師器	小皿	9.6	2.1	4.9	58.2	口縁 4/1 欠損	ロクロ整形、回転糸切り（右）。	雲母多い、白色粒子・黒色粒子少量	良好	内外面　にぶい橙	
04	カマド・1	須恵器	蓋	(16.3)	〈3.6〉	ツマミ径 2.2	155.9	口縁 7/8 欠損	ロクロ整形、ツマミは擬宝珠状を呈す。天井の回転ヘラケズリは 1/5、返しは無い。	小～中礫多い、白色針状物質微量	良好	内外面　灰	内面朱墨痕あり 転用硯ヵ



第 82 図　SI39 出土遺物

第 48 表　SI39 出土遺物観察表（2）

掲載番号	注記	種類	器種	口径	器高	底径	重量	残存	整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
05	覆土	須恵器	無台坏	(14.5)	4.9	8.7	114.3	2/3	ロクロ整形、体部下端回転ヘラケズリ、底部回転ヘラ切り後ナデ。	小～中礫少量、雲母・白色針状物質微量	良好	内外面　灰白	底部ヘラ記号
06	覆土	灰釉陶器	椀	(18.0)	〈3.3〉	—	7.6	口縁～体部片	体部下位を回転ヘラケズリご回転ナデ、器壁は薄く緩やかに内湾して立ち上がり口縁端部で強く外反。	鉄分の噴出し微量	良好	胎土　灰白 釉　暗淡緑	猿投 K14 ～ 90- Ⅰ 【387】実 98-2-098
07	覆土	土師器	羽釜	(14.7)	〈12.7〉	—	209.6	口縁～胴部上端 1/4	ロクロ整形ヵ、口縁で折返した後短く屈曲し面取りが行われている。鍔は横ナデ、胴部横方向のヘラケズリ。内面ナデ。	雲母少量、白色粒子やや多い	良好	内面　にぶい褐 外面　褐灰	

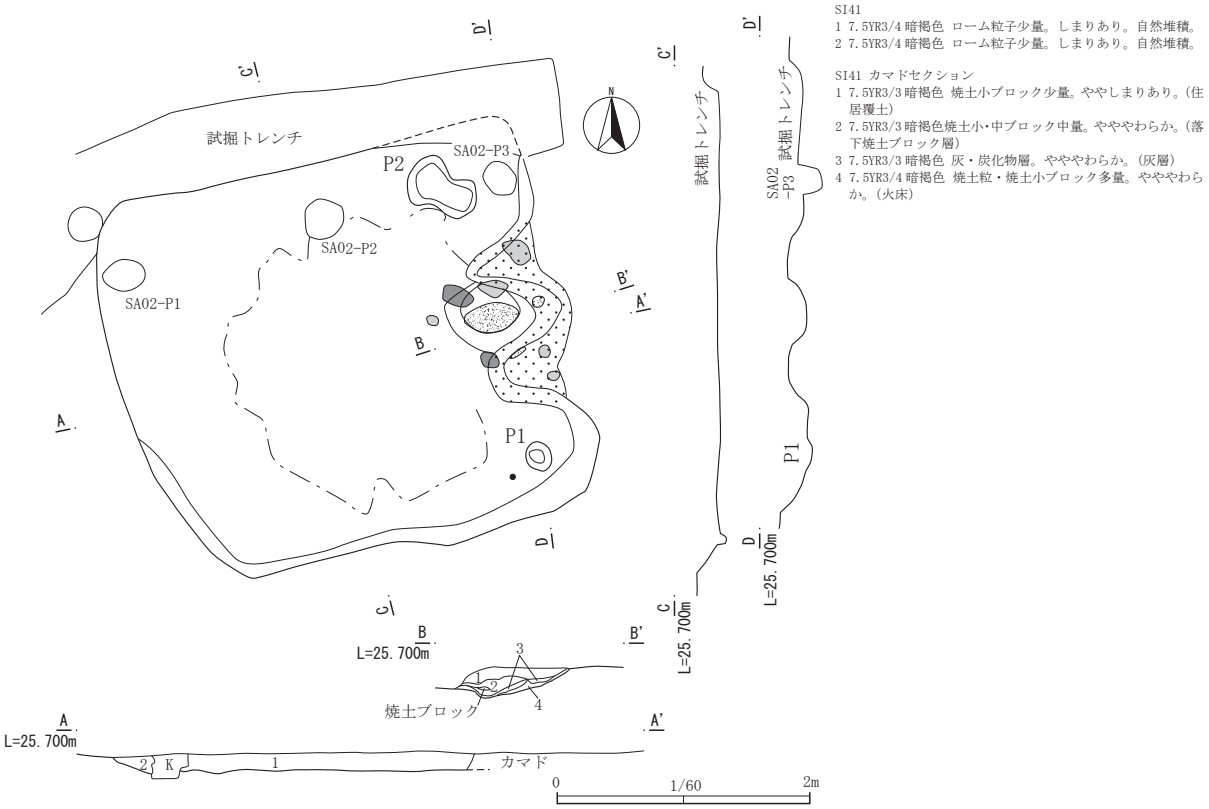
SI41（第 83・84 図、第 49 表、遺構図版 10、遺物図版 14）

検出位置：調査区北西端部 B2 グリッド。**平面形状**：正方形。**主軸方向**：N - 69°-E。**規模**：3.15m × 3.57m。**確認面下の深さ**:14 ㎝。**覆土**:暗褐色土を基調に 3 層に分層される。自然堆積。**柱穴**:南東コーナー部分に 1 基、北側壁寄りに 4 基が検出されている。後者の内 3 基はほぼ等間隔に配列されるもので、北側に近接する SA01 同様の配置関係にあることから、柵跡（SA02）の可能性を考えた。したがって本住居に伴う可能性があるピットは P1・2 の 2 基と判断される。**壁溝**：エレベーション（C）では南壁に確認できる。**床面**：平坦。**カマド**：北壁中央付近に設置され、壁際主軸部分の全長は 82 ㎝で、西壁から 60 ㎝ほど掘り出される。山砂及び粘土により構築された袖が大きく開いて設置される。中央部分には火床面が東西方向の楕円形に広がる。**その他付帯施設**：なし。**重複関係**：SA02 と重複関係にあり、本住居跡より新しいものと判断される。

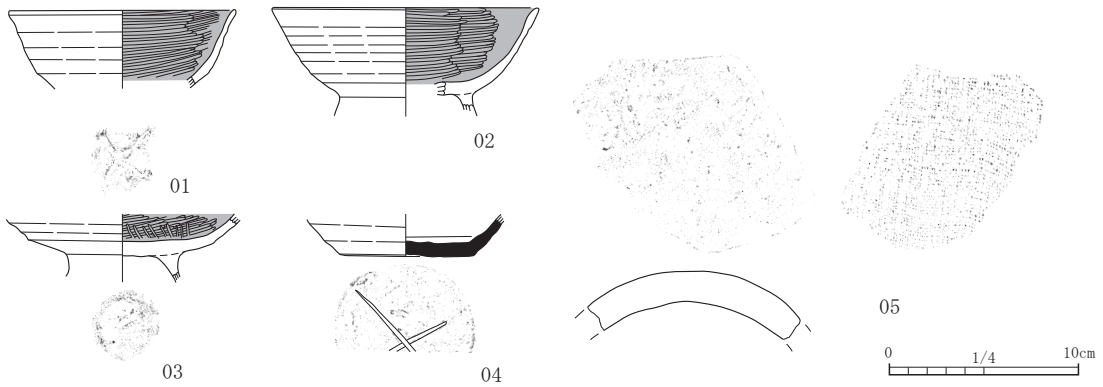
掲載遺物:土師器無台坏 1 点、有台埦 2 点（刻書 1 点「×」）、須恵器無台坏 1 点（刻書 1 点「×」）、丸瓦 1 点。

その他未掲載遺物:土師器 1609.4g、須恵器 1117.7g、瓦 109.3g、鉄塊 114.7g、礫 158.9。**近世以降の遺物**:陶器 28.2g。

遺構の帰属時期：土師器内黒有台埦 2 点が出土しており、10 世紀前半の遺構と判断される。一方、須恵器 04 はやや古い遺物で混入した可能性がある。



第 83 図　SI41



第 84 図　SI41 出土遺物

第 49 表　SI41 出土遺物観察表

掲載番号	注記	種類	器種	口径	器高	底径	重量	残存	整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
01	カマド	土師器	無台坏	(12.0)	〈4.0〉	—	31.8	口縁～胴部 1/3	ロクロ整形。	雲母多い	良好	内面　褐灰 外面　にぶい橙	
02	覆土	土師器	有台埦	(13.9)	〈5.6〉	—	39.3	口縁～底部 1/3	ロクロ整形、体部下端回転ヘラケズリ、内面ミガキ。	雲母・白色粒子少量	良好	内面　にぶい黄褐 外面　にぶい黄橙	
03	覆土	土師器	有台埦	—	〈3.5〉	—	101.2	体部下端～底部上端	ロクロ整形、体部下端回転ヘラケズリ、底部回転糸切り後ナデ。	雲母・白色粒子少量	良好	内面　黒褐 外面　にぶい黄褐	内面黒色処理 内面底部ミガキ状 刻書「×」 内面に黒色物付着
04	カマド	須恵器	無台坏	—	〈2.2〉	7.1	51.9	体部下端～底部 2/3	ロクロ整形、底部回転ヘラ切り後ナデ。	白色粒子・白色針状物質やや多い	良好	内外面　灰	刻書「×」 新治産
05	覆土	瓦	丸瓦	タテ (10.7)	ヨコ (11.3)	厚 1.8	243.9	端・側縁残らず	凸面ナデ。凹面布目圧痕。	雲母微量、白色粒子少量	良好	内面　にぶい黄橙 外面　灰黄	

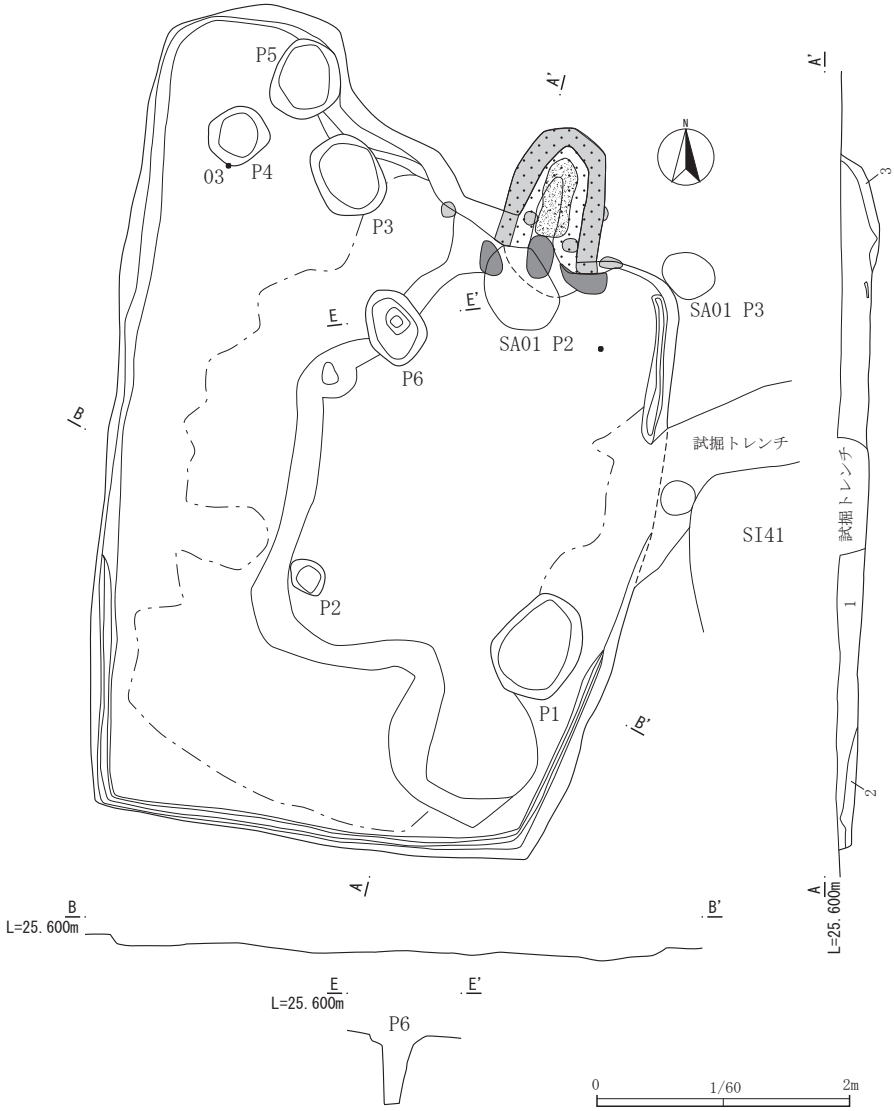
SI42（第 85・86 図、第 50 表、遺構図版 10、遺物図版 14）

検出位置：調査区北西端部 A・B1、A・B2 グリッド。**平面形状**：長方形。**主軸方向**：N－11°-E。**規模**：6.5m × 4.42m。**確認面下の深さ**：23 cm。**覆土**：確認面が浅く暗褐色土の 3 層。**柱穴**：東壁中央部分に 1 基、床面段差部分にて 1 基、棚状に突出する北西部分に 3 基、合計 6 基が検出されている。**壁溝**：カマド部分を除きほぼ全周する。幅 14 cm前後。**床面**：カマドの西側袖延長から南側壁に向かい蛇行する、西側がおよそ 10 cmの段差を有する。**カマド**:北壁東寄りに設置され、壁際主軸部分の全長は 82 cmで、西壁から 60 cmほど掘り出される。山砂及び粘土により構築された袖が大きく開いて設置される。中央部分には火床面が南北方向の楕円形に広がる。**その他付帯施設**：北西コーナー部分が方形に突出しており棚状の施設が想定される。**重複関係**：SA01 と重複し、本住居跡の方が古い。

掲載遺物：土師器坏無台坏 1 点（墨書「□」）、有台埦 1 点、小皿 3 点、有台皿 1 点、有台小皿 1 点、灰釉陶器椀 1 点（美濃ヵ）、長頸瓶 1 点（猿投 K90）、壺・瓶類 1 点（美濃不明）、平瓦 1 点、鉄製品金具 1 点。

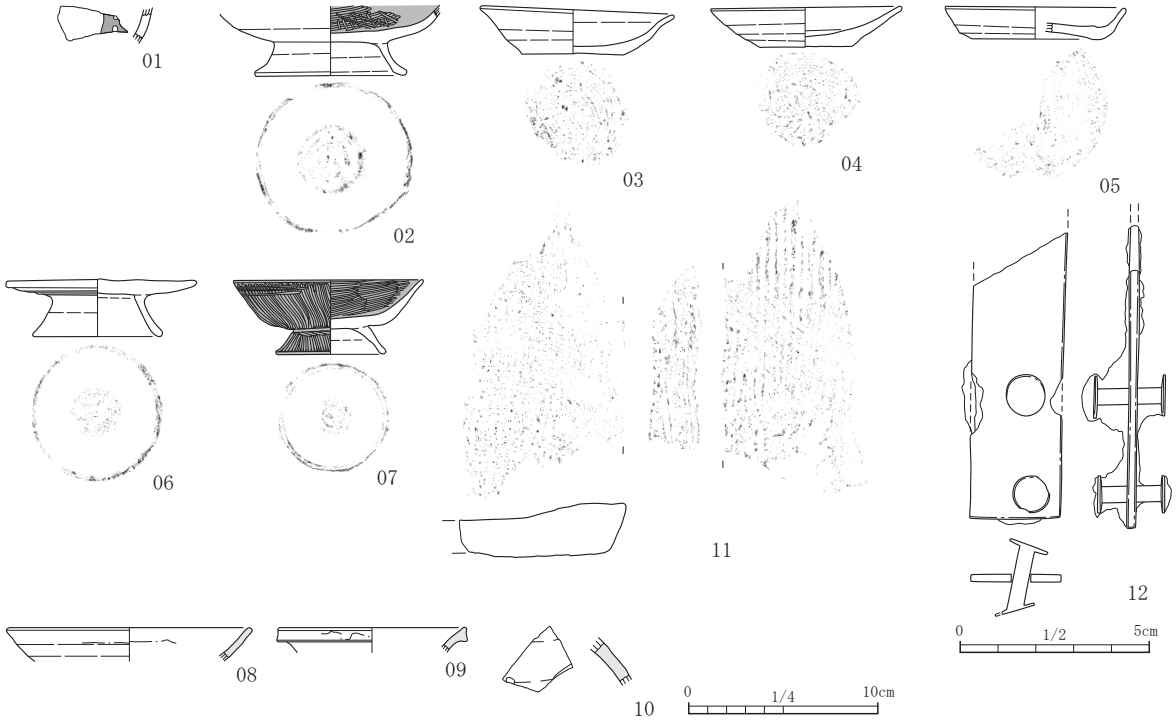
その他未掲載遺物：土師器 4202.2g、須恵器 1037.6g、瓦 25.6g、鉄塊 96.1g、礫 234.1。**近世以降の遺物**：陶器 52.1g。

遺構の帰属時期：土師器小皿、黒色土器 B 類埦の出土があり 11 世紀と判断した。灰釉陶器片が出土しているが 9 世紀後半代の黒笹 90 号窯式で、時期差がある。



SI42 セクション
1 7.5YR3/4 暗褐色　ローム粒子少量、炭化物粒子極少量。ややしまりあり。自然堆積。
2 7.5YR3/4 暗褐色　ローム粒子少量、ローム小ブロック少量。ややしまりあり。自然堆積。
3 7.5YR3/4 暗褐色　ローム粒子少量、粘土小・中ブロック中量。ややしまりあり。自然堆積。

第 85 図　SI42



第 86 図　SI42 出土遺物

第 50 表　SI42 出土遺物観察表

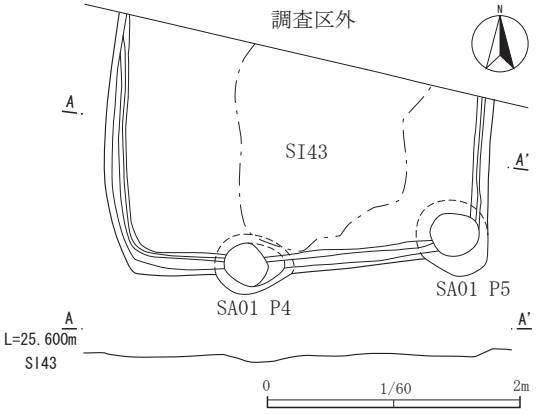
掲載番号	注記	種類	器種	口径	器高	底径	重量	残存	整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
01	覆土	土師器	無台坏	—	高さ〈1.2〉	—	3.9	体部破片	ロクロ整形。	雲母少量	良好	内外面　橙	墨書「□」
02	覆土	土師器	有台埦	—	〈3.7〉	7.9	83.9	体部下端～底部	ロクロ整形、底部回転ヘラケズリ後ナデ。内面ミガキ。	白色粒子やや多い	良好	内面　黒褐 外面　にぶい黄橙	内面黒色処理
03	1	土師器	小皿	10.3	2.3	5.4	76.8	ほぼ完形	ロクロ整形、底部回転糸切り（左）。	雲母・黒色粒子微量、スコリア少量、白色粒子多い	良好	内外面　にぶい橙	
04	覆土	土師器	小皿	10.0	2.0	5.0	64.0	3/4	ロクロ整形、底部回転糸切り（左）。	白色粒子・黒色粒子多い、スコリア微量	良好	内外面　にぶい橙	
05	覆土	土師器	小皿	(9.3)	1.2	7.0	37.6	1/2	ロクロ整形、底部回転糸切り（左）。	雲母・白色粒子・スコリア少量	良好	内外面　にぶい黄橙	
06	覆土	土師器	有台小皿	10.1	3.0	6.8	105.2	ほぼ完形	ロクロ整形、底部回転糸切り後ナデ。	雲母・白色粒子・スコリア少量、白色針状物質微量	良好	内外面　橙	
07	覆土	土師器	有台埦	10.0	3.8	5.5	83.9	2/3	ロクロ整形、外面体部～高台ミガキ、内面ミガキ、底部回転ヘラケズリ後ナデ。	雲母やや多い、白色粒子少量、白色針状物質少量	良好	内外面　黒褐	内外面黒色処理
08	覆土	灰釉陶器	椀	(12.7)	〈1.7〉	—	4.0	口縁部10%	器壁は比較的薄く緩やかに内湾して立ち上がる立ち上がり端部で僅かに外反。	鉄分の噴出し細かく少量	良好	胎土　灰白 釉　白（漬け掛け）	美濃ヵ不明 【388】実 98-2-099
09	覆土	灰釉陶器	長頸瓶	(9.8)	〈1.8〉	—	4.0	口縁部10%	器壁は比較的薄く外反して立ち上がる立ち上がり端部に至る。口縁端部のメリハリは小さい。	鉄分の噴出し細かい	良好	胎土　灰白 釉　暗淡緑	猿投 K90 【389】実 98-2-100
10	覆土	灰釉陶器	壺・瓶類	—	〈2.5〉	—	8.3	胴部片	器壁は比較的厚く丸みを持って立ち上がる。	鉄分の噴出し微量	良好	胎土　淡灰褐 釉　暗淡緑	美濃不明 【390】実 98-2-101
11	覆土	瓦	平瓦	タテ(16.2)	ヨコ(8.7)	厚2.6	355.5	右側縁残存	凹面糸切り痕、布目圧痕。凸面縄目回転圧痕。側面ケズリ。	雲母微量、白色粒子少量	良好	内面　にぶい黄橙 外面　灰白	凸面に平滑面あり。再利用ヵ。
12	覆土	鉄製品	金具	長〈7.5〉	幅2.4	厚0.2	38.7	上部欠損	用途不明の金具。長方形の鉄板の一端に長さ 2cm 程、太さ 4mm の鋲が 2 か所残る。鋲の長さから、固定部材は厚さ 7 ～ 8mm と考えられるが、材質を推定できる痕跡はない。				

SI43（第 87・88 図、第 51 表、遺構図版 10、遺物図版 14）

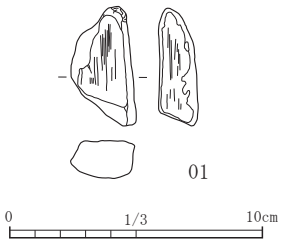
検出位置:調査区北西端部 A2 グリッド。北側が調査区域外となる。**平面形状**:不明。主軸方向　不明。**規模**:—× 3.07m。**確認面下の深さ**：6 cm。**覆土**：住居跡の覆土は確認面が浅く暗褐色土の単層。**柱穴**：検出されていない。**壁溝**：検出部分はほぼ全周する。幅 14 cm前後。**床面**：平坦。**カマド**：調査区外に設置ヵ。**その他付帯施設**：なし。**重複関係**：SA02 と重複するが明確な新旧関係はつかめていない。

掲載遺物：砥石１点。**その他未掲載遺物**：土師器271.7g、須恵器93.3g。

遺構の帰属時期：出土遺物として掲載できたのは砥石１点で、時期が判断できる資料はない。



第87図　SI43



第88図　SI43出土遺物

第51表　SI43出土遺物観察表

掲載番号	注記	種類	器種	口径	器高	底径	重量	残存	整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
01	覆土	石製品	砥石	タテ〈4.7〉	ヨコ 2.6	厚 1.6	20.5	下部欠損	携帯型・提げ砥。表面・右側面が使用面。裏面は礫表皮を残す。使用面は両面とも平坦。石材：凝灰岩。				

第２節　土 坑（第89～93図、第52～55表、遺構図版9・11・12、遺物図版14～16）

本調査で検出された土坑は１号から44号まで番号を付しているが、土坑と判断したものは35基である。SK32は遺構測量図・遺物ともなく欠番とした。また、遺構原図に土坑（SK）表記があるものの、無番のものについては個別に扱うことは避けた。遺構の詳細については一覧表（第52表）にまとめた。ここでは、全体の概略を記載する。

土坑の平面形状は直径2m前後の円形を基調とし、断面形状は概ね鍋底状で、確認面から1m前後の深いものもある。大形の土坑はC2・3グリッド中心の一群と、C5グリッドを中心とする一群の２か所に分かれている。これらの土坑はおおむね住居跡よりも新しく、住居跡を切る形で検出されている。覆土中からは大量の遺物が出土している。SK42・43では灰釉陶器の新しい段階（虎渓山１号窯式）の遺物が出土しており、住居跡出土遺物との時期差には齟齬はない。

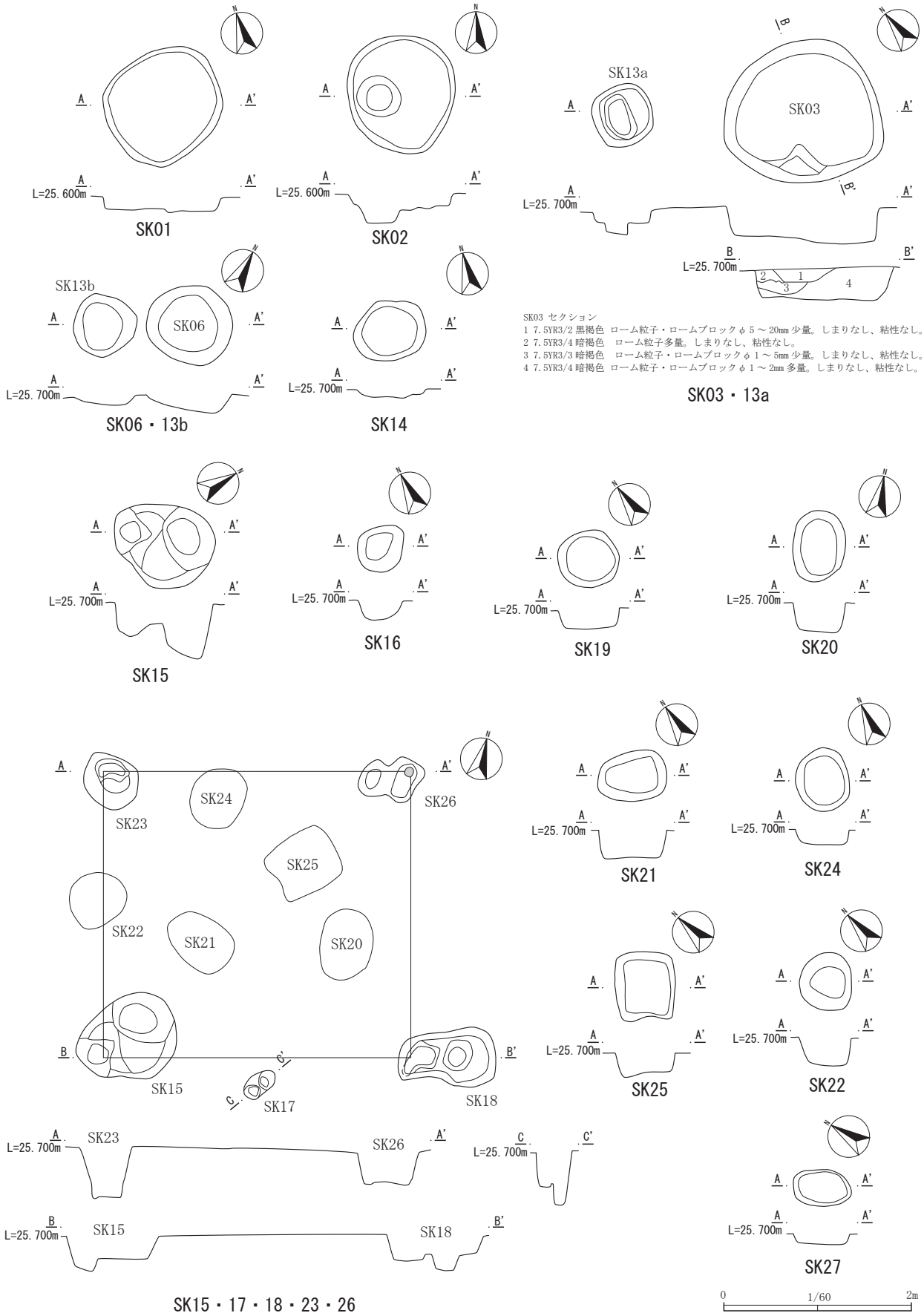
中形の土坑は不整形を呈するものが多く、C5グリッドにおいて検出されている。前述の円形土坑群の集中する区域からはやや南側に偏在する。方形・楕円形・不整形等、形状に統一性はない。遺物の出土量もきわめて少なく、明確な時期判断はできていない。

小形で柱穴状を呈する土坑は、建物または柵・塀と区別されるもの以外についてはすべて土坑（SK）と呼称した。分布は調査区の東から南側にやや偏在傾向がある。これは、掘立柱建物の分布と近接する。柱穴状の土坑でも、SK15・18・23・26はいずれも２基のピットの重複となっており、方形に配置されることから住居跡が削平され、柱穴のみが残された可能性がある。柱穴状の土坑からの遺物は、やはり僅かで時期を特定できるものではない。

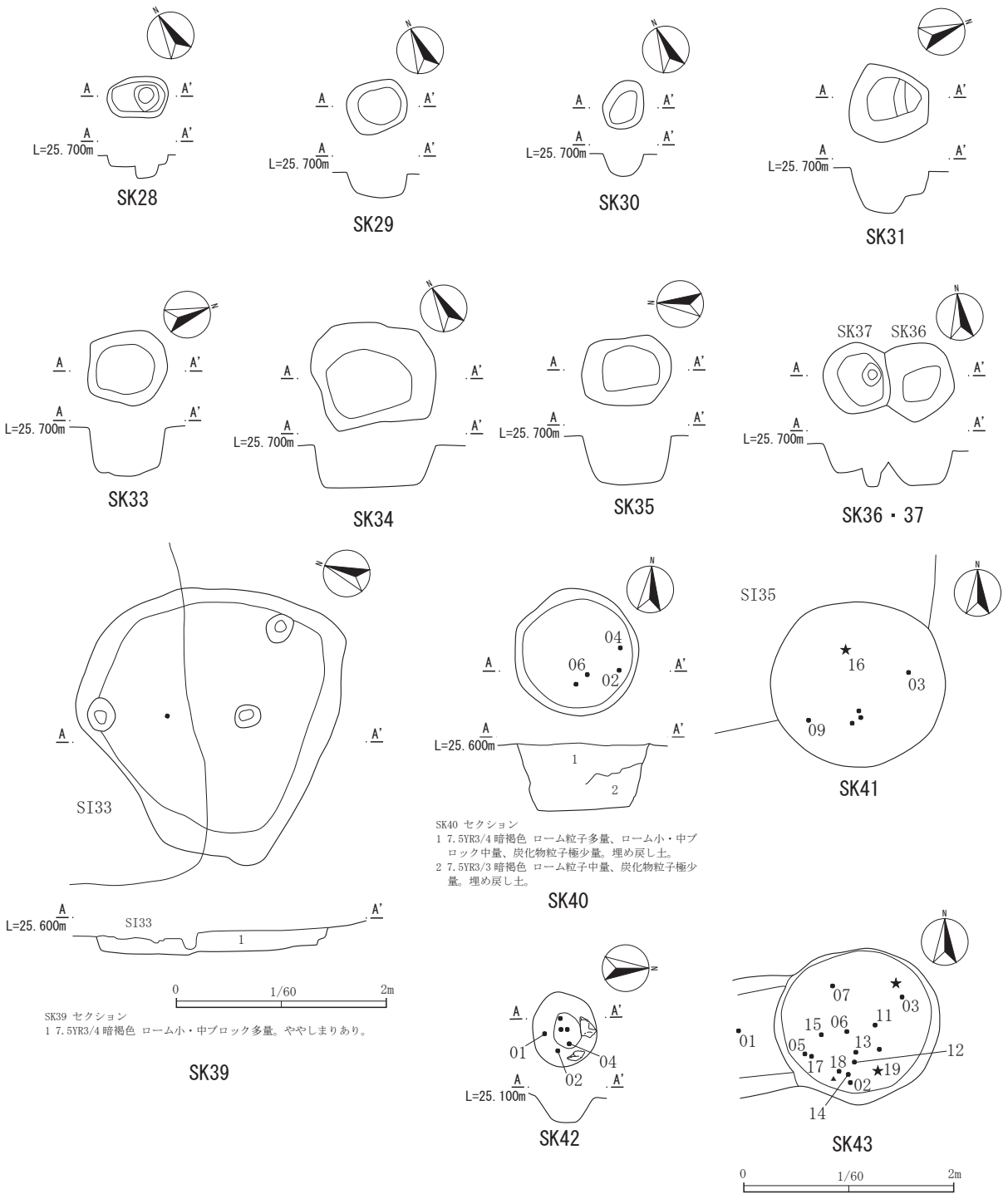
なお、SK05からは緑釉陶器の出土があったが、同土坑はSK04とともにSI07に伴うP1・P2と判断し、土坑番号は欠番とした。その他、欠番となった土坑は掘立柱建物跡（SB）の柱穴に変更されたものである。

第52表　土坑一覧表

土坑番号	検出グリッド	平面形	長軸方向	断面形	南北長（cm）	東西長（cm）	深さ（cm）	掲載遺物	未掲載遺物	備考
01	B・C5	楕円	N-41°-E	浅い鍋底	128.4	132.1	17.6	土師器有台埦1点	土師器157.1g 須恵器144.9g	
02	C5	円	N-5°-W	ピット1基	127.5	112.6	32.6	—	土師器81.5g 須恵器13.8g	
03	C5	円	N-68°-W	鍋底	154.7	161.1	37	土師器無台坏1点、フイゴ羽口1点	土師器301.9g 須恵器2225.5g 鉄塊60.1g 礫12.3g	
04	SI07 P1									
05	SI07 P2									
06	C5	楕円	N-57°-E	浅いU字	86.3	91.6	22.7	土師器甕1点	土師器437.1g 須恵器18.6g 瓦38.7g	
07	SB09 P4									
08	SB09 P3									
09	SB07 P7									
10	SB07 P6									
11	SB05 P2									
12	D3	なし	—	—	—	—	—	土師器無台坏2点、有台埦3点（墨書1点「□」）、小皿4点、灰釉陶器長頸瓶2点	土師器4785.5g 須恵器841.8g 灰釉陶器65.8g 瓦38.4g 鉄製品刀子カ6.2g	
13a	C5	楕円	—	西側にピット	64.7	64.8	24.3	—	土師器63.6g 須恵器8.3g	遺構番号重複
13b	C5	楕円	—	浅い皿	65.6	65.6	10.9	—		
14	C5	楕円	N-88°-W	浅い皿	64.4	78	10.6	—	土師器54.6g	
15	D4	隅丸三角	N-36°-E	2本のピット	108.3	89.7	56.8	—	須恵器76.7g	
16	D4	不整円	N-20°-E	U字	48.5	55.7	22	土師器無台坏1点	土師器617.2g 須恵器74.9g	
17	D4	瓢形	N-42°-E	2本の小ピット	39.1	22.8	59.7	—	土師器19.6g	
18	D4	不整	N-71.5°-E	2本の小ピット	63	104.1	36.4	土師器無台坏1点（墨書「生□」）	土師器43.5g 須恵器16.3g	
19	D4	円	N-36°-E	U字	66	62	20.4	—	なし	
20	D4	楕円	N-12°-W	U字	76.7	56	31.1	—	なし	
21	D4	楕円	N-59°-W	U字	53.3	73.5	31.7	—	なし	
22	D4	不整円	N-38°-E	U字	62.7	60	32	—	なし	
23	D4	不整円	N-45°-W	北側にピット	68.8	57.8	54.6	—	土師器52.2g 須恵器7.8g	
24	D4	楕円	N-21°-E	U字	68.1	57.4	17	—	なし	
25	D4	方形	N-45°-E	U字	86.6	74.3	20.9	—	なし	
26	D4	瓢形	N-65°-E	2本の小ピット	48.7	73.2	33.8	須恵器有台坏1点	土師器92.1g 須恵器94.9g	
27	D4	楕円	N-32°-W	U字	59.5	39.7	11.6	—	なし	
28	D4	楕円	N-59°-W	南側にピット	39.4	28.4	17.8	—	なし	
29	D4	隅丸方形	N-80°-E	U字	48.5	57.6	25.2	—	なし	
30	E4	楕円	N-52°-E	U字	49.7	39.8	22.6	—	なし	
31	C5	楕円	N-8°-W	階段	75.3	75.9	43.9	—	なし	
32	欠番									
33	C・D5	楕円	N-15°-W	U字	78.3	71.4	47.1	—	須恵器5.4g 近代陶器7.4g 鉄製品不明146.9g	
34	D5	楕円	N-24°-W	U字	105.2	116.9	41.1	—	なし	
35	D5	楕円	N-30°-W	U字	85.1	65.9	46.4	土師器無台坏1点（墨書「田」1点）	土師器113.7g 須恵器48.5g	
36	D5	円	N-20°-E	東側にピット	75.1	61.2	32.6	—	なし	
37	D5	円	N-42°-E	鍋底	67.8	61.7	41.3	—	なし	
38	SB09 P1									
39	C・D2	不整円	N-56°-E	浅い皿	238.5	258.1	21.6	須恵器無台坏1点	なし	風倒木痕ヵ
40	C2・3	円	—	浅い皿	122.6	118.5	15.9	土師器有台埦3点、小皿6点、有台小皿2点	土師器1614.2g 須恵器316.4g	
41	C2・3	円	—	—	158	167.2	101.3	土師器無台坏2点（墨書1点「□□」）、鉢1点、有台皿3点、皿4点、灰釉陶器椀1点、長頸瓶4点、鉄製品釘1点、鏃1点	土師器4302.5g 須恵器235.8g 瓦192.7g 鉄製品28.1g 礫450.1g	
42	C2	円	—	—	60.6	71.6	26	土師器無台坏3点、有台埦1点、小皿1点、灰釉陶器皿1点、長頸瓶2点	土師器745.1g 須恵器476.1g 瓦47.3g 鉄製品57.5g 礫327.7g	
43	C2	円	—	—	149.2	142.1	—	土師器無台坏2点、有台埦7点、小皿7点、有台皿2点、灰釉陶器椀2点、鉄製品釘1点	土師器1103.6g 須恵器250.1g 鉄製品10.9g 礫337.8g	
44	SB08 P4・P5									



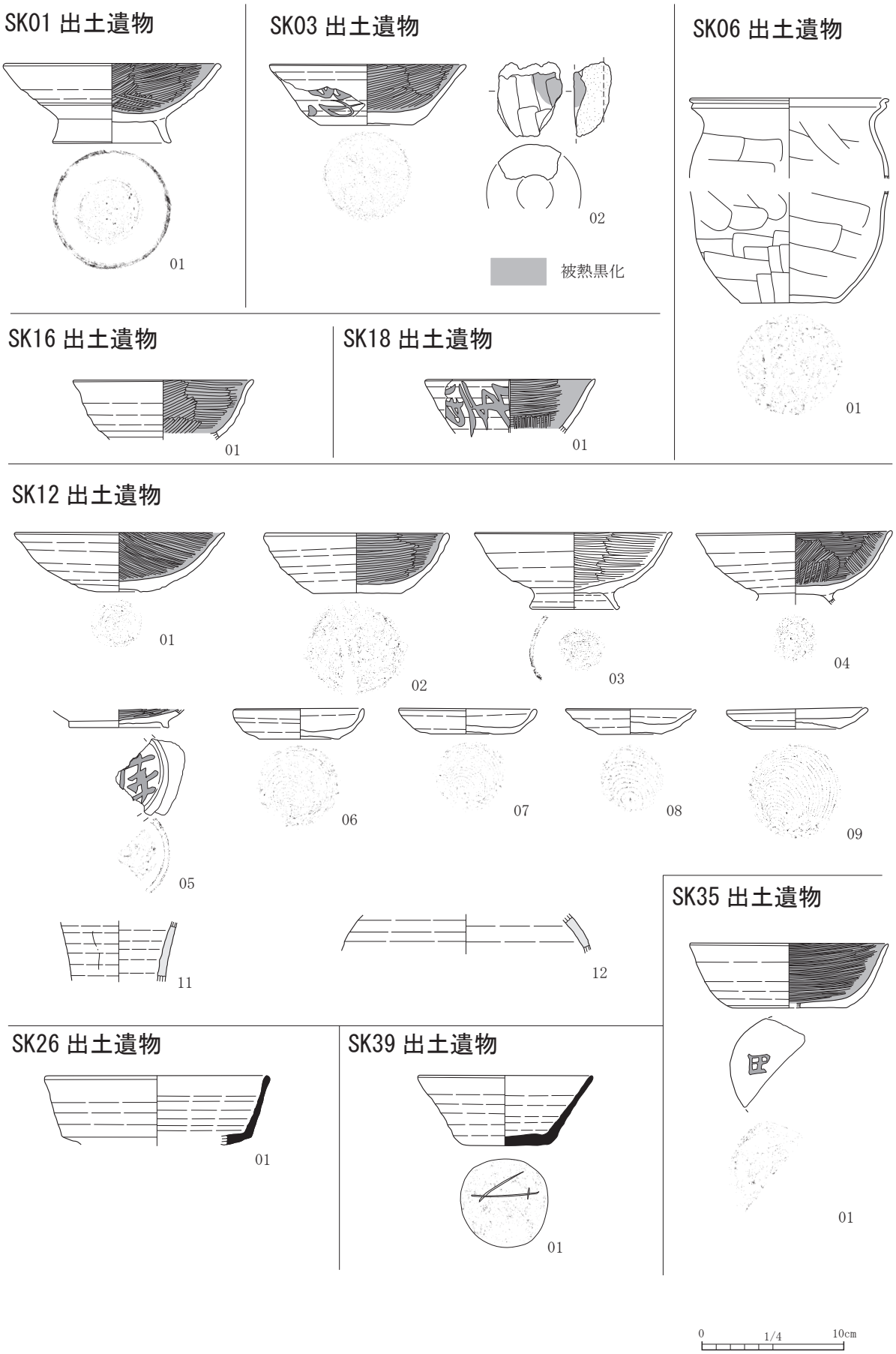
第 89 図　SK01 ～ 03・06・13 ～ 16・19 ～ 22・24・25・27・28



SK40 セクション
1 7.5YR3/4 暗褐色 ローム粒子多量、ローム小・中ブロック中量、炭化物粒子極少量。埋め戻し土。
2 7.5YR3/3 暗褐色 ローム粒子中量、炭化物粒子極少量。埋め戻し土。

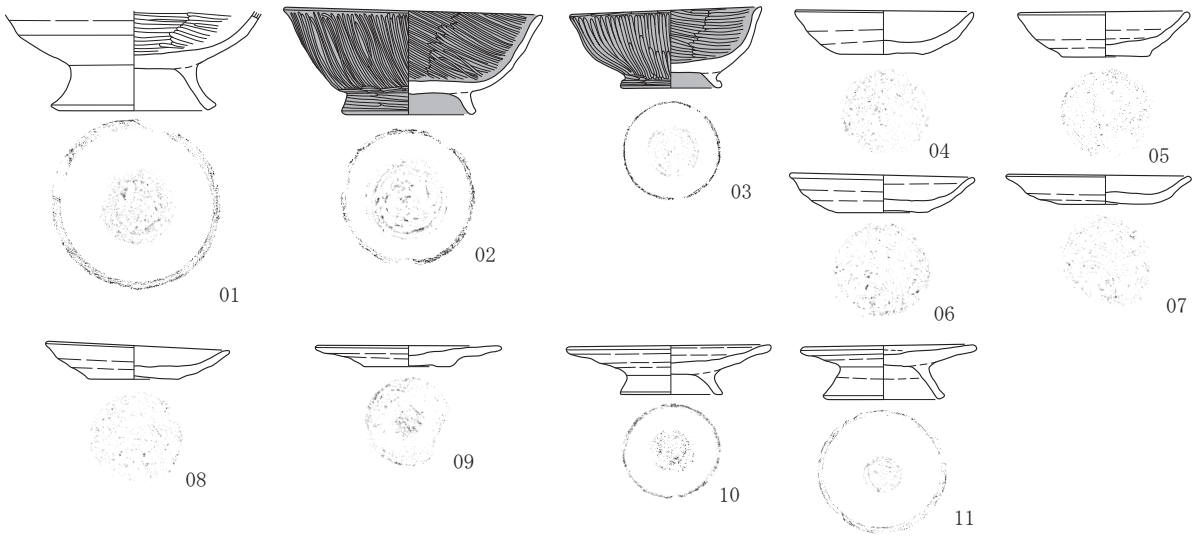
SK39 セクション
1 7.5YR3/4 暗褐色 ローム小・中ブロック多量。ややしまりあり。

第90図　SK29～31・33～37・39～43

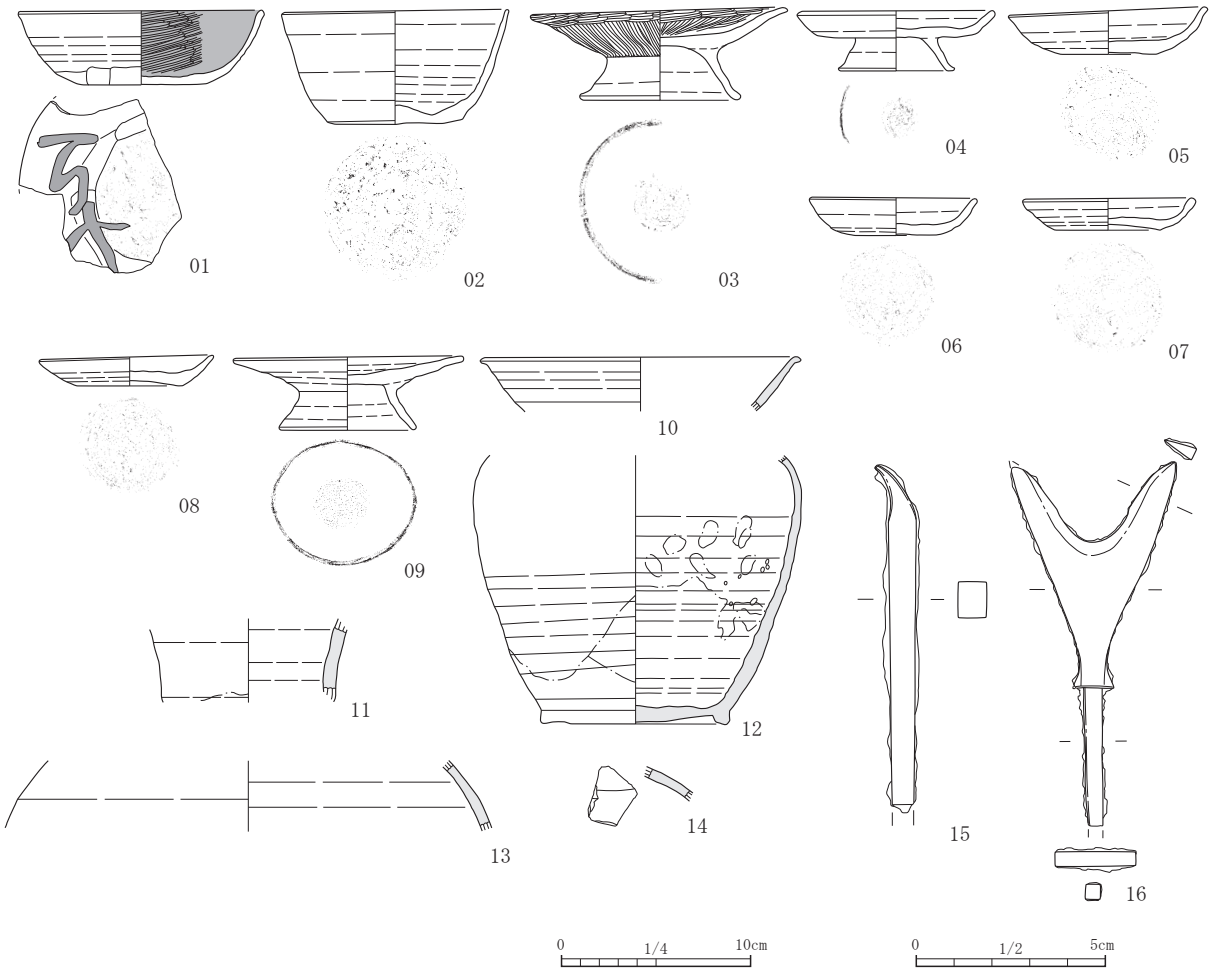


第 91 図　土坑出土遺物（1）

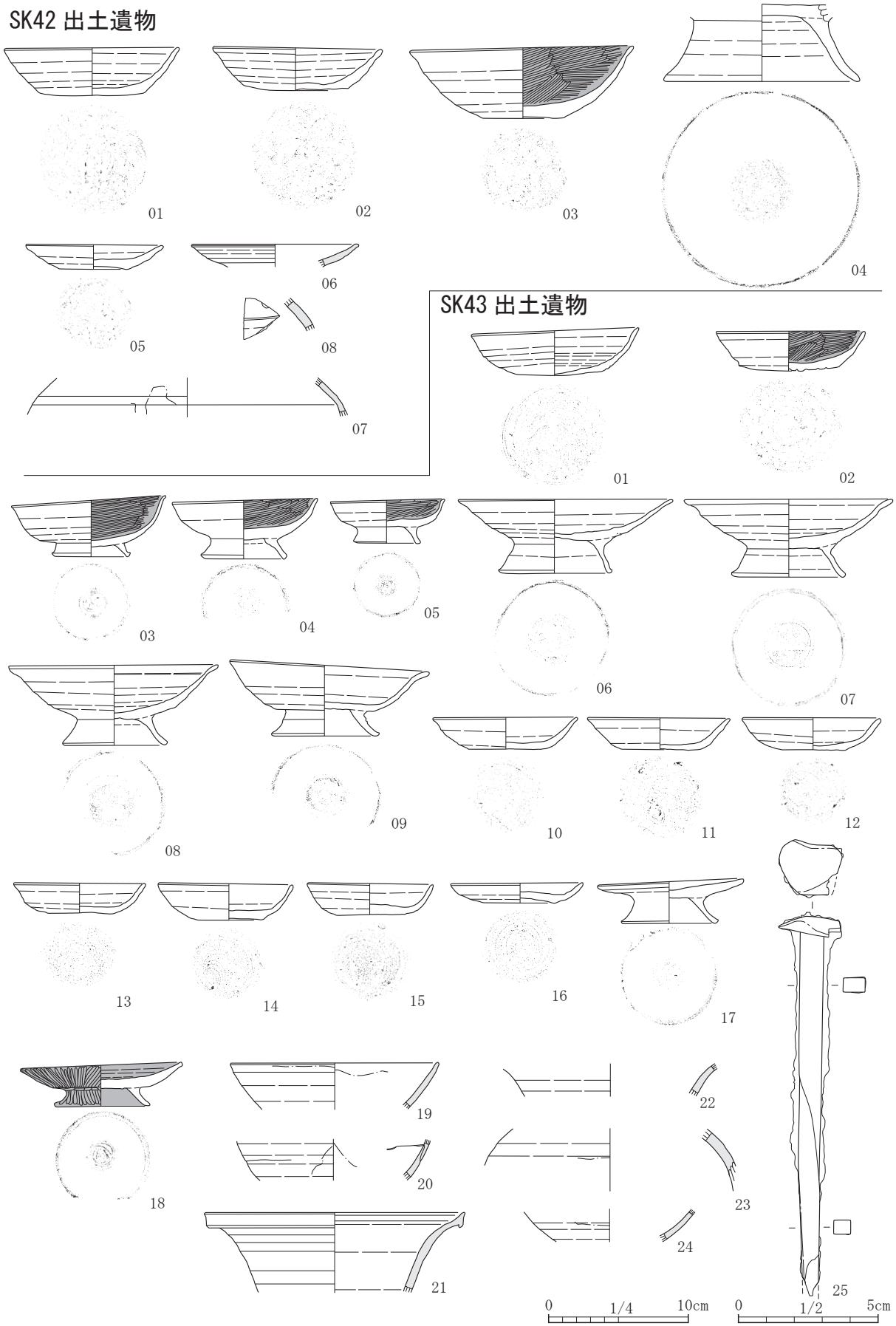
SK40 出土遺物



SK41 出土遺物



第92図　土坑出土遺物（2）



第 93 図　土坑出土遺物（3）

第53表　土坑出土遺物観察表（1）

遺構番号	掲載番号	注記	種類	器種	口径	器高	底径	重量	残存	整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
SK01	1	覆土	土師器	有台埦	(14.8)	5.4	8.0	125.9	口縁1/8～底部	ロクロ整形、体部下端回転ヘラケズリ、底部回転糸切り後ナデ。内面ミガキ。	白色粒少量、白色針状物質やや多い	良好	内面　黒褐 外面　にぶい黄褐	内面黒色処理
SK03	1	覆土	土師器	無台坏	(13.4)	4.2	6.5	154.4	口縁2/3欠損	ロクロ整形、体部下端～底部回転ヘラケズリ。内面ミガキ。	雲母・白色粒子・スコリア・白色針状物質やや多い	良好	内面　黒褐 外面　にぶい黄橙	内面黒色処理 墨書「福」ヵ
SK03	2	覆土	土師器	フイゴ羽口	外径(6.6)	〈5.1〉	孔径(2.6)	49.6	少片	円筒形を呈するものヵ。	白色粒子やや多い、雲母・スコリア少量	良好 二次焼成ｱﾘ	内面　橙 外面　にぶい橙	
SK06	01	覆土	土師器	小型甕	13.6	〈13.1〉	7.0	204.2	胴部欠損	胴部の張りは弱い、口唇は摘み上げられる。口縁は内外面共に横ナデ、外面胴部下半ヘラケズリ、内面ナデ。底部木葉痕。	雲母やや多い、白色粒子多い	良好	内面　明褐 外面　にぶい黄褐	底部木葉痕
SK12	01	覆土	土師器	無台坏	(14.8)	〈4.1〉	—	140.4	高台欠損口縁3/4欠損	ロクロ整形、内面・底部ミガキ。	雲母・白色粒子多い、スコリア少量、白色針状物質やや多い	良好	内面　黒褐 外面　にぶい黄橙	内面黒色処理
SK12	02	覆土	土師器	無台坏	(13.8)	4.1	6.2	136.7	2/3	ロクロ整形、内面ミガキ。	雲母・長石・石英多い、スコリア少量	良好	内面　黒褐 外面　にぶい黄橙	内面黒色処理
SK12	03	覆土	土師器	有台埦	13.8	〈5.3〉	(6.0)	147.4	3/4	ロクロ整形、底部下端回転ヘラケズリ、底部回転糸切り、内面ミガキ。	雲母・白色粒子多い	良好	内外面　にぶい褐	
SK12	04	覆土	土師器	有台埦	13.8	〈4.9〉	—	154.2	口縁1/3欠損	ロクロ整形、底部回転糸切り。内面ミガキ。	雲母・白色粒子多い、スコリア少量	良好	内面　黒 外面　にぶい黄橙	内面黒色処理
SK12	05	覆土	土師器	有台埦	—	〈1.25〉	(7.0)	17.1	底部破片	ロクロ整形、体部下端回転ヘラケズリ、底部回転ヘラ切り、内面ミガキ。	白状粒子・黒色粒子やや多い、白状針状物質少量	良好	内面　黒褐 外面　橙	内面黒色処理 墨書「□」
SK12	06	覆土	土師器	小皿	9.0	2.1	5.9	49.8	ほぼ完形	ロクロ整形、回転糸切り（左）	雲母・白色粒子少量、スコリア微量	良好	内外面　にぶい橙	
SK12	07	覆土	土師器	小皿	9.5	1.8	4.8	64.5	完形	ロクロ整形、回転糸切り（左）	雲母・黒色粒子微量、白色粒子多い	良好	内外面　橙	
SK12	08	覆土	土師器	小皿	9.1	1.75	4.4	67.7	完形	ロクロ整形、回転糸切り（左）	雲母少量、白色粒子・スコリアやや多い	良好	内外面　にぶい黄橙	
SK12	09	覆土	土師器	小皿	9.8	1.4	6.2	59.7	ほぼ完形	ロクロ整形、回転糸切り（左）	雲母多い、白色粒子少量、スコリア微量	良好	内面　黒 外面　にぶい黄橙	
SK12	10	覆土	灰釉陶器	長頸瓶	—	〈4.2〉	—	12.0	頸部片	内外面共に密な強いロクロ、器壁は比較的薄くやや外反し立ち上がる。	鉄分の噴出し少量	良好	胎土　淡灰 釉　暗淡緑色自然釉	猿投K90 【392】実98-2-103
SK12	11	覆土	灰釉陶器	長頸瓶	—	〈2.7〉	—	15.3	胴部片	器壁は比較的厚く丸みを持って立ち上がる。	鉄分の噴出し極多い	良好	胎土　淡灰褐 釉　暗淡緑色	宮ロヵ不明 【393】実98-2-014
SK16	01	覆土	土師器	無台坏	(12.4)	〈4.1〉	—	27.5	口縁～体部1/4	ロクロ整形、体部下端回転ヘラケズリ、内面ミガキ。	雲母多い、白色粒子やや多い、スコリア少量	良好	内面　黒褐 外面　にぶい黄橙	内面黒色処理
SK18	01	覆土	土師器	無台坏	(11.7)	〈3.7〉	—	18.0	口縁1/8	ロクロ整形。内面ミガキ。	雲母・白色粒子・白色針状物質少量	良好	内面　オリーブ黒 外面　明褐	内面黒色処理 墨書「生□」
SK26	01	覆土	須恵器	有台坏	(15.5)	〈5.2〉	—	47.8	口縁～体部1/4高台欠損	ロクロ整形、体部下端回転ヘラケズリ。	白色粒子・鉄分の噴出しやや多い、白色針状物質微量	良好	内外面　黄灰	
SK33	01	覆土	鉄製品	板状製品	—	—	—	142.7	砕片	全形・用途不明の製品。厚さ0.3mmの鉄板を素材とする。方形の鉄板の一辺を幅1.3cm折り曲げ、その部分に別の同様の鉄板を引っ掛けてつなげている。破片の大きさは、最大で長さ8.2cm、幅2.5cmが確認できる。鉄板をつなげたのちに、波状や緩く曲げるなどの加工がなされたものもある。また、2枚に折り曲げた5.0×4.1cm大の破片もある。穿孔や鋲などの加工は確認できない。茅状の付着物はあるが、顕著なものは認められない。				写真のみ
SK35	01	覆土	土師器	無台坏	(13.7)	〈4.5〉	(8.8)	59.8	1/4	ロクロ整形、体部下端回転ヘラケズリ、底部回転ヘラ切り後ナデ。内面ミガキ。	雲母・白色針状物質微量、白色粒子・スコリア少量	良好	内面　黒褐 外面　にぶい黄	内面黒色処理 墨書「田」
SK39	01	覆土	須恵器	無台坏	(12.0)	4.8	6.0	126.2	口縁1/4～底部	ロクロ整形、底部多方向の手持ちヘラケズリ後ナデ。	白色粒子多い、白色針状物質微量	良好	内面　灰オリーブ 外面　灰	底部ヘラ記号
SK40	01	覆土	土師器	有台埦	—	〈5.3〉	7.8	148.5	体部下端～底部	ロクロ整形、体部下半回転ヘラケズリ、内面ミガキ。	雲母多い、白色粒子・黒色粒子やや多い	良好	内面　明褐 外面　にぶい黄橙	
SK40	02	2	土師器	有台埦	13.4	5.4	6.6	161.8	口縁～体部1/4欠損	ロクロ整形、底部回転ヘラ切り、内外面共に黒色処理・ミガキが施されている。	雲母多い、白色粒子やや多い	良好	内外面　黒	内外面黒色処理
SK40	03	覆土	土師器	有台埦	9.8	4.0	5.0	86.0	口縁～体部1/4欠損	ロクロ整形、底部回転ヘラ切り後周縁をナデ整形、内外面共に黒色処理・ミガキが施されている。	白色粒子・白色針状物質少量	良好	内外面　黒	内外面黒色処理
SK40	04	1	土師器	小皿	9.2	2.2	4.5	67.3	ほぼ完形	ロクロ整形、回転糸切り（右）。	雲母少量、白色粒子多い	良好	内外面　にぶい黄褐	
SK40	05	覆土	土師器	小皿	8.2	2.35	4.6	68.9	ほぼ完形	ロクロ整形回転糸切り（左）。	雲母やや多い、白色粒子・スコリア・白色針状物質少量	良好	内外面　にぶい黄橙	
SK40	06	3	土師器	小皿	9.5	1.95	4.8	77.3	完形	ロクロ整形回転糸切り（左）。	雲母・スコリアやや多い、白色粒子少量	良好	内外面　にぶい黄橙	

第 54 表　土坑出土遺物観察表（2）

遺構番号	掲載番号	注記	種類	器種	口径	器高	底径	重量	残存	整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
SK40	07	覆土	土師器	小皿	9.4	1.5	5.0	62.6	口縁 1/4 欠損	ロクロ整形回転糸切り（左）。	雲母・スコリア微量、白色粒子やや多い、白色針状物質微量	良好	内外面　にぶい黄橙	
SK40	08	覆土	土師器	小皿	9.4	175	4.7	57.7	口縁 1/4 欠損	ロクロ整形回転糸切り（左）。	雲母・白色粒子・白色針状物質少量	良好	内外面　にぶい黄橙	
SK40	09	覆土	土師器	小皿	9.5	1.1	4.6	56.7	口縁 1/3 欠損	ロクロ整形、底部回転ヘラ切り。高台が剥がれたものカ。	雲母・白色粒子・スコリア少量	良好	内外面　にぶい黄橙	
SK40	10	覆土	土師器	有台皿	10.5	2.5	5.0	76.4	ほぼ完形	ロクロ整形、底部回転糸切り後ナデ。	雲母・白色粒子・スコリア少量	良好	内外面　にぶい黄橙	
SK40	11	覆土	土師器	有台皿	9.0	2.8	5.8	79.8	口縁 1/3 欠損	ロクロ整形、底部回転糸切り後ナデ。	雲母・白色粒子少量、スコリア・黒色粒子微量	良好	内外面　にぶい橙	
SK41	01	覆土	土師器	無台坏	(12.7)	3.8	(6.1)	41.0	1/4	ロクロ整形、体部下端手持ちヘラケズリ、底部多方向の手持ちヘラケズリ、内面ミガキ。	雲母多い、白色粒子・スコリアやや多い	良好	内面　黒 外面　にぶい橙	内面黒色処理 墨書「□□」
SK41	02	覆土	土師器	鉢	11.8	5.9	7.2	138.7	3/4	ロクロ整形、底部回転ヘラ切り。	雲母・白色粒子多い、スコリア微量	良好	内外面　にぶい橙	
SK41	03	2	土師器	有台皿	13.1	4.65	8.0	176.2	口縁 1/4、底部 1/2 欠損	ロクロ整形、体部は内外面共にミガキ。高台は高さがある。	雲母微量、白色粒子少量	良好	内外面　にぶい黄橙	
SK41	04	覆土	土師器	有台皿	(10.1)	〈3.15〉	(5.6)	64.3	口縁 1/3 ～底部 1/4	ロクロ整形、底部回転ヘラ切り。	雲母多い、スコリア・白色針状物質少量、黒色粒子微量	良好	内外面　にぶい明褐	赤彩
SK41	05	覆土	土師器	小皿	10.3	2.3	5.0	78.0	口縁 1/3 欠損	ロクロ整形、回転糸切り（左）。	雲母・白色粒子・白色針状物質少量、スコリア微量	良好	内外面　にぶい黄橙	
SK41	06	覆土	土師器	小皿	8.5	1.95	4.5	64.5	ほぼ完形	ロクロ整形、回転糸切り（左）。	雲母少量、白色粒子やや多い、白色針状物質・スコリア微量	良好	内外面　にぶい橙	
SK41	07	覆土	土師器	小皿	8.8	1.65	5.5	54.8	ほぼ完形	ロクロ整形、回転糸切り（左）。	雲母・白色粒子少量、	良好	内外面　にぶい黄橙	
SK41	08	覆土	土師器	小皿	9.0	1.5	5.5	51.0	1/4 欠損	ロクロ整形、回転糸切り（左）。	白色粒子多い、スコリア微量	良好	内面　褐灰 外面　にぶい黄橙	
SK41	09	3	土師器	有台皿	11.8	3.8	7.0	152.2	完形	ロクロ整形、底部回転糸切り後ナデ。	雲母・白色粒子少量、スコリア・白色針状物質微量	良好	内外面　にぶい褐	
SK41	10	覆土	灰釉陶器	椀	(16.4)	〈2.8〉	—	6.4	口縁～体部片	体部下位を回転ヘラケズリ後回転ナデ、器壁は薄く僅かに内湾して立ち上がり口縁端部で外反。	鉄分の噴出し少量	良好	胎土　灰白 釉　暗青緑	猿投 K90 新 【394】実 98-2-105
SK41	11	覆土	灰釉陶器	長頸瓶	—	〈4.3〉	—	31.0	頸部 10%	器壁は比較的厚くやや外反し外に開いて立ち上がる。	鉄分の噴出しやや多い	良好	胎土　灰白 釉　暗淡緑	猿投 K90（～ 053） 【395】実 98-2-106
SK41	12	覆土	灰釉陶器	長頸瓶	—	〈14.2〉	9.6	430.6	胴部 1/3 ～底部	器壁は薄く、胴部は直線的。高台は断面三角形気味。底部外面に右回転糸切り痕残る。外面胴部と内面胴部下端～底部に灰釉刷毛塗り。	鉄分の噴出し少量	良好	胎土　灰白 釉　暗淡緑	猿投 053 【377】実 98-2-087
SK41	13	覆土	灰釉陶器	長頸瓶	—	〈3.6〉	—	20.7	胴部片	器壁は比較的薄く丸みを持って立ち上がる。	鉄分の噴出し細かく少量	良好	胎土　淡灰褐 釉　暗淡緑	猿投 K90（～ 053） 【396】実 98-2-017
SK41	14	覆土	灰釉陶器	長頸瓶	—	〈1.8〉	—	4.7	胴部片	器壁は比較的薄くやや丸みを持って立ち上がる。	鉄分の噴出し細かく少量	良好	胎土　灰白 釉　暗淡緑	猿投 K90 新 【397】実 98-2-108
SK41	15	覆土	鉄製品	角釘	タテ 〈9.2〉	ヨコ 1.1	幅 1.0	24.1	下部欠損	頭部は折り曲げずに屈曲させた状態。鎹の類の可能性あり。				
SK41	16	覆土	鉄製品	鉄鏃	長 〈9.5〉	幅 4.2	厚 0.6	20.4	身部・茎部端欠損	雁股鏃。身部先端はふくらあり。台形関。身部厚 0.4cm。矢柄の木質は看取されない。				
SK42	01	1	土師器	無台坏	12.2	3.4	7.6	154.6	完形	ロクロ整形、底部回転ヘラ切り。	雲母・白色針状物質少量、白色粒子多い、スコリアやや多い	良好	内外面　にぶい橙	
SK42	02	4	土師器	無台坏	11.9	3.0	7.5	111.1	口縁 1/4 欠損	ロクロ整形、底部回転ヘラ切り。	白色粒子多い	良好	内外面　にぶ黄橙	
SK42	03	覆土	土師器	無台坏	(15.8)	4.9	5.9	161.4	口縁 3/4 欠損	ロクロ整形、底部回転糸切り（右）、内面ミガキ。	雲母多い、白色粒子やや多い、白色針状物質少量、スコリア微量	良好	内面　黒 外面　にぶい黄橙	内面黒色処理
SK42	04	3	土師器	有台埦	—	〈5.4〉	13.8	320.2	高台部のみ	ロクロ整形、高さがある。	雲母やや多い、白色粒子多い	良好	内外面　橙	
SK42	05	覆土・SK43 覆土	土師器	小皿	9.7	1.65	4.9	75.8	完形	ロクロ整形、回転糸切り（左）。	雲母微量、白色粒子・スコリア少量	良好	内外面　にぶい黄橙	
SK42	06	覆土	灰釉陶器	皿	(11.6)	〈1.6〉	—	8.7	口縁～体部片	体部下端回転ヘラケズリ後回転ナデ、器壁は比較的薄く僅かに内湾して立ち上がり口縁端部でやや外反。端部下位に明瞭な稜。	鉄分の噴出し少量	良好	胎土　白灰 釉　暗淡緑自然釉	美濃大 2 ～虎 1 【398】実 98-2-109
SK42	07	覆土	灰釉陶器	長頸瓶	—	〈2.7〉	—	6.9	胴部片	胴部回転ヘラケズリ、器壁は薄く丸みを持って立ち上がる。	鉄分の噴出し少量	良好	胎土　灰白 釉　暗淡緑（釉垂れ）	猿投 K14 【399】実 98-2-110

第55表　土坑出土遺物観察表（3）

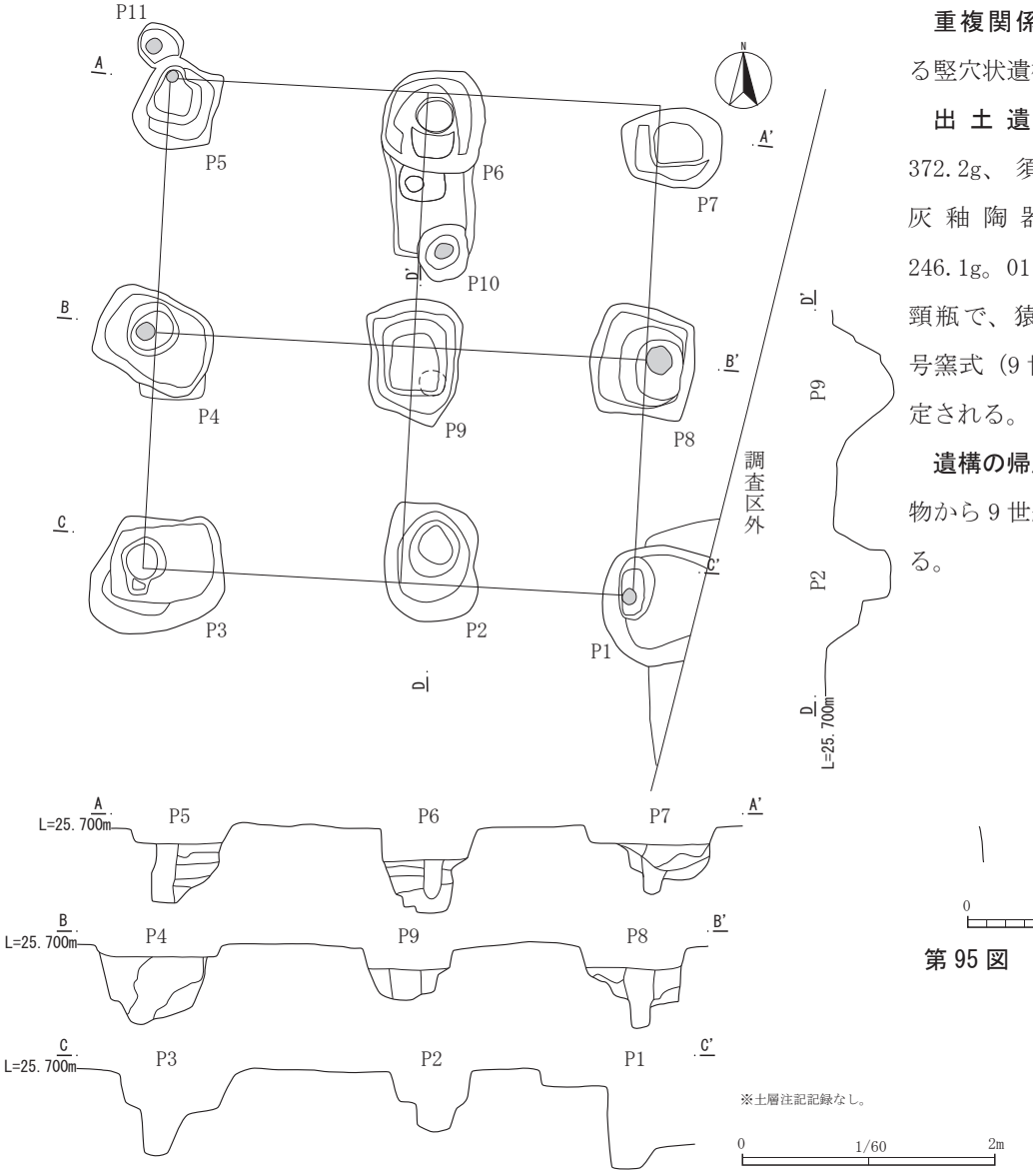
遺構番号	掲載番号	注記	種類	器種	口径	器高	底径	重量	残存	整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
SK42	08	覆土	灰釉陶器	長頸瓶	—	〈2.3〉	—	5.4	胴部片	器壁は比較的厚く丸みを持って立ち上がる、外面胴部に幅1㎜強の圏線。	鉄分の噴出しやや多い	良好	胎土　灰白 釉　暗淡緑 （部分的に乳白色）	猿投K14～90 【400】実98-2-111
SK42	09	覆土	鉄製品	不明製品	長 4.5	幅 〈2.6〉	厚 0.5	54.0	部分欠損	用途不明の製品。二又状の部位と棒状の部位とからなる。両者は折り曲げられて接している。特別、付着物などはない。				写真のみ
SK43	01	14	土師器	無台坏	11.9	3.2	6.0	90.3	口縁1/4欠損	ロクロ整形、底部回転糸切り（右）。	雲母・白色粒子やや多い	良好	内外面　橙	
SK43	02	4	土師器	無台坏	10.5	2.7	7.2	105.6	完形	ロクロ整形、底部回転ヘラ切り。	雲母少量、白色粒子・スコリア・白色針状物質やや多い	良好	内面　黒褐 外面　にぶい黄橙	内面黒色処理
SK43	03	11	土師器	有台埦	11.1	3.95	5.2	101.1	ほぼ完形	ロクロ整形、底部回転ヘラケズリ。内面ミガキ。	雲母・白色粒子少量、白色針状物質微量	良好	内面　黒 外面　にぶい黄橙	内面黒色処理
SK43	04	覆土	土師器	有台埦	10.3	4.3	5.6	87.8	1/2	ロクロ整形、底部回転ヘラケズリ、内面ミガキ。	雲母やや多い、白色粒子・白色針状物質少量	良好	内面　黒 外面　にぶい黄橙	内面黒色処理
SK43	05	7	土師器	有台埦	8.2	3.0	4.2	60.8	ほぼ完形	ロクロ整形、底部回転糸切り後ナデ。内面ミガキ。	雲母やや多い、白色針状物質・スコリア微量	良好	内面　黒 外面　にぶい黄橙	内面黒色処理
SK43	06	15	土師器	有台埦	15.4	5.1	7.6	199.9	口縁1/3欠損	ロクロ整形、底部回転糸切り後周縁をナデ。	雲母・白色粒子・白色針状物質少量、スコリア微量	良好	内外面　橙	
SK43	07	1	土師器	有台埦	14.9	5.4	7.7	218.7	ほぼ完形	ロクロ整形、底部回転糸切り後周縁をナデ。	白色粒子・黒色粒子少量、スコリア・白色針状物質微量	良好	内外面　橙	
SK43	08	覆土	土師器	有台埦	14.8	5.6	7.2	187.9	口縁・底部一部欠損	ロクロ整形、底部回転糸切り後周縁をナデ。	雲母・白色粒子・黒色粒子少量、白色針状物質微量	良好	内外面　橙	
SK43	09	覆土	土師器	有台埦	14.4	4.8	7.4	190.7	ほぼ完形	ロクロ整形、底部静止糸切り後周縁をナデ。	雲母・白色粒子・小レキやや多い、黒色粒子少量	良好	内外面　にぶい橙	
SK43	10	覆土	土師器	小皿	10.4	2.2	5.4	87.9	ほぼ完形	ロクロ整形、回転糸切り（左）。	雲母・白色粒子・黒色粒子少量、白色針状物質・スコリア微量	良好	内外面　橙	
SK43	11	12	土師器	小皿	10.1	2.2	5.6	75.5	ほぼ完形	ロクロ整形、回転糸切り（左）。	雲母やや多い、スコリア微量、小～大レキやや多い	良好	内外面　にぶい褐	
SK43	12	16	土師器	小皿	9.8	2.3	4.6	68.7	完形	ロクロ整形、回転糸切り（左）。	雲母・白色粒子少量、白色針状物質・スコリア微量	良好	内外面　橙	
SK43	13	3	土師器	小皿	9.4	2.1	4.8	61.7	ほぼ完形	ロクロ整形、回転糸切り（左）。	雲母やや多い、白色針状物資微量、小～中レキ多い	良好	内外面　明褐	
SK43	14	17	土師器	小皿	9.6	2.6	4.8	65.3	完形	ロクロ整形、回転糸切り（左）。	雲母・黒色粒子・白色粒子少量、スコリア微量	良好	内外面　にぶい黄橙	
SK43	15	13	土師器	小皿	9.0	2.2	5.0	66.7	完形	ロクロ整形、回転糸切り（左）。	雲母やや多い、白色針状物質微量、小～中レキやや多い	良好	内外面　にぶい褐	
SK43	16	覆土	土師器	小皿	9.4	1.4	5.2	58.2	完形	ロクロ整形、回転糸切り（左）。	雲母少量、白色粒子・黒色粒子やや多い、スコリア微量	良好	内外面　橙	
SK43	17	6	土師器	有台皿	10.2	2.9	6.6	103.5	小皿部分一部欠損	ロクロ整形、底部回転糸切り後ナデ。	雲母・白色粒子・黒色粒子やや多い、スコリア・白色針状物質少量	良好	内外面　橙	
SK43	18	5	土師器	有台皿	11.4	2.9	6.2	102.1	1/2	ロクロ整形、底部回転ヘラ切りカ。高台を含む外面ミガキ。	雲母やや多い、白色針状物質・中レキ微量	良好	内外面　黒	内外面黒色処理
SK43	19	覆土	灰釉陶器	椀	—	〈2.3〉	—	6.5	体部片	器壁は比較的薄く緩やかに内湾して立ち上がる。	鉄分の噴出し多い	良好	胎土　灰白 釉　暗淡緑自然釉	猿投K90 【401】実98-2-112
SK43	20	覆土	灰釉陶器	椀	（14.8）	〈3.2〉	—	10.6	口縁10%、体部5%	器壁は比較的薄く緩やかに内湾して立ち上がり口縁端部で僅かに外反する。外面口縁直下に明瞭な稜を有す。	鉄分の噴出し少量	良好	胎土　灰白 釉　暗淡緑 （漬け掛け）	美濃虎渓山1 【402】実98-2-113
SK43	21	覆土	灰釉陶器	深椀	—	〈2.9〉	—	6.6	体部片	器壁は薄く多々内湾して立ち上がる。中位に粘土接ぎがみられる。	鉄分の噴出し多い	良好	胎土　淡灰褐 釉　暗淡緑	猿投H72 【403】実98-2-114
SK43	22	覆土・試掘No.2トレンチ	灰釉陶器	広口瓶	（18.5）	〈5.6〉	—	57.9	口縁15%頸部10%	器壁は比較的薄くほぼ直線的に立ち上がり口縁付近で強く外反し端部に至る。端部のメリハリは比較的大きい。	鉄分の噴出し多い	良好	胎土　淡灰 釉　暗淡緑	猿投053 【404】実98-2-115
SK43	23	覆土	灰釉陶器	広口瓶	—	〈2.3〉	—	12.6	頸部片	器壁は比較的薄く緩やかに外反して立ち上がる。	鉄分の噴出し多い	良好	胎土　灰白 釉　暗淡緑	猿投K90 【405】実98-2-116
SK43	24	覆土	灰釉陶器	長頸瓶	—	〈4.4〉	—	15.6	胴部片	器壁は比較的厚く丸みを持って立ち上がる。	鉄分の噴出し多い	普通	胎土　淡灰褐 釉　暗淡緑	三遠系（K90～053併行） 【406】実98-2-117
SK43	25	覆土	鉄製品	角釘	長 〈13.6〉	幅 〈2.2〉	厚 0.5	43.0	下部欠損	身部は左回転の捩じりが加えられている。				

第 3 節　掘立柱建物跡

遺構は調査区域の南側に偏在する傾向がある。住居跡と重複するものは、いずれも住居跡に切られている。SB01 は総柱建物であるが、側柱建物を中心とする。基本的に発掘調査時及び概要報告書の所見に基づいたが、一部組み替えたものがある。なお、遺物は柱穴覆土のうち、掘方埋め土・柱痕跡・柱抜取り痕跡のいずれから検出されたものであるか、記録がなく不明である。

SB01（第 94・95 図、第 56・57 表、遺構図版 10、遺物図版 16）

北東隅の P7 と南側柱列中央の P2 がずれるものの、梁行・桁行とも 3.90m、13 尺、一間 =6.5 尺と見てよいだろう。2 間× 2 間と捉えたが、東側調査区外に延びる可能性もある。P5・6 で版築状埋土が確認されており、P4・7 では柱抜取り痕跡が認められる。P10・11 は平面円形の小型の掘方。P10 は床束柱穴か。P11 は副え柱的であるが、性格不明。P3・4 ではやや南側にずれる形で掘方が確認されており、P9 の破線表示の柱痕跡（ヵ）とともに、建て替えもしくは柱の差し替えが行われた可能性がある。

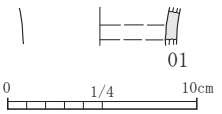


第 94 図　SB01

重複関係：P1 に切られる竪穴状遺構あり。

出土遺物：土師器 372.2g、須恵器 179.4g、灰釉陶器 4.5g、鉄塊 246.1g。01 は灰釉陶器長頸瓶で、猿投産・黒笹 90 号窯式（9 世紀後半）に比定される。

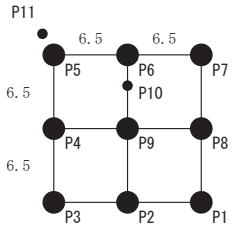
遺構の帰属時期：出土遺物から 9 世紀後半と思われる。



第 95 図　SB01 出土遺物

第 56 表　SB01 属性表

グリッド	D・E5	平面形状	総柱	主軸方向	N-3°　-E	
規 模	梁行	2 間	桁行	2 間		
柱間距離（芯々間）	P3-P4	1.81m	P1-P2	1.59m		
	P4-P5	2.02m	P2-P3	2.31m		
	P7-P8	1.75m	P5-P6	2.12m		
	P8-P1	1.90m	P6-P7	1.96m		
柱穴	平面形状	長径	短径	深さ	底面レベル	柱当
P1	隅丸方形ヵ	97cm	(78cm)	95cm	24.798m	有
P2	隅丸方形	93cm	73cm	−	25.092m	無
P3	隅丸方形	107cm	93cm	−	24.905m	無
P4	隅丸方形	95cm	93cm	61cm	24.961m	有
P5	不整方形	72cm	64cm	62cm	24.993m	有
P6	隅丸方形	81cm	81cm	69cm	24.911m	無
P7	隅丸方形ヵ	80cm	79cm	61cm	25.064m	無
P8	方形	86cm	83cm	66cm	24.937m	有
P9	長方形	102cm	69cm	42cm	25.153m	無



※図中の明朝体数字は柱間寸法＝尺

第 57 表　SB01 出土遺物観察表

遺構番号	掲載番号	注記	種類	器種	口径	器高	底径	重量	残存	整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
SB01-P3	01	SB-01 P-3	灰釉陶器	長頸瓶	—	〈2.0〉	—	4.5	頸部片	ロクロ整形。器壁は比較的薄くやや外反して立ち上がる。	鉄分の噴出し多い	良好	胎土　灰白 釉　暗淡緑	猿投 K90 【300】実 98-2-008

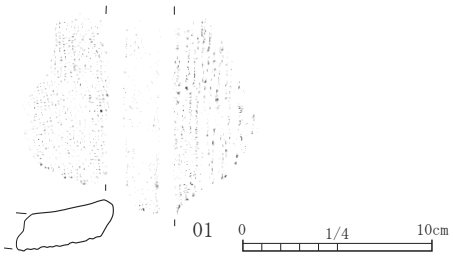
SB02（第 96・97 図、第 58・59 表、遺物図版 16）

全体として柱筋の通りが悪い。梁行・桁行とも 3.60m、12 尺、一間=6 尺とした。P8 は別の建物の柱掘方か、東側柱列中央の柱穴は確認されていない。しかし、掘方平面形は南側柱列が円形基調、北側柱列が方形基調とそろわない。住居跡 SI09・10 との重複状況から、各柱穴は 1 棟の組み合わせではないかも知れない。P7 は柱痕跡（と抜取穴）のみを掘り下げた状態か。

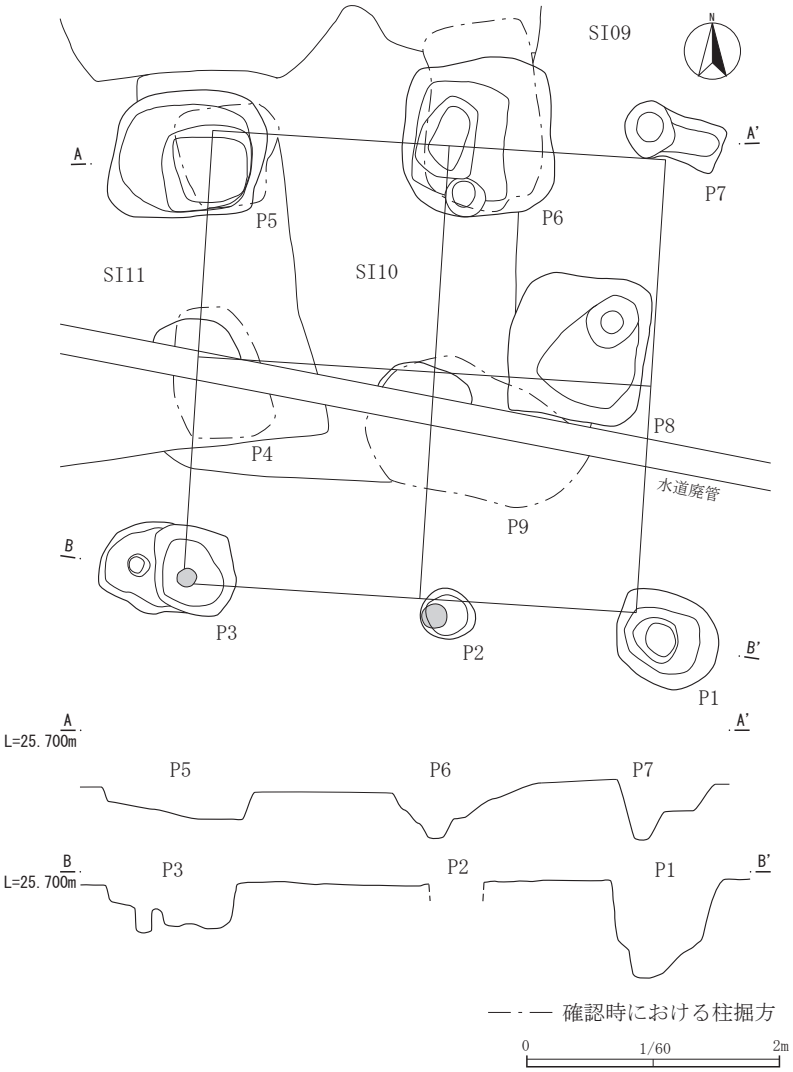
重複関係：P6 は SI10 の床面を切る形で確認、P5 は同床下で確認、P4・9 と SI10 との新旧関係は不明である。P6 は上部に新しい土坑が重複している可能性もある。

出土遺物：土師器 44.1g、須恵器 36.3g、瓦 121.4g、礫 43.6g。

遺構の帰属時期：不明。



第 97 図　SB02 出土遺物



第 96 図　SB02

第 58 表　SB02 属性表

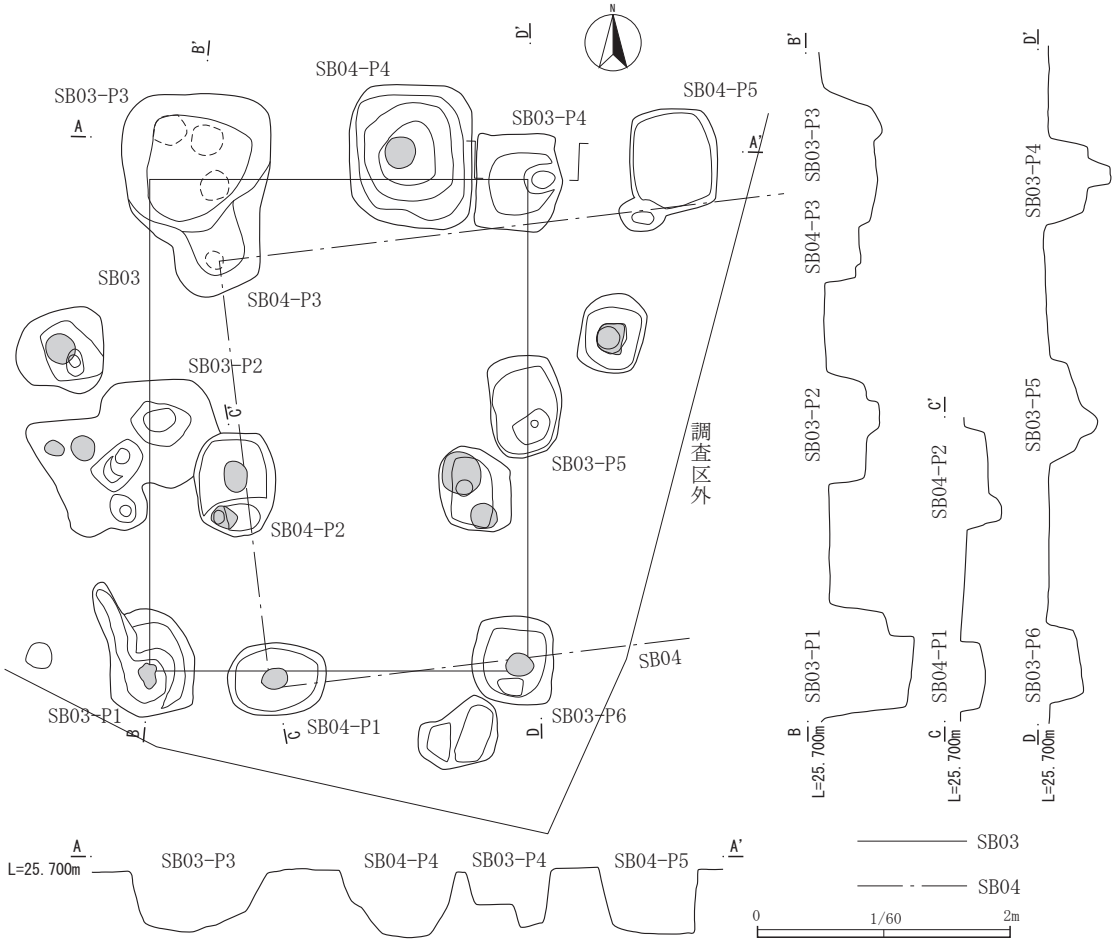
グリッド	D5	平面形状	総柱	主軸方向	N-4°　-E	
規 模	梁行	2 間	桁行	2 間		
柱間距離（芯々間）	P3-P4	1.62m	P1-P2	1.80m		
	P4-P5	1.59m	P2-P3	1.96m		
	P7-P1	4.05m	P5-P6	1.87m		
			P6-P7	1.57m		
柱穴	平面形状	長径	短径	深さ	底面レベル	柱当
P1	円形	82cm	77cm	78cm	24.857m	無
P2	円形	45cm	37cm	－	－	有
P3	不整円形	68cm	65cm	33cm	25.215m	有
P4	不明	60cm	(28cm)	－	－	無
P5	隅丸方形	121cm	109cm	21cm	24.995m	無
P6	隅丸方形	127cm	121cm	44cm	24.846m	無
P7	不明	80cm	45cm	48cm	24.829m	無
P8	隅丸方形	114cm	109cm	－	－	無
P9	不明	75cm	(25cm)	－	－	無

第 59 表　SB02 出土遺物観察表

遺構番号	掲載番号	注記	種類	器種	口径	器高	底径	重量	残存	整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
SB02-P7	01	SB-02 P-7	瓦	平瓦	タテ〈11.0〉	ヨコ〈5.4〉	厚 1.9	121.4	右側縁残存	凹面布目圧痕、側縁ケズリ。凸面縄目回転圧痕。側面ケズリ。	雲母・白色粒子やや多い	良好	内面　黄褐 外面　にぶい黄	被熱黒化

SB03・04（第 98・99 図、第 60 ～ 62 表、遺構図版 10、遺物図版 16）

14 基以上のピット群。東（・南）側調査区外に延びるものと思われる。組み合わせが明確ではないが、造営方位が南北の建物（SB03：N-0°-E）とやや西に偏する建物（SB04：N-8°-W）を想定した。前者には中央付近の柱穴 6 基（SB04-P2 含む）が伴う可能性があるが、柱間構造が判然としないため、概要報告の所見を尊重して 2 棟の組み合わせを示しておく。



第 98 図　SB03・04

SB03　梁行 3.00m・10 尺、桁行 3.90m・13 尺・一間 =6.5 尺。P1 は平面形状から北北東方向に延びる掘方は柱抜取穴と見られる。P4・5 の最深部は柱痕跡と見てよい。

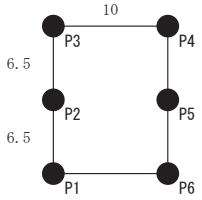
SB04　梁行 3.30m・11 尺・一間 =5.5 尺、桁行も一間 =5.5 尺か。側柱列はやや不明瞭、南側柱列中間柱は遺物（01）の出土・接合状況からすると、SB03-P6 と重複か。P4 は掘方規模と位置から伴わない可能性あり。P5 は南西角が柱痕跡か。

出土遺物：土師器 754.9g、須恵器 382.0g、灰釉陶器 43.5g、礫 379.1g。01 は SB03-P6・SB04-P2 出土、02 は P4 出土の土師器有台皿（黒色土器 B 類）。02 は体部外面に墨書「太□□□」あり。03 は灰釉陶器小碗で、美濃産・虎渓山 1 号窯式（10 世紀後半）に比定される。04 は同壺・瓶類。猿投産・黒笹 90 号窯式か。

遺構の帰属時期：土師器から 9 世紀後半と考えるのが穏当か。

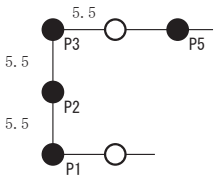
第 60 表　SB03 属性表

グリッド	E5	平面形状	側柱	主軸方向	N-0°　-E	
規　模	梁行	1 間	桁行	2 間		
柱間距離（芯々間）	P3-P4	2.75m	P1-P2	2.04m		
	P6-P1	2.94m	P2-P3	2.06m		
			P3-P4	1.92m		
			P5-P6	1.91m		
柱穴	平面形状	長径	短径	深さ	底面レベル	柱当
P1	隅丸方形	85cm	70cm	67cm	24.844m	有
P2	不整方形	87cm	86cm	41cm	25.115m	無
P3	隅丸方形	118cm	109cm	47cm	25.094m	無
P4	長方形	76cm	68cm	45cm	25.121m	無
P5	隅丸長方形	80cm	57cm	38cm	25.227m	無
P6	隅丸方形	70cm	65cm	27cm	25.343m	有

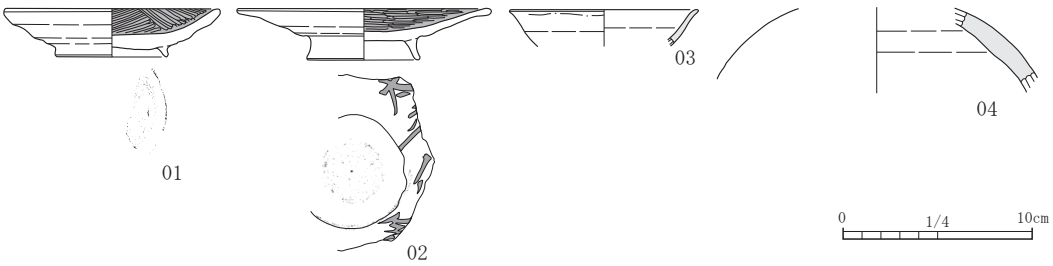


第 61 表　SB04 属性表

グリッド	E5	平面形状	側柱	主軸方向	N-8°　-W	
規　模	梁行	2 間	桁行	3 間以上ヵ		
柱間距離（芯々間）	P1-P2	1.62m	P3-P4	1.57m		
	P2-P3	1.72m	P4-P5	1.76m		
			P1-SB03P6	1.94m		
柱穴	平面形状	長径	短径	深さ	底面レベル	柱当
P1	隅丸方形	79cm	58cm	67cm	25.376m	有
P2	不整方形	82cm	65cm	41cm	25.251m	有
P3	隅丸方形	(80cm)	74cm	47cm	25.102m	無
P4	長方形	114cm	97cm	45cm	25.056m	無
P5	隅丸長方形	84cm	79cm	38cm	25.090m	無



※図中の明朝体数字は柱間寸法 = 尺



第 99 図　SB03・04 出土遺物

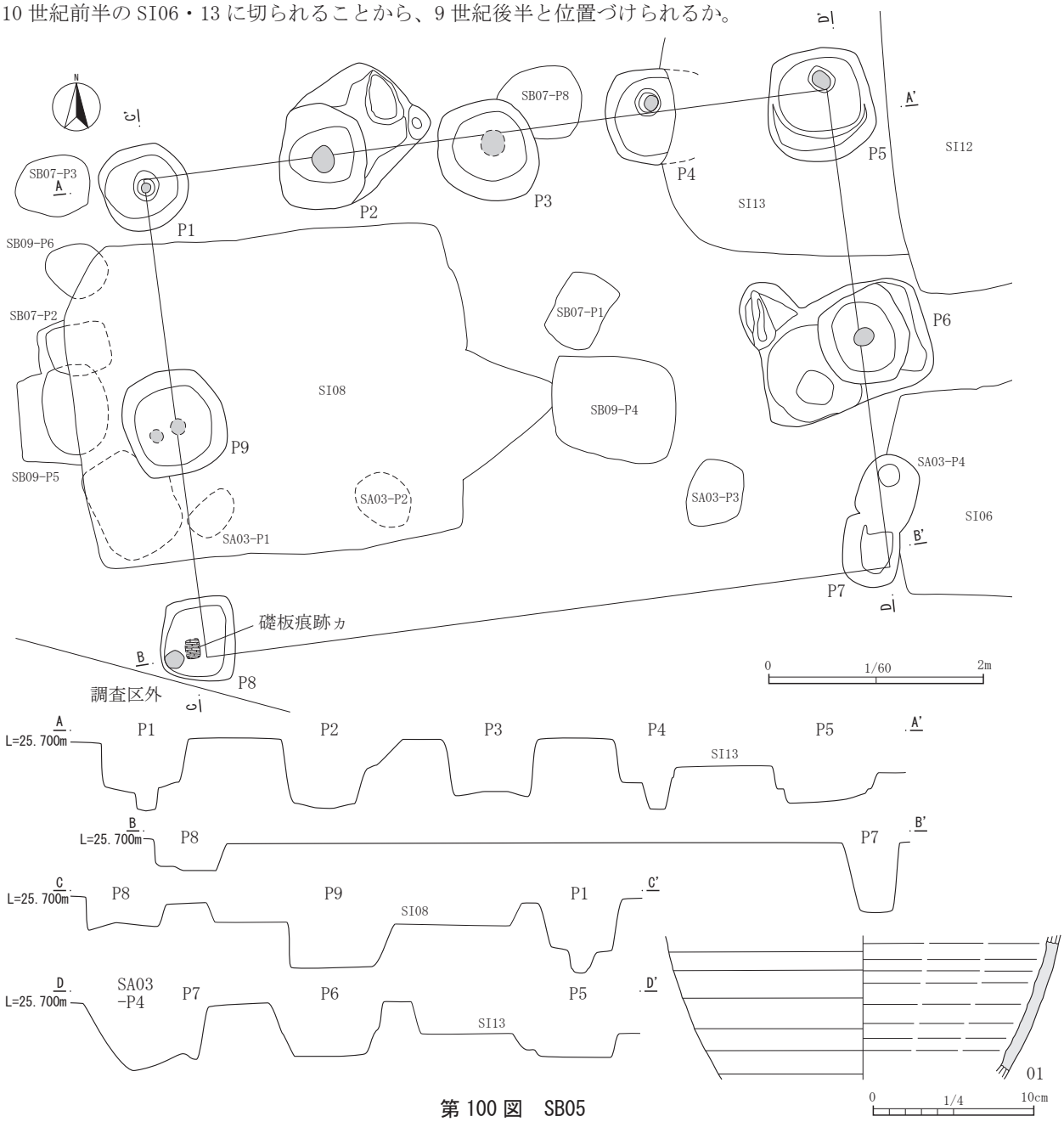
第 62 表　SB03・04 出土遺物観察表

遺構番号	掲載番号	注記	種類	器種	口径	器高	底径	重量	残存	整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
SB03-P6 SB04-P2	01	SB-04 P-1・ SB-04 P-5	土師器	有台皿	(11.1)	〈2.5〉	(5.7)	47.0	1/4	ロクロ整形、底部回転糸切り後ナデ整形。	雲母・白色粒子・白色針状物質・スコリア少量	良好	内面　黒 外面　にぶい褐	内面黒色処理
SB04-P4	02	SB-03 P-4	土師器	有台皿	(13.1)	〈2.7〉	(5.7)	81.0	1/3	ロクロ整形、底部回転ヘラケズリ。内面ミガキ。	雲母・白色粒子多い	良好	内面　黒 外面　にぶい黄褐	内面黒色処理 墨書「太□□□」
SB04-P3	03	SB-03 P-3	灰釉陶器	小椀	(9.8)	〈1.9〉	—	4.0	口縁 15%	器壁は薄く内湾して立ち上がり口縁端部でやや外反。	鉄分の噴出し微量	良好	胎土　灰白 釉　暗淡緑	美濃虎渓山 1 【301】実 98-2-009
SB04-P5	04	SB-03 P-5	灰釉陶器	短頸壺	—	〈4.4〉	—	39.5	肩部片	器壁は厚く内側へ丸みを持って立ち上がる。	鉄分の噴出し多い	良好	胎土　淡灰 釉　暗淡緑	猿投 K90 ヵ 【302】実 98-2-010

SB05（第 100・101 図、第 63・64 表、遺構図版 10・11、遺物図版 16）

梁行 6.30m・21 尺・一間 = 端間 5.5 尺、中央間 =5 尺、桁行 4.50m・15 尺・一間 = 南間 7 尺、北間 8 尺。南側柱列の中間柱穴は確認されていない。P2・6 の掘方は柱抜取り穴か。P8 は礎板痕跡の他に柱のあたりが、P9 には柱のあたりが 2 か所把握されているが、各柱穴に対応する状況は認められず、部分的な柱の差し替えによるものであろうか。写真から P3 では柱痕跡と版築状の掘方埋土が確認される。

重複関係：SI06・08・13 に切られる。SB07 を切る。SA03 を切るか。**出土遺物**：土師器 220.7g、須恵器 59.2g、礫 10.7g。01 は灰釉陶器長頸瓶で、猿投産・黒笹 90 号窯式（9 世紀後半）。**遺構の帰属時期**：出土遺物と、10 世紀前半の SI06・13 に切られることから、9 世紀後半と位置づけられるか。



第 100 図　SB05

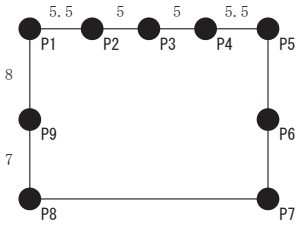
第 101 図　SB05 出土遺物

第 63 表　SB05 出土遺物観察表

遺構番号	掲載番号	注記	種類	器種	口径	器高	底径	重量	残存	整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
SB05-P2	01	SK11	灰釉陶器	長頸瓶	—	〈8.8〉	—	74.9	胴部片	外面回転ヘラケズリ、器壁は比較的薄く緩やかに内湾しながら立ち上がる、内面は密な強いロクロ目。	鉄分の噴出し極多い	良好	胎土　灰白 釉　暗淡緑色自然釉	猿投 K90 【391】実 98-2-102

第 64 表　SB05 属性表

グリッド	D2・3、E3	平面形状	側柱	主軸方向	N-8°　-W	
規 模	梁行	2 間	桁行	4 間		
柱間距離（芯々間）	P5-P6	2.44m	P1-P2	1.69m		
	P6-P7	2.01m	P2-P3	1.58m		
	P8-P9	2.01m	P3-P4	1.52m		
	P9-P1	2.31m	P4-P5	1.61m		
			P7-P8	6.46m		
柱穴	平面形状	長径	短径	深さ	底面レベル	柱当
P1	円形	80cm	80cm	67cm	24.948m	有
P2	隅丸方形	99cm	81cm	64cm	24.976m	有
P3	不整方形	98cm	92cm	49cm	25.129m	有
P4	隅丸方形ヵ	90cm	(66cm)	65cm	24.974m	有
P5	隅丸方形	105cm	100cm	38cm	24.991m	有
P6	不整方形	88cm	82cm	51cm	25.093m	有
P7	不整楕円形	70cm	53cm	69cm	24.916m	無
P8	方形	80cm	70cm	30cm	25.337m	有
P9	隅丸方形	99cm	94cm	47cm	24.940m	有



※図中の明朝体数字は柱間寸法＝尺

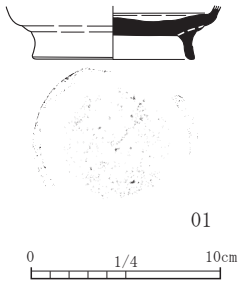
SB06（第 102・103 図、第 65・66 表、遺構図版 11、遺物図版 16）

梁行一間 =5.5 尺、桁行 4.65m・15.5 尺・一間＝端間 5 尺、中央間 5.5 尺。西側は調査区外に延びるが、梁行 2 間、桁行 3 間であろうか。

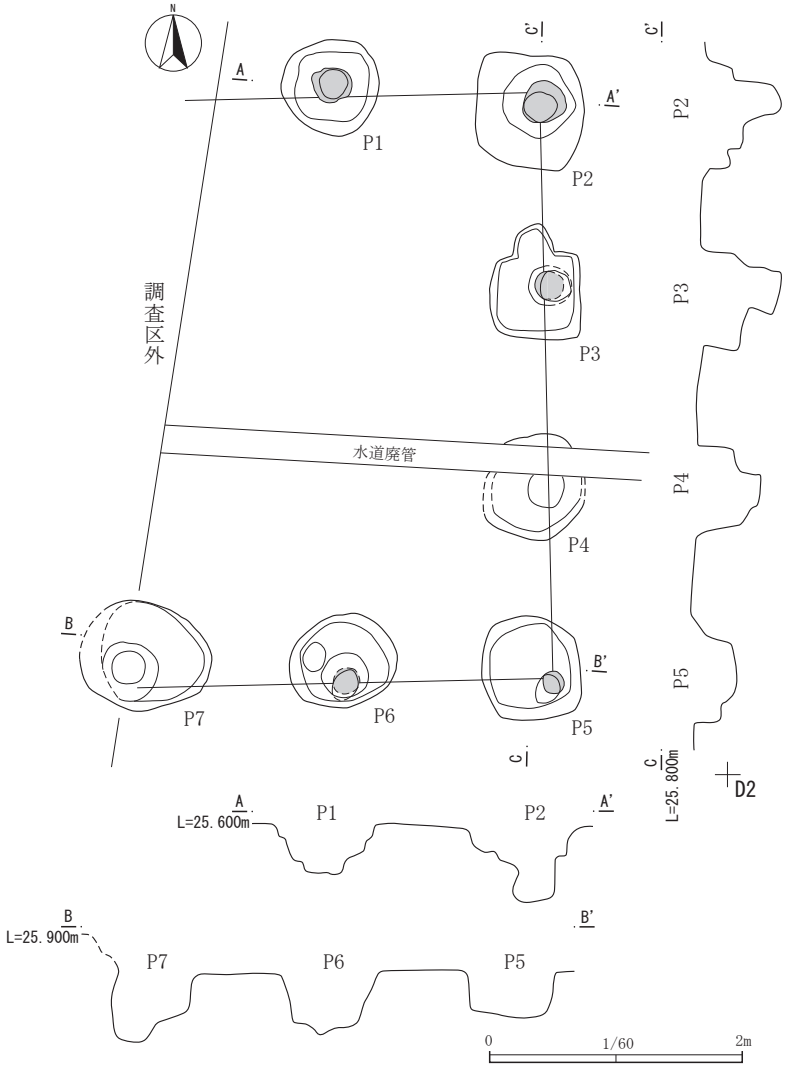
重複関係：なし。

出土遺物：土師器 12.6g、須恵器 230.9g。01 は須恵器高台付坏で、8 世紀後葉～ 9 世紀前半に位置づけられる。

遺構の帰属時期：出土遺物と、9 世紀後半～ 10 世紀後半の SI27・28・31 に近在することから、9 世紀前半以前と考えるのが穏当か。



第 103 図　SB06 出土遺物



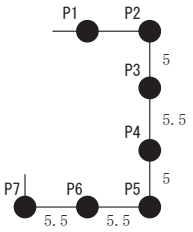
第 102 図　SB06

第 65 表　SB06 出土遺物観察表

遺構番号	掲載番号	注記	種類	器種	口径	器高	底径	重量	残存	整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
SB06-P6	01	SB-07 P-6	須恵器	有台坏	—	〈2.7〉	8.1	157.6	体部下端～底部	ロクロ整形、底部回転ヘラケズリ。	小～中礫多い、白色針状物質・雲母微量。	良好	内外面　灰	外面底部転用硯ヵ

第 66 表　SB06 属性表

グリッド	C1	平面形状	側柱	主軸方向	N-1°　-W	
規 模	梁行	2 間以上	桁行	3 間		
柱間距離（芯々間）	P1-P2	1.67m	P2-P3	1.45m		
	P5-P6	1.64m	P3-P4	1.61m		
	P6-P8	1.72m	P4-P5	1.55m		
柱穴	平面形状	長径	短径	深さ	底面レベル	柱当
P1	隅丸方形	77cm	76cm	39cm	25.110m	有
P2	隅丸方形	89cm	86cm	59cm	24.890m	有
P3	隅丸方形	72cm	70cm	62cm	24.880m	有
P4	不整円形	84cm	81cm	50cm	25.030m	無
P5	隅丸長方形	83cm	79cm	35cm	25.220m	有
P6	不整円形	86cm	72cm	49cm	25.070m	有
P7	不整円形	105cm	86cm	52cm	25.010m	無



※図中の明朝体数字は柱間寸法＝尺

SB07（第 105 図、第 67 表、遺構図版 10）

梁行 3.60m・12 尺・一間 =6 尺、桁行 4.80m・16 尺・一間＝端間 5.5 尺、中央間 5 尺。南側柱列の中間柱穴は SI08 によって消失か。梁行 2 間、桁行 3 間と見てよいだろう。ややはっきりしないが、写真記録では P6 は SB09-P2 を切るようである。P5 と SB09-P1 の切り合いは不明。

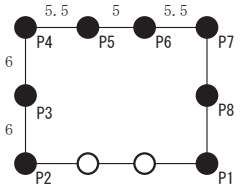
重複関係：SI08 と SB05 に切られる。SB09 を切るか。

出土遺物：土師器 63.4g、須恵器 279.4g。

遺構の帰属時期：9 世紀後半の SB09 との重複関係と、SB05 に切られることから、9 世紀後半と位置づけられる。

第 67 表　SB07 属性表

グリッド	D2・3	平面形状	側柱	主軸方向	N-10°　-W	
規 模	梁行	2 間	桁行	3 間		
柱間距離（芯々間）	P2-P3	1.57m	P1-P2	4.74m		
	P3-P4	1.70m	P4-P5	1.69m		
	P7-P8	1.88m	P5-P6	1.45m		
	P8-P1	1.86m	P6-P7	1.61m		
柱穴	平面形状	長径	短径	深さ	底面レベル	柱当
P1	長方形	72cm	48cm	－	－	無
P2	長方形	(67cm)	(52cm)	23cm	25.320m	無
P3	不整円形	71cm	57cm	47cm	25.160m	有
P4	不整円形	113cm	109cm	28cm	25.289m	有
P5	不整円形	109cm	90cm	23cm	25.360m	有
P6	不整円形	102cm	99cm	50cm	25.110m	有
P7	隅丸長方形	103cm	73cm	46cm	25.166m	有
P8	不整円形	(77cm)	73cm	32cm	25.300m	無



※図中の明朝体数字は柱間寸法＝尺

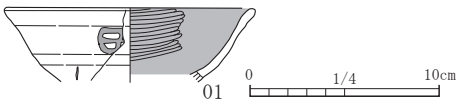
SB09（第 104・105 図、第 68・69 表、遺構図版 10、遺物図版 16）

梁行 4.05m・13.5 尺、桁行 5.10m・17 尺・一間＝端間 6 尺、中央間 5 尺。南側柱列の中間柱穴は SI08 によって消失の可能性があり、梁行 2 間、桁行 3 間と見てよいだろう。

重複関係：SI08 に切られる。SB07 にも切られるか。

出土遺物：土師器 66.4g、須恵器 41.8g。01 は土師器無台坏（黒色土器 A 類）で、体部外面に墨書「田」あり。

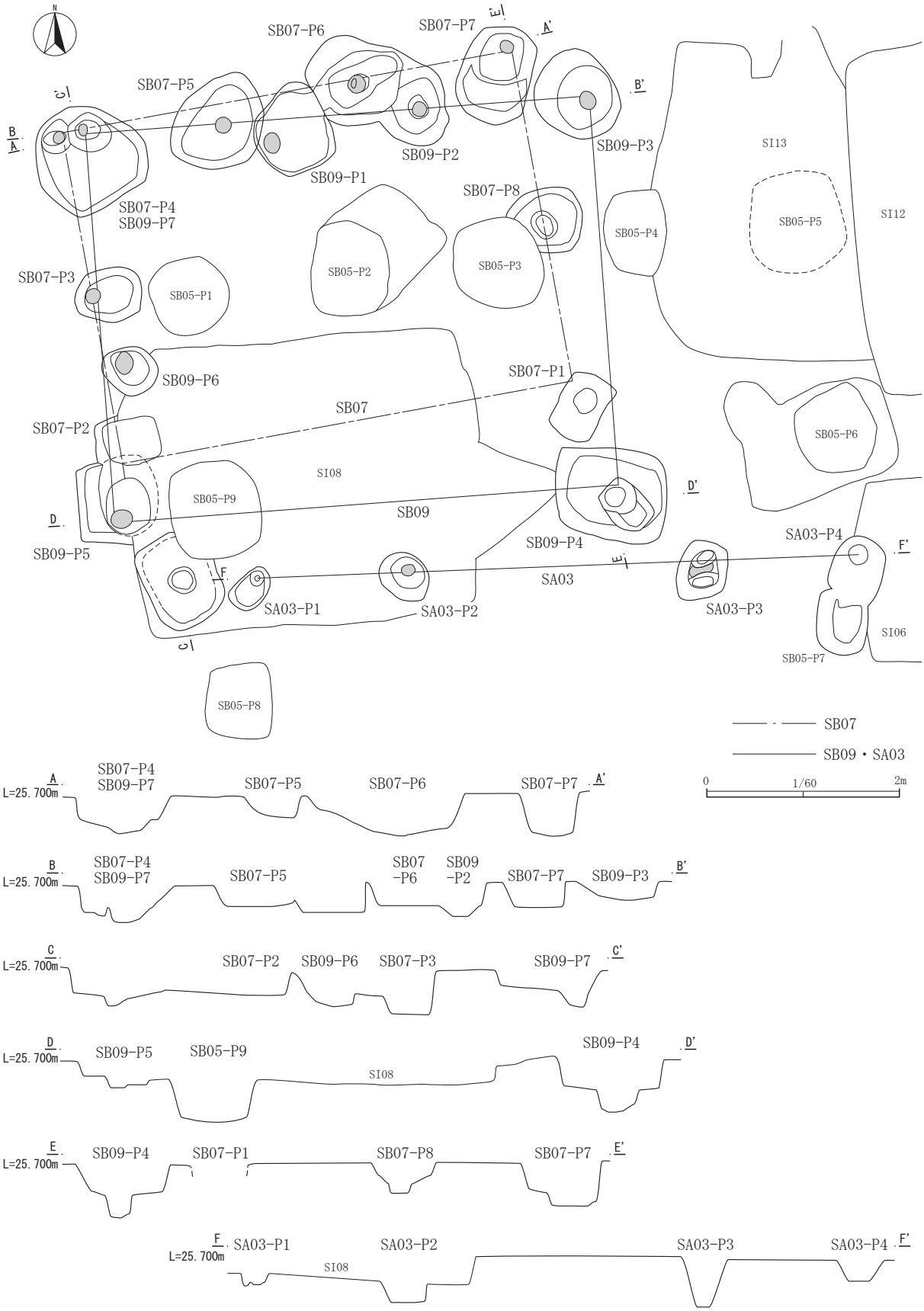
遺構の帰属時期：9 世紀後半の SB05 に切られ、SB07 との重複関係から、9 世紀後半と位置付けられる。SB07 とは、ほぼ同規模、同一場所における建て替えの関係が推定される。



第 104 図　SB09 出土遺物

第 68 表　SB09 出土遺物観察表

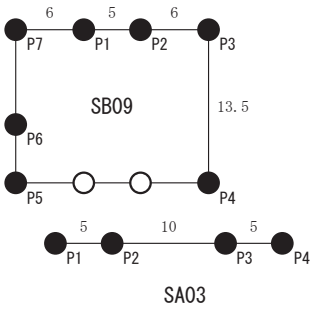
遺構番号	掲載番号	注記	種類	器種	口径	器高	底径	重量	残存	整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
SB09-P1	01	SB-08 P-1	土師器	無台坏	(12.6)	〈4.5〉	―	18.4	口縁 1/5	ロクロ整形、 内面ミガキ。	雲母・白色針状物質やや多い、白色粒子少量	良好	内面　黒 外面　にぶい黄褐	内面黒色処理 墨書「田」



第 105 図　SB07・09・SA03

第 69 表　SB09 属性表

グリッド	D2・3	平面形状	側柱	主軸方向	N-4°　-W	
規 模	梁行	2 間	桁行	3 間		
柱間距離（芯々間）	P3-P4	4.12m	P4-P5	5.13m		
	P5-P6	1.59m	P7-P1	1.96m		
	P6-P7	2.43m	P1-P2	1.55m		
			P2-P3	1.73m		
柱穴	平面形状	長径	短径	深さ	底面レベル	柱当
P1	不整方形	88cm	78cm	35cm	25.285m	有
P2	不整円形	(87cm)	73cm	36cm	25.248m	有
P3	不整円形	94cm	82cm	20cm	25.420m	有
P4	隅丸長方形	117cm	96cm	55cm	25.045m	無
P5	長方形	(84cm)	84cm	27cm	25.299m	有
P6	不整円形	58cm	49cm	36cm	25.192m	有
P7	不整円形	113cm	109cm	39cm	25.185m	有



※図中の明朝体数字は柱間寸法＝尺

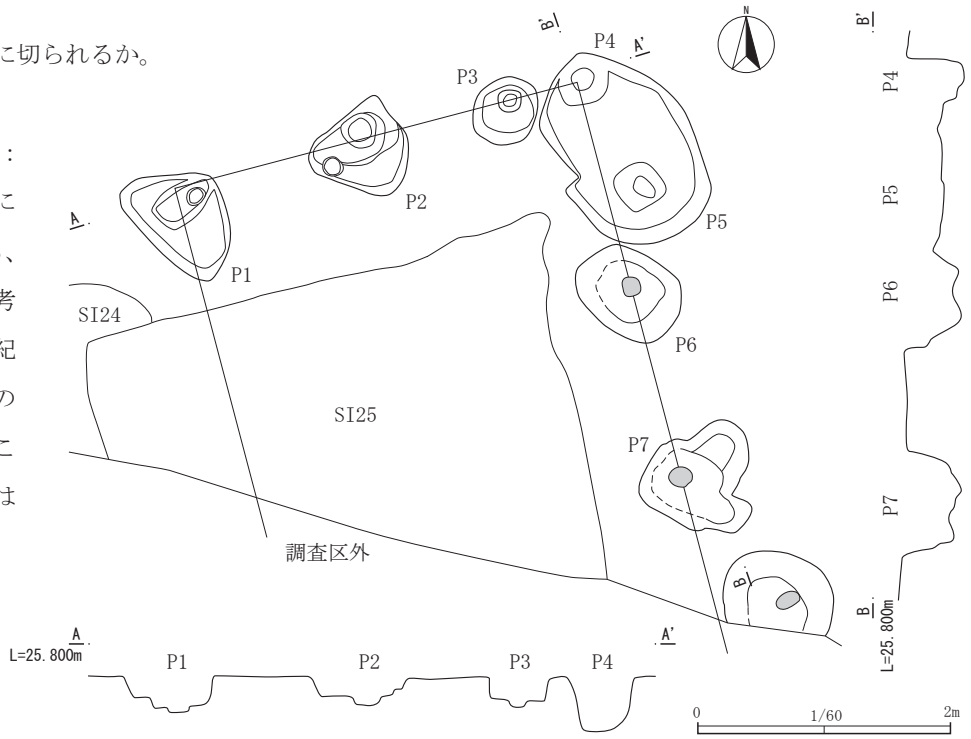
SB08（第 106 図、第 70 表、遺構図版 11）

梁行3.30m、11尺、一間=5.5尺、桁行も一間=5.5尺。南側調査区外に延びる。西側柱列の中間柱穴はSI25によって消失か。梁行２間、桁行３間と見られる。P3 は副え柱か。P4・5 の新旧関係は不明。あるいは P5 は P4 の柱抜取穴か。柱掘方平面形は概ね隅丸長方形で、北西－南東方向に長軸を向ける傾向があるようだ。P7 の突出部分、及び P1・2 の変形は柱抜取りによるものと見られる。P7 南東の柱穴は SB09-P5 南東の柱穴と同一建物の可能性があるだろうか。

重複関係：SI25 に切られるか。

出土遺物：なし。

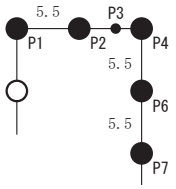
遺構の帰属時期：9 世紀前半の SI25 に切られる可能性から、9 世紀前半以前と考えられるが、8 世紀末～9 世紀初頭の SI24 とは近接することから、同時存在は考え難い。



第 106 図　SB08

第 70 表　SB08 属性表

グリッド	D2	平面形状	側柱	主軸方向	N-15°　-W	
規 模	梁行	2 間	桁行	2 間以上		
柱間距離（芯々間）	P1-P2	1.61m	P4-P6	1.68m		
	P2-P4	1.82m	P6-P7	1.56m		
柱穴	平面形状	長径	短径	深さ	底面レベル	柱当
P1	不整方形	100cm	70cm	35cm	25.230m	無
P2	不整方形	76cm	76cm	24cm	25.290m	無
P3	円形	58cm	49cm	24cm	25.280m	無
P4	不整方形ヵ	89cm	55cm	46cm	25.070m	無
P5	不整形	103cm	96cm	29cm	25.240m	無
P6	隅丸長方形	87cm	65cm	44cm	25.100m	有
P7	隅丸長方形	69cm	60cm	56cm	25.073m	有



※図中の明朝体数字は柱間寸法＝尺

第 4 節　柵・掘立柱塀跡

発掘調査時に認識されていたものは SA01・02 の 2 基で、SA03 は整理作業において想定したものである。

SA01（第 107 図、第 71 表）

全長 4.72m の柱穴列。柱掘方は径 4、50cm の平面円形と小さく、大きな上部構造は想定しがたい。

重複関係：SI42 を切る。SI43 に切られるか。

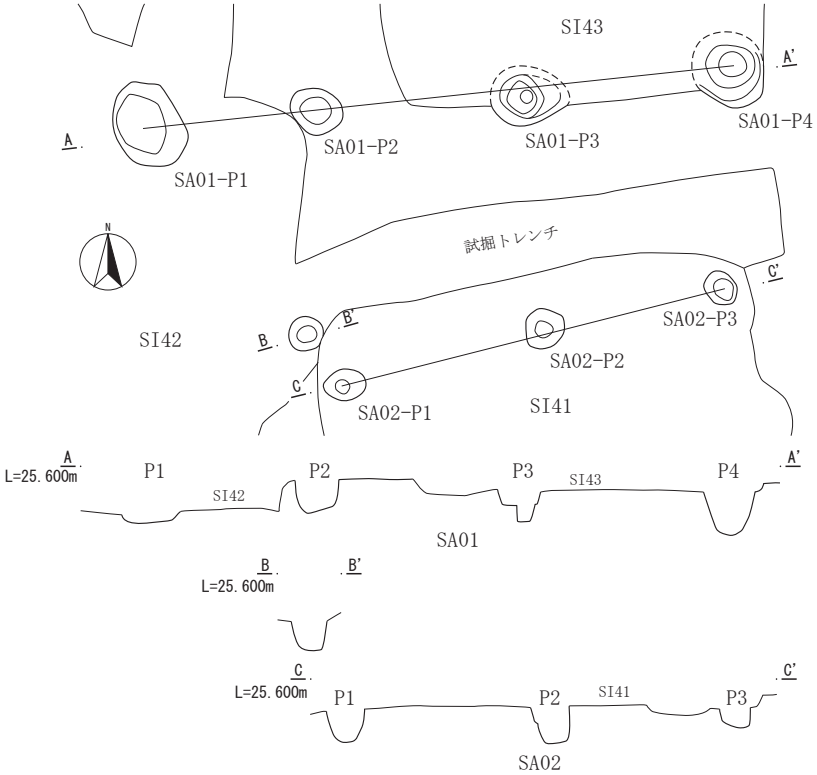
出土遺物：なし。

SA02（第 107 図、第 72 表）

全長 3.14m の柱穴列。P1 北西のピットの関連は不明。SA01 と同様、柱掘方は径 4、50cm の平面円形と小さく、大きな上部構造は想定しがたい。

重複関係：SI41 を切る。

出土遺物：なし。



第 107 図　SA01・02

第 71 表　SA01 属性表

グリッド	A・B2	主軸方向	N-84°-E			
規 模	3 間					
柱間距離（芯々間）	P1-P2	1.37m				
	P2-P3	1.69m				
	P3-P4	1.66m				
柱穴	平面形状	長径	短径	深さ	底面レベル	柱当
P1	不整楕円形	72cm	52cm	9cm	25.146m	無
P2	不整円形	43cm	36cm	27cm	25.227m	無
P3	不整円形	(61cm)	41cm	26cm	25.159m	無
P4	不整円形	(53cm)	57cm	35cm	25.053m	無

第 72 表　SA02 属性表

グリッド	B2	主軸方向	N-76°-E			
規 模	2 間					
柱間距離（芯々間）	P1-P2	1.66m				
	P2-P3	1.46m				
柱穴	平面形状	長径	短径	深さ	底面レベル	柱当
P1	不整円形	34cm	25cm	26cm	25.299m	無
P2	不整円形	33cm	31cm	30cm	25.087m	無
P3	不整円形	29cm	23cm	16cm	25.213m	無

SA03（第 105 図、第 73 表）

全長 6.21m の柱穴列。端間 5 尺、中央間 10 尺と規則性が見られ、中間柱穴（P2・3）には柱のあたりが認められる。

重複関係：SI06 に切られる。P4 と SB05-P7 の切り合いは不明瞭であるが、記録過程からすると、P4 → SB05-P7 である。

出土遺物：なし。

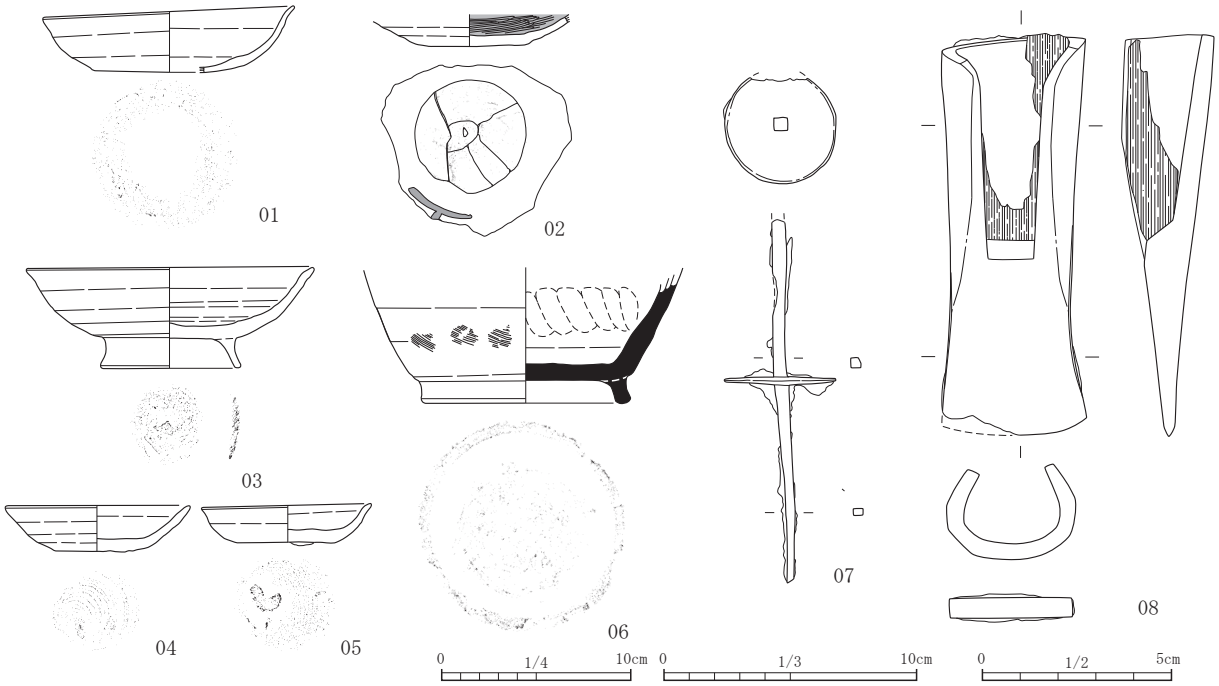
第 73 表　SA03 属性表

グリッド	D3	主軸方向	N-88°-E			
規 模	3 間					
柱間距離（芯々間）	P1-P2	1.56m				
	P2-P3	3.05m				
	P3-P4	1.60m				
柱穴	平面形状	長径	短径	深さ	底面レベル	柱当
P1	不整円形	49cm	32cm	12cm	25.299m	無
P2	不整円形	57cm	45cm	22cm	25.113m	有
P3	不整円形	63cm	51cm	46cm	25.131m	有
P4	不整円形	(62cm)	54cm	49cm	25.065m	無

第 5 節　遺構外出土遺物（第 108 図、第 74 表、遺物図版 17）

遺構外出土遺物としては、残存度が高いものに限り掲載を行った。内訳は土師器無台坏 2 点、有台埦 1 点、小皿 2 点、須恵器瓶 1 点、鉄製品では紡錘車 1 点、斧 1 点の計 7 点である。

詳細は観察表にまとめた。なお「SI45No1」と注記された遺物（02）があるものの、該当する遺構はない。



第 108 図　遺構外出土遺物

第 74 表　遺構外出土遺物観察表

掲載番号	注記	種類	器種	口径	器高	底径	重量	残存	整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
01	—	土師器	無台坏	13.1	3.1	7.8	102.0	口縁・底部一部欠損	ロクロ整形、底部回転ヘラ切りｶ。	雲母多い、長・石等小ﾚｷ多い	良好	内面　にぶい黄橙 外面　灰黄褐	
02	SI45No.1	土師器	無台坏	—	〈1.6〉	5.9	58.5	体部下端～底部	ロクロ整形、底部回転糸切り周縁を広く手持ちヘラケズリ、内面ミガキ。	雲母多い、白色粒子・黒色粒子少量、ﾚｷ微量	良好	内面　黒 外面　にぶい黄橙	内面黒色処理 墨書「□」
03	SI19～21 ｶｸﾆｼﾞ面	土師器	有台埦	15.0	5.3	(7.0)	205.8	ほぼ完形	ロクロ整形、体部下端広く回転ヘラケズリ、底部回転ヘラ切り。	雲母・スコリア少量、長石多い	良好 二次焼成ｱﾘ	内外面　にぶい黄橙	
04	表採 D-3	土師器	小皿	9.6	2.4	4.3	69.5	ほぼ完形	ロクロ整形、底部回転糸切り（左）。	雲母・白色粒子少量、白色針状物質微量	良好	内外面　にぶい橙	
05	表採 D-4	土師器	小皿	8.7	1.9	5.2	63.1	口縁 1/3 欠損	ロクロ整形、底部回転糸切り（左）。	白色粒子少量	良好	内外面　にぶい橙	
06	表採 D-3	須恵器	瓶	—	〈7.0〉	10.2	443.9	体部下端～底部	ロクロ整形、外面胴部下端付近平行叩きが確認される、内面指頭圧痕あり、底部回転ヘラケズリ後ナデ。	雲母少量、白色粒子やや多い	良好	内面　にぶい黄橙 外面　灰黄褐	
07	表採 D-4	鉄製品	紡錘車	紡輪直径 4.4、紡軸長さ〈14.4〉、同太さ 0.4			31.9	紡輪一部・紡軸上部欠損	紡輪は円盤状（銭型）。紡軸は断面方形を呈するようである。紡輪上面には緑青様の付着物が看取される。				
08	表採	鉄製品	袋状鉄斧	長 10.5	刃部幅 3.8	厚 1.1	165.7	刃部一部欠損	無肩タイプ。基部幅と刃部幅がほぼ同じ。器面の剥落が著しいが、刃部は両刃と見てよい。柄袋部には柄の木質が残り、着柄状態であったことがわかる。				

第５章　まとめ

第１節　緑釉・灰釉陶器の出土状況

本遺跡から出土した緑釉陶器は７点、灰釉陶器は112点である。出土した各遺構別に掲載した。

これらの遺物については、川井正一氏指導のもと小松崎博一・山本吉一氏の両名により資料紹介がなされている（小松崎･山本2007）。本報告に掲載した遺物図は、同書に掲載された実測原図をデジタルにより再トレースしたものである。また､遺物の産地同定については未報告ながら両氏がまとめられた一覧表を提供いただき、所見はそのまま転載した。

その中では､黒笹14号窯､同90号窯､折戸53号窯､東山72号窯の猿投型式､及び光ヶ丘１号窯､大原２号窯､虎渓山１号窯の美濃型式、更に三河の二川窯、遠江の宮口窯の資料が出土していたと記載される。猿投・百代寺窯式の出土は報告されていない。齊藤孝正氏の編年（齊藤2000）に当てはめれば、９世紀前葉から10世紀末ころにかけての遺物が出土していることになる。なお、国分遺跡においては11世紀代とされる百代寺窯式遺物の出土が報告されている（川井2002）。

これらの遺物が出土した遺構を全体図に色分けしたものが第109図である。遺構の重複関係ではSI22･SI33がSK43によって切られており、調査の結果からSK43が新しくなることが判明している。SK43では東山72号窯産の灰釉深碗、虎渓山１号窯の灰釉碗が出土する。一方、SI33では黒笹90号窯式に並行する緑釉碗が出土しており齟齬はない。また、SI19～22・34では重複関係からSI21・22が最も新しくSI20→SI19→SI34の順に古くなることが確認されている。いずれの遺構も黒笹90号窯式を主体とするもので、明確な判定はできないが、SI19では黒笹14号窯式～黒笹90号窯式の９世紀前半が主体となる遺物が多く灰釉陶器からはやや古い様相を示す。これは新旧関係に若干の疑問を残している。一方で、SI35・37・38・39では重複関係からSI35・39が最も古く、SI38→SI37の順に新しくなる。SI37では黒笹14号窯式～黒笹90号窯式と９世紀前半の遺物が主体で、SI38では黒笹14号窯式～黒笹90号窯式でほぼ同様の組成、しかしながらSI35では９世紀後半の光ヶ丘１号窯・折戸53号窯の遺物が主体となり、明らかに齟齬を生じている。土坑ではSK40で黒笹90号窯式の新段階、SK41で黒笹90号窯式～折戸53号窯式、SK42では虎渓山１号窯式段階、SK43では虎渓山１号窯式・東山72号窯式が出土しており、住居跡出土の緑釉・灰釉陶器に対して全体的に新しい段階の遺物が出土している。これは、土坑と住居跡の新旧関係からも齟齬はない。

さらに掘立柱建物跡では、SB01・03・05から黒笹90号窯式、SB03から虎渓山１号窯式の遺物が出土している。住居跡群の遺物と並行関係にある。したがって、住居跡と掘立柱建物跡の新旧関係は異なった時期に存在したものでなく、住居跡と並行して存在したものと判断される。

第２節　文字資料

出土した文字資料（記号を含む）としては、土器に書かれた墨書38点、朱墨書１点、刻書（焼成前）20点である。破片資料が多いため判読不明のものがあるが、第110・111図にその一覧を示した。なお、文字の読み下しは国立歴史民俗博物館館長平川 南先生にお願いした。

墨書土器はほとんどが土師器坏・埦類で、本遺跡では９世紀中葉から10世紀後半の内黒土器の体部外面に書かれたものが一般的である。SI01から出土した６点のうち、06「曹司」は、官庁に付帯する施設及び官位の一種と考えられ、茨城町奥谷遺跡や千葉県香取市古屋敷・印西市油作第２遺跡などに類例がある。05「万」・

第 109 図　緑釉・灰釉陶器出土遺構分布図

第 75 表　緑釉・灰釉陶器分類表

実年代	猿投窯				尾北窯		美濃窯				三河（二川窯）			遠江（宮口窯）	
	窯式（略号）	型式	出土遺構		窯式	出土遺構	窯式	時期	出土遺構		群	期	出土遺構	窯	出土遺構
800	井ヶ谷 78 号窯式（IG78）						美濃須衛窯								
	IG78 ～ K14		SI09												
	黒笹 14 号窯式（K14）	1 型式			篠岡 47 号窯式									吉名 6 号窯	
		2 型式	SI13・SI37・SK14											吉名 6・1 号窯	
	K14 ～ K90		SI09・SI15・SI19・SI21・SI22・SI37・SI38・SI39・SK42												
850	黒笹 90 号窯式（K90）	1 型式（K90-1）	SI15・SI37・SI39・SK11・SK12・SK42	K90 細分不可	篠岡 4 号窯式	SI16					第 1 群	1 期			遠江細分不可
		2 型式（K90-2）	SI01・SI09・SI14・SI20・SI22・SI33 緑・SI35 緑・SI38 緑	SI04・SI08 緑・SI09・SI10 緑・SI13・SI14・SI15・SI17・SI19・SI22・SI28・SI33 緑・SI34・SI35 緑・SI37・SI38・SI42・SK04 緑・SK11・SK12・SK43・SB01・SB03・SB05			光ヶ丘 1 号窯式	前半	SI37・SI20	美濃細分不可 SI42	第 2 群	1 期			
		3 型式（K90-3・90 新）	SI09・SI11・SK41					後半	SI09・SI13・SI35		第 3 群	2 期			SI13・SI14・SI20・SK11・SK12
900	K90 ～ 053		SI17・SK41				光ヶ丘 1 ～大原 2		SI09・SI13・SI35		中間		SI06・SI12・SI17・SI21		
	折戸 53 号窯式（053）	1 型式	SI14・SI53	SK43	篠岡 4’号窯式		大原 2 号窯式	前半			第 4 群	3 期			
		2 型式						後半			第 5 群				
950	053 ～ H72						大原 2 ～虎渓山 1		SI03・SK42						
	東山 72 号窯式（H72）		SK43		篠岡 27 号窯式		虎渓山 1 号窯式		SK42・SK43・SB03		第 6 群	4 期		吉名 1・3・4・5・8・9 号窯	
1000	百代寺窯式	1 型式			篠岡 1 号窯式		丸石 2 号窯式				第 7 群			吉名 5 号窯	
1060		2 型式					明和 27 号窯式								
	齊藤孝正 編年（齊藤 2000）						田口昭二 編年（齊藤・後藤編 1995）				贄 元洋 編年（贄編 2002）			松井一明 編年（贄編 2009）	

07「福」は吉祥文字で、前者は桜川市西小塙・阿見町頭田遺跡、後者はつくばみらい市鎌田・石岡市鹿の子C遺跡、両者とも出土しているのはつくば市中原遺跡である。おなじ吉祥句でもSI17-10「利古」は11世紀に降る事例で、他に例を見ない。SI39-01「十万」は合わせ文字の一種と思われる。

ここで注目されるのはSI20-08「物」・SK18-01「生□」で、とくに「生」については奥谷遺跡や千葉県習志野市谷津貝塚遺跡から多量に発見されており、他にも鹿の子C・中原遺跡に例がある。ともに古代東国の氏族として、物部や壬生系統の姓と考えることも可能である。なお、SI35-04は8世紀代に遡る須恵器蓋で、一部擦れてしまったが「石上□ロ」と読める。さらに、SB03-01「太□□□」も9世紀後半の多文字資料として興味深い。また、SI32-02は土師器甕の胴部破片で、人面絵画の一部（頬の辺り）と思われる。

その他の文字について県内での分布をみると、SI14-08「子」が牛久市ヤツノ上・稲敷市幸田台、SI22-03等「上」が中原、SK35-01「田」が竜ヶ崎市南三島・石岡市国分・奥谷遺跡にある。

刻書したものの中には9世紀代の須恵器にみられるいわゆる窯印があり、これが10世紀以降の土師器にも引き継がれているのが珍しい。またSI09-04「丁井」が内黒土師器に、SI38-12「仲林」が須恵器瓶の胴部に刻まれているが、ともに生産地名を表したものである可能性がある。

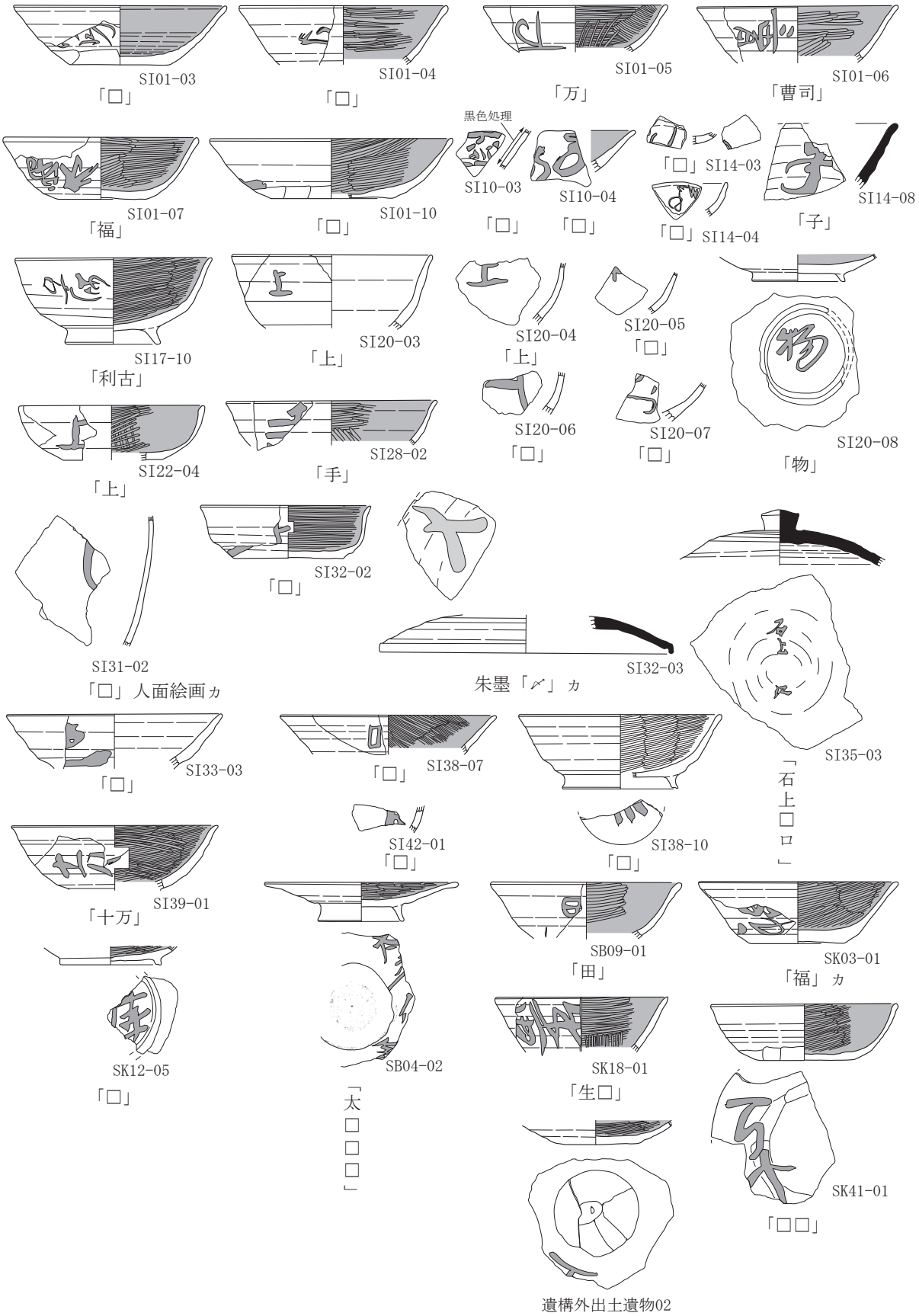
第3節　出土遺物の年代観

本遺跡から検出された遺構は住居跡41軒、掘立柱建物跡9棟、柵・掘立柱塀跡3条、土坑35基であった。これらの遺構の帰属する時期について、特に住居跡については、当初、調査担当者の土生朗治氏によって概要報告書第5図「竪穴住居跡の構造と新旧関係」にその新旧関係が形状を考慮して示されていた。整理作業に当たって、筆者らも同図の見解を基に、遺物の組み合わせから年代観を示すことに努力した。しかし、現場（原図）で切り合いが不明瞭であった住居跡については、出土遺物の帰属の検討、型式学的検討を踏まえると、新旧関係が逆転するものが認められた。そのため、改めて1. 住居跡の重複関係、2. 遺物のセット関係、3. 緑釉・灰釉土器の3項目の関連から検討を加えることになった。3については、小松崎氏らによる緑釉・灰釉陶器の分類結果から齊藤編年に基づいて、在地産の土師器・須恵器との整合性についてクロスチェックを行った。

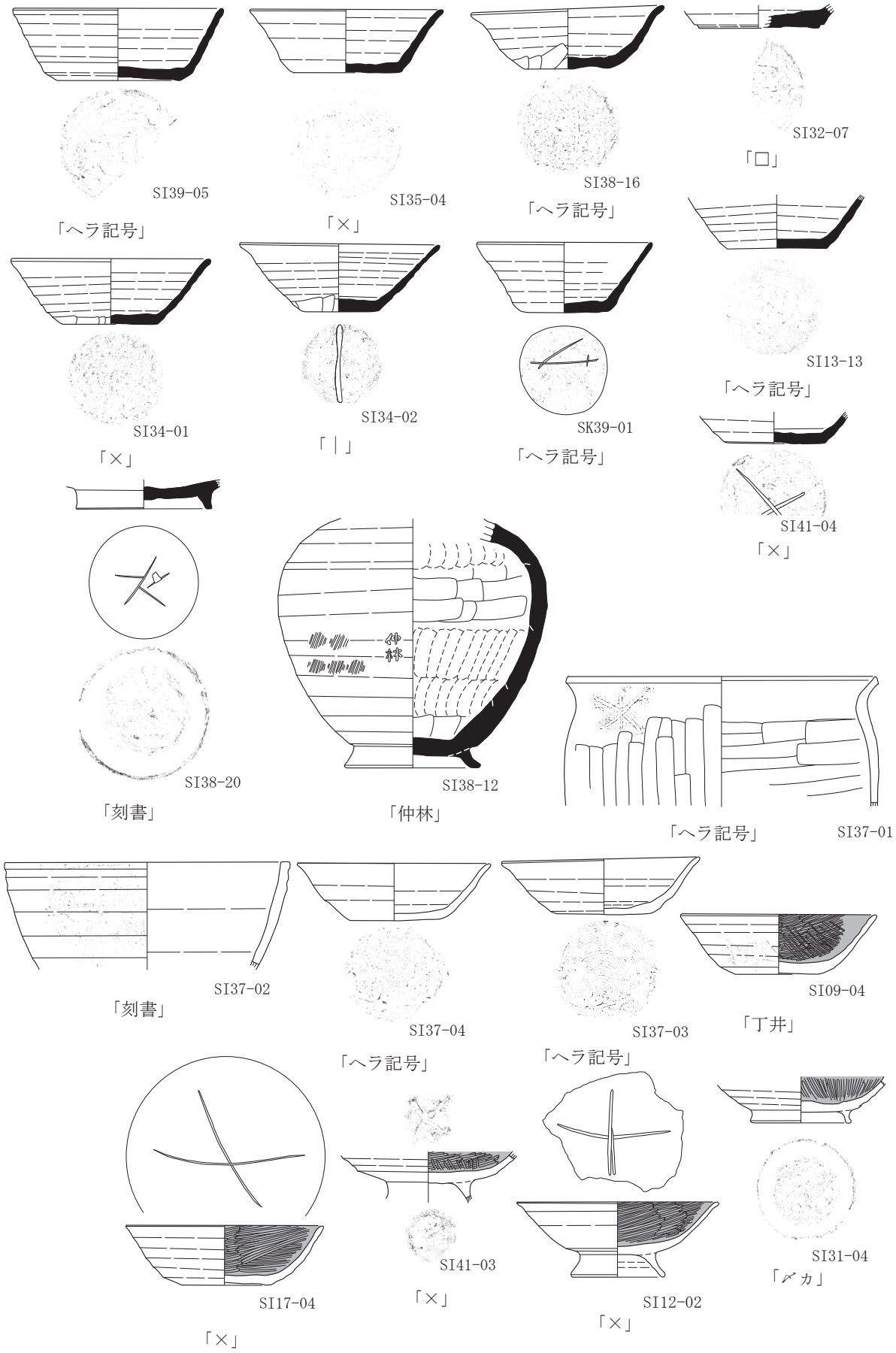
まず、本節では出土遺物について整理をしておく。土師器・須恵器について、それぞれ継続する器種、消滅する器種、新たに出現する器種をもって各時期の画期とした。その結果、8世紀後葉～9世紀初頭（Ⅰ期）、9世紀前半（Ⅱ期）、9世紀後半（Ⅲ期）、10世紀前半（Ⅳ期）、10世紀後半（Ⅴ期）、11世紀（Ⅵ期）の6期に分類された。

Ⅰ期　8世紀後葉～9世紀初頭の遺物の特徴としては、須恵器無台坏では底部が平坦で口径に対し底径が広く、器高は比較的浅いものを主体とし、須恵器蓋では返しを持たないものが出土する。さらに、有台の坏・盤がある。なお、須恵器の出土量の比率が土師器に対して多い。これらをもって8世紀後葉～9世紀初頭段階と判断した。東海産須恵器・灰釉陶器の編年では井ヶ谷78号窯式、黒笹14号窯式1・2型式がこれに並行する。

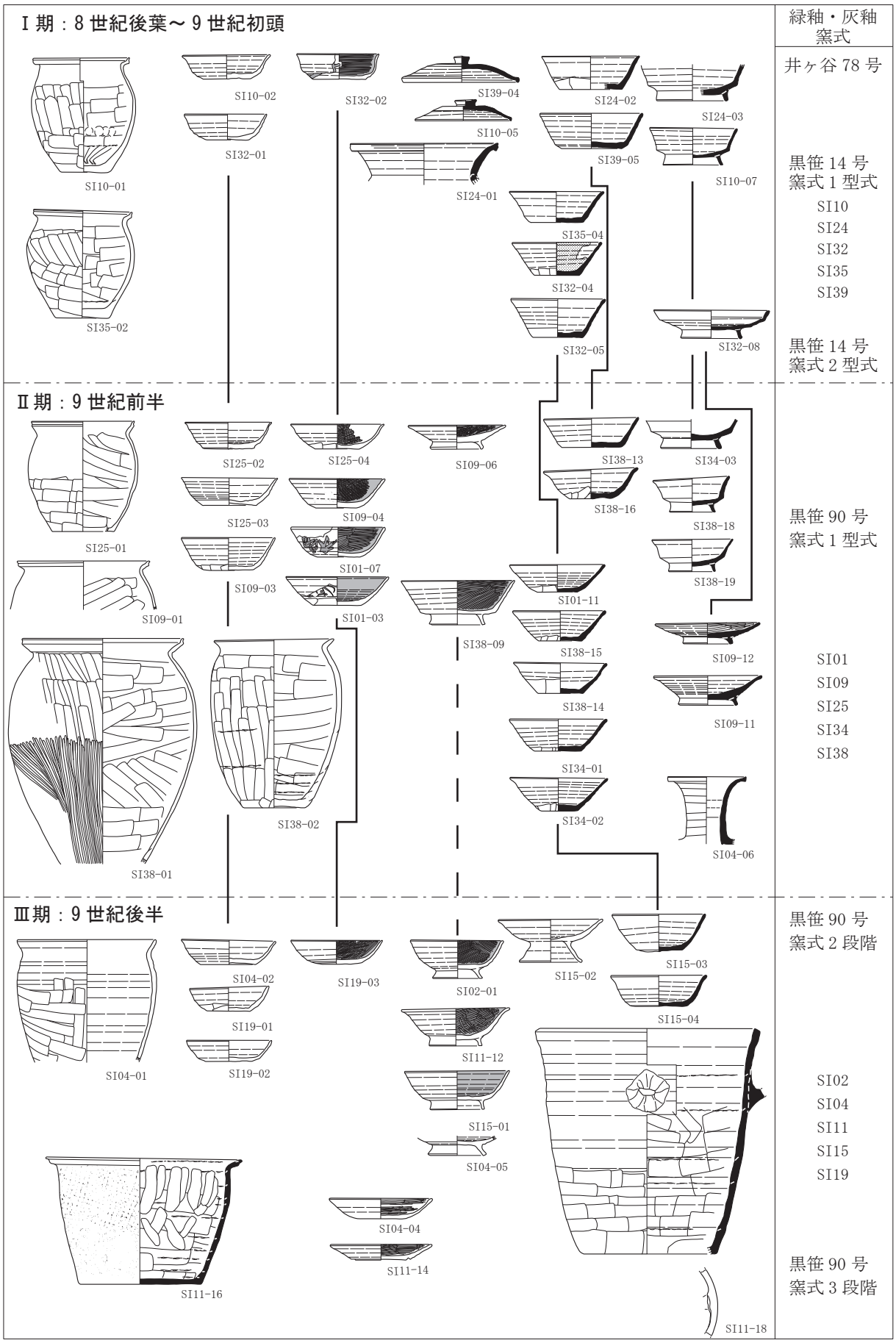
Ⅱ期　9世紀前半は須恵器の無台坏が口径に対し底径が小さくなり、器高が高くなるものに変化する。盤（有台皿）の口縁部も直線的に開くようになり、体部に屈曲は見られない。また、有台坏は前期に比較して小型化する傾向がある。須恵器の蓋は姿を消している。これらの特徴をもって9世紀前半と判断した。また、土師器無台坏は体部が緩やかに内湾し、内面ミガキ調整・黒色処理を施す黒色土器A類、特に墨書を有する資料の増加が顕著である。灰釉陶器では黒笹90号窯式1型式の遺物が共伴関係になる。



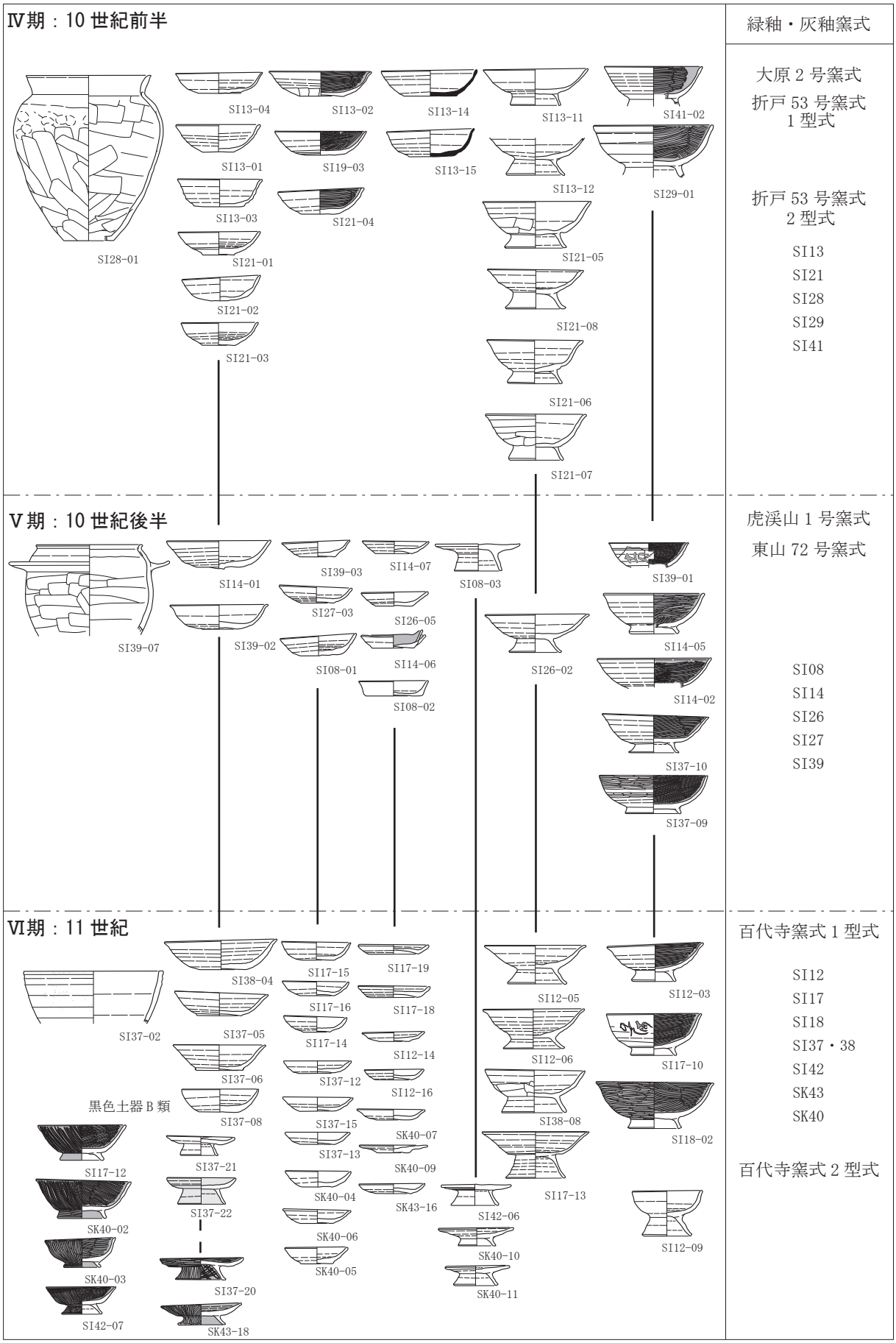
第 110 図　墨書土器集成図



第 111 図　刻書土器集成図



第 112 図　土器編年 1（8 ～ 9 世紀）



第 113 図　土器編年 2（10 ～ 11 世紀）

Ⅲ期　9世紀後半になると土師器甕から常総型が姿を消し、並行して須恵器の供膳形態の量が減少する一方で、甕・甑などに特徴的な須恵器が出現している。須恵器有台坏は姿を消し、足高高台の有台埦（坏）が出現する。また、土師器では少量ながら黒色土器A類の有台埦や、皿が出現する。全体の須恵器が占める量は極端に減少してくる。土師器の無台坏も本遺跡では出土量は少ない。これらの特徴をもって9世紀後半と判断した。灰釉陶器では猿投黒笹90号窯式2型式及び3型式が共伴する。微量ながら緑釉陶器が出土するが、やはり黒笹90号窯式またはそれに並行する資料と判断される。

Ⅳ期　10世紀前半では土師器無台の小型坏が出現する。約半数が黒色土器A類である。さらに有台埦が量を増す。中には比較的高台が高い、足高高台埦が急激な増加を示している。一方で墨書土器の数は激減している。また、土師器無台小型坏は皿状にやや浅くなるものも出現している。須恵器無台坏が少量ながら検出されているが、焼成が極めて粗悪で、還元不良の軽量のものが主体となり、土師質の須恵器とも表現できるものである。技法的にはロクロ整形で回転ヘラ切りを行うもので、須恵器の技法に法っている。これらの特徴をもって10世紀前半と判断した。灰釉陶器では大原2号窯式、折戸53号窯式1型式・2型式が共伴関係にある。

Ⅴ期　10世紀後半では羽釜の出土が挙げられる。また、土師器無台坏が増加し、それまで小振りであったものに加え大振りのものも見られる。この時期になると無台坏の内面に黒色処理を施すものは見られなくなる。また特徴的な事象として、須恵器の消滅、土師器小皿の急増、高足の有台皿の出現が挙げられる。土師器有台埦は依然として一定量の出土が見られる。一方、有台碗で内面黒色処理の黒色土器A類が多量に出土する。この時期になると墨書土器は減少するようである。灰釉陶器では虎渓山1号窯式、東山72号窯式が見られる時期で、灰釉陶器の全体量は減少する。

Ⅵ期　11世紀代では10世紀後半の組成とほぼ同様の遺物組成が見られるが、大振りの土師器無台坏は姿を消す。そして、内外面にミガキ・黒色処理を施す黒色土器B類の出現が挙げられる。内外面に炭素の吸着が見られ、断面は瓦器に酷似する。瓦器の系統へとつながるものであろう。畿内の黒色土器B類の外面のミガキ方向は横方向であるが、本遺跡出土例では縦方向のミガキとなっており、この点、畿内のものとは異なる。指標となる遺物として黒色土器B類を掲げたが、一方、灰釉陶器は百代寺窯式がこの段階に並行するものの、本遺跡では確認されていない。先日、茨城大学人文学部・水戸市教育委員会主催のシンポジウムにおいて台渡里官衙遺跡群の発掘調査成果が発表された（茨城大学編2011）。この中で、第41次調査における茨城大学の調査によって正倉跡が検出され、この基壇部分から高足の有台坏が検出されている。この遺物をもって台渡里官衙の機能の最終末期とし、12世紀を想定しているが、本遺跡における足高高台埦（坏）の出土上限は9世紀後半段階にまでさかのぼり、2世紀以上の齟齬が生じている。高足の有台埦（坏）の分類及び灰釉陶器との共伴関係についてはさらなる検証が必要と考える。

第4節　住居跡の形態と年代、及びその性格

前述のとおり、本遺跡の調査においては、41軒の住居跡が検出され、重複するものが多く確認されている。前節までの検討を踏まえて、各住居跡の属性・出土遺物・年代・重複関係についてまとめたものが第77表である。さらに、重複関係について図に表したものが第114図である。以下、各期の住居形態の特徴を列挙しておく。

Ⅰ期（8世紀後半～9世紀初頭）　平面形状は方形で北側にカマドを有し、4本の主柱穴が明瞭で入口ピットを有するものでやや規模が大きいものと、主柱穴を有さず規模がやや小さいものの二者がある。

Ⅱ期（9世紀前半）　状況は前期とほぼ同様。東カマドが見られる。

Ⅲ期（9 世後半）	方形で北側にカマドを有するもの。規模は小振りのものが多い。
Ⅳ期（10 世紀前半）	方形もしくは長方形を呈し、東カマドを有するものが約半数を占める。
Ⅴ期（10 世紀後半）	長方形で東カマドを有するもの。長軸が東西方向のものや、カマドがコーナー付近に偏在するものが見られる。
Ⅵ期（11 世紀）	長方形で長軸が東西方向のものが目立ち、カマドはコーナー付近に設置される。

概ね以上のような変化が見られる。

特徴的な形状として、土生氏も指摘する、床面の主軸方向に段を有するものがある。8 世紀末～ 11 世紀（Ⅰ・Ⅳ～Ⅵ期）にわたって存在するが、SI24 以外は 10 世紀前半～ 11 世紀（Ⅳ～Ⅵ期）のものであることが判明した。これらの住居跡の中で 10 世紀前半（Ⅳ期）と判断した SI03 に鍛冶炉が確認され、鍛造剥片、粒状滓が出土しており、鍛冶工房跡と判断される。しかしながら、この段差を有する住居跡の中で鍛冶炉を備えるものは他に確認されておらず、住居内段差と鍛冶工房の関連は明瞭ではない。現時点では遺物からこれらの段を有する住居跡の性格を特定するには至っていない

また、漆が付着した土器を出土した住居跡は SI32･38 の 2 軒である。前者は 8 世紀末～ 9 世紀初頭（Ⅰ期）、後者は 9 世紀後半（Ⅲ期）である。北カマドで方形を呈する点では共通するものの、同様の形状を示す住居すべてから漆付着の遺物が出土した訳ではない。本遺跡では 8 世紀末～ 9 世紀前半の須恵器（無台坏）に付着が確認された。

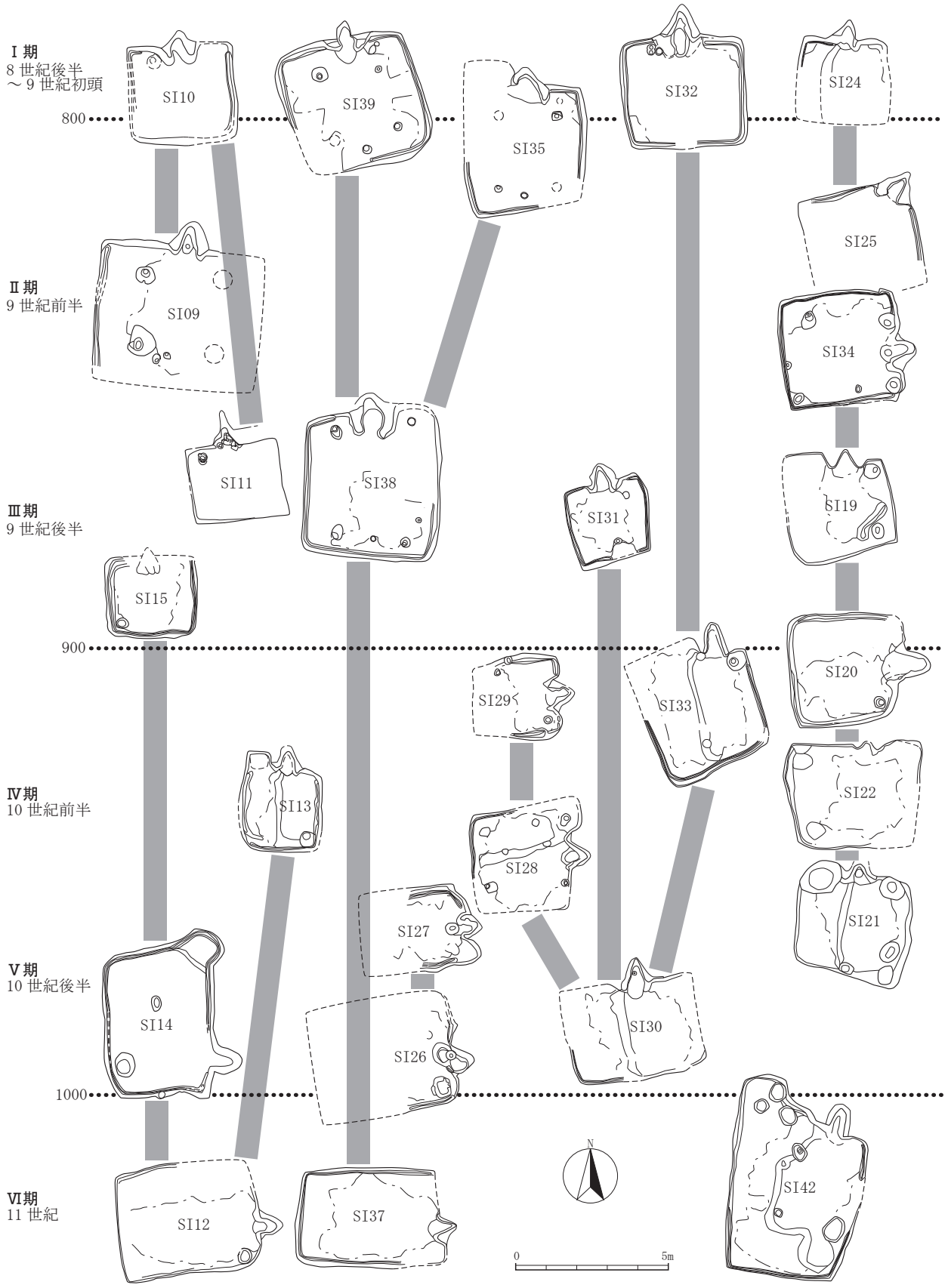
さらに、カマドの左側が大きく張り出すものがある。SI04・13・14・16・19・28・33・35・41・42 の 10 軒であり、構造が明確ではない SI17・18 がある。8 世紀末～ 9 世紀初頭（Ⅰ期）の SI35 から 11 世紀代（Ⅵ期）の SI42 まで全時期にわたって確認されている。出土遺物に特別な共通性を見出すことはできない。同様に、住居のコーナー部分に貯蔵穴状のピットを有するものも、9 世紀前半（Ⅱ期）から 11 世紀（Ⅵ期）にかけて存在し、やや古い段階の住居では確認できない内部施設である。

以上、時期ごとの住居跡の形態、それに伴う内部施設について分析を試みた結果としては、特別な遺構または工房との関連性を認めることはできなかった。このことは、本集落の性格を鹿の子 C 遺跡のように工人の居住区とするには積極性に欠けている。

第５節　まとめ

繰り返しになるが、鍛冶炉・鉄滓（埦形鍛冶滓・粒状滓・鍛造剥片）・金床石・砥石の共伴から、鍛冶を行った痕跡を示している「鍛冶工房」と判断できる遺構は、SI03 の僅かに 1 基であった。その他に、調査記録に鍛冶炉の所見が示された炉を有する住居跡（SI01・14・17）はあるものの、鍛冶の操業を示す遺構・遺物の組み合わせは明確にはできていない。このことから、鹿の子 C 遺跡に見られるような鍛冶・鉄製品の製作が行われた生産遺跡とは想定しがたい。さらに、僅かながら須恵器に漆が付着する資料が検出されているものの、漆生産に関わる明確な資料を確認するには至っていない。こうした状況から、いわゆる国府域内における生産遺跡として本遺跡を想定することは困難と判断せざるを得ない。

一方で、カマド左袖の延長上左側部分に一段高い床面を有する住居跡が検出されている。これらの住居跡の形態が何を意味するものかも、時期的あるいは特殊な遺構の可能性があるのかは、出土遺物からその差異を確認するには至っていない。住居中央を横断する段を有する住居跡、張り出しを有する住居跡には、時期的な変遷が認められることから、何らかの目的（生業）の異なる住居の可能性も想定される。



第 114 図　住居跡重複関係

第 76 表　住居跡属性一覧表

番号	形状	付帯施設							出土遺物					墨書・刻書	緑釉・灰釉陶器		土器年代	時期	重複関係	備考・その他の出土遺物
		カマド位置	主柱穴	入口ピット	左張り出し	段差	炉	隅ピット	鉄製品	鉄滓	砥石	金床石	漆容器		型式	年代				
SI01	方形ヵ	西	—	—	—	—	●	●	—	—	—	—	—	曹司、万、福	053	10 世紀前半	9 世紀前半	Ⅱ		
SI02	方形	北	—	—	—	—		●	—	—	—	—	—		—	—	9 世紀後半	Ⅲ		
SI03	方形	東	—	●	—	●	●	—	—	●	●	●	—		大 2 ～虎 1	9 世紀末～10 世紀中葉	10 世紀前半	Ⅳ		塊形鍛冶滓・粒状滓・鍛造剥片
SI04	方形	北	—	●	●	—	—	●	—	●	—	—	—		K90	9 世紀後半	9 世紀後半	Ⅲ		
SI05	方形ヵ	北	—	—	—	●	—	—	—	—	—	—	—		K90 ～ 053	9 世紀後半～10 世紀前半	10 世紀前半	Ⅳ		
SI06	長方形	北	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	□	K90 ～ 053	9 世紀後半～10 世紀前半	10 世紀前半	Ⅳ	SB05・SA03 → SI06	二川ヵ
SI07	—	東	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		緑 K90	9 世紀後半	不明	—		
SI08	長方形	東	—	—	—	—	—	—	棒状品	—	●	—	—		K90・光 1 ～大 2	9 世紀後半～10 世紀	10 世紀後半	Ⅴ	SB09（→）SB07 → SB05 → SI08	
SI09	方形ヵ	北	●	●	—	—	—	—	鎹・板状品	—	—	—	—	丁井	K14 ～ 90	9 世紀	9 世紀前半	Ⅱ	SI10 → SI09	IG78 含む
SI10	方形	北	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	□、□□	緑 K90	9 世紀後半	8 世紀末～9 世紀初頭	Ⅰ	SI10 → SI09・SI11	
SI11	方形ヵ	北	—	—	—	—	—	—	●	—	—	—	—		K90 － 3	9 世紀末	9 世紀後半	Ⅲ	SI10 → SI11	土製紡錘車
SI12	長方形	東	—	—	—	—	—	●	—	—	—	—	—		K90 ～ 053	9 世紀末～10 世紀中葉	11 世紀	Ⅵ	SI13 → SI12 SI15 → SI14 → SI12	置竈
SI13	長方形	北	—	—	●	●	—	●	紡錘車	—	—	—	—		K90 ～ 053	9 世紀末～10 世紀中葉	10 世紀前半	Ⅳ	SI13 → SI12 SB05 → SI13	
SI14	長方形	東	—	—	●	—	●	●	—	—	—	—	—	子、□	K90 ～ 053	9 世紀末～10 世紀中葉	10 世紀後半	Ⅴ	SI15 → SI14 → SI12	
SI15	方形	北	—	—	—	—	—	●	—	—	●	—	—		K14 ～ 90	9 世紀	9 世紀後半	Ⅲ	SI15 → SI14 → SI12	
SI16	方形ヵ	東	—	—	●	—	—	—	—	—	—	—	—		篠岡 4（K90）	9 世紀末～10 世紀中葉	10 世紀後半	Ⅴ	SI16 → SI17	獣脚ヵ
SI17	方形	北	—	—	▲	—	●	—	刀子	●	●	—	—	利古	K90 ～ 053	9 世紀末～10 世紀中葉	11 世紀	Ⅵ	SI16・18 → SI17	置竈・土玉
SI18	長方形ヵ	東	—	—	▲	—	—	—	—	—	—	—	—		—	—	11 世紀	Ⅵ	SI18 → SI17	火災住居
SI19	方形	北	—	—	●	—	—	—	平金具	—	—	—	—		K14 ～ 90	9 世紀	9 世紀後半	Ⅲ	SI34 → SI19 → SI20	文字瓦ヵ
SI20	方形	東	—	●	—	●	—	—	刀子	—	—	—	—	上、物、□	K90-2・光 1	9 世紀末～10 世紀	10 世紀前半	Ⅳ	SI34 → SI19 → SI20 → SI22	
SI21	方形	北	—	—	—	●	—	—	—	—	●	—	—		K90 ～ 053	9 世紀末～10 世紀中葉	10 世紀前半	Ⅳ	SI34 → SI22 → SI21	K90 ～ 053 混在
SI22	長方形	北	—	—	—	—	—	—	●	—	—	—	—	上	K90・K14	8 世紀末～9 世紀後半	10 世紀前半	Ⅳ	SI34 → SI20 → SI22 → SI21	
SI23	欠　番																			
SI24	方形ヵ	北	—	—	—	●	—	—	—	—	—	—	—		—	—	8 世紀末～9 世紀初頭	Ⅰ	SI24 → SI25	白玉鋳帯（丸鞆）。転用硯ヵ
SI25	方形ヵ	北東隅	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		—	—	9 世紀前半	Ⅱ	SI24 → SI25 SB08（→）SI25	
SI26	方形ヵ	東	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		—	—	10 世紀後半	Ⅴ	SI27 → SI26	
SI27	長方形ヵ	東	—	—	—	—	—	—	—	—	●	—	—		—	—	10 世紀後半	Ⅴ	SI27 → SI26	
SI28	方形	東	●	●	●	●	—	—	●	—	—	—	—	手	K90	9 世紀後半	10 世紀前半	Ⅳ	SI29 → SI28 → SI30	
SI29	方形	東	—	—	—	—	—	●	—	—	—	—	—		053 ヵ篠岡 4’	10 世紀中葉～10 世紀後半	10 世紀前半	Ⅳ	SI29 → SI28	
SI30	長方形	北	—	—	—	●	—	—	—	—	—	—	—		—	—	10 世紀後半	Ⅴ	SI28・31・32 → SI33 → SI30	
SI31	方形	北	—	●	—	—	—	—	—	—	—	—	—	〆カ、□	—	—	9 世紀後半	Ⅲ	SI31 → SI30	
SI32	方形	北	—	—	—	—	—	—	●	—	—	—	●	〆カ、□	—	—	8 世紀末～9 世紀初頭	Ⅰ	SI32 → SI33 → SI30	
SI33	長方形	北東隅	—	—	●	●	—	●	—	—	—	—	—	□	K90	9 世紀後半	10 世紀前半	Ⅳ	SI32 → SI33 → SI30	
SI34	方形	東	●	●	—	—	—	—	刀子	—	—	—	—		K90	9 世紀後半	9 世紀前半	Ⅱ	SI34 → SI19 → SI20 → SI22 → SI21	火災住居
SI35	方形	北	●	●	●	—	—	—	—	—	—	—	—	石上□ロ	光 1 ～大 2・053	10 世紀前半	8 世紀末～9 世紀初頭	Ⅰ	SI39（→）SI35 → SI38	緑釉・灰釉は SK41・43 に帰属
SI36	床面のみ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		—	—	不明	—	SI38 → SI36	床面の一部を確認
SI37	長方形	東	—	—	—	—	—	—	金具	—	●	—	▲	□、朱墨痕	K14 ～ 90	9 世紀	11 世紀	Ⅵ	SI38 → SI37	鋼鋺。灰釉陶器は SI38 に帰属ヵ
SI38	方形	北	●	●	—	—	—	—	●	—	●	—	●	仲林、□	K14 ～ 90	9 世紀	9 世紀後半	Ⅲ	SI39（→）SI35 → SI38 → SI37 SI38 → SI36	転用硯ヵ
SI39	方形	北	●	●	—	—	—	—	—	—	—	—	—	十万、朱墨痕	K14 ～ 90	9 世紀	8 世紀末・10 世紀後半	Ⅰ	SI39（→）SI35 → SI38	転用硯ヵ
SI40	欠　番																			
SI41	方形	東	—	—	●	—	—	—	—	●	—	—	—	×	—	—	10 世紀前半	Ⅳ	SI41 → SA02	
SI42	長方形	北	—	—	●	●	—	—	金具	●	—	—	—	□	K90	9 世紀末～10 世紀中葉	11 世紀	Ⅵ	SI42 → SA01	
SI43	方形ヵ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	●	—	—		—	—	不明	—	SA01（→）SI43	

＊「付帯施設」「出土遺物」●は存在、▲は存在の可能性を示す。「重複関係」矢印は「旧→新」を示す。

ところで、9 棟の掘立柱建物跡については、SB02 と SB03・04 に構造的に不分明な部分を残す結果となったが、それら以外の 6 棟については、総柱建物 1 棟、側柱建物 5 棟を確認できた。柱間寸法は 5.5 ～ 6.5 尺と、国庁・曹司の官舎（箕輪 2009、石山ほか編 2011）とは明確な格差が存在する。帰属時期は遺物の出土状況が明確ではないものの、重複・近在の住居跡との関連も含め、SB06・08 をⅠ～Ⅱ期（8 世紀末葉～ 9 世紀前半）、SB01・05・07・09 と SB03・04 をⅢ期（9 世紀後半）に位置づけた。後者の一部は、あるいはⅡ期に置くのがよいかもしれない。したがって、本遺跡存続期間の前半に建設されたことになり、概要報告で示された理解とは異なる結果となった。8 世紀末～ 9 世紀代には掘立柱建物 2、3 棟と竪穴住居が共存する集落形態を採っていたものと見られる。

最後に、瓦は多量に出土しているものの、軒先瓦の出土がなく、型式分類は行えないが、1 枚造りで長縄叩き（撚糸状の圧痕）が施される。桶巻き造りは確認されていない。このことから、9 世紀代の瓦と思われる。二次的な焼成により質量が軽いものが多く、カマドなどの構築材として持ち込まれた遺物と想定される。屋瓦葺きの建物が近隣に存在したことは考えられるものの、調査区内で礎石建物は確認されていない。

黒澤彰哉・川井正一両氏による分析（黒澤 2002、川井 2002）で、国分遺跡の集落は国分寺衰退期の 9 世紀後半から 10 世紀前半、国府域の拡大期に存続したことが想定されている。出土遺物から判断して、本遺跡の時期も 9 世紀後半から 10 世紀代にほぼ限定される遺構・遺物の組み合わせを見ることができる。このことは、8 世紀代中葉以前の遺構・遺物が全く見られず、大半の遺構から灰釉陶器・緑釉陶器の出土が見られる点、これに伴う土器群も明らかに 9 世紀から 11 世紀代にかけての組成を示している点より、市域を分断する山王川枝谷の東側にも国府域が拡大する時期の遺跡が本遺跡と想定できる。国分遺跡同様に国分寺衰退後の国府域拡大期の遺跡と判断される。

【参考引用文献】

浅井哲也　1992・93「茨城県内における奈良・平安時代の土器（Ⅰ・Ⅱ）」『研究ノート』創刊号・2 号 平成 3・4 年度　（財）茨城県教育財団
石岡市・石岡市教育委員会　2000『国府・国衙・みち―常陸国府の現状と今後―』歴史の里文化のまちづくりシンポジウム
石山 啓ほか編　2011『府中城跡―私道建設に伴う発掘調査―』石岡市埋蔵文化財調査報告書　石岡市教育委員会・有限会社勾玉工房 Mogi
（財）茨城県教育財団奈良・平安時代研究班　1996「茨城県域における施釉陶器の検討（2）」『研究ノート』5 号　（財）茨城県教育財団
（財）茨城県教育財団　2001 ～ 04「茨城県域における文字資料集成 1 ～ 4」『研究ノート』9 ～ 12 号
茨城大学人文学部考古学研究室編　2011 『古代常陸の原像―那賀郡の成立と台渡里官衙遺跡群―』 台渡里官衙遺跡群国史跡追加記念・第 7 回茨城大学人文学部地域史シンポジウム発表要旨集　茨城大学　人文学部・水戸市教育委員会
川井正一　1998「各国報告―常陸国」『シンポジウム　東国の国府 in WAYO―考古学からみた東国国府の成立と変遷―』資料集　シンポジウム東国の国府 in WAYO 実行委員会
川井正一　1999「国府を支えた生産 常陸国」寺村光晴・早川 泉・駒見和夫編『幻の国府を掘る―東国の歩みから―』 雄山閣
川井正一　2002「国分遺跡出土施釉陶器の検討」『国分遺跡―確認調査報告書―』 石岡市教育委員会
川井正一・佐藤正好　1983『常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書 5―鹿の子 C 遺跡』茨城県教育財団文化財調査報告第 20 集　（財）茨城県教育財団
木下　良編　1996『古代を考える 古代道路』 吉川弘文館
黒澤彰哉　1987「常陸における国分寺瓦の研究Ⅱ」『婆良岐考古』第 9 号　婆良岐考古同人会
黒澤彰哉　2002「造寺計画の変更」『国分遺跡―確認調査報告書―』 石岡市教育委員会
小杉山大輔・曾根俊雄　2008『市内遺跡調査報告書』第 3 集　石岡市教育委員会
古代生産史研究会　1997『東国の須恵器―関東地方における歴史時代須恵器の系譜―』’97 シンポジウム発表要旨・資料
小松崎博一・山本吉一　2007「常陸国府域出土施釉陶器集成―Ⅰ：図版編―」『茨城県考古学協会誌』第 19 号　茨城県考古学協会
齊藤孝正　2000『越州窯青磁と緑釉・灰釉陶器』日本の美術第 409 号　至文堂
齊藤孝正・後藤建一編　1995『須恵器集成図録』第 3 巻 東日本編Ⅰ　雄山閣出版
澁谷昌彦　2007「藤枝市助宗古窯跡群の灰釉陶器生産と遠江・駿河の編年」『静岡県考古学研究』№.39　静岡県考古学会
東国土器研究会　1990『東国土器研究』第 3 号 特集 黒色土器―展開と終焉
豊崎　卓　1973『常陸国府址発掘調査報告書』 石岡市教育委員会
楢崎彰一　1983「猿投窯の編年について」『愛知県古窯跡群分布調査報告』（Ⅲ）（尾北地区・三河地区）　愛知県教育委員会
贄　元洋編　2002「二川窯出土遺物の分類と編年」『二川古窯址群』（Ⅱ）―豊橋総合動植物公園建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―豊橋市埋蔵文化財調査報告書第 61 集　豊橋市教育委員会
贄　元洋編　2009『灰釉陶器のブラインドテスト№.1・2・3』 東海土器研究会
土生朗治　1999『茨城県石岡市泉台遺跡―発掘調査報告書―』 石岡市教育委員会・山武考古学研究所
松井一明　1989「宮口古窯跡群と清ヶ谷古窯跡群における須恵器・陶器生産についての一考察」及川　司・鈴木良孝編『静岡県の窯業遺跡』（静岡県内窯業遺跡分布調査報告書）静岡県文化財調査報告書第 42 集　静岡県教育委員会
箕輪健一　2001『常陸国衙跡―石岡小学校温水プール建設事業に伴う調査―』 石岡市教育委員会
箕輪健一　2009『常陸国衙跡―国庁・曹司の調査―』 石岡市教育委員会
山中敏史編　2003・04『古代の官衙遺跡』Ⅰ遺構編・Ⅱ遺物・遺跡編　奈良文化財研究所